

福岡県の中近世城館跡Ⅰ

—筑前地域編 1—

福岡県文化財調査報告書 第 249 集



2014

福岡県教育委員会

福岡県の中近世城館跡Ⅰ

—筑前地域編 1—

福岡県文化財調査報告書 第 249 集

序

我が国の中世から近世初期において、特に戦国時代の前後には、在地領主や大名によって各地に数多くの城館が築かれました。福岡県においても同様に、著名な山城から無名の小砦まで、多くの中近世城館遺跡が存在し、その数は知られているもので1,000箇所を超えています。

本県ではこれまで、埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査や各自治体史誌の編纂事業等をとおして、他の遺跡と同様に中近世城館遺跡の把握や周知が進められてきました。また、任意団体や個々の研究者による踏査、縄張り図の作成等が行われたものもあり、県内の中近世城館遺跡の存在と歴史的重要性は既に一定の理解が得られるに至ってきているところです。

一方、遺跡の詳細を把握できていない中近世城館遺跡も多く存在している中で、近年の開発事業等によりやむを得ず記録保存の対象となった事例もまた多々存するところです。

こうした現状に対し、本県教育委員会では、県内に所在する全ての中近世城館遺跡を対象に、総合的な緊急分布調査に取り組むこととしました。この調査は遺跡の位置や時代、歴史的背景を可能な限り把握するとともに、成果の体系的な整理と評価を行い、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解を促進することを目的としています。

平成24年度から調査に着手し、このたび、旧筑前国の南部について調査成果を取りまとめることができました。今後も県内各域について報告書に取りまとめ、刊行していく予定です。

本調査の実施と本書の刊行に当たり、福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の委員の皆様、関係市町村をはじめ、多くの方々に多大なる御協力を得ましたことに対し、記して謝意を表します。

平成26年3月31日

福岡県教育委員会教育長

杉光 誠

例 言

- 1 本書は、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業の報告書第1集であり、福岡県文化財調査報告書第249集にあたる。
- 2 本事業は県内に所在する中世・近世の城館跡および関連遺跡を対象とした悉皆分布調査事業であり、平成24年度より28年度（予定）まで調査を実施し、報告書を刊行する計画である。
- 3 本書では、平成24年度から25年度にかけて実施した筑前地域の南部（旧郡の御笠郡（大野城市・太宰府市・筑紫野市）・夜須郡（朝倉市（一部）・朝倉郡筑前町）・下座郡（朝倉市（一部）・上座郡（朝倉市（一部）・朝倉郡東峰村）・穂波郡（飯塚市（部分）・嘉穂郡桂川町）・嘉麻郡（飯塚市（一部）・嘉麻市）の旧6郡、6市2町1村に所在する約180箇所の中世・近世の城館跡、城館等伝承地、城館関連遺跡を報告対象とした。

なお、近世および幕末・維新期の台場、烽火台、遠見番所等の城館関連遺跡についても調査対象としているが、これらについては県内全地域をまとめて次巻以降に報告する予定である。

- 4 調査については福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の指導のもとに実施した。
- 5 本書に掲載した縄張り図および遺構実測図は、全て出典を明示し、縄張り図については作成者を明示した。

事務局にて作成した縄張り図の作成および製図は岡寺 良（九州歴史資料館）が担当した。

- 6 本書に掲載した写真は、明示したもの以外は事務局にて撮影したものであり、岡寺が担当した。

- 7 本書の執筆分担は以下のとおりである。

- I 今井涼子
(福岡県教育庁文化財保護課)
- II 岡寺
- III 岡寺
- IV 岡寺
- V 岡寺
- VI 一瀬 智（九州歴史資料館）
- VII 岡寺

- 8 本書の編集は岡寺が担当した。



目 次

	頁
I はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
3 調査の組織	2
II 調査の方法	5
1 調査の進め方と方法	5
III 対象地域城館一覧	10
IV 対象地域城館分布図	31
V 個別城館報告	56
1 中世城館	57
①御笠郡	57
②夜須郡	76
③下座郡	90
④上座郡	93
⑤穂波郡	110
⑥嘉麻郡	129
2 近世城館	144
3 城館関連遺跡	148
VI 城館関連文献史料一覧	154
VII 城館関連地名一覧	166
索引	172
抄録	

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 『旧城跡等ノ取調』（福岡県教育委員会蔵）……………	6
（上：高知県庁から福岡県庁への照会文書）	
（下：八女郡役所から福岡県社寺兵事課への回答文書）	
第 2 図 『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』……………	7
（右：表紙と序文、左：所在地一覧（秋月の部分））	
第 3 図 唐山東・西城遠景（文献 64・昭和 45 年頃）……………	57
第 4 図 唐山東城縄張り図（文献 76・中西義昌作成）……………	57
第 5 図 唐山西城縄張り図（文献 76・中西義昌作成）……………	57
第 6 図 不動城縄張り図（岡寺 良作成）……………	58
第 7 図 不動城航空測量図（文献 31）……………	58
第 8 図 岩屋城全体縄張り図（文献 86・岡寺 良作成）……………	59
第 9 図 筑前三笠郡岩谷城図（部分・個人蔵）……………	59
第 10 図 岩屋城主郭（伝本丸）……………	60
第 11 図 岩屋城伝二の丸・高橋紹運墓……………	60
第 12 図 岩屋城縄張り図（主要部分・文献 86・岡寺 良作成）……………	60
第 13 図 浦ノ城跡地形図（文献 33・昭和 44 年 4 月段階）……………	61
第 14 図 浦ノ城跡遠景（文献 33・昭和 44 年）……………	61
第 15 図 高尾山城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）……………	62
第 16 図 御笠郡宰府村高尾故城之図（部分・国立公文書館蔵）……………	62
第 17 図 有智山城縄張り図（文献 88・岡寺 良作成）……………	63
第 18 図 有智山城虎口石垣……………	63
第 19 図 升形城縄張り図……………	
（文献 97 掲載の村上勝郎・田中賢二作成図を一部改変して作成）……………	64
第 20 図 升形城を描いた絵図（『古城図』のうち）（部分・国立公文書館蔵）……………	65
第 21 図 宝満山頂周辺遺構配置図（文献 91・岡寺 良作成）……………	66
第 22 図 頭巾山城縄張り図（文献 88・岡寺 良作成）……………	67
第 23 図 龍ヶ城縄張り図（岡寺 良作成）……………	68
第 24 図 三笠郡吉木村龍ヶ城古址図（部分・国立公文書館蔵）……………	68
第 25 図 米嚙城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）……………	69
第 26 図 太宰府旧跡全図（米嚙城部分）（複製・九州歴史資料館蔵（原資料は個人蔵））…	69
第 27 図 御笠郡二日市村米嚙故城図（部分・国立公文書館蔵）……………	69
第 28 図 天判山城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）……………	70
第 29 図 御笠郡武蔵村天判山故城之図（部分・国立公文書館蔵）……………	70
第 30 図 御笠郡武蔵村天判山麓飯盛砦址之図（部分・国立公文書館蔵）……………	71
第 31 図 飯盛城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）……………	71

	頁
第 32 図 堂ノ山砦縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	72
第 33 図 御笠郡武蔵村天判山麓堂ノ山砦址之図（部分・国立公文書館蔵）	72
第 34 図 博多見城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	73
第 35 図 御笠郡山口村博多見故城図（部分・国立公文書館蔵）	73
第 36 図 柴田城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	74
第 37 図 御笠郡天山村柴田故城之図（部分・国立公文書館蔵）	74
第 38 図 太宰府旧跡全図（南・ちよほんが城部分） （複製・九州歴史資料館蔵（原資料は福岡市博物館蔵））	75
第 39 図 ちよほんが城縄張り図（事務局作成）	75
第 40 図 『古城図』『柴田古城之図』に描かれた「天ヶ城」（部分・国立公文書館蔵）	75
第 41 図 天ヶ城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	76
第 42 図 砥上山城縄張り図（事務局作成）	76
第 43 図 砥上山城遠景	77
第 44 図 砥上山城主郭東側の堀切	77
第 45 図 中牟田城地割図（現在の地籍図を基に事務局作成）	77
第 46 図 中牟田城遠景（筑前町教育委員会提供）	77
第 47 図 中牟田城の掘割	77
第 48 図 小鷹城縄張り図（岡寺 良作成）	78
第 49 図 夜須郡弥永村小鷹城址図（部分・国立公文書館蔵）	78
第 50 図 茶臼山城縄張り図（事務局作成）	79
第 51 図 茶臼山城現況写真	79
第 52 図 五位山城縄張り図（事務局作成）	80
第 53 図 鼓ヶ岳城縄張り図（文献 11・岡寺 良作成）	80
第 54 図 夜須郡下淵邨鼓嶽城跡図（部分・国立公文書館蔵）	81
第 55 図 夜須郡持丸村片山城址之図（部分・国立公文書館蔵）	81
第 56 図 福嶽城調査平面図（文献 47）	82
第 57 図 稲荷山城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	82
第 58 図 荒平城縄張り図（文献 11・岡寺 良作成）	83
第 59 図 1号礎石建物（文献 37）	84
第 60 図 1号礎石建物実測図（文献 37）	84
第 61 図 古処山城および関連城館位置図（数字は山麓城郭を示す）	85
第 62 図 筑前国夜須郡古所山城并経ヶ峯古城之図（部分・国立公文書館蔵）	85
第 63 図 古処山城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	86
第 64 図 古処山城山麓城郭 1（標高 223m 地点）縄張り図（文献 83・岡寺 良作成）	87
第 65 図 古処山城山麓側城郭 2（標高 317m 地点）縄張り図（文献 83・岡寺 良作成）	87
第 66 図 古処山城山麓城郭 3（標高 471m 地点）縄張り図（文献 83・岡寺 良作成）	88
第 67 図 古処山城山麓城郭 4（標高 338m 地点）縄張り図（事務局作成）	88

	頁
第 68 図 上秋月城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	89
第 69 図 坂田城の位置が示された図（文献 70）	89
第 70 図 休松城縄張り図（文献 11・片山安夫作成）	90
第 71 図 小田城跡推定地割図（現在の地籍図を元に事務局作成）	90
第 72 図 茶臼山城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	91
第 73 図 下座郡茶臼山古城図（部分・国立公文書館蔵）	91
第 74 図 岩切山城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）	92
第 75 図 下座郡三奈木村岩切山古城図（部分・国立公文書館蔵）	92
第 76 図 下座郡荷原邨村茶臼山故城図（部分・国立公文書館蔵）	92
第 77 図 村上城縄張り図（文献 11・岡寺 良作成）	93
第 78 図 上座郡黒川村之内村上古城之図（部分・国立公文書館蔵）	93
第 79 図 本陣山城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	94
第 80 図 上座郡志波村本陣山古城之図（部分・国立公文書館蔵）	94
第 81 図 麻氏良城縄張り図（文献 74・木島孝之作成）	95
第 82 図 上座郡山田村麻天良古城之図（部分・国立公文書館蔵）	95
第 83 図 前隈山城・茶臼山城地点縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	96
第 84 図 上座郡志波邨前隈山古城之図（部分・国立公文書館蔵）	96
第 85 図 夕月城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	97
第 86 図 三日月城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	98
第 87 図 上座郡池田村三日月城跡之図（部分・国立公文書館蔵）	98
第 88 図 米山城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	99
第 89 図 上座郡白木村米山城跡之図（部分・国立公文書館蔵）	99
第 90 図 上座郡白木村米山丸城図（部分・国立公文書館蔵）	99
第 91 図 鶺鴒木城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	100
第 92 図 上座郡林田邑鶺鴒木山城跡之図（部分・国立公文書館蔵）	100
第 93 図 長尾城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	101
第 94 図 上座郡林田村長尾城跡之図（部分・国立公文書館蔵）	101
第 95 図 真竹山城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	102
第 96 図 上座郡松末村真竹山城跡之図（部分・国立公文書館蔵）	102
第 97 図 針目城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）	103
第 98 図 上座郡穂坂村針目山古城之図（部分・国立公文書館蔵）	103
第 99 図 上座郡佐田村疇山古城之図（部分・国立公文書館蔵）	104
第 100 図 「城ノ辻」の石垣遺構	104
第 101 図 烏岳城（城の平）縄張り図（文献 95・岡寺 良作成）	105
第 102 図 上座郡宝珠山村烏嶽古城之図（部分・国立公文書館蔵）	105
第 103 図 烏岳城（城ノ辻）縄張り図（文献 95・岡寺 良作成）	105
第 104 図 上座郡宝珠山邑烏ヶ岳出城図（部分・国立公文書館蔵）	105

	頁
第 105 図 高鼻城縄張り図（文献 11・岡寺 良作成）	106
第 106 図 上座郡鼓村高鼻城跡之図（部分・国立公文書館蔵）	106
第 107 図 上座郡小石原村松尾古城図（部分・国立公文書館蔵）	107
第 108 図 松尾城縄張り図（文献 11・木島孝之作成）	107
第 109 図 松尾城測量図（文献 62）	107
第 110 図 副郭内枳形虎口石垣実測図（文献 52）	108
第 111 図 副郭検出礎石建物実測図（文献 52）	108
第 112 図 北側石垣（文献 52）	108
第 113 図 副郭礎石建物（文献 52）	108
第 114 図 二股岳城縄張り図（文献 116・片山安夫作成）	109
第 115 図 伊王寺城縄張り図（文献 116・片山安夫作成）	109
第 116 図 懸尾城縄張り図（文献 90 掲載図を改変して事務局作成）	110
第 117 図 穂波郡内住村懸尾古城図（部分・国立公文書館蔵）	110
第 118 図 曲輪切岸に残る石垣	110
第 119 図 鬼杉城縄張り図（文献 90・岡寺 良作成）	111
第 120 図 穂波郡内住村鬼杉故城図（部分・国立公文書館蔵）	111
第 121 図 米ノ山城位置図 （昭和 31 年国土地理院発行 1/25,000「太宰府」を一部改変）	112
第 122 図 かつての米ノ山（写真中央・文献 63）	112
第 123 図 穂波郡山口村米山古城図（部分・上が北）（国立公文書館蔵）	112
第 124 図 井戸実測図（文献 41）	113
第 125 図 米ノ山城第 2 次調査（堀切群・「馬サシ」曲輪・文献 63）	113
第 126 図 発掘調査状況写真（飯塚市教育委員会提供）	113
第 127 図 向山城縄張り図（事務局作成）	114
第 128 図 向山城遠景	114
第 129 図 筑前穂波郡内野村高石故城之図（部分・国立公文書館蔵）	115
第 130 図 高石山城（山頂部）縄張り図（岡寺 良作成）	115
第 131 図 高石山城（東山麓部）縄張り図（岡寺 良作成）	115
第 132 図 扇山城縄張り図（中村 正作成図面を改変して事務局作成）	116
第 133 図 穂波郡阿恵村扇山古城図（部分・国立公文書館蔵）	117
第 134 図 茶白山城縄張り図（①主郭部・岡寺 良作成）	118
第 135 図 茶白山城位置図	118
第 136 図 茶白山城遠景	118
第 137 図 茶白山城縄張り図（②北東山麓部・岡寺 良作成）	119
第 138 図 茶白山城縄張り図（③南側尾根部・岡寺 良作成）	119
第 139 図 茶白山城と旧茶白山古城の位置関係（上が西） （「筑前穂波郡内野村高石故城之図」（部分・一部改変）（国立公文書館蔵））	119

	頁
第 140 図 茶臼山城堀切	120
第 141 図 茶臼山城遠景（左）と筑豊盆地	120
第 142 図 筑前穂波郡阿恵村茶臼山古城図（部分・国立公文書館蔵）	120
第 143 図 一ノ谷城堀切	121
第 144 図 一ノ谷城縄張り図（事務局作成）	121
第 145 図 許斐山城跡の許斐神社社殿	121
第 146 図 穂波郡河袋村木實故城図（国立公文書館蔵）	121
第 147 図 穂波郡津原村宮山古城図（部分・国立公文書館蔵）	122
第 148 図 宮山城推定位置図（飯塚市発行 1/2,500 地形図に事務局加筆作成）	122
第 149 図 城山城縄張り図（事務局作成）	123
第 150 図 穂波郡北古賀村城山古城図（部分・国立公文書館蔵）	123
第 151 図 「穂波郡北古賀村城山古城図」に描かれた小佐古古城	124
第 152 図 小佐古城縄張り図（事務局作成）	124
第 153 図 筑前穂波郡小佐古古城図（部分・国立公文書館蔵）	124
第 154 図 高の山城縄張り図（事務局作成）	125
第 155 図 筑前穂波縣高田邨高野山古城図（部分・国立公文書館蔵）	125
第 156 図 高の山城堀切	126
第 157 図 h 地点北側の石垣	127
第 158 図 笠木山城縄張り図（①全体）（文献 94・岡寺 良作成）	127
第 159 図 笠木山城縄張り図（②中心部分）（文献 94・岡寺 良作成）	128
第 160 図 かつての摺鉢山（文献 18）	129
第 161 図 葛山城調査図（文献 18）	129
第 162 図 萱城遠景	129
第 163 図 堀切状遺構	129
第 164 図 萱城縄張り図（事務局作成）	130
第 165 図 元吉城遠景	130
第 166 図 元吉城縄張り図（事務局作成）	131
第 167 図 嘉摩郡山野村高野故城図（部分・国立公文書館蔵）	131
第 168 図 日野山城縄張り図（文献 82・木島孝之作成）	132
第 169 図 千手館縄張り図（文献 11・岡寺 良作成）	132
第 170 図 長谷山城縄張り図（中村 正作成図を一部改変して事務局作成）	133
第 171 図 竹生島城横堀土層図（文献 59）	134
第 172 図 竹生島城実測図（文献 59 掲載図を改変して事務局作成）	134
第 173 図 柴原城縄張り図（中村 正作成図を改変して事務局作成）	134
第 174 図 茅城縄張り図（文献 83・岡寺 良作成）	135
第 175 図 花尾城縄張り図（文献 93・岡寺 良作成）	135
第 176 図 益富城出土瓦類実測図（文献 53）	136

	頁
第 177 図 益富城礎石建物（嘉麻市教育委員会提供）	136
第 178 図 益富城主郭虎口の門礎（嘉麻市教育委員会提供）	136
第 179 図 益富城縄張り図（上）・主城部分平面実測図（下）（上：文献 96・木島孝之 作成図を改変して作成、下：文献 53・56 掲載図を改変して事務局作成）	137
第 180 図 益富故城図（部分・国立公文書館蔵）	138
第 181 図 益富古城ノ東ニ当テ此砦跡図（部分・国立公文書館蔵）	138
第 182 図 毛利ヶ城縄張り図（文献 93・岡寺 良作成）	140
第 183 図 平家城縄張り図（文献 93・岡寺 良作成）	140
第 184 図 大王山城縄張り図（文献 82・木島孝之作成）	141
第 185 図 嘉麻郡上山田村大王故城図（部分・国立公文書館蔵）	141
第 186 図 嘉摩郡上山田村木城宅跡図（部分・国立公文書館蔵）	141
第 187 図 岸殿城縄張り図（事務局作成）	142
第 188 図 山頂周辺の畝状空堀群	143
第 189 図 嘉摩郡中山田村岸取古城図（部分・国立公文書館蔵）	143
第 190 図 屏山城縄張り図（文献 83・岡寺 良作成）	143
第 191 図 秋月陣屋奥御殿発掘調査遺構平面図（文献 38）	144
第 192 図 秋月陣屋奥御殿調査全景 1（西から 朝倉市教育委員会提供）	145
第 193 図 秋月陣屋奥御殿調査全景 2（南から 朝倉市教育委員会提供）	145
第 194 図 秋月陣屋奥御殿庭園遺構（西から 朝倉市教育委員会提供）	145
第 195 図 筑前秋月黒田甲斐守長徳公御館図面 （朝倉市教育委員会蔵 縦 181cm × 横 183cm）	145
第 196 図 筑前秋月黒田甲斐守長徳公御館図面（左：表御殿部分 右：奥御殿部分）	146
第 197 図 秋月藩南御殿石垣	147
第 198 図 秋月藩南御殿平面図（文献 71）	147
第 199 図 御笠の森遺跡遺構概略配置図（文献 55）	148
第 200 図 以来尺遺跡全景	148
第 201 図 以来尺遺跡遺構配置図（文献 46 掲載図を一部改変して転載）	149
第 202 図 大溝土層断面図（文献 57）	150
第 203 図 下杵野遺跡遺構配置図（文献 57 掲載図を一部改変して転載）	150
第 204 図 砥上上林遺跡遺構平面図（文献 44 掲載図を一部改変して転載）	151
第 205 図 炭焼遺跡遺構平面図（文献 60）	151
第 206 図 城腰遺跡遺構平面図（文献 50 より一部改変して作成）	152
第 207 図 城腰遺跡全景（飯塚市教育委員会提供）	152
第 208 図 城腰遺跡溝状遺構（飯塚市教育委員会提供）	152
第 209 図 勘高遺跡遺構平面図（文献 40）	153

表 目 次

	頁
第1表 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿 ……………	2
第2表 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過（平成24～25年度）…	2

I はじめに

1 調査に至る経過

古代の防衛施設である大野城跡、基肄城跡、水城跡が存する本県では、九州歴史資料館を中心に継続的な古代山城の調査研究が行われてきた。また、8か所の神籠石系山城が知られており、いずれも国の史跡に指定され、調査研究と保護、活用が図られているところである。

中世以降、全国的に山城を中心とした多くの城館・城郭が築造されるが、本県においても同様の傾向がみられ、特に南北朝期と戦国期にその数を増している。国家的事業として築造された古代山城とは異なり、中世山城は地域間抗争の産物である。領主の居城や地域支配の拠点となる城郭から出城や砦まで、その立地や規模、構造等は多様である。

更に、戦闘方法の変化に伴い、城郭の役割や構造、立地にも変化が生じ、近世城郭と呼ばれる大規模な城郭が築かれる。一方、既存の山城を改修して国境の備えとするなど、元和元年（1615）の一国一城令によって、県内の城郭が藩主の居城を残して廃されるまで城郭の築造は続く。

これらの中世から近世初期までの間に築造された城館・城郭遺跡について、本県ではこれまで、県および市町村が実施した遺跡詳細分布調査や重要遺跡確認調査、県史・市町村史誌編纂事業等を通じて把握に努めてきたが、総合的な調査を行うには至っていなかった。九州縦貫自動車道建設に先立つ中世山城の発掘調査報告と併せて、付録として県内の中世山城跡の一覧表と位置図をまとめたにとどまっている。この時把握された中世山城跡の数は、筑前地域 289 か所、筑後地域 168 か所、豊前地域 217 か所、合計 674 か所である。

一方で、任意団体や個々の研究者によって地道に続けられた調査研究成果の蓄積は著しく、本県における中近世城館研究の進展はこれに負うところが大きい。

しかし、悉皆的な調査が実施されていないため、位置が特定されていない、あるいは詳細が十分に把握されていない城館遺跡はまだ多く、適切な保護措置を講じるにあたり情報が不足している状況である。また、遺跡の公開活用を図る上でも県内の城館遺跡との比較検討は必要であり、本県にとって中近世城館遺跡の総合調査の実施は課題のひとつであった。

近年の山間部における開発の増加や、山城に対する興味関心の高まり、保存活用の要望の増加から総合調査の実施は急務となり、この度、総合的な分布調査に取り組むこととなった。県内の中近世城館遺跡を対象に、遺跡の位置や範囲、時代、歴史的背景等の基本的情報を可能な限り把握し、成果の体系的な整理と評価を行うものである。また、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解の促進をも目的としている。

【参考文献】

福岡県教育委員会 1979 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIX 付録 福岡県中世山城跡』

2 調査の経過

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業に、国庫補助を受け平成 24 年度から着手することとなり、福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会を設置した。委員は第 1 表のとおりである。

平成 25 年 2 月に第 1 回指導委員会を開催し、調査の方針と手法について指導を受け、調査に取りかかった。本詳細分布調査は、県内市町村を旧国に基づいて地域分けし、筑前地域、豊前地域、

筑後地域の順に調査を進め、随時報告書をまとめることとなった。

第1表 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿（敬称略）

委員氏名	職名	備考
西谷 正	九州歴史資料館名誉館長 九州大学名誉教授	委員長、考古学
服部英雄	九州大学教授	副委員長、中世史
中井 均	滋賀県立大学教授	城郭研究

平成25年度は、筑前地域の報告書刊行と豊前地域の調査を実施する予定となっていた。7月に第2回指導委員会を開催し、旧筑前国の三日月山城館群（仮称）の現地視察と検討を行い、調査の進捗状況、報告書の内容等について指導を受けた。筑前地域に所在する中近世城館遺跡の数は非常に多く、関連資料等も膨大な量にのぼるため、報告書は分冊することとなり、本書で報告するのは筑前地域の一部（旧御笠郡・夜須郡・下座郡・上座郡・穂波郡・嘉麻郡）の6郡についてである。筑前地域のその他の地域については平成26年度に報告する予定である。

平成26年3月開催の第3回指導委員会では、旧筑前国の花尾城跡ならびに黒崎城跡の現地視察と検討を行った。また、調査および報告書作成作業の進捗について報告し、指導を受けたところである。

第2表 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過（平成24～25年度）

	開催日時	会場	審議内容等
第1回	平成25年2月25日	九州歴史資料館	<ul style="list-style-type: none"> 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業（以下「調査事業」。）実施に至る経緯について 調査事業内容について 既存情報の整理状況について
第2回	平成25年7月26日	シーオーレ新宮	<ul style="list-style-type: none"> 三日月山城館群（仮称）現地視察・検討 一次調査の結果と追加調査 文献史料調査結果と追加調査 砲台と烽火台の調査 報告書の作成と今後の調査について
第3回	平成26年3月3日	北九州市立埋蔵文化財センター	<ul style="list-style-type: none"> 花尾城跡・黒崎城跡現地視察・検討 筑前地域の調査、報告書作成の進捗状況 今後の調査等について

3 調査の組織

本詳細分布調査は、福岡県教育庁総務部文化財保護課と九州歴史資料館に事務局を置き、協力して取り組んでいる。

なお、調査にあたっては、次章の調査の方法でも述べるとおり、該当市町村教育委員会等の公的機関に調査協力を依頼するとともに、地元研究団体および個人の方に、図面の提供や情報照会等で調査に御協力いただいた。詳細については以下のとおりである。

福岡県教育庁総務部文化財保護課（調整・調査・報告）

平成 24 年度

平成 25 年度

総括

教育長	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課長	伊崎俊秋	伊崎俊秋
課長補佐	桂木俊樹	高田政司

庶務

管理係長	石橋伸二	石橋伸二
事務主査	伊藤幸子 綾香博充	綾香博充
主任主事	加藤教子	加藤教子

調査・報告

企画係長	吉田東明	吉田東明
技術主査	岸本 圭 今井涼子 宮地聡一郎	今井涼子
主任技師		大庭孝夫 坂元雄紀

九州歴史資料館（調査・報告）

平成 24 年度

平成 25 年度

総括

館長	西谷 正	荒巻俊彦
副館長	篠田隆行	篠田隆行
参事		飛野博文

庶務

総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子
総務班長 (平成 25 年度から)		長野良博

調査・報告

学芸調査室長	小田和利	小田和利
学芸普及班長 (平成 25 年度から学芸研究班)	松川博一	松川博一

技術主査

岡寺 良

主任技師

岡寺 良

一瀬 智

一瀬 智

調査協力（本書報告対象地域のみ（50音順・敬称略））

＜公的機関＞

朝倉市教育委員会、飯塚市教育委員会、大野城市教育委員会、嘉麻市教育委員会、桂川町教育委員会、国立公文書館、太宰府市教育委員会、筑紫野市教育委員会、筑紫野市歴史博物館、筑前町教育委員会、東峰村教育委員会

＜研究団体・個人＞

片山安夫、木島孝之、重藤輝行、田中賢二、中西義昌、中村 正、村上勝郎、北部九州中近世城郭研究会（代表：中村修身）

Ⅱ 調査の方法

1 調査の進め方と方法

前章でも述べたとおり、本県における中近世城館の調査研究成果の蓄積は著しく、既往の調査情報が比較的多くそろっているのが実情である。よって、既往情報の整理と蓄積を主眼に置き、以下のとおりの手順で調査を進めている。

<手順1>既存資料の把握

上記の状況を勘案し、対象地域における城館の全体概要を知るために、過去の調査資料等を把握するところから始めることとした。福岡県内における城館調査は、既に江戸時代の地誌類編纂にまでさかのぼることができるが、それらも含め、以下の11の文献に加え、城郭の一覧を早い段階において公表した『探訪日本の城』（1977年・小学館発行。福岡県城郭一覧は西谷正が記載）を入れた12文献を「基本参考文献」とし、そのほか各自治体史誌や報告書等を参考にしながら、城館の情報を収集した。11の基本参考文献の概要は以下のとおりである。

① 『筑前国続風土記』（貝原益軒著・1709年）

本草学者としても知られる貝原益軒が福岡藩の命を受けて編纂した近世福岡藩最初の地誌で、提要2巻、福岡博多及び筑前15郡の記21巻、古城古戦場の記5巻、土産考2巻の計30巻からなる。中近世城館に関しては「古城古戦場の記」に集中して記され、場所、概要、来歴などが記載される。昭和18年に『福岡県史資料 続第4輯』として翻刻が刊行されたが、昭和55年にも文献出版から復刻されている。

② 『筑前国続風土記附録』（加藤一純・鷹取周成著・1798年）

福岡藩の命により加藤一純が鷹取周成の助力を得て完成させた全47巻の筑前国全体を網羅した江戸時代中期の地誌。『筑前国続風土記』（以下、『本編』）に既に記載されている事柄については「本編で述べたり」などと書いていることから、『本編』の記載情報の追補訂正を目的としていることが推測される。他の地誌にはない挿図がさらにその史料価値を高めている。報告された城館の数に関しては『本編』や次に述べる『筑前国続風土記拾遺』よりも充実している。翻刻については昭和52年に上・中・下巻で文献出版から刊行されている。

③ 『筑前国続風土記拾遺』（青柳種信著・文政～天保年間（未完））

前二編の筑前地誌を受け、福岡藩の命により国学者の青柳種信が編纂した。筑前全郡および古城古戦場の54巻からなるが、完成を見ることなく青柳は死去し、河水記等は刊行されなかったとされる。また秋月藩領についてはほとんど記載はないが、編纂の過程において青柳が行った実地調査の成果をまとめた『筑前町村書上帳』によりその欠を補うことができる。城館についても前二編には見られないものもある。翻刻については平成5年に文献出版から刊行されている。

④ 『福岡県地理全誌』（臼井浅夫ほか著・1875～1880年）

廃藩置県が行われた直後の明治5年、陸軍省から全国各府県に対して全国地理図誌編輯についての指令が発せられ、福岡県では、臼井浅夫に委嘱して作成が行われ、同8年12月末から13年7月にかけて内務省地理局宛に進達された「町村」地誌である。現在東京大学史料編纂所に全148冊が収められているが、これらには福岡県とは言いながら、旧筑前国内の郡のみしか収められていない。記載内容も基本的には近世地誌の転載がほとんどであるが、中にはそれらに見られない記載等もあ

る。昭和 63 年～平成 7 年にかけて『福岡県史 近代資料編』として全 6 冊で復刻刊行がなされている。

⑤ 『旧城跡等ノ取調』（福岡県社第 1956 号 大正 5 年 10 月 2 日施行）

福岡県庁には大正 5 年の公文書の中に「旧城跡等ノ取調」という一連の文書が残されている（第 1 図）。これは同年 9 月 14 日付にて高知県庁から各府県にあてての照会として、「貴府縣下ニ於テ旧城址ノ現存セルモノ有之候ハバ乍御手数左記事項御回報相成候」として城名、城主名、位置、面積、現存建物の有無、所有者及び管理者、利用・維持・保存方法について回答を依頼している。福岡県ではこれを受けて県下の郡役所に照会をかけ、回答を得ている。城数自体はさほど多くはないものの、大正時代の城跡の認識を知る上でも非常に重要な資料である。

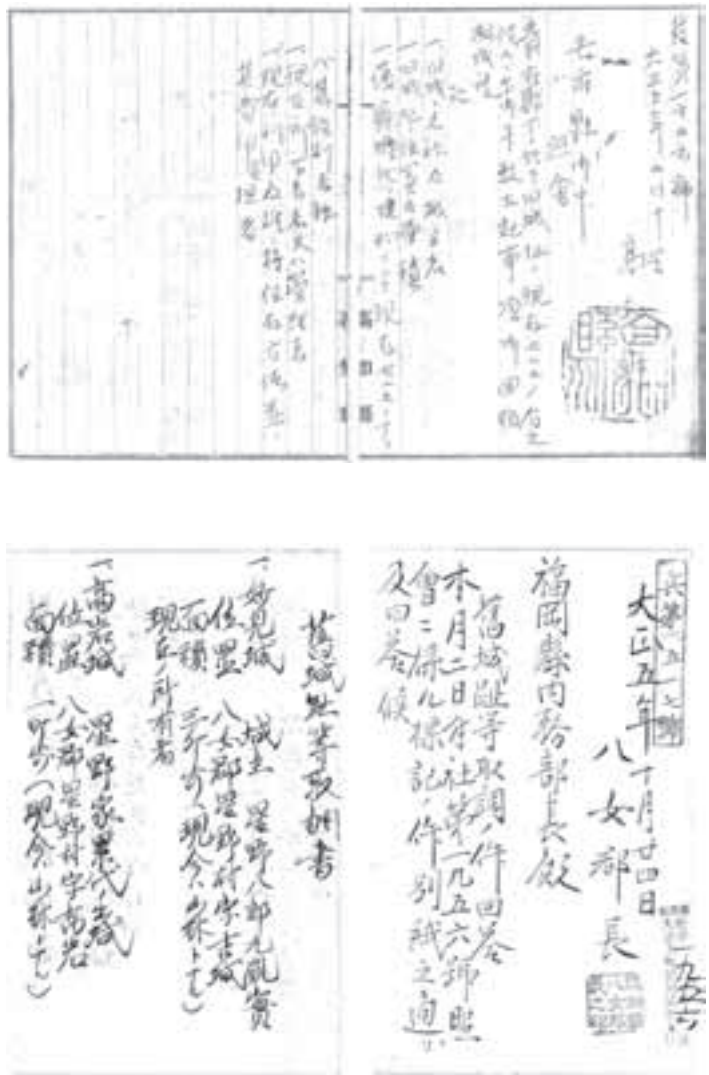
⑥ 『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（金文堂（和田宗八・1936 年））

福岡師範学校教諭の和田宗八が著し、金文堂から出版された（第 2 図）。序文に「一、小学校の先生曰く、この村はつまりません。貧乏村で（以下略）」のユニークな書き出しで始まるこの書籍は、郷土史を教える福岡県内の小学校、中等学校の教員のために記されたもので、福岡県の歴史に始まり、人物、風習、口碑伝説、遺跡などを記す。特に史蹟遺物口碑伝説所在地と銘打った一覧は、市郡ごとに詳細な地名表が掲げられ、城館のほか、寺社や遺跡なども数多く掲載されている。和田は本書を記すにあたって、地誌類はもとより数多くの古文献に当たっているようで、本文献が初出の城館も少なからず存在する。また、当文献は後の福岡県教育委員会作成の一覧（文献⑧）を作成する際にも参考とされ、その後の城館一覧に掲載されるに至ったものもある。

なお、本書の奥付を見ると当時 1 円 50 銭で販売されたことがわかる。

⑦ 『日本城郭全集』 14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967 年））

大類伸が監修し、全国都道府県ごとに古代から中近世城館の全体概要を示したという点では、戦後初めてとなるシリーズ本で、鳥羽正雄や小室栄一など当時の学界をリードしていた研究者が編集を行った。福岡県は蒲池星が編集を担当、小和田哲男や廣崎篤夫などが執筆した。近世からの地誌



第 1 図 『旧城跡等ノ取調』（福岡県教育委員会蔵）
（上：高知県庁から福岡県庁への照会文書）
（下：八女郡役所から福岡県社寺兵事課への回答文書）



第2図 『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡県史、史蹟名勝口碑傳説所在地』
(右：表紙と序文、左：所在地一覧(秋月の部分))

のほか、郡誌などにしか掲載のない城館なども採り上げられ、昭和40年代における城館の把握状況を知ることができる。

⑧ 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX 付録 福岡県中世山城跡
(福岡県教育委員会(副島邦弘・近沢康治編)・1979年)

九州縦貫自動車道建設に伴い、70年代には福岡県教育委員会では路線内の記録保存調査を大規模に行うこととなったが、中世城館跡も幾つかが調査対象となった。その一つ、鞍手郡鞍手町音丸城跡の調査報告に際し、県内の中世山城跡の一覧表を作成報告したものが本書である。基本的には城名、所在地、立地、規模、形式、築城者、時代、残存遺構、文献、備考の項目を列記したものである。例言の5に「本書は、中世山城についての資料を採集した資料編で、今後の研究のためのたたき台としてほしい。」とあるように、その後の福岡県内における城館研究の基礎資料となった。

⑨ 『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島(新人物往来社(磯村幸男編)・1979年)

全国の古代から近世に至るまでの城館遺跡を対象としたシリーズで、都道府県ごとに地元の研究者が執筆したこともあり、70年代の城館遺跡に関する情報が網羅されたものとなっている。福岡県は県職員で古代史が専門の磯村幸男が編集を担当し、中世については当時、文献⑧を手がけていた副島邦弘と近沢康治が、近世は三池賢一という県の関係者が手がけている。中世に関しては文献⑧と重複する部分が殆どであるが、一般への普及という意味においては本書の果たした役割は大きい。

⑩ 『福岡県の城』(廣崎篤夫・1995年) / 『福岡県古城探訪』(廣崎篤夫・1997年)(共に海鳥社)

廣崎篤夫が中学校の歴史教員の傍ら、全国城郭研究者セミナーなどの全国学会でも発表しつつ、60年代から90年代の約40年をかけて県内1,000箇所内の約700箇所を踏査し、内約300城を詳細に報告した労作である。特に、これまで城館跡の報告としては図面等が完備されたものがなかったが、本書では非常に多くの縄張り図を完備しており、本書が刊行された折には全国の城館研究者の注目度が高かったことは、当時の研究雑誌に書評が載せられたことから窺い知ることができよう。また、巻末には詳細な城館一覧表が載せられていることも本書の学術的価値を高めている。また、『福岡県の城』刊行の2年後には普及・追補版として『福岡県古城探訪』が刊行されている。

⑪ 『福岡県の城郭』（銀山書房（福岡県の城刊行会編・2009年））

平成11年、福岡県に「北部九州中近世城郭研究会」が発足した。同会は、これまで北部九州の城館研究を推進してきた一人、中村修身が中心となって主宰するもので、年1回の研究集会の他、年数回の現地見学会、年2回の機関紙の発行が主な活動内容となっている。自治体、大学、その他城郭研究者など、多様なメンバーによって構成された団体であり、この研究会が母体となって、中村と同会会員の村上勝郎が中心となってまとめたのが本書である。本書には、県内222箇所の中世城館の説明と挿図が載せられている。会員をはじめとする計38人という大人数が執筆に加わったこともあり、現在の県内城館の研究状況をそっくり反映したものとなっている。巻末には城館一覧も掲載されている。

この他、国人領主筑紫氏の城館の一覧を示した『筑紫氏城数之覚』（筑紫家文書・福岡市博物館蔵）や秋月氏の城館の一覧を示した『天正十五年四月生駒雅楽頭宛城数覚書』（原文書不詳・三浦末雄1966『物語秋月史 上巻』所収）などの記載城館も参考としている。

<手順2> 既存情報の整理

上記の資料をはじめとする把握された既存情報を元に、城館一覧表を作成するとともに、位置が判明しているものについては国土地理院発行1/25,000地図により位置図を作成した。それらの内容や詳細についてはⅢ・Ⅳを参照願いたい。

それらの情報をこの段階において、該当市町村教育委員会および調査指導委員に情報照会を行ったうえで、追補訂正を行った。

<手順3> 一次調査

上記、既存情報の整理を行った情報をもとに、一次調査として以下の調査を行った。

① 現地遺構の確認調査

位置が把握できたものについて、現地にて遺構の有無や状況について確認した。既に縄張り図等のデータがあるものについては、それらの図面と現地の状況との照合も行っている。

② 文献史料調査

既に翻刻されている古文書について、対象地区の城館にかかわる記載を抽出する作業を行った。詳細についてはⅥを参照願いたい。

③ 絵図調査

古城跡を描いた古絵図資料として、文化～天保年間に秋月藩士の大蔵種周・土井正就によって描かれた『古戦古城之図』（国立公文書館蔵）や文化9年（1812）に太宰府安楽寺天満宮の社家・船賀法印によって描かれたとされる『太宰府旧跡全図』（北）（個人蔵）及び『太宰府旧跡全図』（南）（福岡市博物館蔵）に記載された城館絵図の調査も行い、現地調査のためのデータの参考とした（『太宰府旧跡全図』については複製と翻刻を利用した）。

④ 地名調査

城館にかかわる地名を抽出する作業で、「明治十五年字小名調」（『福岡縣史資料 第7輯』1937年 福岡県編集・発行）を元に、城館関連地名について抽出を行い、現状で把握できている城館との照合を行った。また、上記文献には記載されていないが、現在残されている小字名な

ども城館に直接関わると思われるものについても抽出を行った。詳細についてはⅦを参照願いたい。

<手順4>二次調査（追加調査）

一次調査において得られた情報をさらに補完するため、追加調査として二次調査を行った。調査内容については以下のとおりである。

① 現地調査

一次調査において現地を確認した結果、城館遺構が確認され、なおかつ既往の図面がないものについて、縄張り調査を行い、図面を作成した。また、平地に立地し、現地形からでは城館の範囲の特定が困難なものについては、市町村が所蔵する地籍図を利用して城館の範囲を特定・推定した。作業の行程上、現地調査については一次調査と二次調査を連続して行わざるを得ない状況であり、いくつかについては事実上、一連の調査として行ったものもある。

なお、図面の作成方法・表記・遺構名称等については、『発掘調査のてびき 各種遺跡編』（2014年 文化庁編）に準じた。

② 地名調査

一次調査において確認された城館関連地名について、特定の城館と関連性が窺われるものについては、現在の場所との照合を行った。照合方法は、現在の小字との照合によるものであり、市町村教育委員会および地元博物館等に照会することで行った。そのため、既に今となっては所在不明となってしまったものも多かった。

最終的に、調査対象については「中近世城館」・「城館関連遺跡」・「城館等伝承地」の三つに分類を行い、それぞれ報告することとした。それらの分類基準は以下のとおりである。

① 中近世城館

中近世城館一般をさす。位置や来歴が明確なもののみならず、それらが不明の場合であっても、基本文献に城として記載されているものについてはここに含めた。

なお、報告においては中世城館と近世城館は区別し、中世から近世まで連続しているものについては中世城館に含め、近世以降に築城されたことが明らかなものについては、近世城館とした。

② 城館関連遺跡

城館等の伝承や来歴はないが、発掘調査において中世（概ね12～16世紀代）の溝や堀状遺構で囲まれた集落、屋敷地などの遺跡を指す。中世の屋敷地と思われる遺跡であっても、溝や堀で囲まれる、防御されたものではないものについては除外した。

③ 城館等伝承地

城館伝承の内、主として特定の武将などの居館として伝承のあるもので、現在、場所や城館遺構が全く不明となっているもの、城館以外のもの（岩など）に城館伝承が付されているものを指す。確実に遺構等が見られるものについては「中近世城館」として扱っている（千手館など）。

本書では、上記の調査を経た筑前地域の一部（旧御笠郡・夜須郡・下座郡・上座郡・穂波郡・嘉麻郡）について報告を行うものである。

Ⅲ 対象地域城館一覧

本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての一覧を示す。一覧表の各項目の詳細は以下のとおりである。

<一覧表の項目解説>

「地域」…県内の旧国名（筑前・筑後・豊前）の別を示す。

「No.」…遺跡の分類ごとに通して番号を付した。番号の振り方は以下のとおり。

- ・「中世城館」…1・2・3…
- ・「近世城館」…K1・K2・K3…
- ・「城館等伝承地」…D1・D2・D3…
- ・「城館関連遺跡」…R1・R2・R3…
- ・「所在不明」…F1・F2・F3…

「名称・別称」…城館の名称が複数あるものについては、なるべく基本参考文献の初出名を名称として採用し、他の名称については別称とした。ただし、今日一般的に通用した名称が上記基準でない場合は、一般名称の方を採用した（有智山城、宝満城など）。

「旧郡名」…旧郡名の別を指す。

「所在地」…大字までの表記とした。

「関連地名」…地名調査の結果、城館に直接関連すると思われる地名を記した。

「史料」…文献史料調査の結果、一次史料に記載のあるものには、「一次」欄に、参考史料に記載のあるものには「参考」欄に○を付した。

「地誌類・参考文献」……本一覧表を作成するにあたって基本参考文献とした文献に、記載のあるものにはそれぞれ○を付し、「その他文献」欄にはそれ以外の文献番号（番号は参考文献一覧（28～30ページに記載）の番号に同じ）を付した。番号がゴチックとなっているものについては、縄張り図または測量図が掲載されている文献を指す。文献の略号内容は以下のとおり。

- ・「本編」…『筑前国続風土記』（貝原益軒著・1709年）
- ・「附録」…『筑前国続風土記附録』（加藤一純・鷹取周成著・1798年）
- ・「拾遺」…『筑前国続風土記拾遺』（青柳種信著・文政～天保年間（未完））
- ・「全誌」…『福岡県地理全誌』（白井浅夫ほか著・1875～1880年）
- ・「種々」…『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（金文堂（和田宗八・1936年））
- ・「全集」…『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967年））
- ・「探訪」…『探訪日本の城』10西海道（小学館（西谷正ほか・1977年））
- ・「教委」…『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX 付録 福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）
- ・「大系」…『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979年））
- ・「廣崎」…『福岡県の城』（廣崎篤夫・1995年）/『福岡県古城探訪』（廣崎篤夫・1997年）
- ・「城郭」…『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009年）

「種類」…以下の基準により分類して表記した。

- ・「山城」(比高30m以上の丘陵・山稜上に立地する城館)
- ・「丘城」(比高30m未満の丘陵上に立地する城館)
- ・「平地居館」(平地に立地する城館)

「所在」…城館の所在や遺構の状況、範囲が判別できるか否か等で、以下のとおり分類・表記した。

- ◎…所在・残存遺構・範囲が明確に把握できるもの。
- …所在は把握できるが、残存遺構や範囲は把握できない(もしくは未踏査)もの。
- …小字の範囲程度の所在のみが把握できるもの。
- △…大字の範囲程度の所在のみが把握できるもの。

なお、旧郡の範囲までしか把握できないものについては「所在不明(×)」とした。

「図幅名」………Ⅳに掲載した位置図の図幅名を示した。図幅名は国土地理院のものを採用し、地図の西半分と東半分とで、それぞれ(西)と(東)を付した。

「調査データ」…今回の調査事業も含め、「縄張り調査」・「測量調査」・「発掘調査」がなされているものについて、それぞれ○を付した。また既に消滅し、縄張り図等はないが、古絵図があるものについては、「縄張り調査」の欄に「絵」と付している。

「包蔵地番号」…周知の包蔵地となっているものについては、包蔵地番号を県および市町村の番号をそれぞれ付した。それぞれの包蔵地を示した分布地図については、参考文献一覧を参照願いたい。

「概要」………Ⅴの個別報告に記載のあるものについては、記載ページを付し、記載のないものについては、城館の概要について記した。

< 中世城館 >

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類					参考文献										
								一 次	参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その他 文献			
筑前	1	唐山東城	からやまひがし	賀良山東城	御笠郡 糟屋郡	糟屋郡宇美町 井野・大野城市 乙金東	本城古城	○	○	○	○	○	○												31,64, 76,79
筑前	2	唐山西城	からやまにし	賀良山西城	御笠郡	大野城市中		○	○	○	○	○	○												31,64, 76,79
筑前	3	不動城	ふどう	牛頸城	御笠郡	大野城市牛頸	城の山、城ノ下、ジンダニ、カキノウチ、シロソウ、武士町							○											31,64, 81,99
筑前	4	和久堂城	わくどう	左野之城・脇田城	御笠郡	筑紫野市杉塚				○	○	○	○	○											26,28, 99
筑前	5	岩屋城	いわや		御笠郡	太宰府市太宰府・観世音寺	引陣	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,73,75, 79,86,88
筑前	6	浦ノ城	うらの(うらん)	大宰府城	御笠郡	太宰府市太宰府	浦ノ城	○	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,33
筑前	7	高尾山城	たかおやま		御笠郡	太宰府市太宰府			○	○				○											26,79, 99
筑前	8	有智山城	うちやま	内山城・内山太宰少貳城	御笠郡	太宰府市内山・北谷			○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,81, 88
筑前	9	升形城	ますがた	升形山城・愛嶽の砦	御笠郡	筑紫野市大石・太宰府市内山				○	○	○	○												28,79 92,97
筑前	10	宝満城	ほうまん	竈門山城	御笠郡	太宰府市内山・筑紫野市本道寺		○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○		79,91 99
筑前	11	頭巾山城	とっきんさん	突巾城・障子岳城・丸尾城	御笠郡 糟屋郡	筑紫野市柚須原・糟屋郡宇美町宇美									○	○									12,17,29 81,88
筑前	12	龍ヶ城	たつが		御笠郡	筑紫野市吉木・大石			○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	28,79
筑前	13	笹尾城	ささお		御笠郡	筑紫野市大石									○		○	○	○	○	○	○	○	○	-
筑前	14	高城	たか		御笠郡	筑紫野市塔原																			-
筑前	15	米嚙城	こめかみ		御笠郡	筑紫野市二日市北5丁目				○	○	○	○												28,79
筑前	16	天判山城	てんぱんざん	天拝山城・武蔵ノ城	御笠郡	筑紫野市古賀・武蔵	城ヶ原	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	28,79,99
筑前	17	飯盛城	いもり		御笠郡	筑紫野市武蔵			○	○	○	○													28,79,99
筑前	18	堂ノ山砦	どうのやま	薬師山城	御笠郡	筑紫野市武蔵			○																28,79,99
筑前	19	博多見城	はかたみ	宇佐原城・里岩城	御笠郡	筑紫野市山口				○	○	○	○												28,79
筑前	20	柴田城	しばた		御笠郡	筑紫野市天山			○	○	○	○	○												28,79,99
筑前	21	永岡城	ながおか	長岡城・筑紫広門砦	御笠郡	筑紫野市永岡	上城戸、向城戸、城ノ内			○			○	○											28,99
筑前	22	ちよぼんが城	ちよぼんが	ちよんぼんが城	御笠郡	筑紫野市山口																			-
筑前	23	小出城	こいで		御笠郡	筑紫野市山口																			-

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
山城	◎	福岡南部(東)	○			300103	157(宇美町)	本文57頁参照
山城	◎	福岡南部(東)	○					本文57頁参照
山城	◎	福岡南部(東)	○			190224		本文58頁参照
丘城?	○(消滅)	福岡南部(東)				170047	047	杉塚の山ノ谷池の北側から東側あたりにあったと考えられるが、調査を経ないまま開発によって消滅した。『本編』には「杉塚村の内、田端に小山あり。是則城址也。(中略)筑紫氏の家臣上野伊賀と云者まもれりと云。」とある。また『城教之覚』には「佐野之城」として上野伊賀守が居城したとあることから、和久堂城を指しているものと思われる。消滅により、詳細な位置は不明である。また、文献99には、推定地よりも西側山稜部の尾根線上を城として図化しているが、これについては検討を要する。
山城	◎	太宰府(西)	○			210035		本文59頁参照。城域は国の特別史跡大野城跡(古代山城)の範囲内。
丘城か	◎	太宰府(西)		○	○	219169		本文61頁参照
山城	◎	太宰府(西)	○			210158		本文62頁参照
山城	◎	太宰府(西)	○			210170		本文63頁参照
山城	◎	太宰府(東)	○				170322(筑紫野市)	本文64頁参照
山城	○	太宰府(東)	○					本文65頁参照。推定城域は国史跡宝満山の範囲内。
山城	◎	太宰府(東)	○			300104	170(宇美町)	本文67頁参照
山城	◎	太宰府(東)	○				170323	本文68頁参照
山城?	△	太宰府(東)						『種々』筑紫郡大石に「笹尾城址」と記載するのが初出とみられるが、詳細は不明。笹尾山山頂周辺に想定されるが、現地にて城郭遺構を確認することはできない。
山城	●	二日市(西)						『拾遺』には「塔ノ原村薩摩谷の南なる松山なり。(中略)天判山の城の砦ならむか。」とある。地元の言い伝えでは、天判山城(天判山山頂)から尾根線上を西へ約800m進んだ頂部(標高281m)に位置するという。現地未確認のため、遺構の有無は不明である。この字は「薩摩屋敷」で、北側の谷は「薩摩谷」といって、島津勢が陣を置いたという伝承が残る。
丘城	◎	二日市(西)	○			170345		本文69頁参照
山城	◎	二日市(西)	○			170350		本文70頁参照
山城	◎	二日市(西)	○			170351		本文71頁参照
山城	◎	二日市(西)	○					本文72頁参照
山城	◎	二日市(西)	○			170363		本文73頁参照
丘城	◎	二日市(西)	○		○	170320		本文74頁参照
平城	●	二日市(西)			○			山口川を望む小高い台地上に位置する。『城教之覚』には「長岡城」として、筑紫氏家臣原大隅守が城主であったとする。『拾遺』には、「字を城といひて今圃となれり。昔筑紫広門の砦なりしと云。」とある。周辺には「上城戸」などの地名も残り、『全誌』でも隄跡とありと言っているように、台地の縁辺部には土塁状の痕跡も残される。近年、筑紫野市教育委員会によって確認調査が進められているが、現在のところ、明確な城郭遺構は確認されていない。
山城	◎	二日市(西)	○					本文75頁参照
丘城	●	二日市(西)						『旧跡全図』に描かれる。山口川に面した比高10mにも満たない独立小丘陵上に位置する。丘陵上は人為的な造作はみられるが、耕地利用に伴うもので城郭遺構は確認できない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	参考文献																		
								史料 一 次	参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その 他 文 献				
筑前	24	大出城	おおいで		御笠郡	筑紫野市山口																				-
筑前	25	天ヶ城	あまが	阿満か城・ 蘆城城	御笠郡	筑紫野市阿志 岐・山家		○	○	○	○	○		○					○	○	○	○	○			28,79
筑前	26	砥上山城	とかみやま		夜須郡	朝倉郡筑前町 砥上														○	○	○	○			28,69,72
筑前	27	莊林城	しょうばやし	庄林城・城 林城・兼光 城	夜須郡	朝倉郡筑前町 砥上					○	○	○													-
筑前	28	中牟田城	なかむた		夜須郡	朝倉郡筑前町 中牟田		○																○		28,99
筑前	29	作手城	つくで		夜須郡	朝倉郡筑前町 東小田								○						○	○	○				-
筑前	30	弥永城	いやなが		夜須郡	朝倉郡筑前町 弥永			○	○	○									○	○	○	○			21,69
筑前	31	小鷹城	こたか	梨木城	夜須郡	朝倉郡筑前町 弥永・栗田	梨ノ木城 弥永之城	○	○	○		○	○	○						○	○	○	○	○		21,51, 79,99
筑前	32	桜川砦	さくらがわ		夜須郡	朝倉郡筑前町 弥永																○	○			-
筑前	33	阿弥陀峰城	あみだが みね		夜須郡	朝倉郡筑前町 久光				○	○									○	○	○	○	○		21,69
筑前	34	栗林城	くりぼうし	栗田城・栗 田城	夜須郡	朝倉郡筑前町 栗田				○	○		○	○	○					○	○	○	○	○		21,69
筑前	35	平手城	ひらて		夜須郡	朝倉郡筑前町 栗田・朝倉市 隈江か								○												-
筑前	36	茶臼山城	ちやうすや ま		隈江城	朝倉市隈江																				47
筑前	37	古城戸城	ふるきど	深江伯耆 屋敷跡	夜須郡	朝倉市隈江				○	○															47
筑前	38	五位山城	ごいやま		夜須郡	朝倉市千手・長 谷山																				112
筑前	39	鼓岳城	つづみが たけ	千手城	夜須郡	朝倉市下湊・千 手				○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			79
筑前	40	片山城	かたやま	持丸城	夜須郡	朝倉市持丸		○	○	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			79
筑前	41	道場山城	どうじょうや ま	道城山城	夜須郡	朝倉市長谷山				○										○	○	○	○			69
筑前	42	殿神楽城	とのかぐら		夜須郡	朝倉市秋月														○	○	○				-
筑前	43	福嶽城	ふくだけ	観音岳城	夜須郡	朝倉市秋月・長 谷山															○	○	○	○		47
筑前	44	稻荷山城	いなりやま	古賀城	夜須郡	朝倉市秋月																	○			47,79
筑前	45	荒平城	あらひら	荒平山砦・ 秋月氏宅	夜須郡	朝倉市秋月・秋 月野鳥		○	○	○			○		○	○				○	○	○	○			37,38, 73,79,85
筑前	46	杉本城	すぎもと	秋月宅所・ 秋月館	夜須郡	朝倉市秋月野 鳥		○	○	○	○		○		○	○				○	○	○	○			70,71

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄	測	発	福岡県	市町村	
丘城	●	二日市(西)						小出城の南の尾根上に位置する。現地は墓地となっており、人為的な造作はみられるが、城郭に伴うものではない。小出城と共に地元で城として伝えられてきたものである。
山城	◎	二日市(東)	○				170275	本文75頁参照。城域は国史跡阿志岐城跡(古代山城)の範囲内。
山城	◎	二日市(東)	○					本文76頁参照
丘城か	△	二日市(東)						『附録』には「平地凡八畝有り。里民兼光の城址といふ。」とあり、『拾遺』には「浦谷田神社にある。」とする。字「上林」が推定地と見られ、砥上上林遺跡の発掘調査では、中世の遺跡も見られることから、関連が窺われる。
平地城館	◎	二日市(東)	○					本文77頁参照
平地	△	二日市(東)						『種々』「朝倉郡夜須村東小田」に「作手城址」と記載するのが初出とみられるが、詳細は不明。現在の大字東小田の地内に推定されるが、現地に城郭遺構と見られるものは見つかっていない。
山城か	△	甘木(西)						『本編』には「弥長村の北の山にあり。深江伯耆在城すといへり。」とあり、『附録』には「今は其地定かならず。」とされ、江戸時代に既に場所が分からなくなっている。地元の古記録には、小鷹城の南東側麓あたりに「黒田伯耆政成屋敷跡」と共に「深江伯耆守屋敷」が記載されているが、地誌類の言うところのものと一致するかも不明であるし、現地での確認もできていない。なお、『城敷之覚』に記載される「弥永ノ城」は小鷹城の事と考えられる。
山城	◎	甘木(西)	○	○	○	560003	035	本文78頁参照
山城か	△	甘木(西)						廣崎篤夫の著作(文献10)に記載されるのが初出である。大字弥永の地内で小鷹城の近くに小字地名の「桜川」があり、これが名の根拠とするも、現地に城郭遺構はなく、砦という根拠は不明。
山城	●	甘木(西)				560004	006	小鷹城の南西側の半独立峰「阿弥陀峰」山頂に位置する。『附録』には秋月氏の端城とし、家臣板並左京進が守備したとする。山頂には阿弥陀堂とそれに伴う小さな平坦面がみられるのみで、明確な城郭遺構は確認されない。
山城	△	甘木(西)				560005	071	『本編』には秋月氏家臣、深江伯耆の居城とする。『附録』には目配山の南の麓にあり、平地五畝許、石垣ありとする。分布地図(文献101・104・112)には栗田集落に近い丘陵上に位置が記されるが、現地は後世の耕地による平坦面などがみられるのみで城郭遺構はみられない。場所が異なっている可能性もある。
山城?	△	甘木(西)						『種々』「朝倉郡安川村目配山」の項に目配山城址と共に「平手城址」として掲載される(目配山城は神功皇后伝説に由来するものとして除外)。当該記載以外に情報がなく、目配山周辺にも城郭遺構が見られないため、詳細不明。
山城	◎	甘木(西)	○					本文79頁参照
平地城館か	●	甘木(西)						『全誌』に「(隈江)村西南八町弥永ヨリ秋月ニ通フ道傍ニアリ。里民深江伯耆守カ城址ト云。南ノ側ニ天守ノ土居ト唱ル処アリ。上ニ平地五畝高三間許ノ所アリ」とし、『附録』にも深江伯耆の屋敷跡として同様の記載がみられる。地元の古記録にも、近似する場所に「天守ノ臺」の記述があるため、およその場所が推定できるが、現地にその痕跡は確認することはできない。
山城	◎	甘木(西)	○				4022810396	本文80頁参照
山城	◎	甘木(西)	○			100343	4022810190	本文80頁参照
丘城	●(消滅)	甘木(西)	絵					本文81頁参照
丘城?	●	甘木(西)					4022810394	秋月氏二十四城の一つとする。『本編』「休松古城」には永禄11年(1568)に大友方が秋月を攻めた際、吉弘左近大夫鑑理が「道場山」に陣を置いたとする。また秋月氏二十四城の一つともされる。地元の古記録の記載により、道場山は稲荷山城の西側の尾根の先端部であると分かるが、現地には明確な城郭遺構がなく詳細は不明。なお、読みは不明であるが、別名が「道場山」であるため、双方が読むことのできる「どうじょうやま」とした。
山城	●	甘木(西)						初出の『種々』には「秋月町古賀ノ谷」として「殿神楽城址(古賀氏)」の記載が見られる。地元の古記録には、秋月から白坂峠へ向かう谷の西側山稜頂部(標高389m)に「殿神楽」が記載され、城地と推測されるが、市の踏査では現地に城郭遺構は確認されておらず、詳細は不明。
丘城	◎	甘木(東)		○	○	100342	4022810159	本文82頁参照
山城	◎	甘木(東)	○					本文82頁参照。文献11・79ではこの城を殿神楽城とするが稲荷山城とするのが妥当である。
山城	◎	甘木(東)	○	○	○	100340	4022810152	本文83頁参照
平地城館?	△	甘木(東)						戦国時代の秋月氏の平地館を指す。『本編』には「上秋月村にあり。是秋月種実の邑城なりと云う。」とあり、『附録』には「今其地つたへす。」とある。『全誌』では「八幡宮ノ社地ニ続キタル地ニテ藤ノ森ヲ追手トス。」とする。また『本編』には黒田長政の筑前入国時に叔父・図書助直之を秋月氏旧宅の跡地の宮園に置いたとし、その場所は秋月陣屋(今の邑君の居玉ふ宅地なり)にあったとする。このことから、現在一般的に杉本城は秋月陣屋跡(秋月城跡)があった場所とするのが一般的ではあるが、明確な城郭遺構や発掘成果が見られないことから、詳細な場所は不明と言わざるを得ない。

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
山城	◎	甘木(東)	○			100339	4022810151 (朝倉市)・ 2194(嘉麻市)	本文85頁参照
山城か	△	甘木(東)						『夜須郡之部 風土記再調子草稿』(青柳種信著・『拾遺』の草稿。『筑前町村書上帳』所収。)の「上秋月村」には、「高尾古城」として、「八幡ノ社ヨリ東廿丁斗ニアリ。高山ニシテ茅山也。古所山の出張(城)といふ、堀切に尚残れり。」とあり、古処山城から上秋月八幡宮へ至る尾根線上にあるいくつかの城郭の一つがこれにあたる可能性があるが、特定不可能。詳細は古処山城の項を参照。
丘城	◎	甘木(東)					4022810393	本文89頁参照
山城?	△	甘木(西)						『附録』には「平家城といふあり。山上の平らかなる所三畝余、西北二方に低き所有り。(中略)里民の言く、この所に平家の一類居城せし。」とある。休松城の南西麓一帯が埴地内に当たるが、該当地内には明瞭な城郭遺構は確認できず、詳細は不明。
山城	◎	甘木(東)	○			100344	4022810254	本文90頁参照
平地城館	◎	田主丸(西)	○					本文90頁参照
山城	◎	甘木(東)	○					本文91頁参照
丘城	◎	田主丸(東)	○					本文92頁参照
山城	○	田主丸(東)						『附録』には「(宮野村)立野の北にあるを平家城址といふ。平らかなる所三畝斗あり。鳥集院村に嶺をもって境とせり。」とあり、『全誌』には「南ノ方、漸々低シ。東北ニ椽メクレリ。城主ノ名伝ハラス。」とある。上記の記述から、立野天満宮の北側背後の山稜頂部あたりに推定地が求められるが、現地未確認のため、詳細は不明である。
山城	△	田主丸(東)						『全誌』には「(宮野村)八坂ノ奥ニ町ニアリ。山上ニ平地アリ。」とする。南琳寺北側背後の山中に推定地が求められるが、字「八坂」の範囲が広く、現状では位置の特定はできていない。
山城	◎	吉井(西)	○				4022810357	本文93頁参照
丘城	●	吉井(西)						『本編』には「烏山の北五町許に城山有。平家の古城と云伝へたり。」とある。また、『附録』には「カワクホの平家城といふ。」とあり、『拾遺』には「茶白山と云。道目木の内川窪に在。(中略)里人ハ城カ山といふ。山上平地の下に椽廻れり。」とする。志波の道目木の愛宕社(秋葉社)が城地に当たるとされるが、現地には神社境内の平坦面があるのみで、明確な城郭遺構は確認できない。
山城	◎	吉井(西)	○			580105	4022810432	本文94頁参照
山城	●	吉井(西)						『附録』には「秋月氏出城のよし。山上纔に平らかなる所あり。」とし、筑後川に面した高山山頂(標高190m)に推定される。現地はホテルや道路の敷地となっており、現状では城郭遺構を確認することはできない。
山城	◎	吉井(西)	○			580085	4022810431	本文94頁参照
—	●	吉井(西)					4022810448 (金烏山集雲庵跡)	文献23によると、『星野家譜』に南北朝期に烏山城主松平遠盛が北朝方として記載に現れるとし、それは紫雲院金烏山金應寺にあったと推測する。よって、寺跡が城地として想定されるが、現地は谷部分に当たり、寺院跡と思われるが明確な城郭遺構は見られない。城郭そのものの存在自身も疑わしいところである。
丘城	◎	吉井(西)	○			580091	4022810436	本文96頁参照
丘城	◎ (消滅)	吉井(西)	絵					前隈山城の北約200m地点に所在したが、戦後の開墾によって消滅。『附録』には「ひいた山城跡」として記載され、麻氏良城の端城とする。『古城図』「前隈山城古城之図」(第84図)には「茶白山」として、横堀が巡る円形の曲輪が描かれる。
山城	◎	吉井(西)	○				4022810498	本文97頁参照
山城	◎	吉井(東)	○			580035	4022810511	本文97頁参照。『附録』に城の南の岡に里屋敷ありとする
山城	◎	吉井(東)	○			580033	4022810509	本文98頁参照
丘城	◎	吉井(東)	○	○	○	580023	4022810565	本文100頁参照。城域は国史跡杷木神籠石の範囲内。
山城	◎	吉井(東)	○		○	580025	4022810567	本文101頁参照。城域は国史跡杷木神籠石の範囲内。
山城	◎	吉井(東)	○			580007	4022810510	本文102頁参照
山城	◎	吉井(東)	○			580032	4022810571	本文103頁参照
山城	●	小石原(西)	絵			100425	4022810384	本文104頁参照

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	参考文献																		
								史料 一次参考	地誌類 本編 附録 拾遺 全誌	旧城	種々	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他 文献								
筑前	73	鳥岳城	からすだけ	宝珠山城・舞鶴城	上座郡	朝倉郡東峰村宝珠山	城ヶ迫、城の平、城ノ辻																			25,95,116
筑前	74	高鼻城	たかはな		上座郡	朝倉郡東峰村鼓																				116
筑前	75	松尾城	まつお	小石原城	上座郡	朝倉郡東峰村小石原		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	52,62,74
筑前	76	二股岳城	ふたまただけ		上座郡 豊前田川郡	朝倉郡東峰村小石原・田川郡添田町落合			○																32,116	
筑前	77	庄林城	しょうばやし	剩林山城	上座郡	朝倉郡東峰村福井	城ぼし																			32
筑前	78	鶯岳城	つただけ		上座郡	朝倉郡東峰村福井																				-
筑前	79	伊王寺城	いおうじ	医王寺城・城の辻城	上座郡	朝倉郡東峰村宝珠山																				116
筑前	80	懸尾城	かけお	掛尾城	穂波郡	飯塚市内住																				12,17,29,90
筑前	81	鬼杉城	おにすぎ	牛頸の城	穂波郡 糟屋郡	飯塚市内住大野・糟屋郡宇美町宇美																				12,17,29,90
筑前	82	米ノ山城	こめのやま		穂波郡	飯塚市山口	城山、城ノ山	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12,17,29,41,63,90
筑前	83	向山城	むかいやま		穂波郡	飯塚市馬敷																				12,17,29
筑前	84	桑木城	くわのき		穂波郡	飯塚市内野																				12,17,29
筑前	85	高石山城	たかいしやま	内野城	穂波郡	飯塚市内野																				12,17,29
筑前	86	扇山城	おうぎやま	修理殿城	穂波郡	飯塚市阿恵																				12,17
筑前	87	茶臼山城	ちやうすやま		穂波郡	飯塚市阿恵・山口																				12,17,29
筑前	88	一ノ谷城	いちのたに		穂波郡	飯塚市平塚・阿恵																				12,17,29
筑前	89	弥山城	ややま		穂波郡	飯塚市弥山																				72
筑前	90	許斐山城	このみやま	木の実山城	穂波郡	飯塚市幸袋	城ノ腰																			12,18,22,100
筑前	91	大日寺城	だいにちじ	古城	穂波郡	飯塚市大日寺																				12
筑前	92	潤野城	うるの	古城	穂波郡	飯塚市潤野																				12
筑前	93	川津城	かわづ	古城	穂波郡	飯塚市川津																				12
筑前	94	伊川城	いがわ	古城	穂波郡	飯塚市伊川																				12
筑前	95	白旗山城	しらはたやま		穂波郡	飯塚市相田・中																				12,18,19,22,100
筑前	96	城ヶ尾城	じょうがお		穂波郡	飯塚市舍利蔵	城ヶ尾																			12,17,65
筑前	97	宮山城	みややま	津原城・城山城	穂波郡	飯塚市津原	城ノ山																			65
筑前	98	城山城	じょうやま	北古賀原城・北古賀城	穂波郡	飯塚市久保白・北古賀	城越																			65
筑前	99	小佐古城	おさこ	於佐古城・城山城	穂波郡	飯塚市大分・北古賀・久保白・高田																				12,17,29

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
山城	◎	吉井(東) /大行司 (西)	○			580009	269	本文104頁参照
山城	◎	小石原 (東)	○			550048	89	本文106頁参照
山城	◎	小石原 (東)	○	○	○	550006	32	本文107頁参照。福岡県指定史跡。
山城	◎	小石原 (東)	○				51	本文109頁参照
山城	●	大行司 (西)					320	『附録』には「ショウバシといふ処に城跡あり。城主しれず。」とあり、『拾遺』には「荏林城址」として「猿喰の上に在。城主不詳。」とする。猿喰集落の西側背後の猿喰山山頂(標高224m)を城地と伝えるが、現地には斜面上に小規模な段造成が見られる程度で、明確な城郭遺構とは言えず、詳細は不明である。
不明	△	大行司 (西)						初出文献は『種々』で、朝倉郡宝珠山村福井に「葛岳城址(木村氏)」となっている。後出文献にこれ以上の情報はなく、場所を含めた詳細は不明である。
山城	◎	英彦山 (西)	○			540003	236	本文109頁参照
山城	◎	篠栗(東)	○			490005		本文110頁参照
山城	◎	太宰府 (東)	○			460096		本文111頁参照
山城 (消滅)	◎	太宰府 (東)	○	○		490098		本文112頁参照。筑紫野市の包蔵地番号は170321であるが、筑紫野市内には位置しない。碎石により完全に消滅。
山城	◎	太宰府 (東)	○			490123		本文114頁参照
丘城か	△	大隈(西)						『本編』には「(内野)町はつれの西の山に城址あり。桑の木の城と云。是又城主の名詳ならず。」とあり、『附録』には「今、林となれり」とあるが、所在不明である。
山城	◎	大隈(西)				490100		本文114頁参照
山城	◎	大隈(西)	○			490097		本文116頁参照
山城	◎	大隈(西)	○			490094		本文118頁参照
山城	◎	大隈(西)	○			490097		本文120頁参照。桂川町の包蔵地番号は206であるが、桂川町内には位置しない可能性が高い。
山城か	△	大隈(西)						文献72の秋月氏関連の城郭一覧表に記載されており、在城者は弥山大学としている。他の文献には全く記載がなく、この記載についての出典や典拠は不明である。弥山岳など、飯塚市弥山の範囲内に場所が想定されるが、現状では場所はおろか存在すら不明である。
丘城	◎	飯塚(西)	絵				425	本文121頁参照
山城	△	飯塚(西)						『全誌』には「古城址」として「(大日寺)村ノ南二町城ノ尾ニアリ。山上平地二反許アリ。城主不伝。」とある。大日寺地内にあるものと考えられるが、詳細な場所は不明。
平地城館か	△	飯塚(西)						『附録』には「古城(潤野)村の北一町はかりにあり。平地五畝余、めぐりに一段低き所あり。城主知れず。」とある。現在、潤野地区の北側は宅地や工場が密集しており、城郭は確認できない。
平地城館か	△	飯塚(西)						『全誌』には「古城址」として「(川津村)ノ東三町城ニアリ。平地二畝許。圃トナレリ。城主不詳。」とし、文献12にも同様の記載が見られる。『種々』には「川津城址」として登載されている。これらの記述や現地地形を見る限りでは、建花寺川西岸に面した平地に想定できるが、現状では市街地化が進み、詳細な場所は不明である。
丘城?	△	飯塚(西)				070482	531	『附録』には「古城地(伊川)村に有り。平地二反はかりあり。東西ハ廣ク南北ハ狭シ。城主詳ならず。」とある。分布地図には、伊川の八幡宮の西、建花寺との境の低丘陵上を城地としているが、現地は果樹園となっており、現状で城郭遺構を確認することはできない。
山城 (消滅)	●	飯塚(西)					424	笠置山の南西麓にあたる白旗山山頂(標高163m)に位置する。『附録』には「笠城の端城なりしといふ。城主知れず。本丸(方四十間余)及水の手門の跡等残れり。」とあるが、周囲は鉱害によって地形変化がなされている。文献18・100には現状の縄張り図も載せられているが、鉱害あるいはその復旧による改変地形を図にしたものであり、城郭遺構は現状では確認できない。
山城	△	飯塚(西)						『附録』には「城か尾」として「平地五畝許有り。城主しれず。」とあり、『全誌』には「今モ古瓦出ル事アリ。」とする。舍利蔵地内には字「城々尾」の地名があり、舍利蔵集落の西側背後の山上に想定されるが、城郭遺構は見つかっておらず、詳細は不明。
丘城 (消滅)	◎	飯塚(西)	絵				91	本文122頁参照
山城	◎	飯塚(西)	○				117	本文123頁参照
山城	◎	飯塚(西)	○			490020		本文123頁参照

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	参考文献																			
								史料	地誌類	参考文献													その他				
一次	参考	本編	附録	拾遺	全誌	旧城	種々	全集	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	参考文献													
筑前	100	高の山城	たかのやま	高野山城	穂波郡	飯塚市高田	城ノ鼻、城ノ浦、城林					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12,17,65
筑前	101	藤ノ木城	ふじのき	南尾城	穂波郡	飯塚市忠隈・南尾	城崎												○	○	○	○	○	○	○	○	12,65
筑前	102	笠木山城	かさぎやま	笠置山城	穂波郡 鞍手郡	飯塚市庄司・相田・宮若市宮田	城道、笠城、城ノ下	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12,13,18, 19,22,77, 94,100	
筑前	103	高丸城	たかまる		穂波郡	飯塚市庄司か																				-	
筑前	104	葛山城	かづらやま	摺鉢山城	穂波郡 鞍手郡	飯塚市庄司・鞍手郡小竹町新多													○	○	○	○	○	○	○	12,18, 22,100	
筑前	105	小呉竹城	おくれたけ		穂波郡	飯塚市目尾													○	○	○	○	○	○	○	12,22	
筑前	106	城尾城	じょうがお		穂波郡	嘉徳郡桂川町土師・飯塚市弥山																				12	
筑前	107	茶臼山城	ちやうすやま		穂波郡	嘉徳郡桂川町寿命																				12	
筑前	108	堂の山城	どうのやま		穂波郡	嘉徳郡桂川町瀬戸																				-	
筑前	109	萱城	かや		嘉麻郡 鞍手郡	飯塚市勢田・直方市中泉																				15,66	
筑前	110	古館城	ふるたて	鯰田城	嘉麻郡	飯塚市鯰田																				14	
筑前	111	古城	こ		嘉麻郡	飯塚市鯰田																				14	
筑前	112	築城	つき		嘉麻郡	飯塚市鯰田	築城、殿池																			-	
筑前	113	赤坂城	あかさか		嘉麻郡	飯塚市赤坂																				12,20,27	
筑前	114	城ノ腰城	じょうのこし		嘉麻郡	飯塚市有安																				12,20,27	
筑前	115	元吉城	もとよし	大門城	嘉麻郡	飯塚市大門・仁保・鹿毛馬	城本谷																			12,15, 20,27	
筑前	116	山野城	やまの	高野城・高安城・香安城	嘉麻郡	嘉麻市山野	城ノ辻、浦ノ園																			12,30	
筑前	117	鷲山城	さぎやま	勝山城	嘉麻郡	嘉麻市岩崎																				16,30	
筑前	118	日野山城	ひのやま	金毘羅山城・琴平山城	嘉麻郡	嘉麻市上臼井	城山、城ノ辻																			12,82	
筑前	119	才田城	さいた		嘉麻郡	嘉麻市才田																				72	

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
山城	◎	飯塚(西)	○				115	本文125頁参照
山城	●	飯塚(西)				450019	56	忠隈と南尾との境、穂波東中学校の北側の丘陵上に位置する。『附録』には「忠隈村フジノキ」の「城跡」として「城主詳ならず。平地三畝はかりあり。空隍の跡も残れり。」とある。『全誌』には天正9年(1581)秋月種実が大友方と戦った時に陣を置いたとする。現地は配水池や墓池が作られており、後世の改変が激しく、現状では城郭遺構を確認することはできない。
山城	◎	直方(西)	○			070333	412	本文126頁参照
山城か	△	直方(西)						『種々』には嘉穂郡幸袋町大谷山に「高丸城址(吉原氏)」とある。大谷山には大谷神社や山伏塚が知られ、それらは大字庄司字大谷(庄司地区の北東部の山中)に位置しているため、当城もそのあたりの山城である可能性が高いが、これ以上の情報はないため、場所を含めた詳細は不明である。
山城	◎ (消滅)	直方(西)	○			070334	413	本文129頁参照
丘城	○ (消滅)	直方(東)						『附録』には「城主知れず。平地三畝許あり。」と記し、『全誌』には「大呉竹・小呉竹トテ二小山アリ。」とし、小丘陵上にあったことが想定される。現在、目尾には庄司川と遠賀川の合流地点の北側に字「小呉竹」の地名があり、その地内に城城が想定されるが、宅地化や工場地化が進んでいるため、現状では城郭遺構を確認することができない。
山城	△	大隈(西)				470201	178	『附録』には「(土師)村の坤十三町はかりにあり。城主知れず。平地三町ほどありて、堀切も残れり。」とする。県分布図には、飯塚市弥山との境に当たる稜線上を城地とするが、現地は自然地形であり、城郭遺構を確認することができない。場所が誤っている可能性も考えられる。
山城	●	飯塚(西)				470200	177	『全誌』には「(寿命)村ノ東南三町茶臼山ノ絶頂ニアリ。平地壺畝許。里伝ニ多田満仲ノ砦ト云。不審。」とある。実際に想定される場所には古墳はあるが城郭遺構はみられない。明治以降に初出情報がみられ、平安時代の砦とすることから、誤伝の可能性も考えられる。
山城か	△	飯塚(西)						『附録』には「瀬戸村の良にあり。城主知れず。平地一畝斗有。古塚多し。」とある。現在、瀬戸の東側には、大将陣山から南へ延びる稜線があるが、破壊が進んでおり、詳細な状況は不明である。
山城	◎	直方(東)	○			510021	1(旧額田町)	本文129頁参照
丘城	●	飯塚(東)				070481	3	『附録』には「(鯉田)村の巽四町はかりにあり。平地三反余あり。吉賀江右京といふ者の居城なりしとぞ。」とある。晴雲寺の背後の丘陵上が城地とされるが、墓池と自然地形のみで城郭遺構は確認できず、詳細は不明。
平城か	△	飯塚(東)						『拾遺』には「(鯉田)村の西南八丁許にも古城址有。誰人の有なりしや不詳。」とある。『全誌』はこの場所を古館城としており、入れ替わっている可能性がある。鯉田地内に想定されるが、詳細な場所は不明。
丘城	○	飯塚(東)						『附録』には「是(古館城)より乾二町はかりに築城とて三畝ほどの地有り。右京か端城の跡といふ。」とある。古館城推定地の北西側、JR鯉田駅の南西側には字「築城」が残る。明治21年(1888)の字図には、塚のような表記があるが現在は宅地が密集し、現状での確認はできない。また遠賀川に面した北西側には「殿池」の地名があり、関連地名の可能性もある。
山城	●	飯塚(東)				480072	170	赤坂のほぼ中央にある独立丘陵上に位置する。『拾遺』には「隍の址めくれり。古城址なるべけれど其事実伝はらず。」とある。城地と推定される山頂部は自然地形で明瞭な城郭遺構は見られず、詳細は不明。
丘城	● (消滅)	飯塚(東)				480073	76	『附録』には「(有安)村の南七町はかりにあり。城主詳ならず。本丸・二の丸・三の丸の跡も残れり。」とあり、『拾遺』には「丘の上高き処二畝許面に縁有。城主詳ならず。」とある。庄内川に面し、鳥羽池と挟まれた小丘陵が、字「城ノ越」であるため、城地と推定されるが、住民センターなどが建てられており、既に削平され、城郭遺構は残っていない。
山城	◎	飯塚(東)	○				49(旧庄内町) 132 (旧額田町)	本文130頁参照
丘城	●	飯塚(東)				500007 500010	20062008	本文131頁参照
丘城	●	飯塚(東)					2025	遠賀川東岸、稲築橋の傍にある独立丘陵上に位置する。古記録類は全くなく、初出は文献16とみられる。丘陵一帯には平坦面が広く展開するが、後世の耕地の痕跡とみられ、堀切などの城郭遺構はみられない。近年の道路地図には「勝山城跡」と記載されるが根拠は不明である。
山城	◎	大隈(東)	○			520053	2114	本文132頁参照
不明	△	大隈(東)						文献72の秋月氏関連の城郭一覧表に記載されており、在城者は才田左衛門佐としている。この他、『種々』を除いては、全く記載がなく、出典や典拠は不明である。そのため、嘉麻市才田の範囲内に場所が想定されるが、現状では場所はおろか存在すら不明である。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	参考文献																
								史料 一 次	参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その 他 文 献		
筑前	120	千手館	せんず	千手八太郎宅	嘉麻郡	嘉麻市千手		○																12,24
筑前	121	片辺城	かたべ		嘉麻郡	嘉麻市椎木				○	○		○	○	○	○	○	○	○	○				12,24
筑前	122	長谷山城	はせやま	小岳城・御岳城	嘉麻郡	嘉麻市平山・九郎原・上臼井・嘉穂才田・嘉穂郡・桂川町土師					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				12,111
筑前	123	竹生島城	ちくぶじま		嘉麻郡	嘉麻市西郷																		59
筑前	124	柴原城	しばはら		嘉麻郡	嘉麻市大力	デンシロ																	114
筑前	125	茅城	かやん	馬見城・武の城	嘉麻郡 /夜須郡	嘉麻市馬見・朝倉市江川		○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○				12,24, 78,83
筑前	126	花尾城	はなお		嘉麻郡	嘉麻市桑野	城山	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				12,24,93
筑前	127	益富城	ますとみ	益富山城・大隈城	嘉麻郡	嘉麻市中益・大隈町・大隈	城山、城下	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				12,24,53 56,74,96
筑前	128	毛利ヶ城	もうりが	福智城	嘉麻郡	嘉麻市馬見					○	○		○										12,24,93
筑前	129	平家城	へいけが		嘉麻郡	嘉麻市屏					○	○												12,24, 87,93
筑前	130	大王山城	だいおうざん	帝王城	嘉麻郡 /豊前 田川郡	嘉麻市上山田・田川市猪国				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				24,82
筑前	131	木城館	きしろ	平床屋敷・里城	嘉麻郡	嘉麻市上山田	木城				○	○	○											12,68
筑前	132	塘迫城	つつみがさこ	塘の城(上の城・下の城)	嘉麻郡	嘉麻市小野谷	城山				○	○		○	○	○	○	○	○	○				12,24
筑前	133	岸殿城	きしどの	御前ヶ城・岸取城・高城	嘉麻郡	嘉麻市下山田					○	○	○	○										12
筑前	134	遠見ヶ尾城	とみがお		嘉麻郡	嘉麻市小野谷					○	○		○	○	○	○	○	○	○				12
筑前	135	屏山城	へいやま	平家城	嘉麻郡 夜須郡	嘉麻市屏・朝倉市江川					○	○												12,93
筑前	136	筒見城	つつみ	鴨ヶ岳城	嘉麻郡	嘉麻市下山田・平	城ヶ浦、城山、城子町				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				12

<近世城館>

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	参考文献																
								史料 一 次	参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その 他 文 献		
筑前	K1	秋月陣屋	あきづきじんや	秋月城・黒田氏居館	夜須郡	朝倉市秋月野鳥	館ノ尾、館ノ裏	○	○					○	○	○	○							35,36, 38,39
筑前	K2	秋月藩南御殿	あきづきはなみなみごてん		夜須郡	朝倉市上秋月																		71,113
筑前	K3	黒田図書助直之宅跡	くろだずしよのすけなおゆき		下座郡	朝倉市田代	上城原、上城原ノ上、城原							○	○									-
筑前	K4	栗山備後宅跡	くりやまびんご		上座郡	朝倉市杷木志波	里城				○	○	○	○										23
筑前	K5	城主屋敷跡	じょうしゅ		嘉麻郡	嘉麻市中益	ヤカタ、エビジロ																	24

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
丘城	◎	大隈(東)	○				2187	本文132頁参照
丘城	●	大隈(東)					2203	遠賀川西岸、椎木集落にほど近い丘陵上に位置する。『本編』には「城主は毛利鎮実か一族毛利勘解由と云しとかや。」とあり、『附録』には「山上平かなるところ東西十五間南北三十二間堀切の跡も残れり。」とある。現地には平坦面もみられるが、墓地となっており、後世の改変が激しい。堀切にもみえる遺構もあるが、後世の切り通しとみられ、城郭遺構は確認できず、詳細は不明。『種々』には毛利氏と共に瀧下氏が城主名としてあがっている。
山城	◎	大隈(東)	○			520051 520052	21062107	本文133頁参照
丘城	◎	大隈(東)		○	○		2123	本文134頁参照
山城	◎	大隈(東)					2179	本文134頁参照
山城	◎	小石原(西)	○			460097	2218 (嘉麻市)	本文135頁参照
丘城	◎	小石原(西)	○			460095	2229	本文135頁参照
山城	◎	筑前山田(西)	○		○	460012	2196	本文136頁参照
丘城	◎	筑前山田(西)	○				2217	本文140頁参照
山城	◎	筑前山田(西)	○				2207	本文140頁参照
山城	◎	筑前山田(西)	○			090012	2077	本文141頁参照
平地城館	●	筑前山田(西)					5023	本文141頁参照
丘城	●	筑前山田(西)					2226	『附録』には「上の城、下の城とて南北に相並へり。南を上とし北を下とす。(中略)城主知れず。」とある。城地は遠賀川西岸に面した丘陵上に南北に分かれて立地する。双方共に丘陵頂部に平坦面は確認できるが、堀切などの明瞭な城郭遺構は確認できない。
山城	◎	筑前山田(西)	○				2070	本文142頁参照
山城か	△	筑前山田(西)/小石原(西)						『附録』には「(小野谷)村の南十二町余にあり。秋月種実の端城なりし由云伝ふ。此所に岩窟二ツ有り。里民ハ大高野・小高野と云。」とある。小野谷地内にあるものと思われるが、大高野・小高野という高野石窟の場所も現在は分からないため、場所すら不明である。
山城	◎	甘木(東)	○				2208 (嘉麻市)	本文143頁参照
山城	●	田川(西)				090043	2062	『本編』には「むかしの城主しれず。」とあり、『附録』には「里民ハかまか嶽ともいふ。山上の平地五畝余あり。」とする。嘉麻市下山田・平と飯塚市筒野との境近くに鴨ヶ岳(標高260m)があり、その山頂が城地と想定されるが、現地には明確な城郭遺構は見られず、詳細は不明。

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
陣屋	◎	甘木(東)	絵	○	○	100341	4022810153	本文144頁参照。福岡県指定史跡。
御殿	◎	甘木(東)					4022810389	本文147頁参照
平地城館	○	甘木(東)						福岡藩初期の秋月領主・黒田直之(孝高の弟)の館跡とされるもので、『附録』には「下城原に黒田図書助直之宅跡あり。今圃となれり。」とする。現在、田代地内の佐田川北岸の河岸段丘上にある字「城原」地内に想定されるが、現状では詳細は不明である。
館	●	吉井(西)						『本編』には「此城(麻氏良城)の麓に栗山備後か居たる宅の跡あり。其側に楠木有。」とあり、麻氏良城を描いた『古城図』にも城の麓で普門寺の背後に石垣で囲まれた平坦面を栗山備後の館跡としている。『全誌』・『種々』では栗山大膳の邸宅跡とする。
館	◎	筑前山田(西)					2197	益富城の南西麓、明善寺の背後の平地に位置する。益富城主の居館であると伝えられる。『古城図』にある「毛利勘解由居シ」との記載はさらに麓の街道沿いであり、むしろ「左近屋敷ト云アリ此処城番ノ館有リニシヤ」とする場所とみられる。

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
館	△	福岡南部(東)						『全誌』には「浦屋敷ニアリ。宅址ト称スル所。三畝歩許アリ。圃トナレリ。其東南北ノ三方ニ二重障ノ址アリ。(中略)豊後国ヨリ落人來リテ此所ニ住セシ故、豊後谷ノ名アリ」とし、二重の堀で囲まれた居館の存在を記している。また村内の七塚はその落人の墓であるとするが、『附録』には「村の西、うらまへといふ所に、七ツ塚とてあり。里人紀伊殿墓といふ。」とある。現状では宅地化が進み、詳細な場所等も不明である。
館	○	太宰府(西)			○			観世音寺寺域の東側は字「御所ノ内」と言い、発掘調査において、13～14世紀代の庭園、建物群、礎石建物群を伴った道路に面した屋敷跡が多数検出されている。これらは武藤少式氏関連の館跡群と考えられているが、宅地化が進み、詳細な状況は未解明である。
館	●	太宰府(西)				210034		太宰府市五条の西、西鉄太宰府線に接した「月見山」と称する高台に位置する。『附録』には「字を城の内と云。其北なる田地の字を築山或いは泉水と云。むかし城ありし時の庭砌なりしといふ。」とし、九州探題今川了俊の居城であるとする。『拾遺』にはさらに「此地の東北の方に犬馬場といふ処有。蓋探題在城の時犬追物を講せられし処ならむか。」とある。また、『本編』のいう「城の内」を居城跡の中心とみて、現在太宰府病院のある丘陵上を推定地とする見方もあるが、いずれにせよ、現状では詳細は不明である。
館	●	二日市(西)				170141	170141	現在、筑紫小学校がある高台が字「城ノ越」で推定地とされる。『本編』では「城の越」という小高い山が筑紫氏が筑紫神社宮司であった時の宅跡であるとし、『附録』・『拾遺』ではこれに加え、村内の田の中に筑紫広門の出城跡という場所も多いとしている。『全誌』には「御丸ノ址」と称する山もあるとする。周辺にも関連地名は多いが、古くから集落化しているところで、小学校などもあり、現状で遺構は確認できない。
館	○	二日市(西)						『全誌』には「(原田)村ノ東南二町辻畑ニアリ。原田氏数世ノ宅地ナリ。」とし、原田氏初代春種が住したとしている。現在原田の地内には字「辻畑」(原田5丁目付近)があり、そこが該当地と見られ、またその南側に関連地名と見られる「堀田」なども残る。現地は宅地化されており、全くその痕跡を留めない。また、原田氏が原田の地に移り住んだ事実も不確実であるため、やはり伝承の域を出るものではない。
館	△	甘木(西)						『附録』には「栗林の城主深江伯耆守か弟式部と云者、慶長の頃、千田治右衛門と改名し、此村の内、中やしきと云所に居住せり。ゆへに其所に今も堀の跡あり。千田堀といふ。」とある。現在、森山には「中やしき」という地名は残っており、詳細な場所は不明となっている。
館	△	甘木(西)						秋月氏の家臣、芥田悪六兵衛の館跡とする。『附録』には栗林の西、久保という場所にあり、今は圃となれり、と記載されるが、栗林も久保も現在の地名には残っており、詳細な場所は不明。
館	○	甘木(西)						『本編』には「甘木」の井戸の上に秋月氏の宅址ありとし、秋月氏の別宅という。『附録』には「今其所定かならず。」とある。『全誌』には「倉谷ニ構口アリシ言伝フ。」とあり、倉谷に推定されるが、明確な場所は不明。
館	○	甘木(西)						『附録』には甘木村内の深野に秋月氏の家臣深野某の屋敷があるとする。深野は現在小字が残されており、およその位置は推測できるが、屋敷跡とみられる痕跡は現地に全く詳細不明。
館	○	甘木(西)						『附録』には甘木村内の倉谷に秋月氏の家臣倉谷某の屋敷があるとする。倉谷は現在地名が残されていないが、地元の子に古記録に記載があり、およその位置は推測できる。しかし、現地に屋敷跡とみられる痕跡はなく詳細不明。
館	○	甘木(東)						『附録』には「たつぞの」と云所に(中略)三重の塔立り。里民是を鎮西八郎朝塔といふ。又為朝居宅の跡ともいふ。」とある。上秋月八幡宮の南東側の平地が字「立園」であり、その範囲内に推定されるが、石塔を含め詳細な場所は確認できていない。また『全誌』にはその石塔、さらには乗馬の馬を葬った「馬塚」もあったとしている。
館	●	甘木(東)						『本編』「茶臼山古城」には「此村(荷原村)の中に秋月氏の家臣三奈木弥平次が宅跡とて、竹林の中にあり。其かまへ廣し。」とある。現在荷原の集落の中に館跡と伝える場所が残されている。
館	○	田主丸(東)						『本編』には、「小西と云所在。四方に障を掘廻せり。圃も多く其中にあり。其境内横一町半、長四町はかり。是もよしある人の住ける所なるべけれ共、今は詳ならず。」とある。須川の高木神社の南西側には、現在も字「尾西」が残るが、詳細な位置は不明である。
陣	●	飯塚(西)						天道と吉隈の境にある大将陣山(標高112m)山頂には、大将神社がある。『附録』・『全誌』によると、多田満仲の藤原純友の乱の際の陣跡と伝える。足利尊氏が戦勝祈願したとも伝わる。『嘉徳郡誌』には大友氏、秋月氏が陣を置いたとも伝える。山頂周辺は近年の公園整備等で改変されており、城郭遺構等は見られず、詳細は不明である。
陣	●	飯塚(西)			○	○		『附録』の川津村八大龍王社には「スヘタカジン」と記載があるが、由来は記載されていない。文献42では、水祖神社(八大龍王社)の西側の丘陵上について、笠木山城に関連した陣跡として発掘調査がなされており、堀切状の窪地なども認められるが、城館遺構ではなく後世の改変と考えられ、詳細は分からない。また、『附録』等には八大龍王社の西に笠木山城城番の柏井九郎左衛門が宅の跡があるとされており、同一地点を指している可能性が考えられる。
陣	△	太宰府(東)/大隈(西)						文獻12には、「馬敷村の東南十町城山の東北なり」とし、永禄年中に大友家臣の備後というものが、山上に陣を敷いたと伝えることから名付けられたという。馬敷地内に想定されるが、詳細な場所は不明となっている。
館	●	飯塚(西)					76	吉隈の南西部、泉河内川の東岸の平地に位置し、地元では「地頭屋敷」と呼ばれる場所がある。そこにはかつて二重の堀があったとするが、現在は埋め立てられて農道となっている。一部には堀が残されている場所もある。館主などは伝わっていない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類					参考文献											
								一 次 参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その 他 文 献					
筑前	D18	芥田館	あくただ	芥田悪六兵衛宅	嘉麻郡	嘉麻市芥田	古屋敷				○		○		○	○					○				12,24	
筑前	D19	八郎館	はちろう	鎮西八郎為朝か屋敷跡	嘉麻郡	嘉麻市小野谷	八郎屋敷				○		○		○	○								○		12,24
筑前	D20	茶がま岩	ちやがまいわ		嘉麻郡	嘉麻市上山田																			68	

<城館関連遺跡>

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類					参考文献										
								一 次 参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その 他 文 献				
筑前	R1	御笠の森遺跡	みかさのもり		御笠郡	大野城市山田2・3丁目																			54,55 .61
筑前	R2	以来尺遺跡	いらいじゃく		御笠郡	筑紫野市筑紫																			46
筑前	R3	下杉遺跡	しもたての		夜須郡	朝倉郡筑前町中牟田																			57
筑前	R4	砥上上林遺跡	とがみじょうばやし		夜須郡	朝倉郡筑前町砥上																			43,44
筑前	R5	炭焼遺跡	すみやき		夜須郡	朝倉郡筑前町曾根田																			60
筑前	R6	城腰遺跡	じょうのこし		嘉麻郡	飯塚市佐与	城ノ腰																	○	45,50
筑前	R7	勘高遺跡	かんだか		嘉麻郡	嘉麻市上																			40

<所在地が全く不明なもの>

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類					参考文献										
								一 次 参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その 他 文 献				
筑前	F1	水木城	みずき		御笠郡			○																	-
筑前	F2	尾崎城	おざき		御笠郡	太宰府市大佐野か			○															○	99
筑前	F3	宮尾城	みやお		御笠郡				○																-
筑前	F4	鑑ヶ鼻城	よろいがはな		御笠郡				○																72
筑前	F5	庄山城	しょうやま		夜須郡				○																69
筑前	F6	熊山城	くまやま		夜須郡	朝倉市千手か																			70
筑前	F7	嘉麻城	かま		嘉麻郡			○																	-
筑前	F8	松原城	まつばら		嘉麻郡			○																	-
筑前	F9	奉行岳城	ぶぎょうだけ		嘉麻郡				○																72
筑前	F10	山口城	やまぐち		嘉麻郡				○																72
筑前	F11	二嶽城	ふたたけ		夜須郡 嘉麻郡			○	○																-
筑前	F12	神山城	かみやま		不明			○																	-

<削除対象>

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類					参考文献										
								一 次 参 考	本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その 他 文 献				
筑前	—	山城跡	やまじろ		上座郡	朝倉市杷木穂坂																			113
筑前	—	城ヶ迫城	じょうがさこ		上座郡	朝倉郡東峰村宝珠山	-																		101
筑前	—	八木山城	やきやま		穂波郡	飯塚市八木山											○	○	○	○					-
筑前	—	立岩城	たていわ		嘉麻郡	飯塚市立岩	-										○	○	○	○	○				12,14
筑前	—	陣の原城	じんのぼる		嘉麻郡	嘉麻市馬見	-																○		89

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
館	△	大隈(東)						『附録』には「(秋月)種実の家臣芥田悪六兵衛が居宅の跡も村中に有り。タテヤシキ(『全誌』では立屋敷)と呼ぶ。」とあり、『全誌』には「本村の西二町」とする。文献24には古屋敷と呼ばれる平地の田圃にあたるものとするが、現在その場所不明である。また村中の「タロウヤシキ」には秋月種実が豊田秀吉に降伏を申し出た場所とする「降参畠」という場所も残る。
館	○	筑前山田(西)						『附録』には「(小野谷)村中に鎮西八郎為朝か屋敷跡と里民の云伝ふる所あり。いぶかし。」とある。現在の小字には「八郎屋敷」が残っており、当該地と推測されるが、詳細な場所までは不明である。
山城	●	筑前山田(西)					5028	百々谷の台地上にあり、丘陵上に巨岩があり、周知の包蔵地となっている。大王山城の出城跡と伝承されるが城郭遺構としては不確かである。

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
居館遺跡	◎	福岡南部(東)			○			本文148頁参照
居館遺跡	◎	二日市(西)			○		170142	本文148頁参照
居館遺跡	◎	二日市(東)			○		130	本文150頁参照
居館遺跡	◎	二日市(東)			○		129	本文150頁参照
居館遺跡	◎	二日市(東)			○		97	本文151頁参照
丘城?	◎	飯塚(東)		○	○		73	本文152頁参照
居館遺跡	◎	筑前山田(西)			○		2221	本文153頁参照

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
城	×	—						『北肥戦誌』に、永禄12年(1569)閏5月、高橋鑑連・秋月種実が「水木」に城を構え、大友勢の往来を妨害するとある。
城	×	—						『城教之覚書』(筑紫家文書)に「筑前国三笠郡 尾崎ノ城」として筑紫太(大)和守の居城とする。文献11・99には太宰府市大佐野に位置するとし、実際大佐野には字「尾崎」という地名も残るが、旧地形は消滅しており、場所は確定されていない。
城	×	—						『北肥戦誌』に、弘治3年(1557)に大友氏が宮尾城に筑後勢を置き、のち草野真清に明け渡したと、永禄2年(1559)に草野真清が筑紫惟門のために宮尾城が落ちたことが載る。
城	×	—						文献72の秋月氏関連の城郭一覧表に記載。在城者は権藤藏人。
城	×	—						『豊前覚書』に天正14年(1586)4月4日、立花統虎が豊臣秀吉に対面のため秋月に向かう途次、金出より「秋月庄山」の「庄山里城」に至るとある。
城	×	—						文献70に掲載された秋月氏の家臣の一覧の中に、福武美濃守の守城の一つとして、「千手村熊山の城を守る。」とある。朝倉市千手付近に想定され、鼓岳城の可能性も考えられるが、根拠に乏しく、所在不明とした。
城	×	—						建武4年(1337)10月、北朝方が南朝方の「嘉麻城」を攻め落とす。
城	×	—						延文5年(1360)2月、北朝方が南朝方の「筑前国嘉麻郡松原城」を攻める。
城	×	—						文献72の秋月氏関連の城郭一覧表に記載。在城者は坂田内蔵助。
城	×	—						文献72の秋月氏関連の城郭一覧表に記載。在城者は大坪甚太郎・竹原一学・大坪主水。
城	×	—						『満濟准后日記』永享5年(1433)8月29日条に、8月16日夜大内持世により「少式城筑前国二嶽云々」落城の記事。9月5日条には8月19日「筑前秋月城」落城とあることから、秋月周辺の城としてここに掲げる。
城	×	—						応安6年(1373)閏10月2日、備後の山内通忠が今川了俊の筑前国「神山御城」を警固する。

種類	所在	図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
			縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
-	-	-	-	-	-		4022810583	朝倉市教育委員会の分布調査によって、山頂部に平地が確認されたために新たに城郭としたものであるが、堀切などの明確な防御遺構がなく、また城郭としての伝承等もないことから、城郭遺跡ではないと判断されたために削除した。
-	-	-	-	-	-		540008	文献101に城ヶ迫山頂にあるとしているが、地名から城としたものと思われる。ほかにも根拠がなく、現地にも城郭遺構はないことから削除した。
-	-	-	-	-	-			『本編』等に記載の見られる「八木山村合戦場」を城と誤認したものと考えられ、また所在不明であるため削除した。
-	-	-	-	-	-	070480	142	文献12には「古城址」として「立岩村にあり、宇佐の大宮司立岩別府の跡なりと伝ふ。」とあり、この記載を元に以後「立岩城」とされてきたが、別府は別符という荘園領のことをさし、役所名ではないため、実態のないものと考えられる。よって削除した。
-	-	-	-	-	-			文献89に城跡として掲載されたものであるが、現地の遺構は、曲輪が後世の造成による平坦面、堀切が尾根上に上がるための切り通し道と判断され、「陣の原」の名称についても、特定の場所を指すものではなく、周辺一帯に付された伝承地名であるため、削除した。

参考文献一覧表

<基本参考文献>

No.	編著者名	発行年	書名	発行
1	貝原篤信	1709	『筑前国統風土記』	
2	加藤一純・鷹取周成	1798	『筑前国統風土記附録』	
3	青柳種信	文政～天保	『筑前国統風土記拾遺』	
4	白井浅夫ほか	1875～1880	『福岡県地理全誌』	
5	福岡県	1916	『旧城跡等ノ取調』(福岡県社第1956号 大正5年10月2日施行)	
6	和田宗八	1936	『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』	金文堂
7	鳥羽正雄ほか編	1967	『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡	人物往来社
8	副島邦弘・近沢康治編	1979	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX 付録 福岡県中世山城跡	福岡県教育委員会
9	磯村幸男編	1979	『福岡県』『日本城郭大系』第18巻	新人物往来社
10	廣崎篤夫	1995	『福岡県の城』	海鳥社
		1997	『福岡古城探訪』	海鳥社
11	福岡県の城郭刊行	2009	『福岡県の城郭 戦国城郭を行く』	銀山書房

<市町村郡史誌>

No.	編著者名	発行年	書名	発行
12	嘉穂郡役所	1923	『嘉穂郡誌』	嘉穂郡役所
13	鞍手郡教育会	1934	『鞍手郡誌』	
14	飯塚市役所	1952	『飯塚市誌』	飯塚市役所
15	潁田町誌編纂委員会	1959	『潁田町誌』	潁田町
16	稲築町	1959	『稲築町誌』	稲築町
17	筑穂町	1962	『筑穂町誌』	
18	幸袋町編集委員会	1963	『幸袋町誌』	幸袋町編集委員会
19	二瀬町誌編さん委員会	1963	『二瀬町史』	二瀬町
20	庄内町誌編集委員会	1966	『庄内町誌』	庄内町
21	三輪町教育委員会	1970	『三輪町史』	三輪町役場
22	飯塚市誌編さん室	1975	『飯塚市誌』	飯塚市
23	杷木町史編さん委員会	1981	『杷木町史』	杷木町史刊行委員会
24	嘉穂町誌編集委員会	1983	『嘉穂町誌』	嘉穂町教育委員会
25	宝珠山村誌資料編さん委員会	1992	『宝珠山村誌資料』	宝珠山村
26	太宰府市史編集委員会	1992	『太宰府市史』考古資料編	太宰府市
27	庄内町・庄内町教育委員会	1998	『庄内町誌』上巻	庄内町・庄内町教育委員会
28	筑紫野市史編さん委員会	1999	『筑紫野市史』上巻 自然環境・原始・古代・中世	筑紫野市
29	筑穂町誌編集委員会	2003	『筑穂町誌』上巻	筑穂町
30	稲築町	2004	『稲築町史』上巻	稲築町
31	大野城市史編さん委員会	2005	『大野城市史』上巻 自然 原始・古代 中世 近世	大野城市
32	宝珠山村誌刊行委員会	2010	『宝珠山村誌』	東峰村

<発掘調査報告書>

No.	編著者名	発行年	書名
33	福岡県教育委員会	1970	『浦城跡』(福岡県文化財調査報告書第45集)
34	杷木町教育委員会	1970	『杷木神籠石』(杷木町文化財調査報告書第1集)
35	甘木市教育委員会	1981	『筑前秋月城跡Ⅰ』(甘木市文化財調査報告書第9集)
36	甘木市教育委員会	1982	『筑前秋月城跡Ⅱ』(甘木市文化財調査報告書第11集)
37	福岡県教育委員会	1982	『筑前秋月荒平城跡』(福岡県文化財調査報告書第61集)
38	甘木市教育委員会	1983	『筑前秋月城跡Ⅲ』(甘木市文化財調査報告書第15集)
39	甘木市教育委員会	1984	『筑前秋月城跡Ⅳ』(甘木市文化財調査報告書第17集)
40	嘉穂町教育委員会	1985	『榎町・勘高・巻原遺跡』(嘉穂町文化財調査報告書第5集)
41	筑穂町教育委員会	1988	『米ノ山城跡』(筑穂町文化財調査報告書第2集)
42	飯塚市教育委員会	1990	『川津遺跡群』(飯塚市文化財調査報告書第13集)
43	福岡県教育委員会	1993	『砥上上林遺跡Ⅰ』(福岡県文化財調査報告書第103集)
44	夜須町教育委員会	1993	『砥上上林遺跡』(夜須町文化財調査報告書第27集)
45	潁田町教育委員会	1996	『城腰遺跡』(潁田町文化財調査報告書第3集)
46	福岡県教育委員会	1999	『以来尺遺跡Ⅲ』(筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集)

No.	編著者名	発行年	書名
47	甘木市教育委員会	2000	『福嶽城跡』(甘木市文化財調査報告書第50集)
48	杷木町教育委員会	2001	『史跡杷木神籠石』(杷木町文化財調査報告書第5集)
49	筑紫野市教育委員	2002	『柴田城 峯畑遺跡第7次調査』(筑紫野市文化財調査報告書第71集)
50	穎田町教育委員会	2002	『城腰遺跡Ⅱ』(穎田町文化財調査報告書第7集)
51	三輪町教育委員会	2002	『小鷹城跡』(三輪町文化財調査報告書第10集)
52	小石原村教育委員	2002	『松尾城址』(小石原村文化財調査報告書第8集)
53	嘉穂町教育委員会	2004	『益富城Ⅰ』(嘉穂町文化財調査報告書第21集)
54	大野城市教育委員	2004	『御笠の森遺跡Ⅰ』(大野城市文化財調査報告書第63集)
55	大野城市教育委員	2005	『御笠の森遺跡Ⅱ』(大野城市文化財調査報告書第65集)
56	嘉穂町教育委員会	2006	『益富城Ⅲ』(嘉穂町文化財調査報告書第22集)
57	筑前町教育委員会	2007	『下杵野遺跡Ⅱ』(筑前町文化財調査報告書第6集)
58	大野城市教育委員会	2008	『御笠の森遺跡Ⅲ』(大野城市文化財調査報告書第79集)
59	嘉麻市教育委員会	2009	『竹生島古墳』(嘉麻市文化財調査報告書第2集)
60	筑前町教育委員会	2010	『炭焼遺跡・ロヶ坪遺跡・曾根田前田遺跡』(筑前町文化財調査報告書第12集)
61	大野城市教育委員	2012	『御笠の森遺跡4』(大野城市文化財調査報告書第103集)
62	東峰村教育委員会	2012	『松尾城跡保存整備事業報告書』(東峰村文化財調査報告書第2集)
63	飯塚市教育委員会	2013	『米ノ山城跡2』(飯塚市文化財調査報告書第43集)

<その他刊行物>

No.	編著者名	発行年	書名	発行
64	大野町教育委員会	1971	『大野町の文化財』第二集	大野町教育委員会
65	穂波町教育委員会	1995	『穂波町ものがたり』	穂波町教育委員会
66	穎田町教育委員会 学校週5日制実行委	1995	『ふるさと散歩 史跡とむかしばなし』	穎田町教育委員会
67	桂川町郷土史会	1996	『歩こうふるさと桂川』	桂川町教育委員会
68	山田市文化財保護 委員会	2002	『やまだの史蹟と文化財』	山田市教育委員会

<論文等>

No.	編著者名	発行年	論文名	書名	発行
69	前田正好	1919	「古處山周圍の史蹟」	『筑紫史談』第21集	筑紫史談会
70	前田正好	1920	「古處山周圍の史蹟」(二)	『筑紫史談』第22集	筑紫史談会
71	田代政栄	1951		『秋月史考』	『秋月史考』刊行会
72	三浦末雄	1966		『物語秋月史 上巻』	財団法人郷土館
73	村田修三編	1987		『図説中世城郭事典』第三巻	新人物往来社
74	木島孝之	1995	「近世初頭九州における支城構造—黒田・細川領の支城について—」	『福岡県地域史研究』No.13	福岡県地域史研究所
75	中西義昌	1998	「筑前岩屋城の縄張り構造—縄張り研究からみた戦国史研究の展望—」	『福岡地方史研究』第36号	福岡地方史研究会
76	中西義昌	1999	「小規模山城・丘城の縄張り構造にみる小規模在地勢力の様相—筑前糟屋郡・席田郡・志摩郡を中心に—」	『愛城研報告』第4号	愛知中世城郭研究会
77	中村修身	2000	「北部九州の敵状空堀群」	『長野城』(北九州市文化財調査報告書第89集)	北九州市教育委員会
78	片山安夫	2001	「古処山城の瓦と陶磁器について」	『北部九州中近世城郭情報紙』1	北部九州中近世城郭研究会
79	中西義昌・岡寺 良	2001	「歴史史料としての戦国期城郭—北部九州における城郭遺構と地域権力—」(地域資料叢書4)		九州大学服部英雄研究室
80	岡寺 良・中田裕樹	2002	「福岡県内の戦国期城館(1)—古処山城(甘木市野鳥・嘉穂町千手所在)の踏査・測量報告—」	『福岡考古 第20号』	福岡考古懇話会
81	中西義昌	2002	「戦国期筑前中南部における領主権力の動向」	『福岡地方史研究』第40号	福岡地方史研究会
82	木島孝之	2003	「筑前立花山城跡が語る朝鮮出兵への道程—小早川隆景による立花山城の大改修の実態とその史的意」	『城館史料学』創刊号	城館史料学会
83	岡寺 良	2004	「戦国期城館にみる戦国城下町秋月」	『秋月街道—歴史の道調査報告書第2集—』(福岡県文化財調査報告書第195集)	福岡県教育委員会

No.	編著者名	発行年	論文名	書名	発行
84	山村信榮	2004	「守護武藤少式氏と都市太宰府」	『中世都市研究』10	中世都市研究会
85	岡寺 良	2006	「戦国期秋月氏の城館構成—福岡県朝倉市・杷木地域を事例に—」	『城館史料学』第4号	城館史料学会
86	岡寺 良	2006	「太宰府岩屋城の研究(上)」	『九州歴史資料館研究論集』	九州歴史資料館
87	村上勝郎	2006	「福岡県嘉穂町平家城調査報告」	『北部九州中近世城郭情報紙』10	北部九州中近世城郭研究会
88	岡寺 良	2007	「太宰府岩屋城の研究(下)」	『九州歴史資料館研究論集』	九州歴史資料館
89	中村 正	2007	「陣の原城(砦)」	『北部九州中近世城郭情報紙』12	北部九州中近世城郭研究会
90	岡寺 良	2008	「三郡・砥石山系の戦国期城館—懸尾城を中心に—」	『三郡山遺跡・登尾遺跡・悪所遺跡・赤松尾遺跡』(飯塚市文化財調査報告書第35集)	飯塚市教育委員会
91	岡寺 良	2008	「宝満山近世僧坊跡の調査と検討—山岳寺院の平面構造調査—」	『九州歴史資料館研究論集』33	九州歴史資料館
92	下高大輔	2008	「太宰府市所在愛嶽神社周辺段造成の歴史的位置」	『年報太宰府学』第2号	太宰府市市史資料室
93	岡寺 良	2009	「戦国期国人領主の城館構成に関する一考察—福岡県・嘉麻南部地域を事例に—」	『九州考古学』第83号	九州考古学会
94	岡寺 良	2010	「筑前笠木山城の縄張りがしめすもの」	『古文化談叢』第65号	九州古文化研究会
95	岡寺 良	2011	「筑前朝倉地域の戦国期城館—東峰村烏嶽城について—」	『九州歴史資料館研究論集』36	九州歴史資料館
96	岡寺 良	2012	「戦国期城郭としての筑前益富城」	『九州歴史資料館研究論集』37	九州歴史資料館
97	村上勝郎・田中賢二	2012	「筑前升形城(龍城)調査報告」	『北部九州中近世城郭情報紙』22	北部九州中近世城郭研究会
98	山村信榮	2012	「中世大宰府と『一遍聖絵』の世界」	『一遍聖絵を歩く』	高志書院
99	木原武雄	発行年不詳	「肥前戦国史 中世肥前(佐賀県)北・中・東部編」	『「佐賀学」を考える』(佐賀大学・教育研究学内特別経費による研究報告書)	
100	細川徳正	発行年不詳		『笠木城物語』	

<遺跡等分布地図>

No.	編著者名	発行年	書名
101	福岡県教育委員会	1978	『福岡県遺跡等分布地図』(甘木市・朝倉郡編)
102	福岡県教育委員会	1980	『福岡県遺跡等分布地図』(筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編)
103	福岡県教育委員会	1980	『福岡県遺跡等分布地図』(飯塚市・山田市・嘉穂郡編)
104	三輪町教育委員会	1995	『三輪町内遺跡等分布調査報告書』
105	庄内町教育委員会	1997	『庄内町内遺跡等詳細分布調査報告書』(庄内町文化財調査報告書第2集)
106	桂川町教育委員会	1997	『桂川町文化財分布地図』(桂川町文化財調査報告書第17集)
107	飯塚市教育委員会	1997	『飯塚市内遺跡詳細分布調査報告書』(飯塚市文化財調査報告書第24集)
108	穂波町教育委員会	1997	『穂波町遺跡等詳細分布地図』(穂波町文化財調査報告書第11集)
109	筑紫野市教育委員	1998	『筑紫野市遺跡分布図』
110	颯田町教育委員会	2000	『颯田町内遺跡等詳細分布調査報告書』(颯田町文化財調査報告書第5集)
111	碓井町教育委員会	2001	『碓井町内遺跡等詳細分布調査報告書』(碓井町文化財調査報告書第4集)
112	筑前町教育委員会	2010	『筑前町内遺跡分布地図』(筑前町文化財調査報告第11集)
113	朝倉市教育委員会	2010	『朝倉市内遺跡等分布調査報告書』(朝倉市文化財調査報告書第9集)
114	嘉麻市教育委員会	2012	『嘉麻市文化財等分布地図』(嘉麻市文化財調査報告書第4集)
115	宇美町教育委員会	2013	『宇美町内遺跡等分布地図』(宇美町文化財調査報告書第19集)
116	東峰村教育委員会	2013	『東峰村内遺跡等分布地図』(東峰村文化財調査報告書第3集)

IV 対象地域城館分布図

本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての位置図を示す。凡例および分布図対照図について以下のとおりである。

<凡例>

- 1 基本地図は、国土地理院長の承認を得て（承認番号 平 25 情複 第 874 号）、同院発行の数値地図 25000（地図画像）を複製したもので、「福岡南部（東）」については、1/37,500 に、それ以外は全て 1/35,000 に縮小して掲載している。
- 2 本書の対象地域になっているが、城館が存在しない図幅については割愛した。
- 3 分布図の遺跡の表記と分布図対照図は以下のとおり。

<遺跡の表記>

	範囲が明確なもの	所在は明確であるが範囲が不明確なもの	所在はある程度は明確なもの（小字の範囲程度）	所在は明確でないもの（大字の範囲までの把握）
中近世城館				表記なし (地図の欄外に名称のみ記載)
伝承地	なし			表記なし (地図の欄外に名称のみ記載)
城館等関連遺跡				なし



<分布図対照図>

1 福岡南部（東）

- < 中近世城館 >
- 筑前 1 唐山東城
- 筑前 2 唐山西城
- 筑前 3 不動城
- 筑前 4 和久堂城
- < 城館関連遺跡 >
- 筑前 R 1 御笠の森遺跡

(所在不明)

- < 城館等伝承地 >
- 筑前 D 1 豊後谷



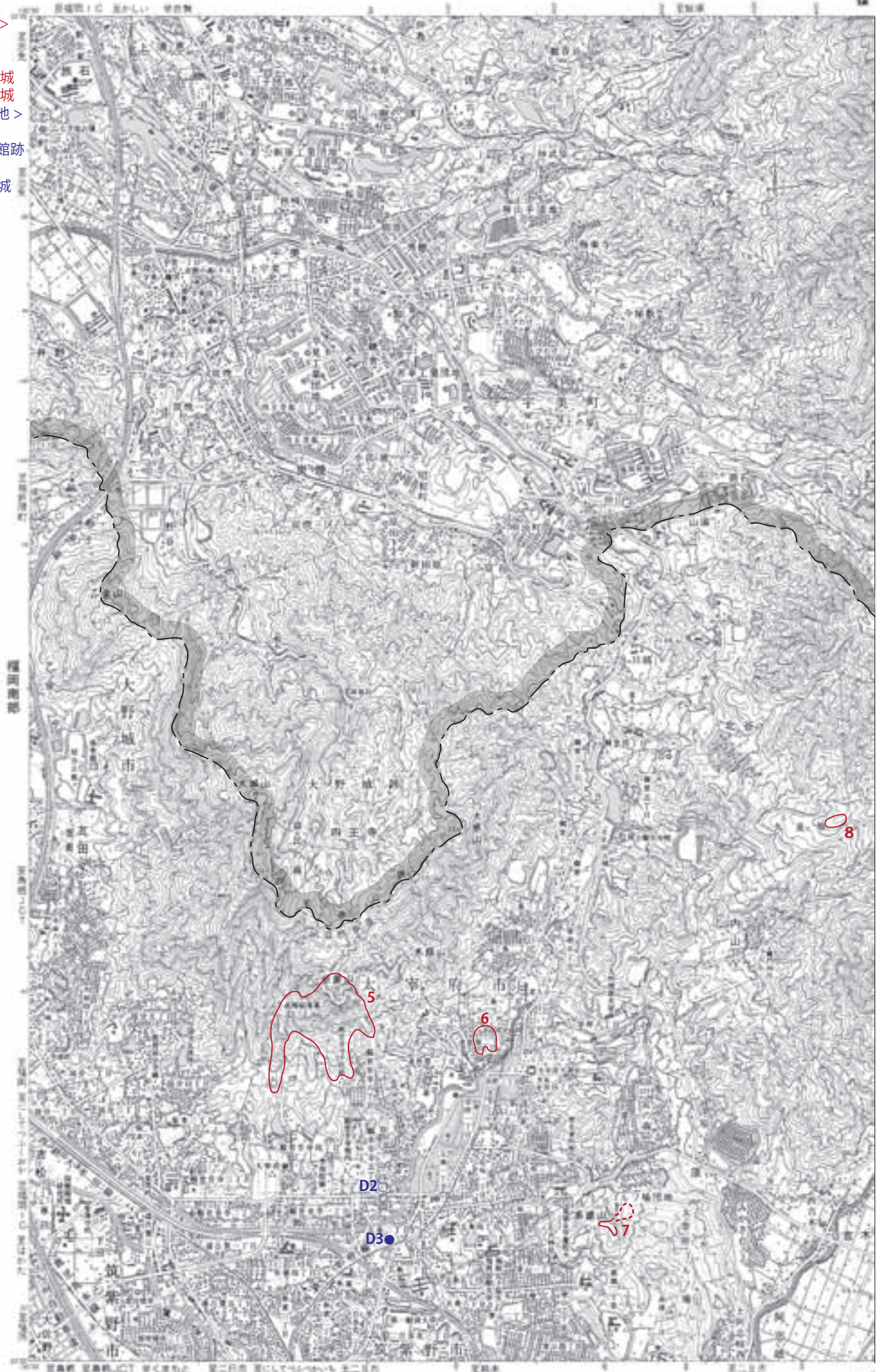
2 篠栗(東)



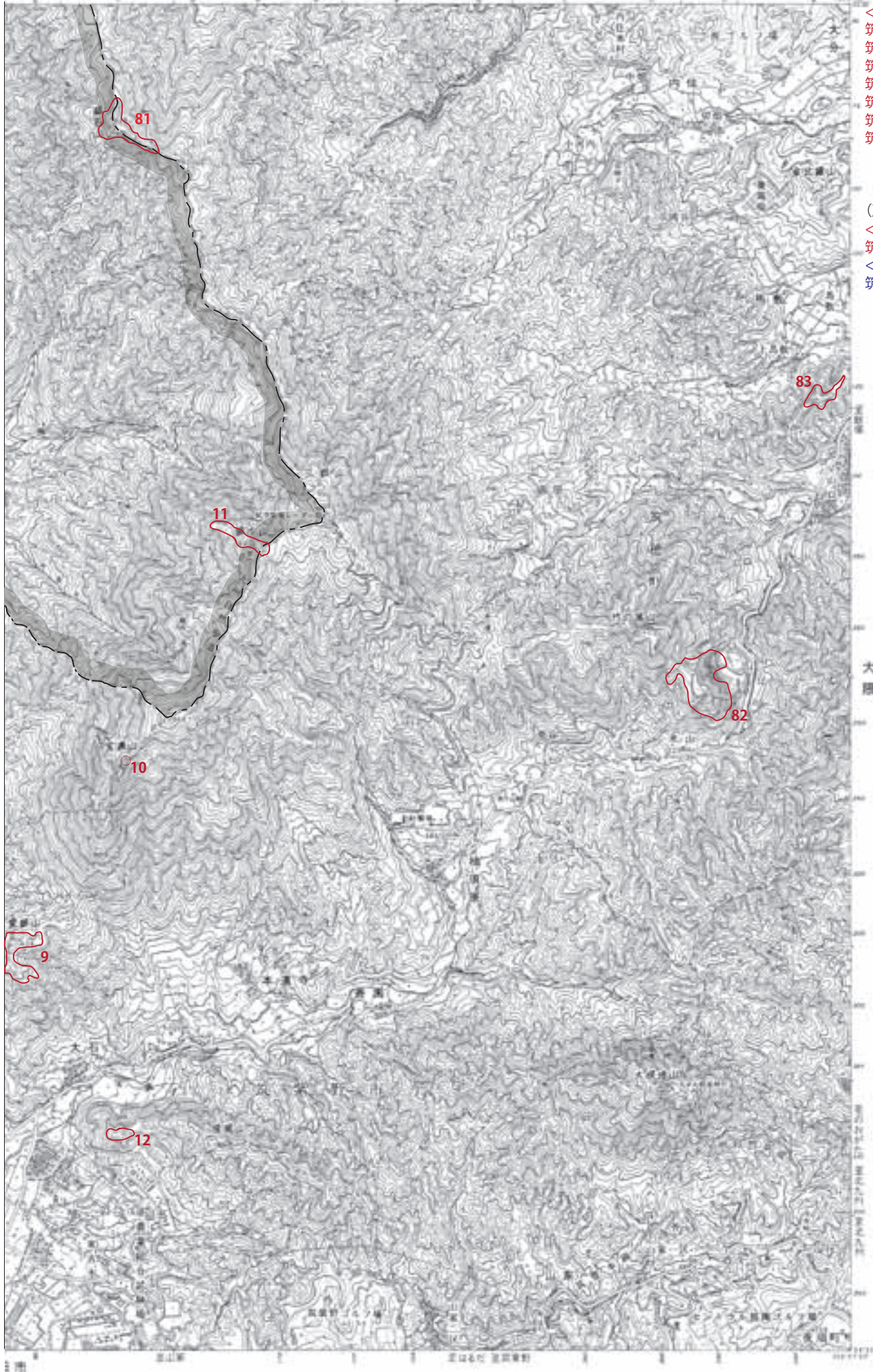
< 中近世城館 >
筑前 80 懸尾城

3 太宰府（西）

- < 中近世城館 >
- 筑前 5 岩屋城
- 筑前 6 浦ノ城
- 筑前 7 高尾山城
- 筑前 8 有智山城
- < 城館等伝承地 >
- 筑前 D 2
- 少弐氏関連館跡
- 筑前 D 3
- 今川了俊居城



4 太宰府（東）

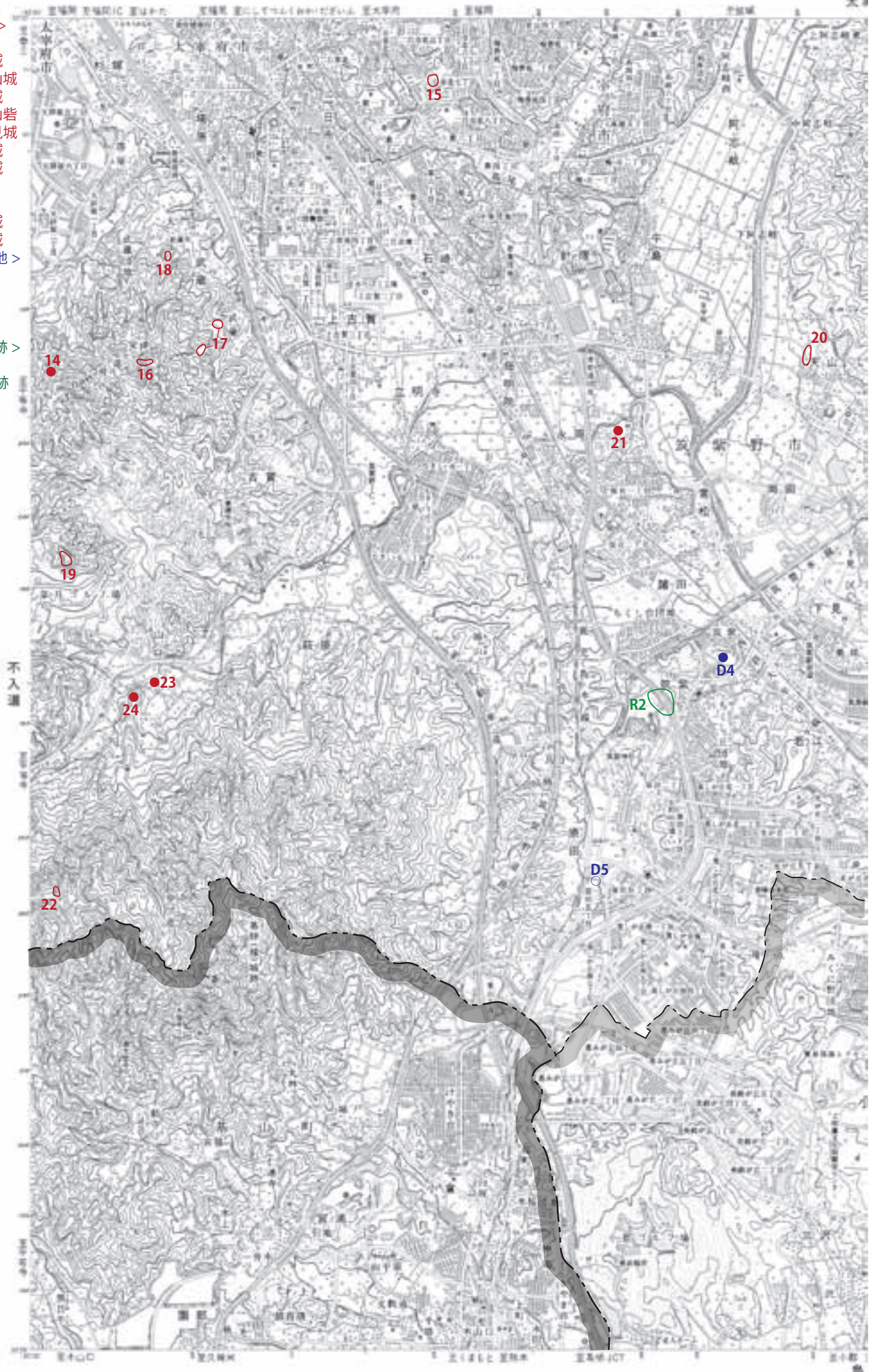


- < 中近世城館 >
- 筑前 9 升形城
- 筑前 10 宝満城
- 筑前 11 頭巾山城
- 筑前 12 龍ヶ城
- 筑前 81 鬼杉城
- 筑前 82 米ノ山城
- 筑前 83 向山城

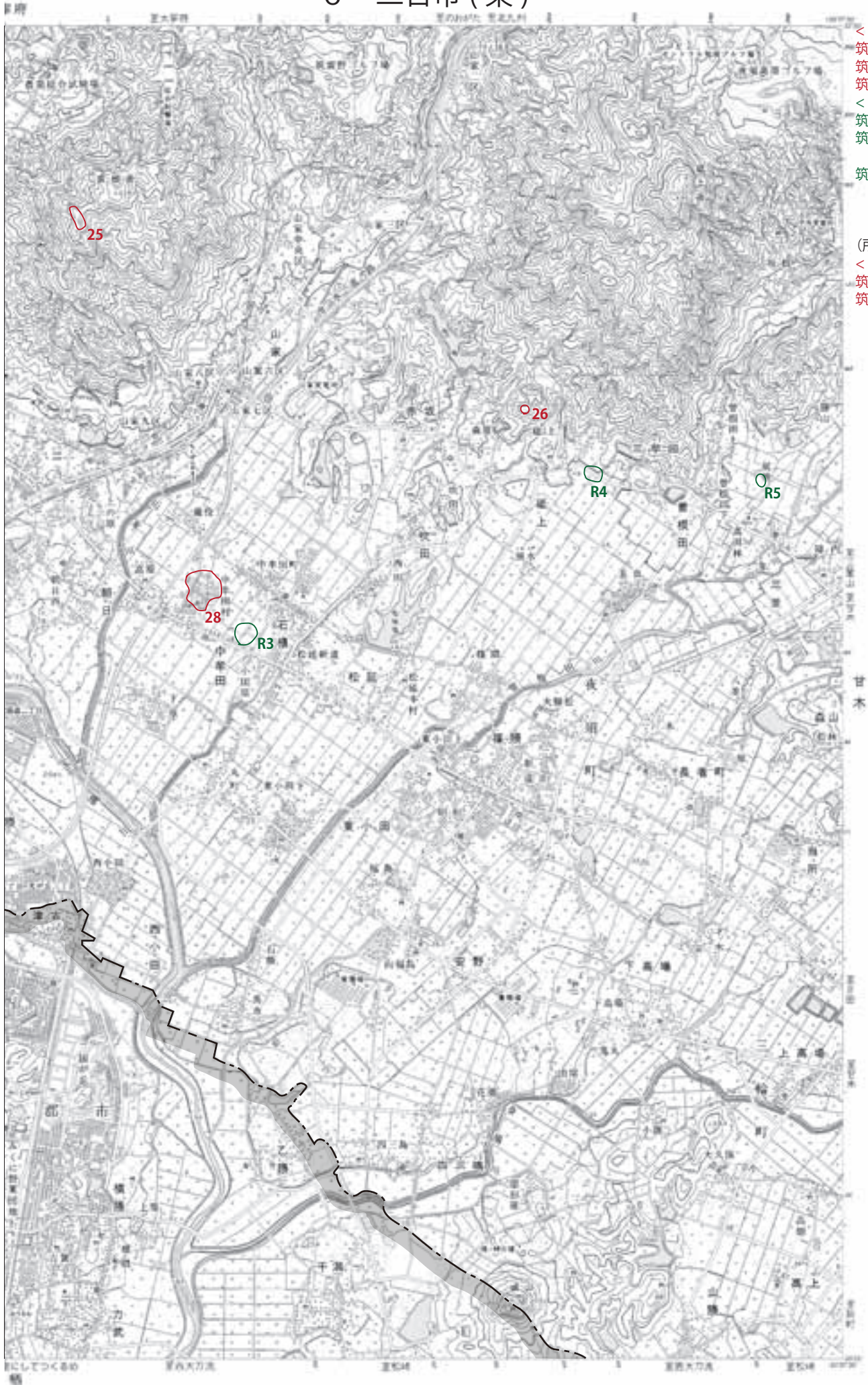
- (所在不明)
- < 中近世城館 >
- 筑前 13 笹尾城
- < 城館等伝承地 >
- 筑前 D16 備後陣

5 二日市西)

- < 中近世城館 >
- 筑前 14 高城
- 筑前 15 米嚙城
- 筑前 16 天判山城
- 筑前 17 飯盛城
- 筑前 18 堂ノ山砦
- 筑前 19 博多見城
- 筑前 20 柴田城
- 筑前 21 永岡城
- 筑前 22
- ちよほんが城
- 筑前 23 小出城
- 筑前 24 大出城
- < 城館等伝承地 >
- 筑前D 4
- 筑紫氏居館
- 筑前D 5
- 原田氏居館
- < 城館関連遺跡 >
- 筑前R 2
- 以来尺遺跡



6 二日市(東)



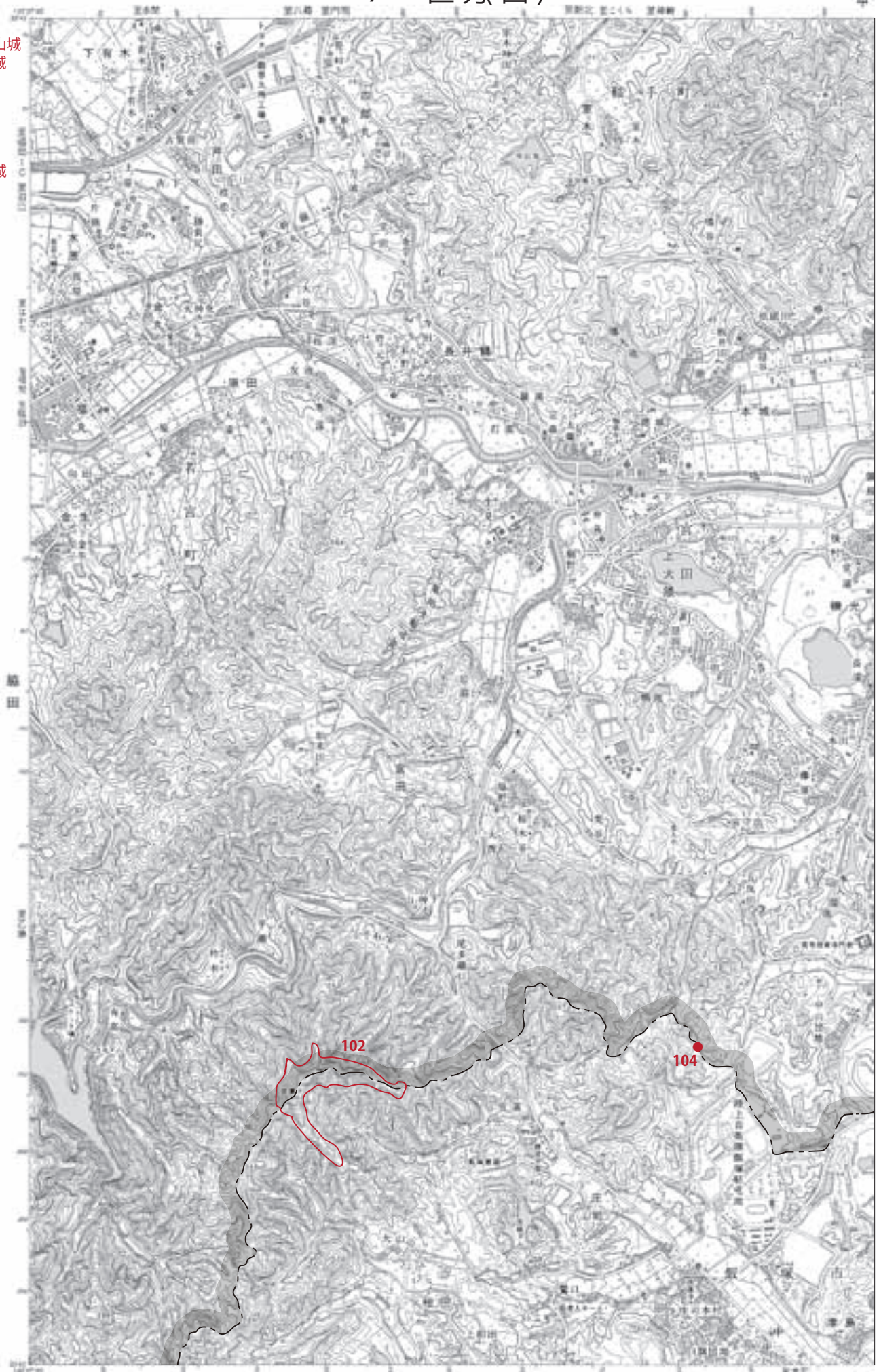
- < 中近世城館 >
- 筑前 25 天ヶ城
- 筑前 26 砥上山城
- 筑前 28 中牟田城
- < 城館関連遺跡 >
- 筑前 R 3 下杵野遺跡
- 筑前 R 4 砥上上林遺跡
- 筑前 R 5 炭焼遺跡

- (所在不明)
- < 中近世城館 >
- 筑前 27 荘林城
- 筑前 29 作手城

7 直方西)

< 中近世城館 >
筑前 102 笠木山城
筑前 104 葛山城

(所在不明)
< 中近世城館 >
筑前 103 高丸城



8 直方(東)

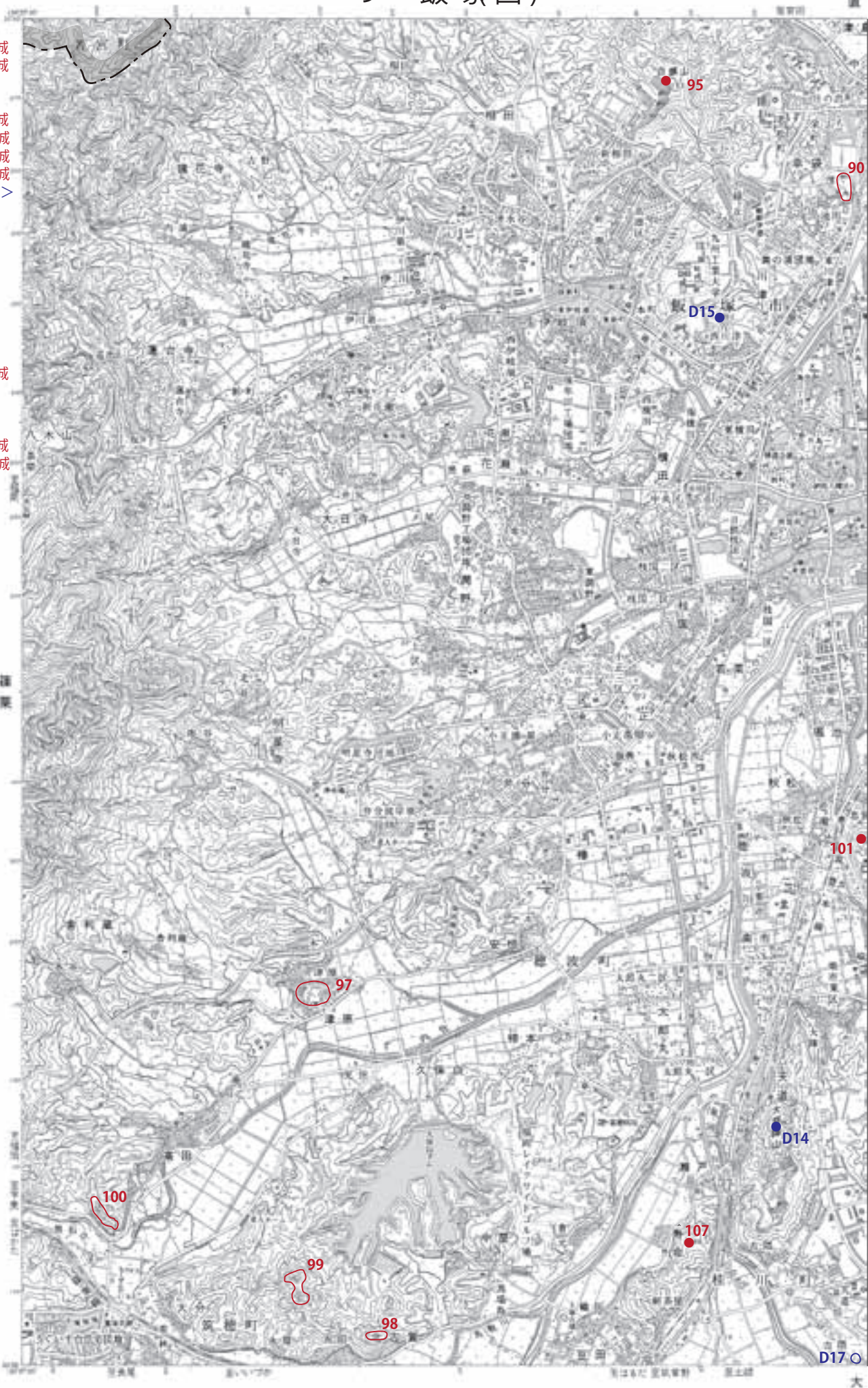


< 中近世城館 >
筑前 105 小呉竹城
筑前 109 萱城

9 飯塚西)

- < 中近世城館 >
- 筑前 90 許斐山城
- 筑前 95 白旗山城
- 筑前 97 宮山城
- 筑前 98 城山城
- 筑前 99 小佐古城
- 筑前 100 高の山城
- 筑前 101 藤ノ木城
- 筑前 107 茶臼山城
- < 城館等伝承地 >
- 筑前D14 大将陣
- 筑前D15 末高陣
- 筑前D17
- 地頭屋敷跡

- (所在不明)
- < 中近世城館 >
- 筑前 91 大日寺城
- 筑前 92 潤野城
- 筑前 93 川津城
- 筑前 94 伊川城
- 筑前 96 城ヶ尾城
- 筑前 108 堂の山城



10 飯塚東)



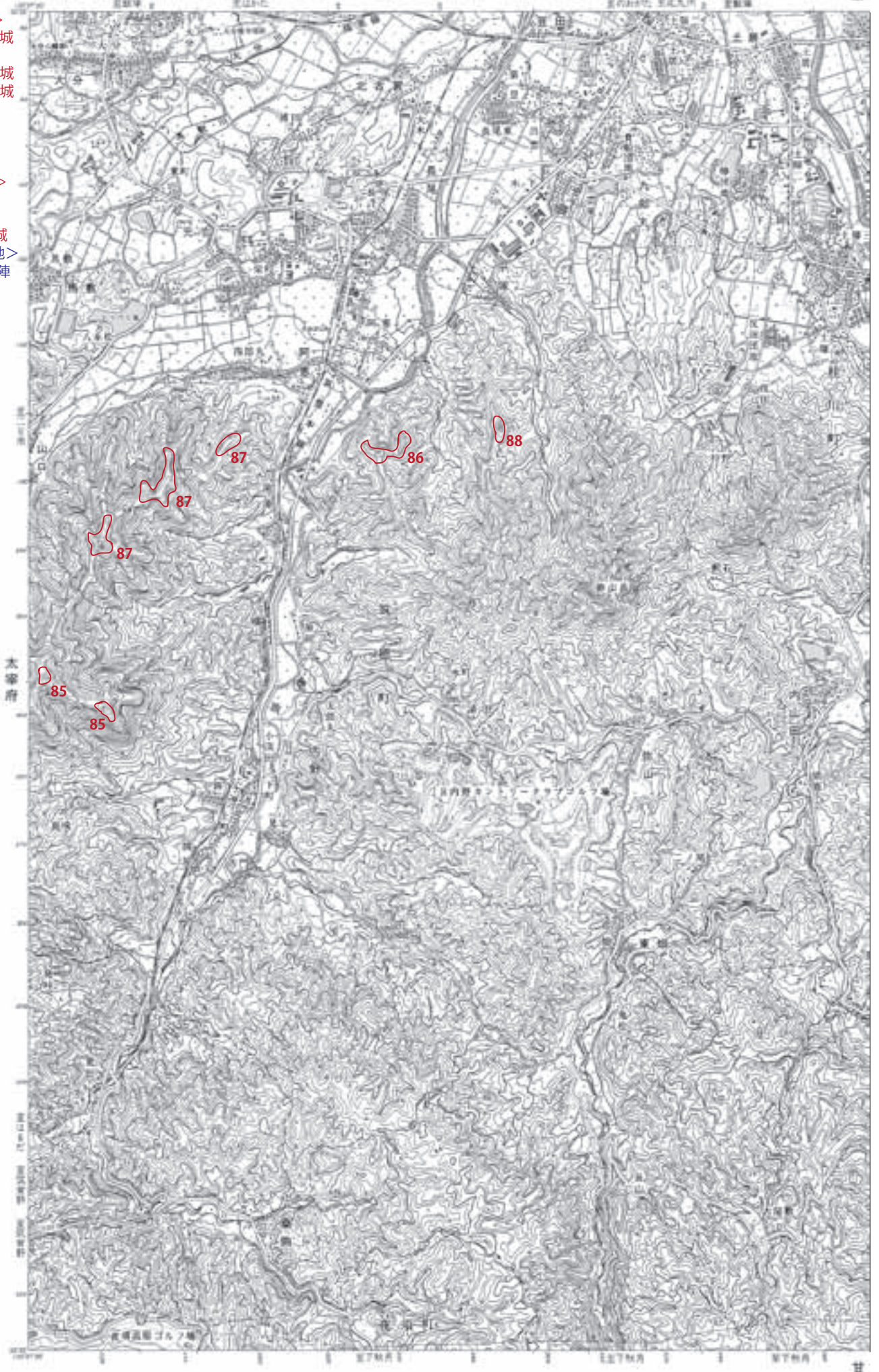
- < 中近世城館 >
- 筑前 110 古館城
- 筑前 112 築城
- 筑前 113 赤坂城
- 筑前 114 城ノ腰城
- 筑前 115 元吉城
- 筑前 116 山野城
- 筑前 117 鷺山城
- < 城館関連遺跡 >
- 筑前 R 6
- 城腰遺跡

(所在不明)
 < 中近世城館 >
 筑前 111 古城

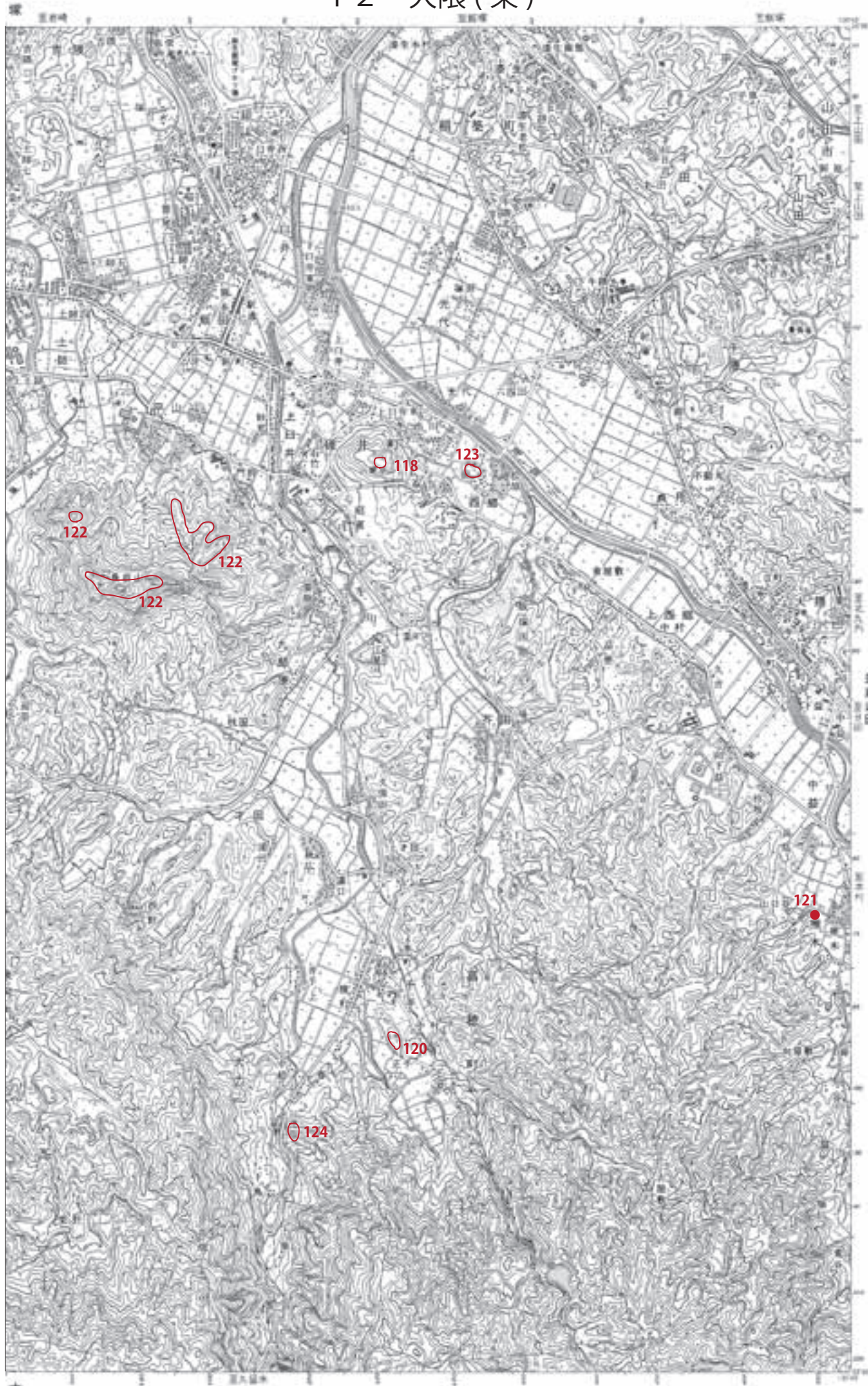
11 大隈西)

< 中近世城館 >
筑前 85 高石山城
筑前 86 扇山城
筑前 87 茶臼山城
筑前 88 一ノ谷城

(所在不明)
< 中近世城館 >
筑前 84 桑木城
筑前 89 弥山城
筑前 106 城尾城
< 城館等伝承地 >
筑前 D 16 備後陣



12 大隈(東)



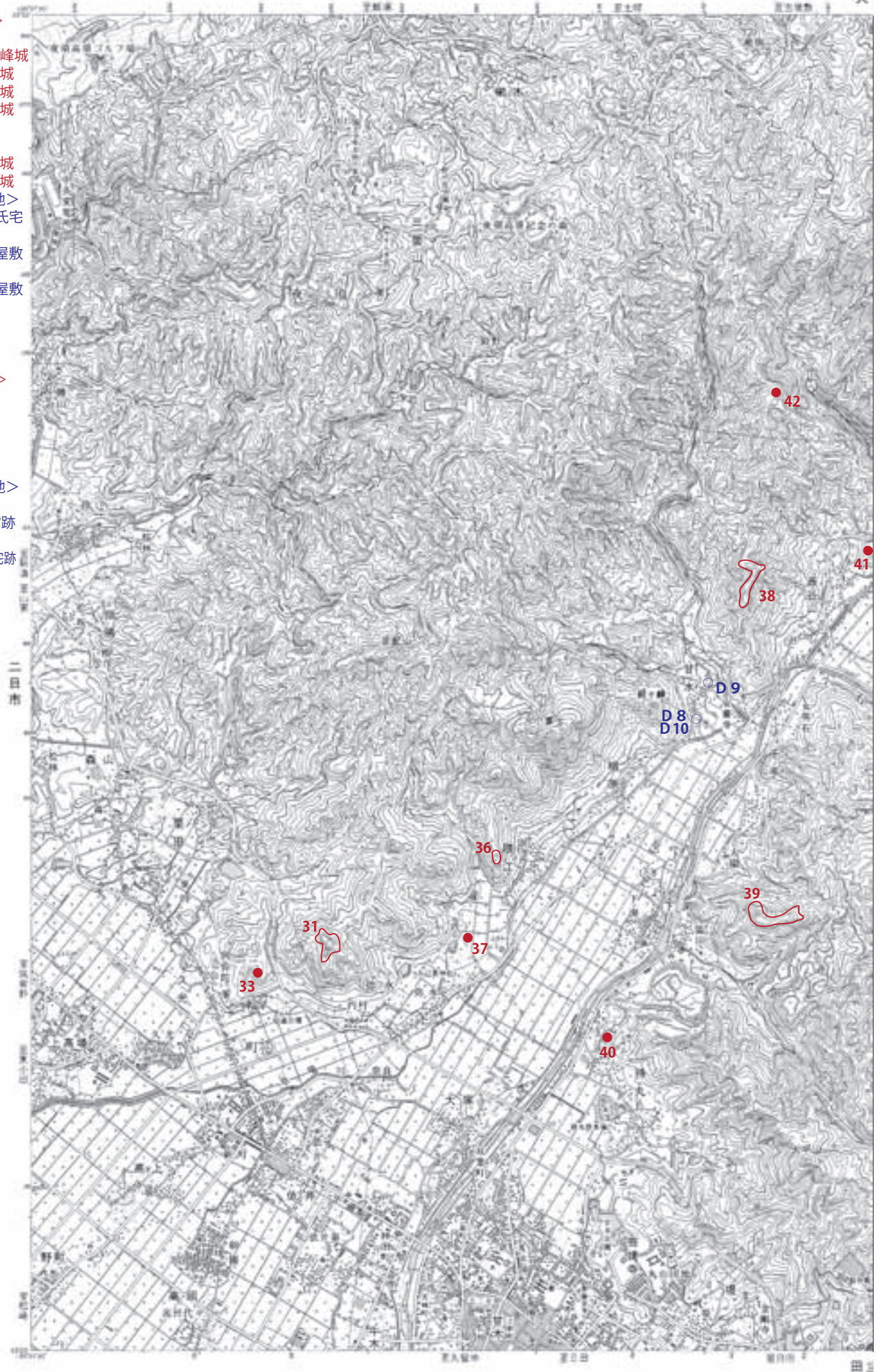
- < 中近世城館 >
- 筑前 118 日野山城
- 筑前 120 千手館
- 筑前 121 片辺城
- 筑前 122 長谷山城
- 筑前 123 竹生島城
- 筑前 124 柴原城

- (所在不明)
- < 中近世城館 >
- 筑前 119 才田城
- < 城館等伝承地 >
- 筑前D18 芥田館

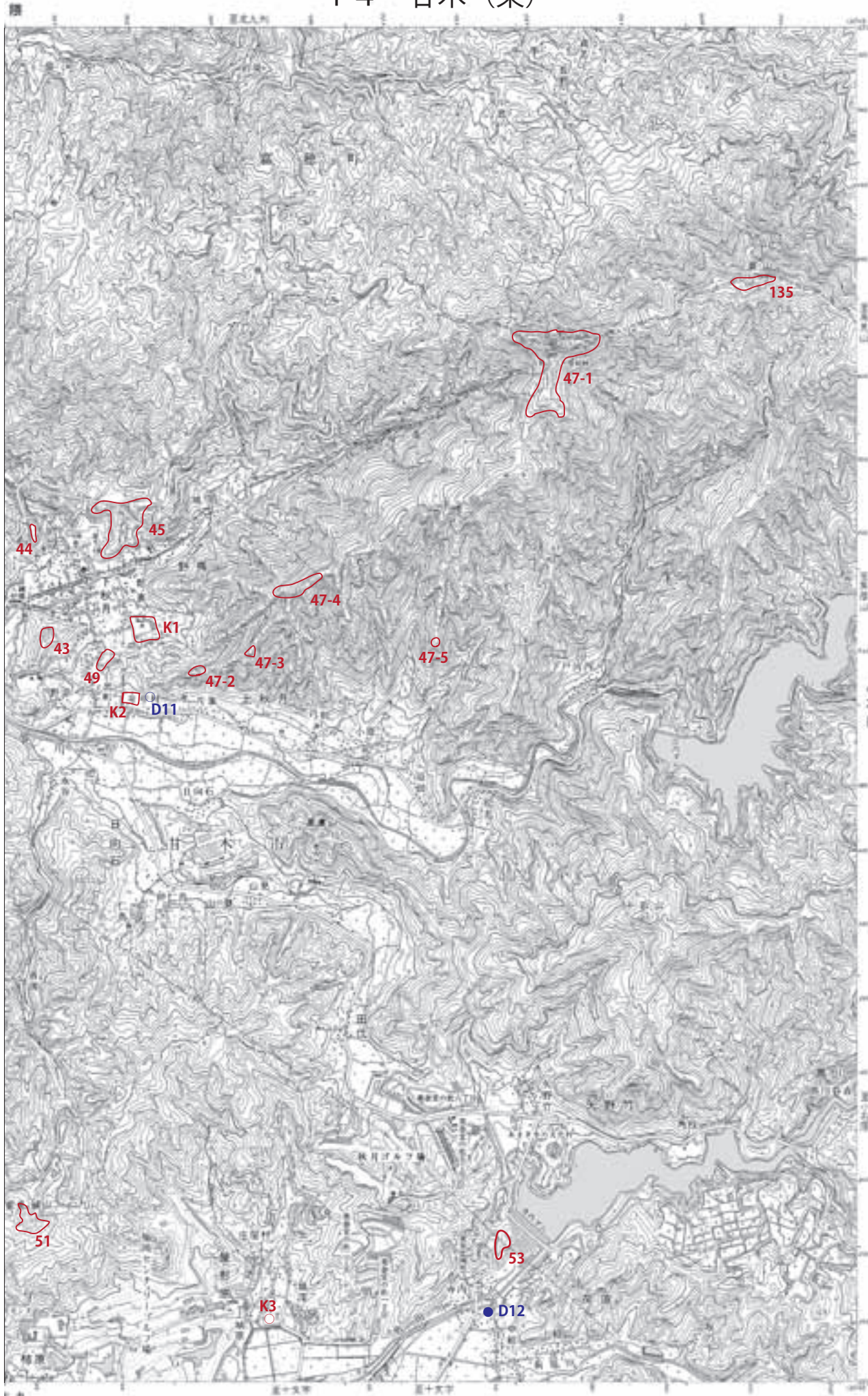
13 甘木(西)

- < 中近世城館 >
- 筑前 31 小鷹城
- 筑前 33 阿弥陀峰城
- 筑前 36 茶臼山城
- 筑前 37 古城戸城
- 筑前 38 五位山城
- 筑前 39 鼓岳城
- 筑前 40 片山城
- 筑前 41 道場山城
- 筑前 42 殿神楽城
- < 城館等伝承地 >
- 筑前 D 8 秋月氏宅
- 筑前 D 9
- 深野某屋敷
- 筑前 D 10
- 倉谷某屋敷

- (所在不明)
- < 中近世城館 >
- 筑前 30 弥永城
- 筑前 32 桜川砦
- 筑前 34 栗林城
- 筑前 35 平手城
- 筑前 50 平家城
- < 城館等伝承地 >
- 筑前 D 6
- 千田治兵衛館跡
- 筑前 D 7
- 芥田悪六兵衛か宅跡



14 甘木 (東)

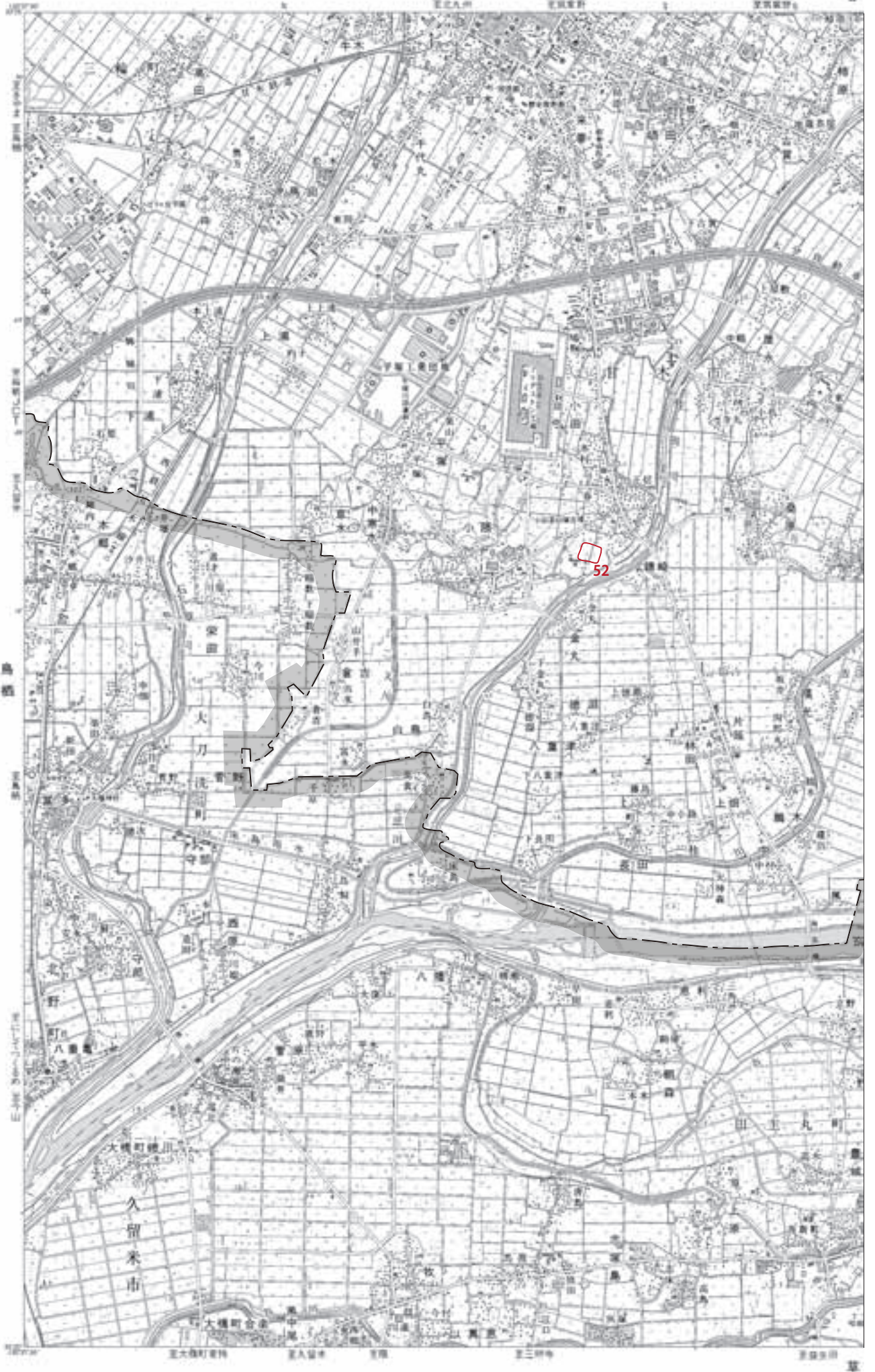


- < 中近世城館 >
- 筑前 43 福嶽城
- 筑前 44 稻荷山城
- 筑前 45 荒平城
- 筑前 47-1 ~ 5
- 古処山城
- 筑前 49 上秋月城
- 筑前 51 休松城
- 筑前 53 茶臼山城
- 筑前 135 屏山城
- 筑前 K 1 秋月陣屋
- 筑前 K 2
- 秋月藩南御殿
- 筑前 K 3
- 黒田図書助直之宅跡
- < 城館等伝承地 >
- 筑前 D 11
- 為朝居宅跡
- 筑前 D 12
- 三奈木弥平次が宅跡

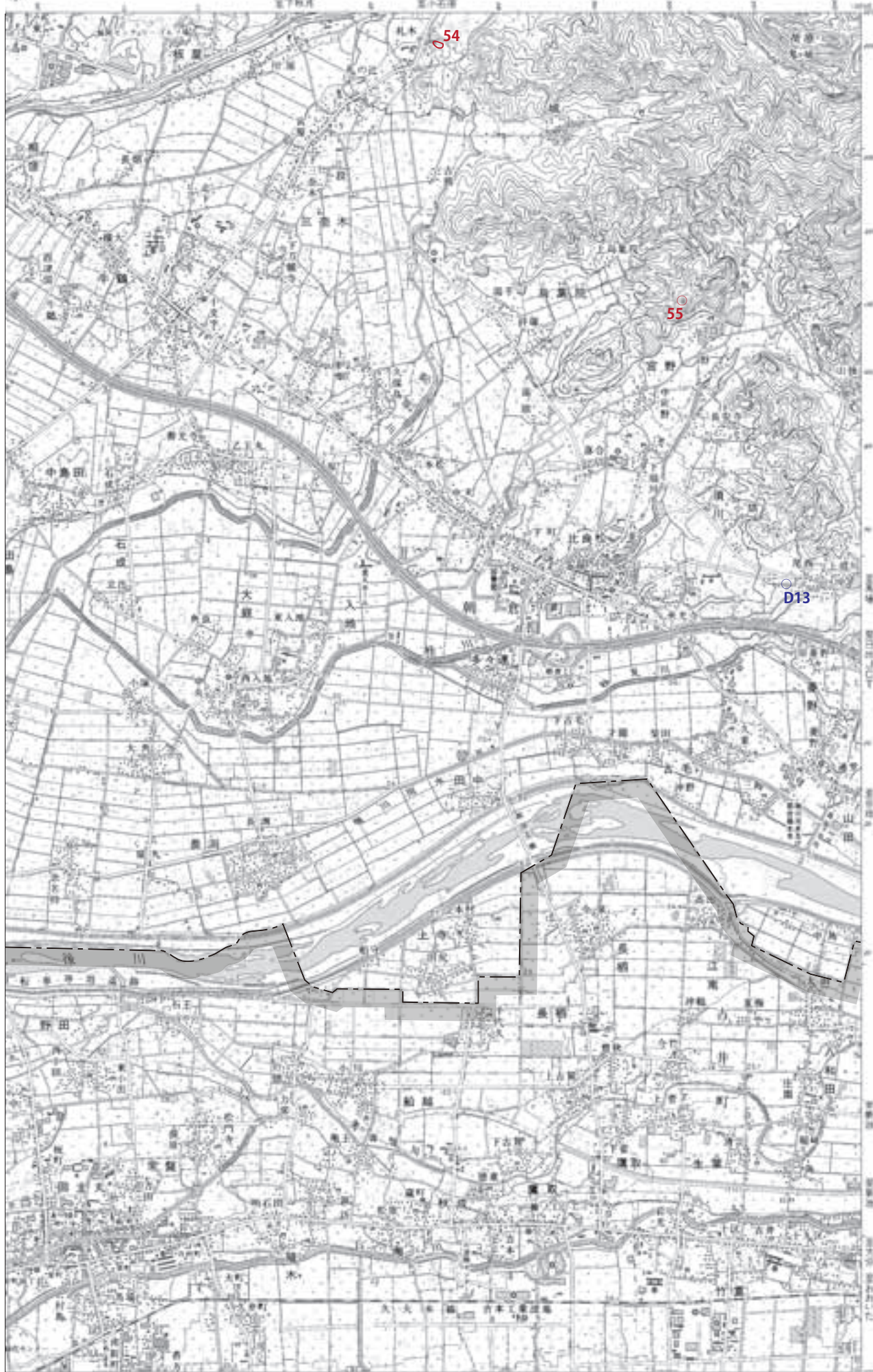
- (所在不明)
- < 中近世城館 >
- 筑前 46 杉本城
- 筑前 48 高尾城

15 田主丸 (西)

< 中近世城館 >
筑前 52 小田城



16 田主丸 (東)



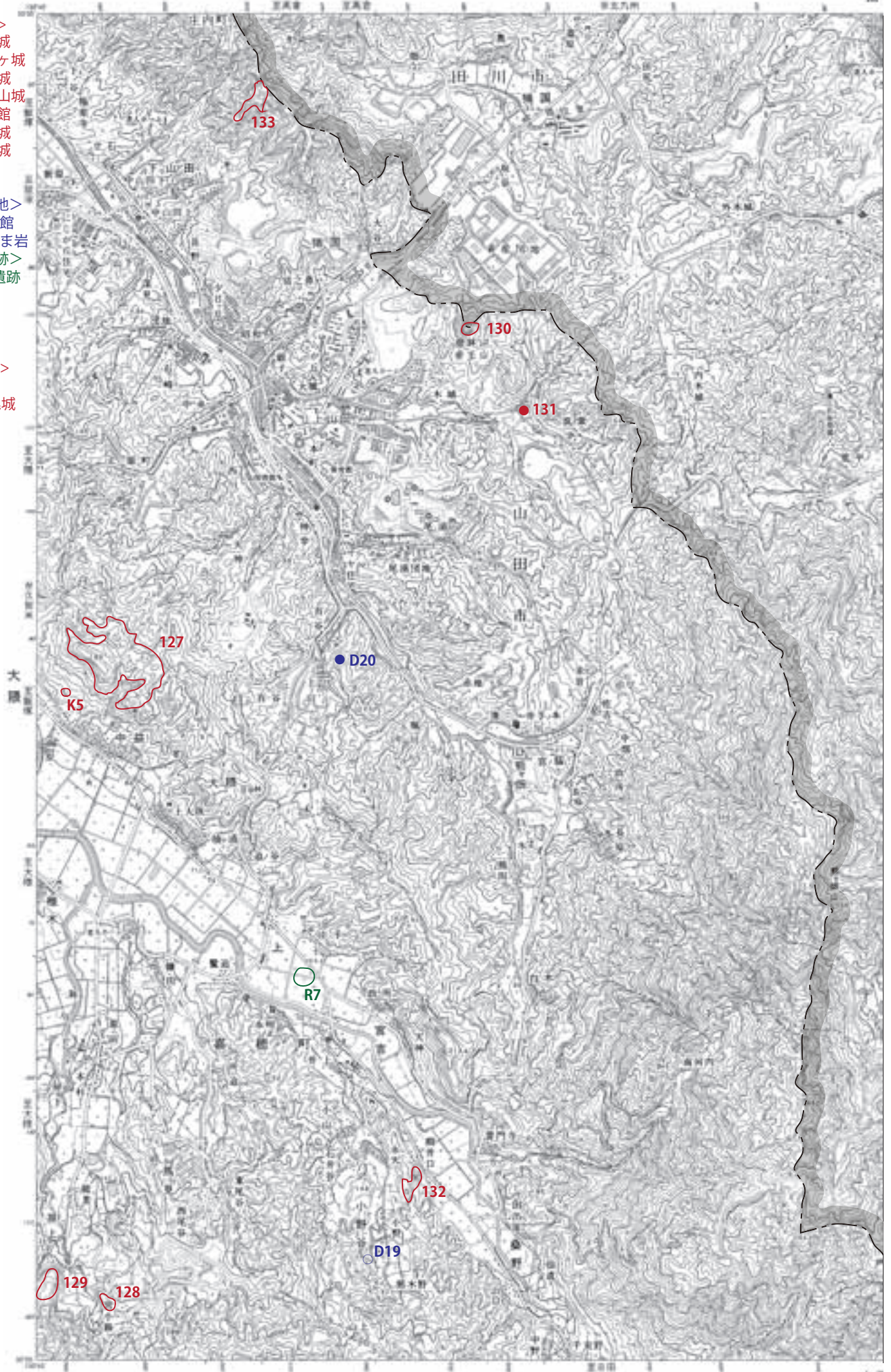
< 中近世城館 >
筑前 54 岩切山城
筑前 55 平家城
< 城館等伝承地 >
筑前 D13 小西館

(所在不明)
< 中近世城館 >
筑前 56 中尾城

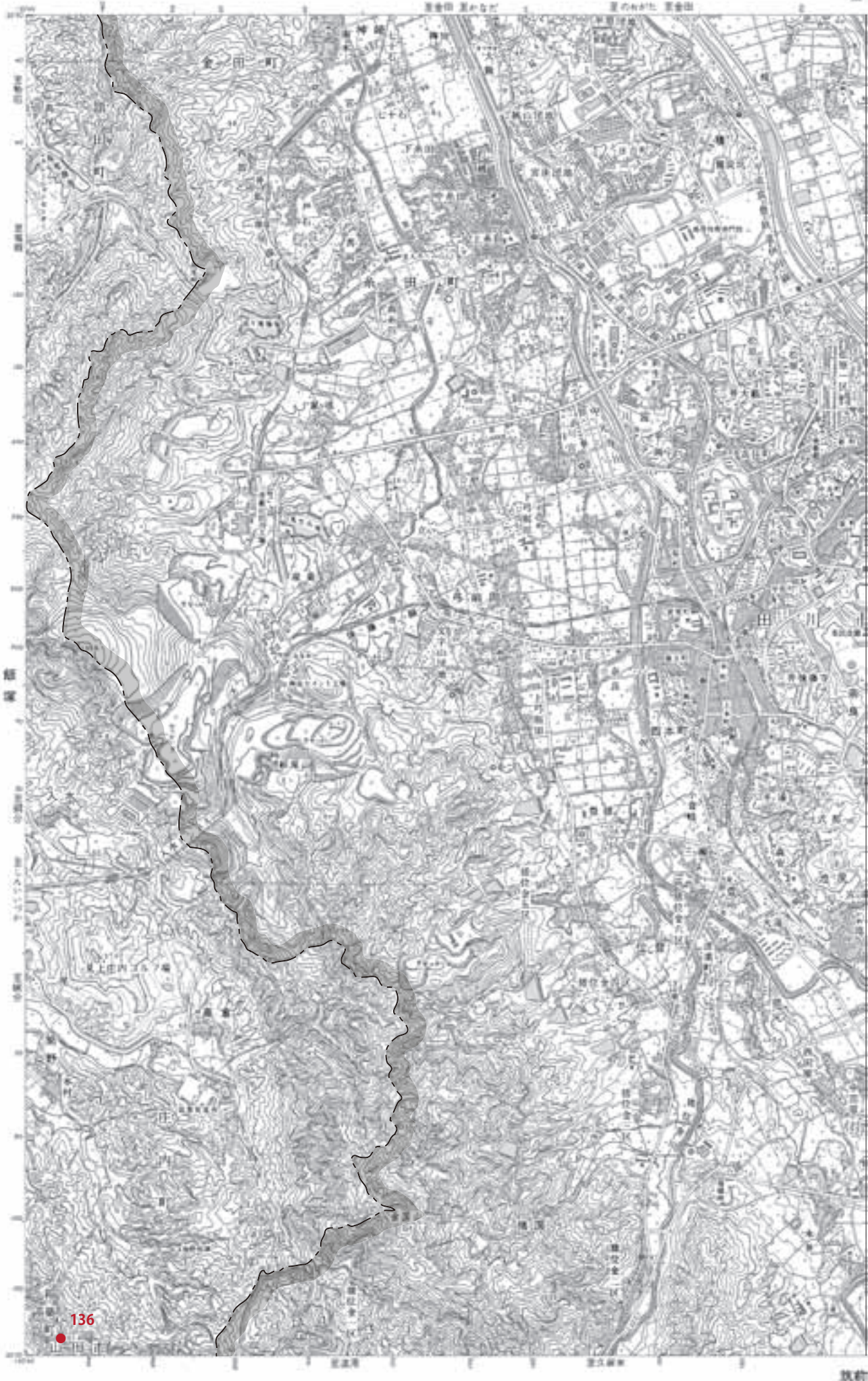
17 筑前山田（西）

- < 中近世城館 >
- 筑前 127 益富城
- 筑前 128 毛利ヶ城
- 筑前 129 平家城
- 筑前 130 大王山城
- 筑前 131 木城館
- 筑前 132 塘迫城
- 筑前 133 岸殿城
- 筑前 K 5
- 城主屋敷跡
- < 城館等伝承地 >
- 筑前 D 19 八郎館
- 筑前 D 20 茶がま岩
- < 城館関連遺跡 >
- 筑前 R 7 勘高遺跡

- (所在不明)
- < 中近世城館 >
- 筑前 134
- 遠見ヶ尾城



18 田川 (西)

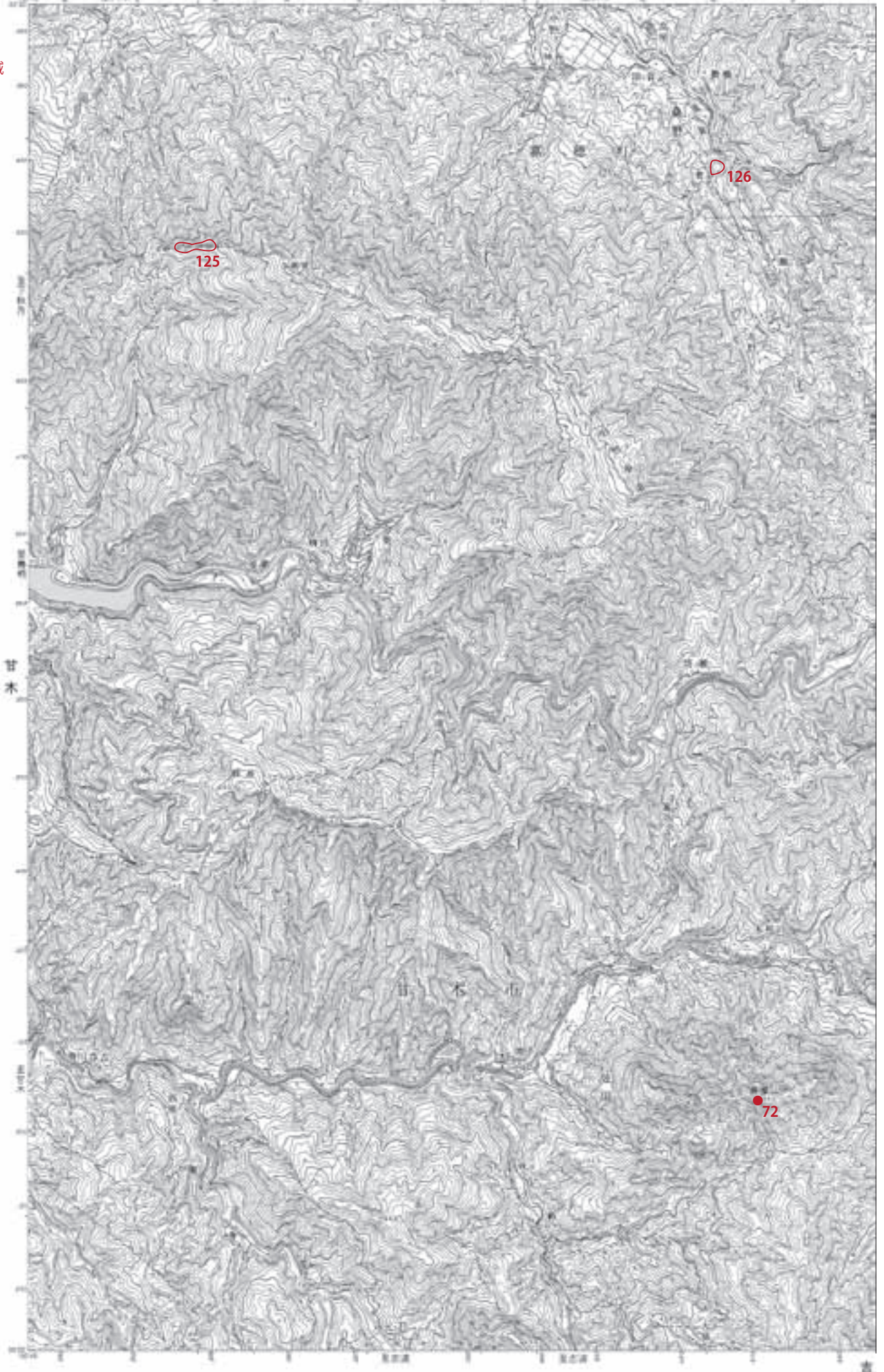


< 中近世城館 >
筑前 136 筒見城

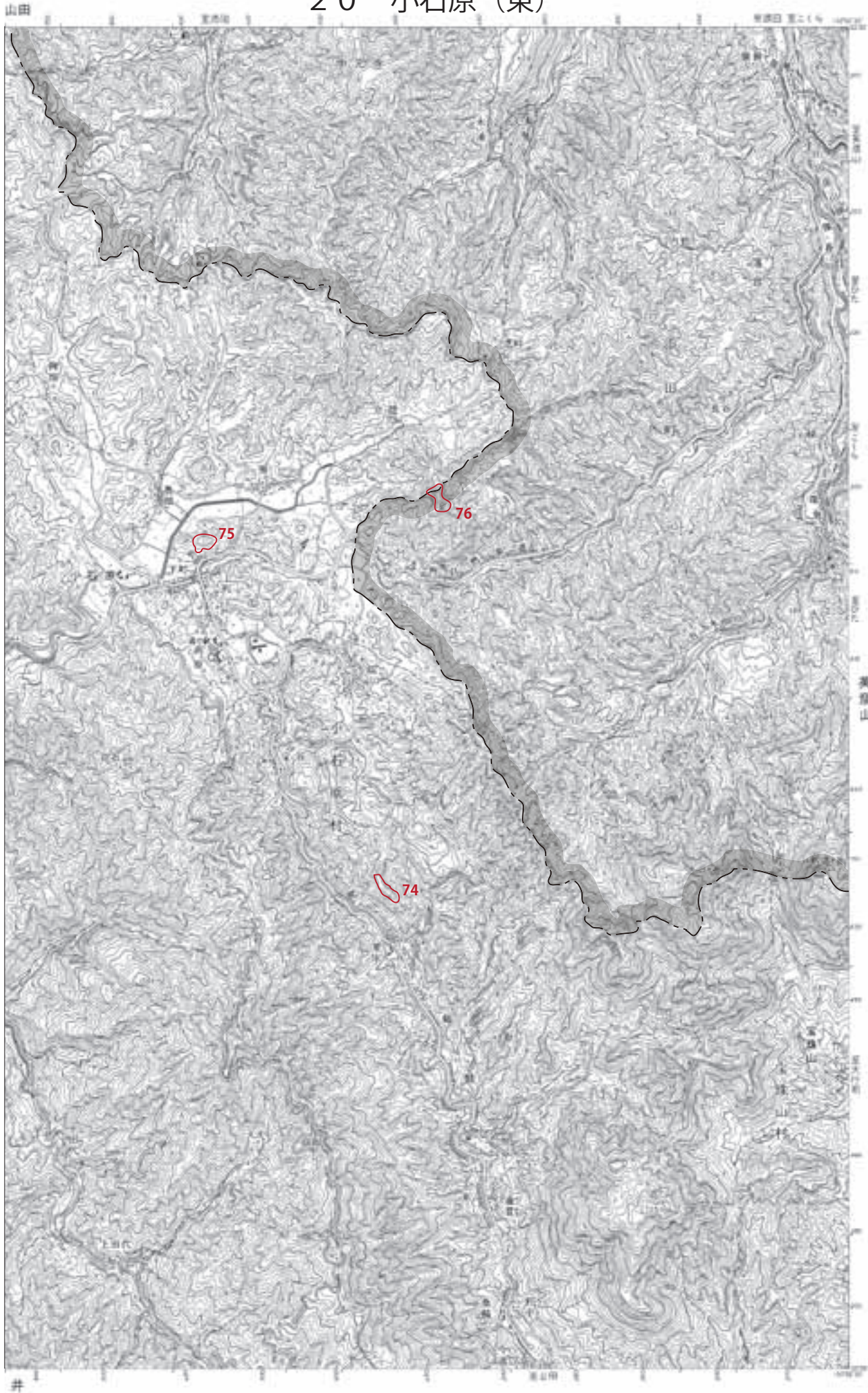
19 小石原 (西)

筑前

< 中近世城館 >
筑前 72 塙山城
筑前 125 茅城
筑前 126 花尾城



20 小石原 (東)



< 中近世城館 >
筑前 74 高鼻城
筑前 75 松尾城
筑前 76 二股岳城

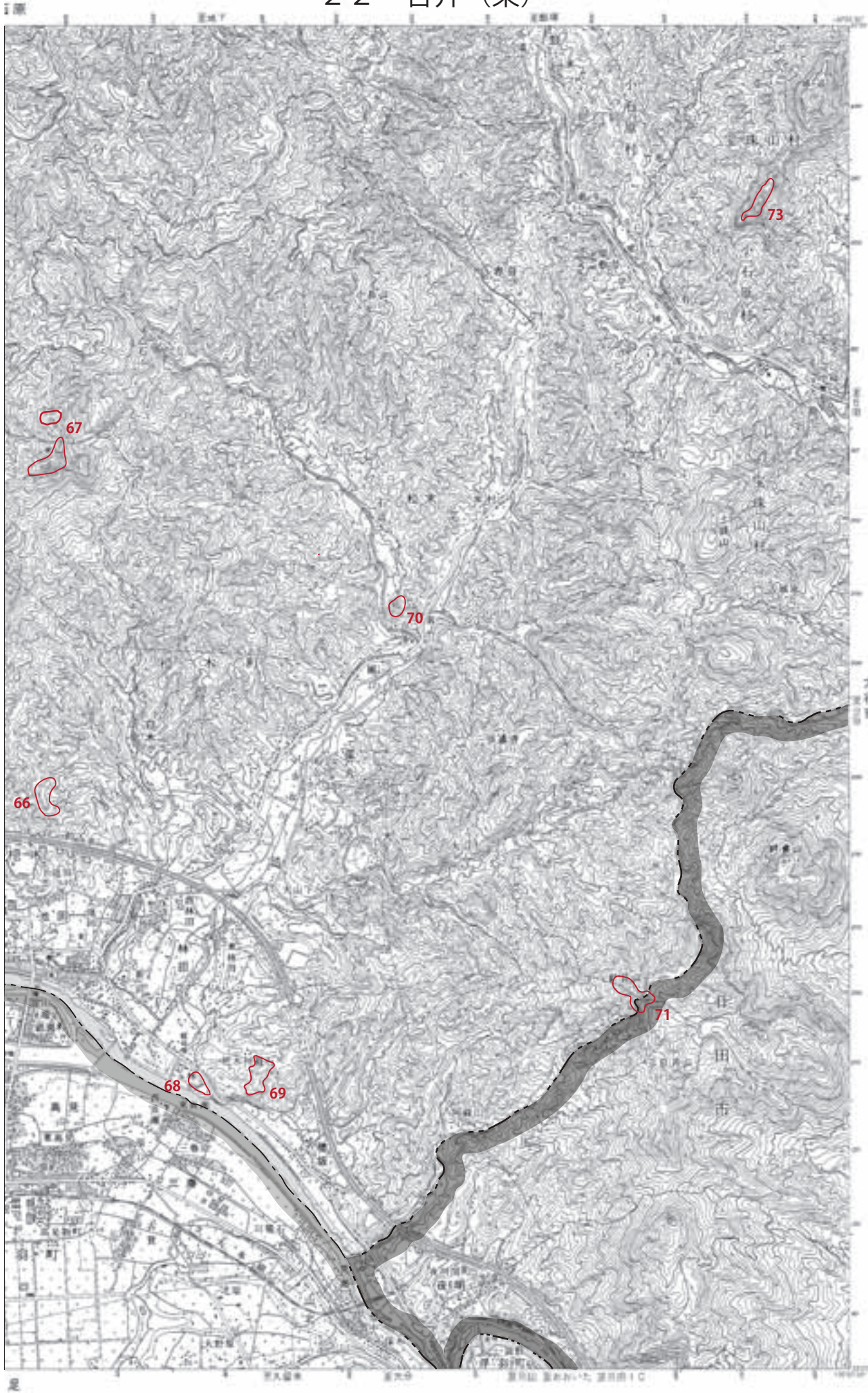
21 吉井 (西)

小

- < 中近世城館 >
- 筑前 57 村上城
- 筑前 58 志波城
- 筑前 59 本陣山城
- 筑前 60 高山城
- 筑前 61 麻氏良城
- 筑前 62 烏山城
- 筑前 63 前隈山城
- 筑前 64 茶臼山城
- 筑前 65 夕月城
- 筑前 K 4
- 栗山備後宅跡



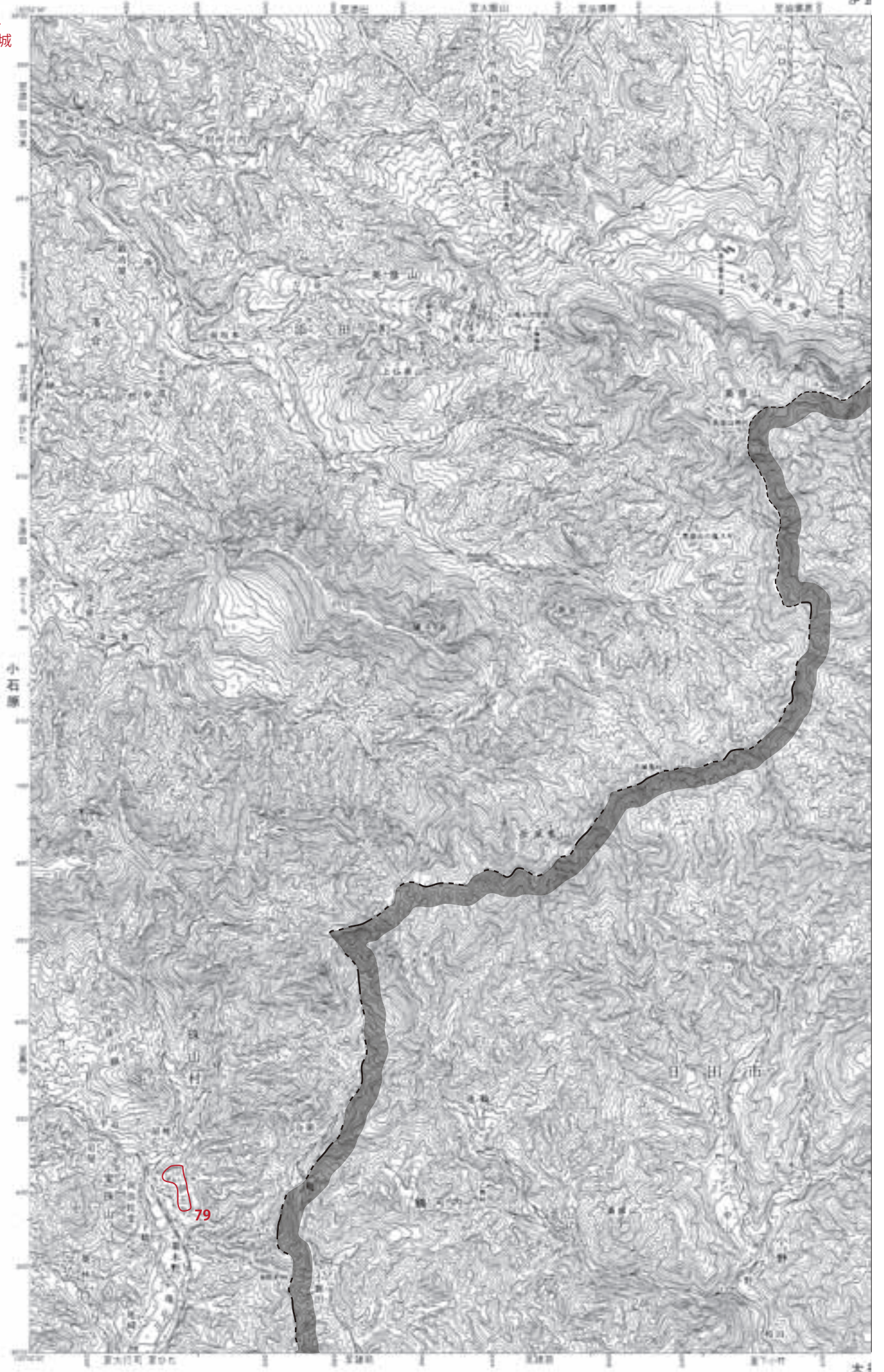
22 吉井 (東)



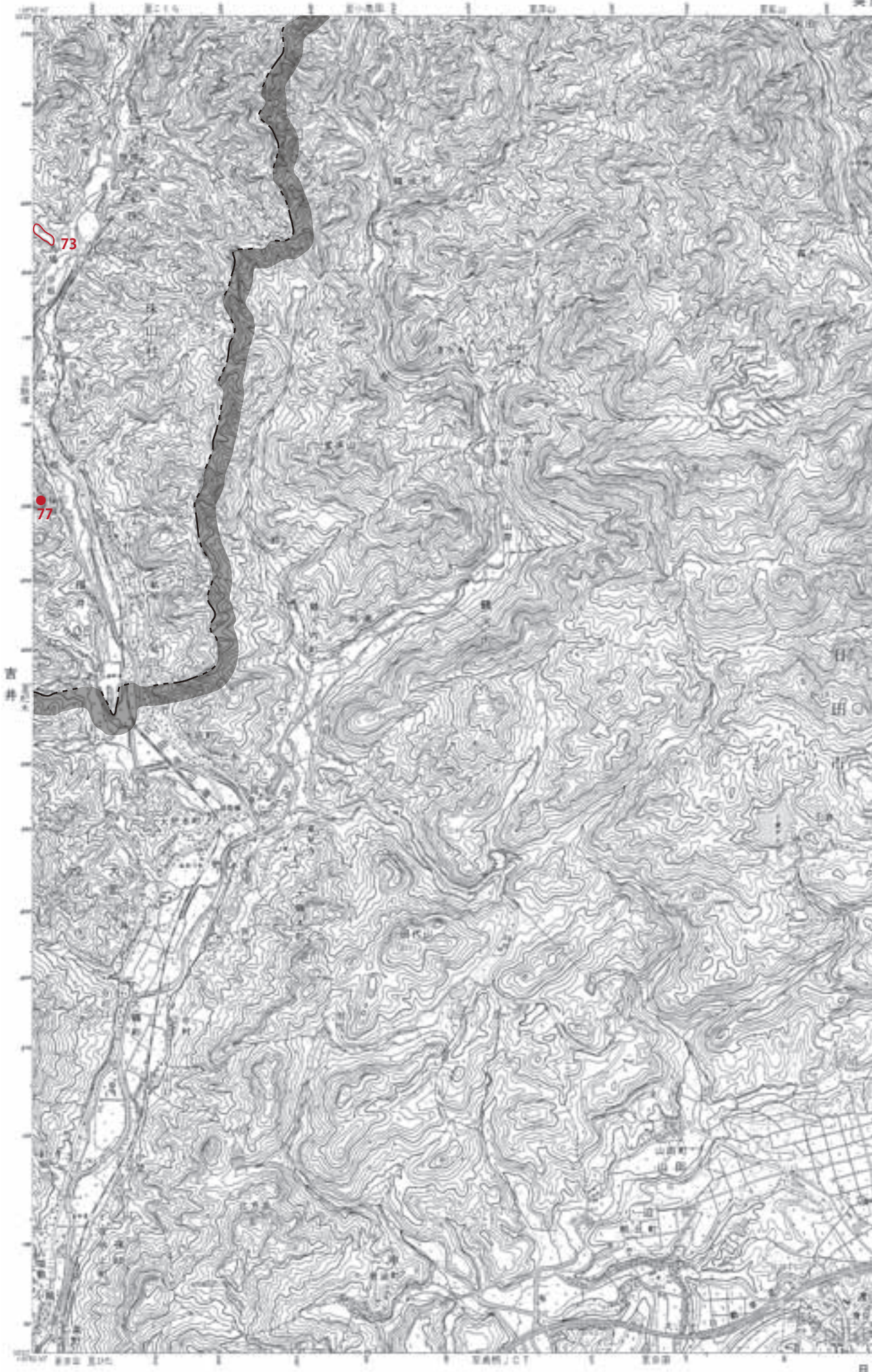
< 中近世城館 >
筑前 66 三日月城
筑前 67 米山城
筑前 68 鶴木城
筑前 69 長尾城
筑前 70 真竹山城
筑前 71 針目城
筑前 73 烏岳城

23 英彦山 (西)

< 中近世城館 >
筑前 79 伊王寺城



24 大行司 (西)



< 中近世城館 >
筑前 73 烏岳城
筑前 77 庄林城

(所在不明)
< 中近世城館 >
筑前 78 蔦岳城

V 個別城館報告

<凡例>

- 1 本章では、報告対象地域に分布する個別城館遺跡等の記載を行っている。
- 2 城館跡は、遺跡の分類単位で、なおかつ旧郡単位で収録しており、市町村単位ではない。
- 3 個別城館のタイトルに示した内容は、IVの一覧に準じている。
- 4 文中にある文献番号は、参考文献一覧（28～30ページ）と対応している。また、基本参考文献等の略号は以下のとおりである。
 - ・『本編』…『筑前国統風土記』（貝原益軒著・1709年）
 - ・『附録』…『筑前国統風土記附録』（加藤一純・鷹取周成著・1798年）
 - ・『拾遺』…『筑前国統風土記拾遺』（青柳種信著・文政～天保年間（未完））
 - ・『全誌』…『福岡県地理全誌』（臼井浅夫ほか著・1875～1880年）
 - ・『種々』…『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（和田宗八・1936年）
 - ・『県教委一覧』…『九州縦貫自動車道関係係理蔵文化財調査報告書』XXIX 付録 福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）
 - ・『古城図』…『古戦古城之図』（大蔵種周・土井正就ほか筆・国立公文書館蔵）
※なお、本書における国立公文書館所蔵の絵図面は断り書きのない限り、全てのこの絵図面集を指すものとする。
 - ・『旧跡全図』…『太宰府旧跡全図』
 - ・『城数之覚』…『筑紫氏城数之覚』（筑紫家文書）
 - ・『覚書』…『天正十五年四月生駒雅楽頭宛城数覚書』
- 5 個別報告文章の項目および内容は以下のとおりである。
 - 【沿革】…城館の位置、および伝承等の来歴を記す。
 - 【概要】…城館の現地の状況及び構造等を記す。
 - 【史料】…文献史料調査における「一次史料」・「参考史料」の記載の有無を示す。
 - 【参考文献】…参考文献一覧に示した文献の有無を示すもので、文献番号を付した。番号がゴチック体となっているものについては、記載文献に縄張り図・測量図等の調査データが搭載されているものを示す。
- 6 掲載した縄張り図の内、事務局作成成分については、作成方法・表記方法等については、『発掘調査のてびき 各種遺跡編』（2014年・文化庁編）に準じている。また、遺構名称も上記文献に準じているが、曲輪への出入口を指す用語については「虎口」を用いた。

1 中世城館 ①御笠郡

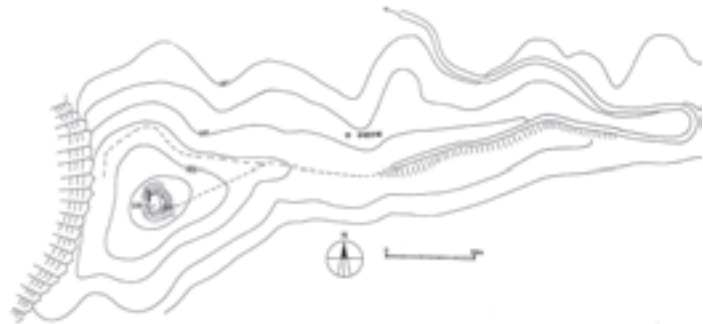
筑前 1	からやまひがしじょう 唐山東城	郡名 御笠郡 / 糟屋郡	別称 賀良山東城	図幅名 福岡南部 (東)
		種別 山城	所在 糟屋郡宇美町井野・大野城市乙金東	

【沿革】旧御笠郡・糟屋郡との境界の井野山(唐山・標高 236m)の山頂(字「本城古城」)に位置する。井野山は三角山とも呼ばれ、東・中・西の3つの峰からなる。『本編』には山上に東城と西城の2箇所があり、東城は安河内備前の居城とする。『拾遺』には「東ノ方本丸址最も高し。平地有。其次に下城と云所有。平地なし」とあり、東城が標高 236m地点で中央の峰が「下城」と想定される。『豊前覚書』に永禄期の毛利・大友間の抗争で記載が見られる。



第3図 唐山東・西城遠景(文献 64・昭和 45 年頃)

【概要】井野山山頂は、現在展望台と林道によって改変を受けているが、明瞭な城郭遺構は確認することができない。また、中央の峰は採石により破壊されて消滅しているようであるが、『拾遺』には「平地なし」とされ、城郭遺構が存在しなかった可能性が高い。



第4図 唐山東城縄張り図(文献 76・中西義昌作成)

【史料】あり 【参考文献】1～4,6,8～11, 31,64,76,79

筑前 2	からやまにしじょう 唐山西城	郡名 御笠郡	別称 賀良山西城	図幅名 福岡南部 (東)
		種別 山城	所在 大野城市中	

【沿革】唐山東城の西、井野山の西峰に位置する。『本編』には神武修理亮の居城とし、『附録』では唐山古城の「調馬場」、『拾遺』では「馬牧場」、『全誌』では「的馬場」と称する。東城と共に立花山城の遠見城とされる。



第5図 唐山西城縄張り図(文献 76・中西義昌作成)

【概要】唐山東城同様、明瞭な城郭遺構は見られず、後世の炭焼遺構が残るのみである。

【史料】あり

【参考文献】1～4,6,8～11, 31,64,76,79

筑前3 ^{ふどうじょう}
不動城

郡名	御笠郡	別称	牛頸城	図幅名	福岡南部(東)
種別	山城	所在	大野城市牛頸		

【沿革】大野城市牛頸にある通称「城の山」山頂に位置する。比高約30m。『本編』には「秋月氏の旗下奈良原刑部少輔と云者、此城を築て在城せり。その後裔奈良原兵庫亮と云し者、秀吉公九州征伐の時、秋月種実か先手として討死せり」とある。また、『城数之覚』（筑紫家文書）には「牛頸ノ城」として筑紫氏の城として幡崎兵庫・筑紫越前守が在番したとする。『附録』では、「不動古城」として「大立寺山に在り」としている。

【概要】城の山は南北2つの頂部からなるが、城域は主に南側を中心とする。南側の頂部より南側は、昭和40年代の宅地開発によって削られてしまい、主郭は南側の頂部（現在の標高94m）にあったとみられるが、詳細な形状は失われてしまっている。現在、主郭からは北東・北西側に尾根が伸びており、北東側には細長い曲輪群が残り、要所には土塁、堀切によって防御される。北西側の斜面上にも土塁や堀切で防御された曲輪群が見られる。その一方で、北西側の尾根は、尾根上に堀切2本（堀切の西側は宅地開発により消滅）を設けて防御するとともに、それよりも北側には城郭遺構は設けていない。またかつては主郭から東側あるいは南西側にも尾根は伸びていたようであり、それらの尾根上にも曲輪や堀切などの城郭遺構が存在したのであろう。

【史料】あり 【参考文献】1～4,6,8～11,31,64,81,99



第6図 不動城縄張り図（岡寺 良作成）



第7図 不動城航空測量図（文献31）

筑前5 いわやじょう
岩屋城

郡名 御笠郡
種別 山城

別称 なし
所在 太宰府市太宰府・観世音寺

図幅名 太宰府(西)

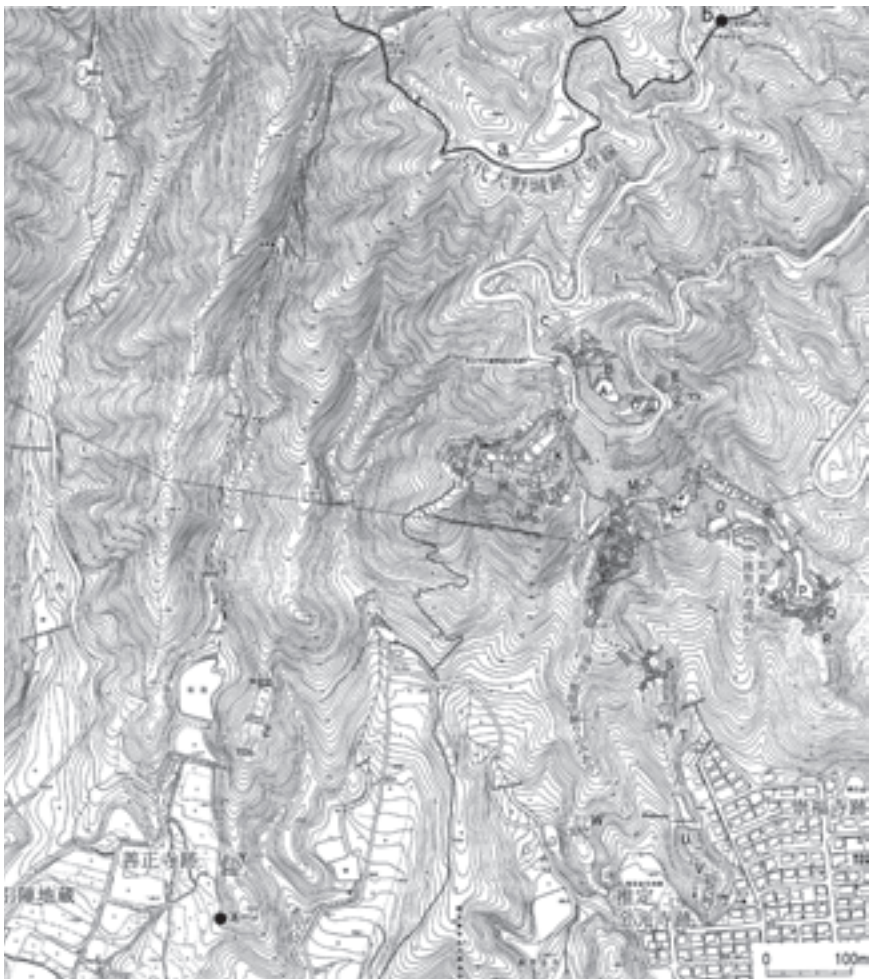
【沿革】大宰府政庁跡の北側にそびえる四王寺山の支峰・岩屋山山頂(281m)を中心として、その南側に曲輪群が展開する。文明10年(1478)に大内政弘が深野重親に在城させたのを初見として、大内氏の後には大友氏の筑前御笠郡の拠点城郭として機能した。天正14年(1586)には島津方と城主・高橋紹運との合戦(岩屋城合戦)により落城、秋月方の城となるも、翌年豊臣秀吉の九州国分けによって廃城となった。

【概要】岩屋山山頂に主郭を置き、そこから南東側と南西側に延びる尾根上に曲輪群が展開する構造を呈する。

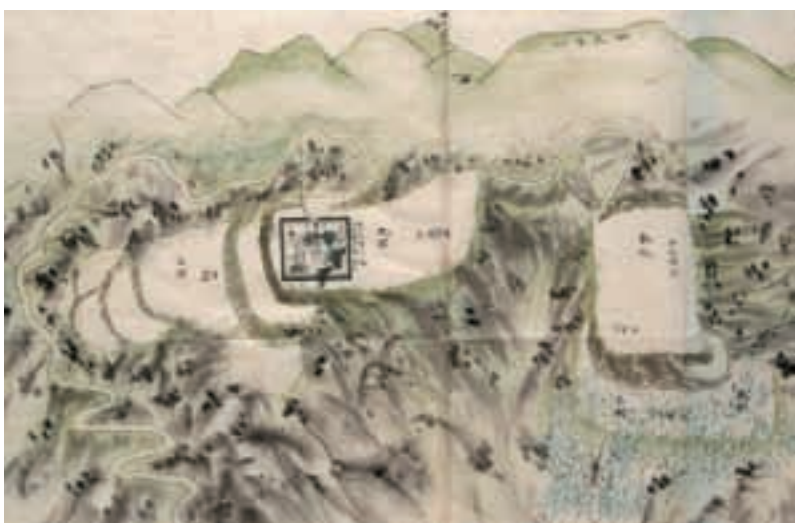
主郭の南東側には、伝二の丸・伝三の丸と称する曲輪群が並列し、伝二の丸には現在高橋紹運の墓が置かれている。三の丸のさらに西側には堀切、畝状空堀群により防備する。また伝二の丸曲輪の南東側斜面(第12図K・J)には小規模な曲輪群と縦堀群が見られる。

また、主郭の背後、北西側には複数の堀切により防御を行うとともに城域を区切り、それより山手側には城郭遺構を築いてはいない。

主郭の南東側は曲輪を配し(D)、その東側の尾根上は堀切と縦堀で防御している。一方、南東側斜面は急斜面となっており、城郭遺構は見られないが、下方については伝二の丸曲輪から回り込む



第8図 岩屋城全体縄張り図(文献86・岡寺良作成)



第9図 筑前三笠郡岩谷城図(部分・個人蔵)



第10図 岩屋城主郭（伝本丸）



第11図 岩屋城伝二の丸・高橋紹運墓

ような形で城郭遺構が再び見られるようになる。

図中Lの南側の尾根上には複数の堀切や畝状空堀群多数が見られ、城内でも最も嚴重な防備を呈する。ここを防御することによって、伝本丸・二の丸の曲輪群と南東側尾根上の曲輪群（N・O・P）との連絡を確保できるため、堅い防御となっているのであろう。

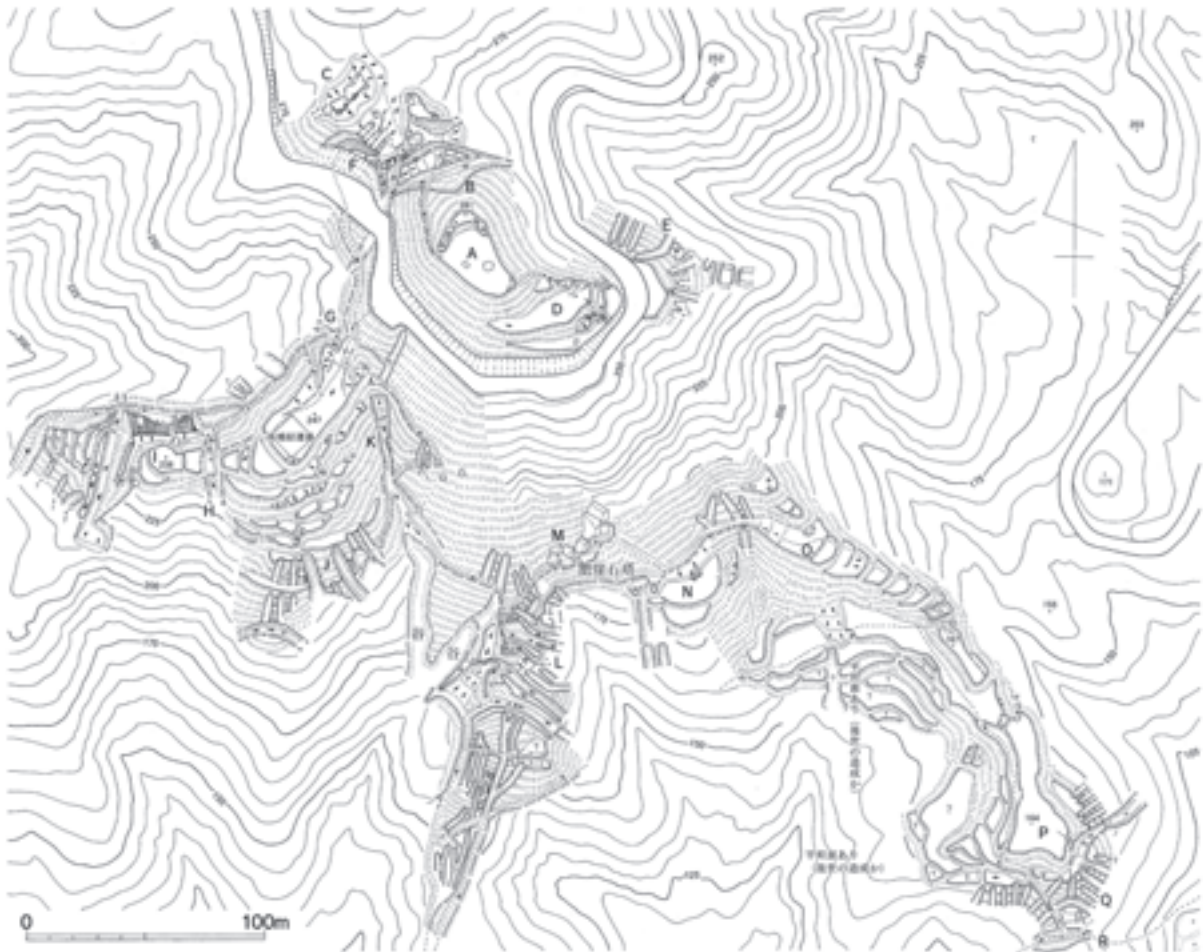
そして、南東側の尾根上には階段状に曲輪群が並列し（図中O～P）、その先端部は畝状空堀群と堀切によって堅く防御している（Q・R）。

また、これら曲輪群から離れた南側と南西側の尾根上には単独で堀切が設けられている（第8図）。

関連地名としては南西麓側の大字坂本に、「引陣^{ひきじ}」という地名が小字として残る。岩屋城合戦の際に島津方が守城軍に押されて軍勢を引いたことに由来すると伝え、「引陣地蔵」が今でも祀られている。

【史料】あり

【参考文献】1～4,6～9,10,11,26,73,75,79,86,88



第12図 岩屋城縄張り図（主要部分・文献86・岡寺良作成）

筑前6 うらのじょう
浦ノ城

郡名 御笠郡
種別 丘城か

別称 大宰府城
所在 太宰府市太宰府

図幅名 太宰府(西)

【沿革】四王寺山から南東側に延びる尾根上の頂部、ジョウセン山とナラコ山に位置したが、昭和44年(1969)に宅地開発によって消滅した。この一帯は字・浦ノ城と呼ばれ、観応4年(文和2・1353)に少弐氏が守りを固める「古浦城」に菊池勢が攻めたとする浦ノ城にあたるものとされている。

【概要】宅地開発による消滅前の地形は、標高約80mの独立丘陵状を呈し、東側の頂部を「ジョウセン山」、西側の頂部を「ナラコ山」と呼び、その丘陵一帯に城郭が展開していたとされる。宅地開発に先立つ発掘調査では、人為的な削平平坦面のトレンチ調査が行われた。部分的な調査であったため、石列などの他には明瞭な以降は確認できなかったが、複数の遺構面が確認され、13～16世紀の遺物も見られた。本来的な城郭の形状は今となっては知るすべもないが、コの字状に取り巻く丘陵上に階段状に平坦面が築かれていたものと考えられるが、これが城郭遺構を反映したものではない可能性も十分考えられる。また、遺物の時期から見ても、文献に見る城郭時期以降も、人為的な使用があり、近辺には原山無量寺跡も存在することから、それらとの関連も想定される。

なお、『拾遺』には「天慶年中藤原純友四国を落て太宰府を侵寇せし時籠りし城址也といふ。」とあるが伝承の域を出ないものである。

【史料】あり

【参考文献】3,4,8～11,26,33



第13図 浦ノ城跡地形図(文献33・昭和44年4月段階)



第14図 浦ノ城跡遠景(文献33・昭和44年)

筑前7

たかおやまじょう
高尾山城

郡名 御笠郡

別称 なし

図幅名 太宰府(西)

種別 山城

所在 太宰府市太宰府

【沿革】太宰府市の東部、石坂にある石穴神社の東側の裏山の高雄山(標高151m)に存在する。城は山頂の東側の標高158m地点に位置する。比高差は約100m。太宰府の町を挟んで、北側の岩屋城と対峙する位置にあるが、主郭は北側よりもむしろ東側を意識した位置になっている。

『拾遺』には、「天正十四年薩摩勢岩屋城を攻し時、秋月氏の陳址と云。山上巽(南東)より乾(北西)に四十三間。坤(南西)より艮(北東)に南にて四間半北にて六間有。東南の方に武者走あり。又筋違にから堀あり。」とある。また、『古城図』には、「立橋(高橋)紹運家臣之を守る」とあり、天正14年(1586)以前は高橋氏の家臣の城であったと考えられる。

【概要】『古城図』と現況の縄張り図を比べると、城の北北東側の約半分は、太宰府ゴルフ場を造る際に、消滅していることがわかる。

標高158mの山頂部に主郭が存在する。主郭は、東西約10m、南北約60mで、南側から、西側にかけて、高さ約1m未満の土塁が巡る。主郭の北西側の曲輪には、北側と西側に土塁がある。そしてその西側の堀切を挟んで、東西約25m、南北約12mの曲輪があり、さらにその西側に堀切・豎堀等が認められる。これらの曲輪の北側には横堀が掘られ、南側には幅約5m程の腰曲輪が2段にわたって存在する。北西側の尾根には



第15図 高尾山城縄張り図(文献79・岡寺良作成)



第16図 御笠郡宰府村高尾故城之図(部分・国立公文書館蔵)

豎堀を3本ほど施した後、最後に堀切を掘って城域を区切っている。また、主郭の東側と南西側にも尾根には必ず堀切を掘る入念さが見られる。

主郭の北東側については、現在消滅しているために確認することはできないが、『古城図』を見ると、北東の尾根上に非常に幅の狭い曲輪を10段以上も設け、その北側に3つほどのやや大きめな曲輪を配している。それらの曲輪群の北側と西側には横堀が巡っていたようである。

絵図を元に考えると、城域は現在残っている部分の2倍以上と推定でき、かなり広大な面積を有していたことがわかる。

【史料】あり

【参考文献】1,4,6,8～10,11,26,79,99

筑前8	うちやまじょう 有智山城	郡名	御笠郡	別称	内山城・内山太宰少貳城	図幅名	太宰府(西)
		種別	山城	所在	太宰府市内山・北谷		

【沿革】宝満山の西麓、標高310m付近に位置する。『本編』「太宰少貳宅址」には、「有智山村の東北にあり。其邊を九重原といふ。堀二重、土堤二重あり。是少貳代々の館の址也。今も里人は御館と云」とあり、次に述べるように堀が掘られたこの城跡を南北朝期の少貳氏の館と認識していたようである。



第17図 有智山城縄張り図(文献88・岡寺良作成)

【概要】縄張り構造を見ると堀は二重ではなく、幅約10mの横堀が100mを超

える長さで1本確認でき、その背後の北東側は曲輪となっている。また、それらのちょうど中央には石垣を設けた虎口(第18図)が確認できる。そしてこれらの背後にも石垣が見られるがこれらについては近世以降の茶園であり、城郭遺構ではない。また、図化はしていないが横堀の全面にも中世段階の宝満山の坊跡の平坦面群が展開している。また、地誌類にいうところの南北朝期の城郭ではなく、巨大な横堀の存在や石垣で固めた虎口などから戦国時代の宝満城の出城として、高橋氏あるいは筑紫氏によって築造・利用された城郭であるとみられている。



第18図 有智山城虎口石垣

【史料】あり 【参考文献】3,4,6～9,10,11,26,81,88

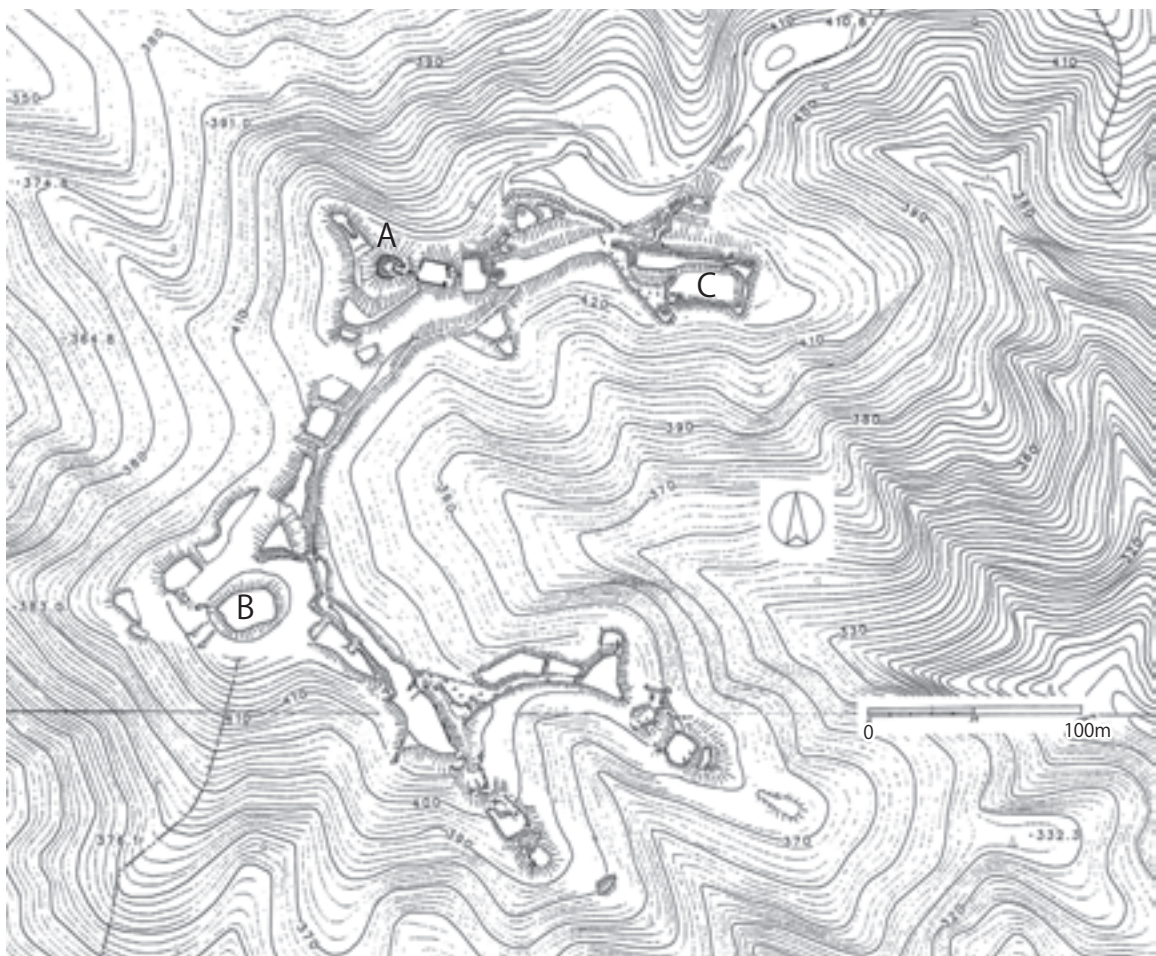
筑前9

ますがたじょう
升形城郡名 御笠郡
種別 山城別称 升形山城・愛嶽の砦
所在 筑紫野市大石・太宰府市内山

図幅名 太宰府(東)

【沿革】宝満山の南西側の中腹にそびえる愛嶽山山頂（標高 439m）を中心に城域が広がる。『本編』には「高橋三河守鑑種か端城也。後には高橋紹運の端城とせられしにや」とあり、また天正 13 年（1585）の筑紫氏との攻防により宝満城とともに落とされている。

【概要】『古城図』の一つ(表題なし)に升形城を描いた絵図が残されている(第 20 図)。それを見ると、愛嶽山山頂(第 19 図 A)には城郭遺構は見られず、その南側の標高 432m の頂部(第 19 図 B)を中心に曲輪が展開している状況が描かれている。しかし近年の調査で、愛嶽山山頂を中心とした広大な城域を持つことが判明してきた。その状況を説明すると(第 19 図)、愛嶽山山頂には現在、愛嶽社の社殿(A)があり、神社に伴う石垣が残されていて近世以降の改変が見られるが、その周囲には帯曲輪とみられる平坦面もあり、かつてはここに主郭があったものとみられる。さらにその東側の尾根上には曲輪とみられる平坦面が確認できるが、尾根の先端部の C は土塁に囲まれた閉塞空間が確認できる。C の部分は近世において、竈門山宝満宮に仕える宝満二十五坊の一つで、愛嶽社に奉仕していた財行坊の坊舎が置かれていた場所で、『古城図』にも坊舎の建物が描かれているが、特筆すべきはその C の平坦面の東側と北側の尾根上に、堀切が確認できることである。これは升形



第 19 図 升形城縄張り図（文献 97 掲載の村上勝郎・田中賢二作成図を一部改変して作成）

城に伴うものであり、かつてはここまでが升形城の城域であったことを物語っている。さらに、山頂の南側のBの頂部には、東西約30m、南北約20mの曲輪が置かれ、その北側には浅い堀切を一本設け、さらにAの山頂に向かう尾根上にも曲輪が並列している。また、Bの南東側にも階段状に曲輪群が並び、その先端部分には堀切で防御している様子がうかがわれる。

以上のように、升形城は尾根線上を500m以上の規模で曲輪群を設けた城郭であり、宝満山一帯の中核をなす城郭とも想定することができる。

【史料】なし

【参考文献】1～4,8～10,11,28,79,92,97



第20図 升形城を描いた絵図（『古城図』のうち）
（部分・国立公文書館蔵）

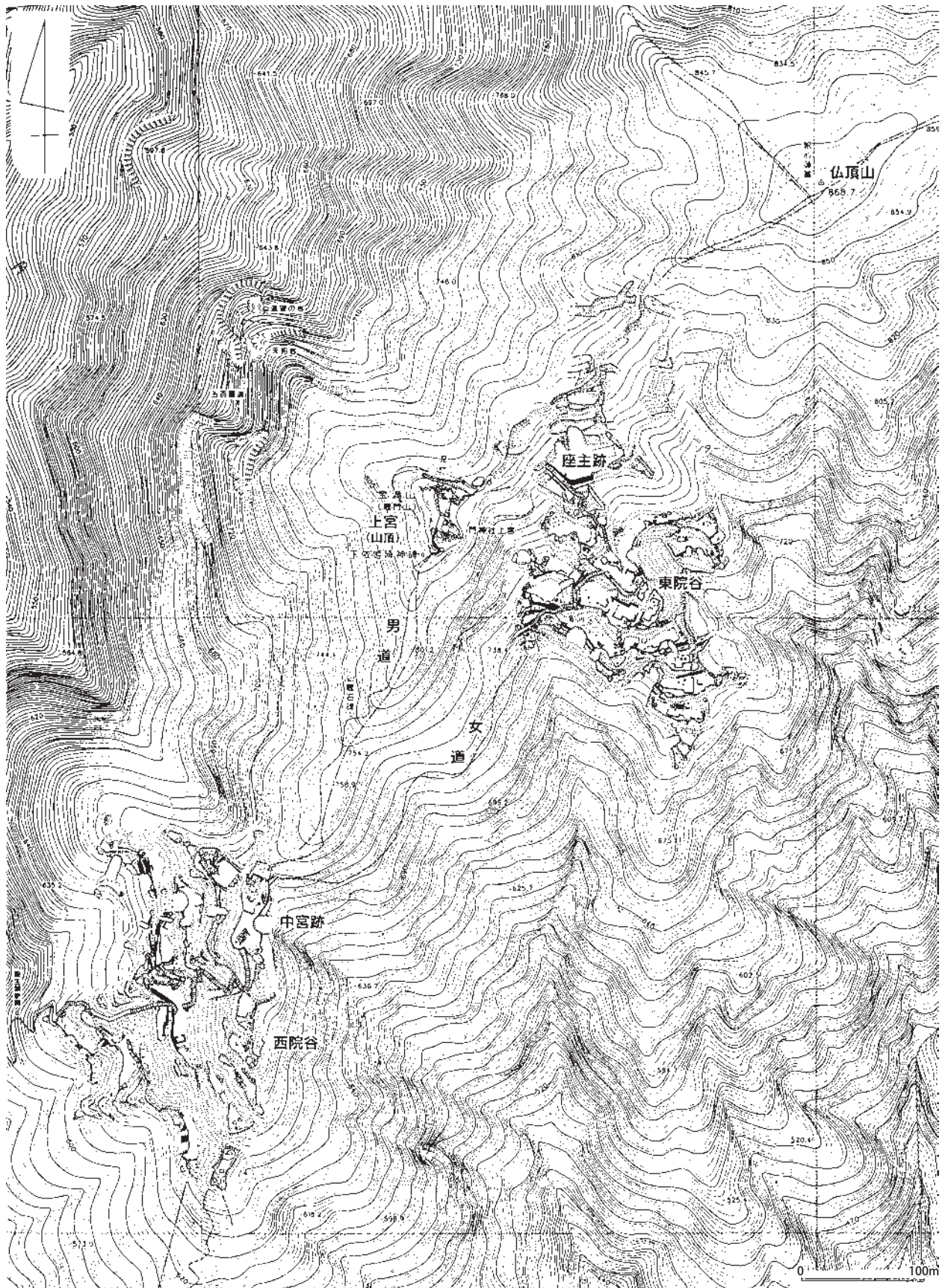
筑前10	ほつまんじょう 宝満城	郡名	御笠郡	別称	竈門山城	図幅名	太宰府(東)
		種別	山城	所在	太宰府市内山・筑紫野市本道寺		

【沿革】太宰府市と筑紫野市との境にそびえる宝満山山頂（標高829m）に位置するとされる。この城は、天文年間に豊後の大名大友宗麟の家臣・高橋三河守鑑種が岩屋城とともに「宝満・岩屋城督」として居城としたのが始まりとされる。後に高橋紹運に城督は移るが、天正13年（1585）には筑紫氏と共に紹運次男の高橋統増が在城し、翌年には島津方によって落城、秋月氏の持ち城となる。小早川隆景筑前入部の際には、居城名島城の支城として、家臣草刈太郎左衛門が入ったとする。

【概要】国史跡宝満山は、古来からの霊山として信仰を集め、江戸時代には東院谷と西院谷という坊跡群が山頂周辺に形成される。現在、山頂周辺に展開する平坦面群や石垣は、これら江戸時代の坊跡遺構であって、中世城郭に直接かかわるものはほとんど確認されていない。おそらくは、古くから存在した寺院・修験にかかわる宗教施設と併存する形で城郭は形成され、それゆえに明瞭な防御遺構を伴う城郭遺構は残さなかったものと考えられる。ただ、山頂から北東側にかけての尾根上には堀切とも考えられる遺構が確認でき、宝満城として唯一確認できる城郭遺構となっている。

なお、宝満山麓には升形城と有智山城、稜線上には頭巾山城の戦国期の城館があり、あたかも宝満山頂を取り囲むかのように分布している。さらに有智山城や頭巾山城は山頂とは反対側に防御の力点を置いており、山頂の宝満城と一体の防衛体制を築いていると推測される。よって、宝満山頂付近には城郭遺構は見られなくとも、これら周辺の城郭によって、宝満城があった場所を全体的に防御していたと考えることができるのではなかろうか。

【史料】あり 【参考文献】1,2,6,8～10,11,79,91,99



第 21 図 宝満山頂周辺遺構配置図 (文献 91・岡寺 良作成)

筑前 11

とつきんさんじょう
頭巾山城

郡名 御笠郡 / 糟屋郡 別称 突巾城・障子岳城・丸尾城 図幅名 太宰府(東)
種別 山城 所在 筑紫野市柚須原・糟屋郡宇美町宇美

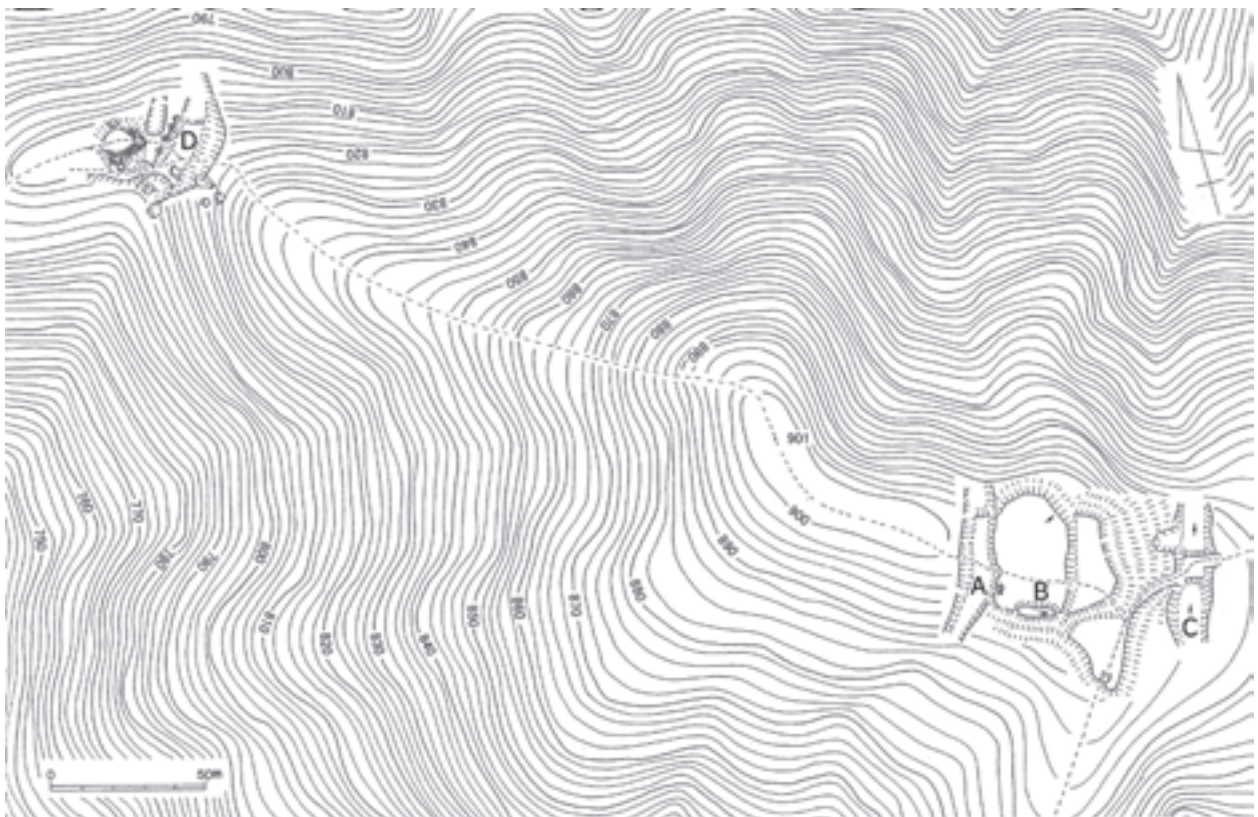
【沿革】御笠郡と糟屋郡との境に聳える宝満山と三郡山との間、頭巾山山頂（標高 901m）周辺に位置する。『拾遺』には「表糟屋郡 障子岳城」として、「(宇美) 村の東南突巾山の山頂に在。高橋鑑種城を構へし所といふ。」とある。また、『全誌』や文献 12 には穂波郡大分村「丸尾城址」として、「村ノ西大分山蛇谷ノ北ニアリ。平地三畝許。虚堀ノ跡アリ。此所モ城主不詳。」とあるが、『附録』には頭巾山のことを穂波郡では「大分山」という、としているため、「丸尾城」は頭巾山城の別称であると考えられる。

【概要】頭巾山山頂部分は、ほとんど造成が施されず自然地形のままであるが、その東側、現在九州自然歩道が通っている尾根線上に曲輪が展開する。図中 B は 30～50m 四方の平坦地をもつ主郭で、南側には土塁が造られている。そして西側には山頂部に向かって堀切 1 本を設ける一方で、東側は二段ほどの曲輪が階段状に展開する。曲輪群の東の尾根上には、三郡山に向けて大きな堀切を設けている。

また、山頂から 200m ほど下った D 地点には、規模の大きな堀切を設け、さらに下方には土留めのための石垣を構築し、宇美側から登る敵に対する備えとしている。

以上のように三郡山から宝満山へ通じる主要なルートを取込み、宝満山に向けてはほとんど防御を考えていない構造から、宝満城を守るための出城として機能したものと考えられる。

【史料】なし 【参考文献】3,4,6～12, 17,29,81,88



第 22 図 頭巾山城縄張り図（文献 88・岡寺 良作成）

筑前 12

たつがじょう
龍ヶ城

郡名 御笠郡

別称 なし

図幅名 太宰府(東)

種別 山城

所在 筑紫野市吉木・大石

【沿革】筑紫野市吉木と大石との境、現在県農業総合試験場の北側、標高 232m の尾根上（龍城山（『全誌』参照））に位置する。比高差約 130m。標高 355m の笹尾山からは西側山稜にあたる。

『本編』・『古城図』等には「此城は高橋紹運の端城にして、其家臣北原鎮久と云者住せり。」とあり、天正 8 年（1580）に北原氏が高橋紹運によって誅されることが記される。

【概要】標高 232m の頂部に一辺約 20m の主郭があり、主郭の西側の一段下がった場所は、コンクリートの石碑などが散乱し、新しい石垣なども見られ、この部分については後世の改変が若干あったものとみられる。さらにその西側には、東西約 40m、南北約 15m の細長い曲輪が認められ、城内では最も広い曲輪となる。その西側には一段小さな曲輪をはさみ、北側の尾根には 2 本の堀切を設けて城域を区画して防御する。また西側は犬走り状の平坦面と豎堀 1 本、南西側の尾根も堀切 1 本で区画・防御する。

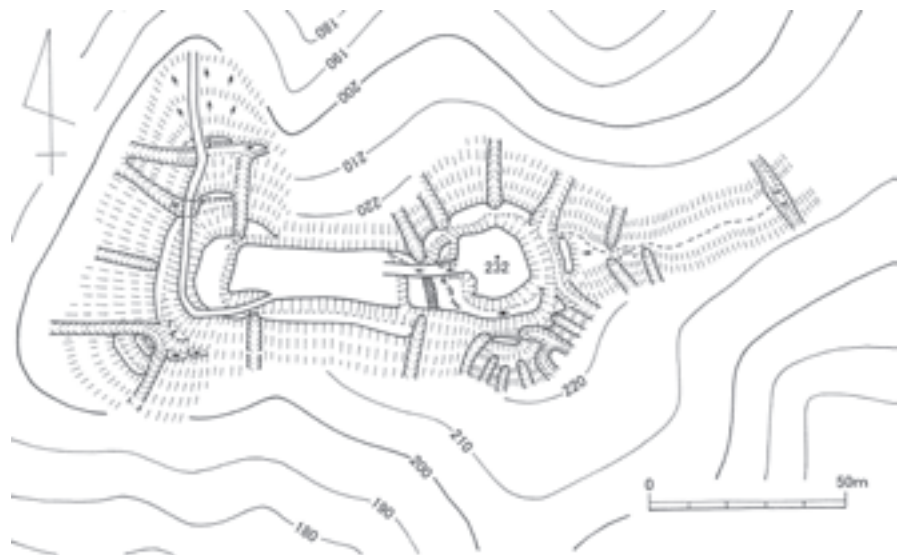
主郭の北側は、犬走りが見られ、2 本の豎堀が見られる。また、東側には堀切が見られ、堀切から南北側それぞれに豎堀へと続いている。さらにその東側には 3 本の豎堀と、一番東側に、1 本の堀切が見られる。

主郭の南側にも犬走りがあり、そのさらに南側の緩斜面には 7 本ばかりの畝状空堀群が雑然とみられ、一部は堀切状となっており、嚴重に防御する様子が窺われる。

以上のように、曲輪群の周囲の防御的に弱い個所については豎堀あるいは堀切を必ず設け、嚴重に防御を行っている様子が見受けられる。

【史料】あり

【参考文献】1～4,6,8～11,28,79



第 23 図 龍ヶ城縄張り図（岡寺 良作成）



第 24 図 三笠郡吉木村龍ヶ城古址図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 15 こめかみじょう
米嚙城

郡名 御笠郡 別称 なし 図幅名 二日市(西)
種別 丘城 所在 筑紫野市二日市北5丁目

【沿革】西鉄紫駅の北東側約 500m 地点の標高 71m の小丘陵上に位置する。この米嚙城の北側には、米嚙山という山があったことが、『古城図』から伺うことができるが、現在、この周辺はほとんど宅地開発がなされており、その様子を知ることは難しい。ただし、米嚙城部分については、自衛隊の官舎に伴う防衛省の敷地となっていることもあり、奇跡的に往時の地形を残している。『本編』には、「城主の姓名詳ならず」とあるが、『拾遺』の記述には「城主しれす。或云原田権頭の城址かといへり。」ともある。また、文化 9 年(1812)に描かれた『旧跡全図(北)』にも、「原田権ノ頭城」として本丸・二ノ丸・三ノ丸が描かれる。

【概要】構造は、単郭構造であり、標高 71m (比高約 30m) の頂上部に、南北約 30m、東西約 20m の主郭を設け、その主郭の主は北側から西側にかけて帯曲輪が巡る単純な構造となっている。豎堀や堀切などの構造物はいっさい認められない。なお、主郭部は作業道のような道が造られ、やや削平されている様子である。現況は、『古城図』に類似し、『旧跡全図』に見られる二ノ丸、三ノ丸部分については確認することができない。

【史料】なし

【参考文献】1～4,8～11,28,79



第 25 図 米嚙城縄張り図(文献 79・岡寺 良作成)



第 26 図 太宰府旧跡全図(米嚙城部分)
(複製・九州歴史資料館蔵(原資料は個人蔵))



第 27 図 御笠郡二日市村米嚙故城図
(部分・国立公文書館蔵)

筑前 16

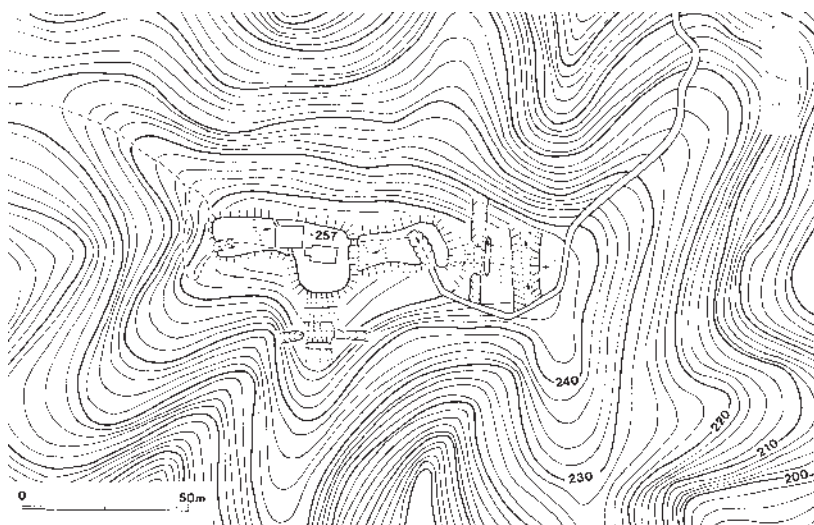
てんぱんざんじょう
天判山城

郡名 御笠郡
種別 山城

別称 天拝山城・武蔵ノ城
所在 筑紫野市古賀・武蔵

図幅名 二日市(西)

【沿革】二日市地峡の西側、標高 257m、菅原道真が無実の罪を天に訴えたと伝わる天拝山(天判山)山頂に位置する。比高約 200m。『本編』には「天判山の上にあり。筑紫廣門の家臣帆足備後居住せしと云」とある。天拝山山頂からは二日市一帯のほか、岩屋城や宝満城を一望することができ、交通の要衝をおさえた立地であることが分かる。



第 28 図 天判山城縄張り図(文献 79・岡寺 良作成)

【概要】天拝山山頂には、現在菅原道真を祀る社殿が建てら

れているが、その場所が主郭である。主郭の規模は約 25m 四方で、その東西の尾根線上に沿って、東西両側の一つずつ曲輪が配される。そして、主郭の南側と東側に伸びる尾根線上にそれぞれ 2 本ずつの堀切が設けられる。東側の尾根線は主尾根にあたるため、やや規模の大きな堀切となっている。至って単純な構造を呈する。

また、天判山城の東麓には、堂ノ山砦と飯盛城があり、それぞれ別々の城郭とされているが、構造上では一体の城郭群と想定され、『城数之覚』に記載のある「武蔵ノ城」は、この天判山城を主体

とし、麓に立地する堂ノ山砦と飯盛城をあわせた総称であると考えられる。

また、天判山城山頂から北へ尾根筋を進んだ先の頂部は地元では「岩関(ガンゼキ)」という天判山城に関わる地名として伝わっており、これは高城(14)のことと考えられる。

【史料】あり

【参考文献】

1～4,6,8～10,11,28,79,

99



第 29 図 御笠郡武蔵村天判山故城之図(部分・国立公文書館蔵)

筑前 17 いいもりじょう
飯盛城

郡名	御笠郡	別称	なし	図幅名	二日市(西)
種別	山城	所在	筑紫野市武蔵		

【沿革】天判山城のある天拝山山頂から北東へ伸びる尾根の中腹、標高 150m 地点に主郭が位置する。比高は約 100m。『本編』には、「城主詳ならず。或説筑紫廣門家臣帆足弾正城番たりし」とあり、『古城図』にもほぼ同様の記載が見られ、天正年間頃には、筑紫氏の家臣の帆足氏が城番であったことがわかる。

【概要】主郭の規模は、南北約 50m、東西約 15m で平坦面は不明瞭で、北側がやや高くなっている。主郭の北側と西側、南側の三方の尾根上には、堀切がそれぞれ 1 本ずつあり、西側は自然の窪地に豎堀を施している。



第 30 図 御笠郡武蔵村天判山麓飯盛砦址之図
(部分・国立公文書館蔵)



第 31 図 飯盛城縄張り図
(文献 79・岡寺 良作成)

この主郭部分の北側 200m ほど下りた標高 83m 地点にも、単郭の曲輪が存在する。規模は南北・東西とも約 30m である。この曲輪の西側(山側)には、地元では「武者隠し」と呼ばれる箇所がある。中央部は山道で破壊されているのであろうが、その両側、特に東側は窪地があり、一見すると武者溜まりのようにも受け取れるものである。しかし、実際そこから攻撃できる場所は、城外側である南側ではなく、北側の曲輪部分であり、城内側の兵が城外の敵へ向かって攻撃できるものではない。つまり、武者隠しとしての機能を果たしていない。また、横堀にも見えるが、主郭よりも高い部分にあるため、これも横堀としての機能を果たしていない。堀切とも考えられるが詳細は不明である。

【史料】あり

【参考文献】1,2,4,8 ~ 11,28,79,99

筑前 18

堂ノ山砦

どうのやまとりて

郡名 御笠郡
種別 山城

別称 薬師山城
所在 筑紫野市武蔵

図幅名 二日市(西)

【沿革】天拝山山頂から北へ伸びる尾根の先端、武蔵寺と御自作天満宮の背後の山麓に位置する。かつて武蔵寺経塚として発掘された地点が砦の主郭部分にあたる。標高 104m、比高約 50m。その発掘調査の際には、平安時代後期の経塚 11 基が見つかり、平安時代には武蔵寺の経塚として営まれた個所が、戦国時代になり、城郭として利用されたとみられる。

『古城図』には、「城主不詳」とあるが、立地から見て天判山城の山城としての性格が考えられる。また、『城数之覚』には「薬師山城 帆足備後」とある。

【概要】構造は南北約 30m、東西約 20m の主郭部分を中心とした単郭構造である。主郭の周囲に帯曲輪を巡らす。所々は横堀状となっている。また、北西部分は西側斜面に向かって施された塹堀と接続している。

尾根続きにあたる南側には、堀切 1 本を設けている。そして主郭の南側と西側の縁には、高さ約 0.5m の高まりが認められる。武蔵寺経塚の発掘調査報告書では、近年の土盛りとされているが、防御上弱点となる尾根続きの南側にあたっており、また『古城図』にも現在とほぼ同様の状況に描かれているため、明らかに城郭に伴う土塁である。その土塁は、中央部分が途切れており、平入りの虎口としての役割も果たしているとみられる。

【史料】あり

【参考文献】10,11,28,79,99



第 32 図 堂ノ山砦縄張り図 (文献 79・岡寺 良作成)



第 33 図 御笠郡武蔵村天判山麓堂ノ山砦址之図 (部分・国立公文書館蔵)

筑前 19 ^{はかたみじょう} 博多見城

郡名 御笠郡 別称 宇佐原城・里岩城 図幅名 二日市(西)
種別 山城 所在 筑紫野市山口

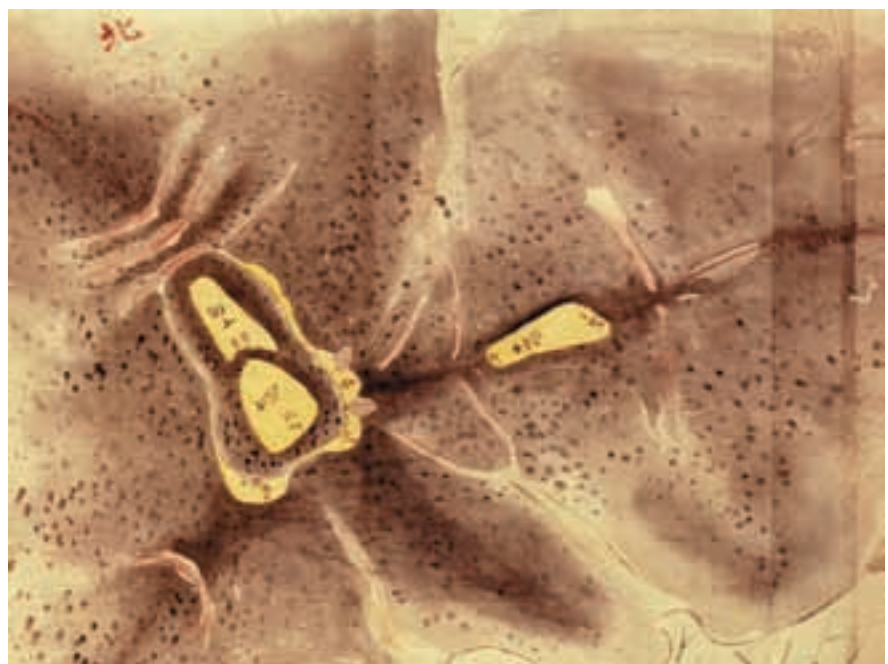
【沿革】筑紫野市大字山口の、皐月ゴルフ場の北側にあたる標高 269m の山頂に位置する。比高約 190m。

『本編』には、「山口村にあり。又うさか原の城とも云。村より北なる高き山上にあり。城主詳ならず。」と記されている。また、『古城図』にも絵図が収録されており、その記載には、「土人ハ里岩城ト云」とある。

【概要】山頂にある南北約 20m、東西約 15m の主郭を中心として、北側に南北に細長い曲輪を一つ配し、さらにその北側の尾根上には、3本の連続堀切が認められる。また、主郭の南側から西側にかけて帯曲輪があり、その南側には一本の堀切を設ける。東尾根には一本の縦堀と一本の堀切があり、その東側に、南北約 10m、東西約 20m の非常に平坦な曲輪が認められる。その曲輪の東側約 20m 下ったところに深さ 1m 未満の浅い一本の堀切があり、城域の東側を限っている。



第 34 図 博多見城縄張り図 (文献 79・岡寺 良作成)



第 35 図 御笠郡山口村博多見故城図 (部分・国立公文書館蔵)

博多見城は、その名の通り、主郭部から博多方面を望むことができる。また、北側には天拝山周辺の城郭群と密接な位置関係にある。そして、城の南側にある御笠郡から肥前方面へ抜けるルートをおさえることができ、その重要性を窺うことができる。

【史料】なし 【参考文献】1～4,8～10,11,28,79

筑前 20 しばたじょう
柴田城

郡名	御笠郡	別称	なし	図幅名	二日市(西)
種別	丘城	所在	筑紫野市天山		

【沿革】筑紫野市東部、標高 338m の宮地岳の南麓、筑後川の支流・宝満川の東側にあたる標高 51m の独立丘陵に位置する。比高約 10m。北側の宮地岳山中には天ヶ城も所在する。

『本編』には、「筑紫氏の端城にして、村山近江、其子彈正在城せり。是筑紫広門の旗下也。」とあり、天正 6 年（1578）秋の柴田川の合戦の状況を記述している。また、『古城図』にも図が載っており、現状とほぼ同じ状況を示している。

【概要】城館の構造は、南北約 80m、東西約 40m のやや大きな主郭を中心に、小さい曲輪を主に、南側と西側にいくつも重ねる構造である。当初、後世の畑かとも思われたが、前述した絵図とほぼ同じ状況であるので、ほぼかつての縄張りを反映しているものと思われる。また、北側から西側にかけて、帯曲輪が巡り、西側の一部には、土塁を設けることで横堀状を呈している。また、東側には曲輪と曲輪をつなぐスロープを兼ねた土塁がいくつか見られる。

柴田城は、江戸時代には御笠郡から夜須郡に抜ける日田街道が近くを通り、西には宝満川沿いに宰府道が通るように、非常に交通の要衝を意識した立地であるといえよう。

【史料】あり

【参考文献】1～4,6,8～11,28,79,99



第 36 図 柴田城縄張り図（文献 79・岡寺 良作成）



第 37 図 御笠郡天山村柴田故城之図
（部分・国立公文書館蔵）

筑前 22 ちよほんが城	郡名	御笠郡	別称	ちよんぼんが城	図幅名	二日市(西)
	種別	山城	所在	筑紫野市山口		

【沿革】山口集落の南、基山の北側山腹頂部（標高 360m）に位置する。『拾遺』「城山古城」の項には、「又荒平谷のおくにちよんぼんか城と云址有。大炊と云者在城せしと云。」とある。



第 38 図 太宰府旧跡全図（南・ちよほんが城部分）（複製・九州歴史資料館蔵（原資料は福岡市博物館蔵））

【概要】標高 360m の頂部に約 15m 四方の主郭を置き、その北側に 10m × 15m の曲輪を置く。また南側へ続く尾根上には 1 本の堀切が見られる。西側と北東側にも尾根は伸びているが、明確な城郭遺構は確認できない。また、『旧跡全図（南）』にも山口村から基山山頂へ続く尾根上の頂部に「チヨホンカ城」の記載が認められる（第 38 図）。



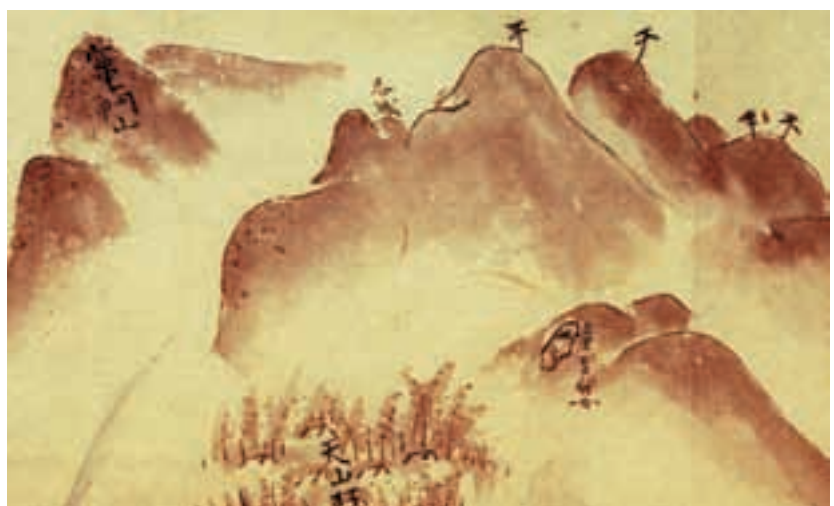
第 39 図 ちよほんが城縄張り図（事務局作成）

【史料】なし 【参考文献】3,4

筑前 25 ^{あまがじょう} 天ヶ城	郡名	御笠郡	別称	阿満か城・蘆城城	図幅名	二日市(東)
	種別	山城	所在	筑紫野市阿志岐・山家		

【沿革】筑紫野市東部、宝満川の東側にあたる標高 338m の宮地岳山頂から南西側 300m ほどの中腹標高 324m 地点位置する。比高約 280m。

『本編』には、「蘆城村古城」として「あまか城といふ。城主詳ならず。」とある。また、『古城図』の「柴田古城之図」には、竈門山より宝満川対岸の山稜に「天ヶ城」と記載されており、おそらく今回、踏査した場所を指していると思われる。そして更に、『薦野家譜』の中に、



第 40 図 『古城図』「柴田古城之図」に描かれた「天ヶ城」（部分・国立公文書館蔵）

天正7年（1579）の秋月・筑紫勢の攻勢に対して、戸次道雪・高橋紹運が「…米の山龍力城あまカ山加羅山香椎山名嶋等に砦を築き軍勢を籠め置」いたことが記されている。この記述の「あまカ山」は、この天ヶ城をさしていると考えられる。

【概要】主郭は、東西 20m 南北 50m ほどで、そこから北側へ削平の非常に甘い曲輪が約 70m ほど続く。それらの曲輪の東西両側には、ほど長い犬走りが走り、特に東側の犬走りは非常に明瞭な平坦面として確認できる。

そして更に北西側の尾根の先端部にも、非常に狭いが、曲輪と犬走りが認められる。ただ、堀切などの明確な防御施設に乏しく、あえてあげるならば、Aの豎堀ぐらいなものである。また、一部には石積み遺構らしきものもあるが判然としない。

このように天正年間の記載にも登場してはいるが、城郭の構造は、防御性に乏しい構造を呈していることが分かる。

【史料】あり 【参考文献】1～4,6,8～11,28,79



第41図 天ヶ城縄張り図（文献79・岡寺良作成）

②夜須郡

筑前 26	とがみやまじょう 砥上山城	郡名	夜須郡	別称	なし	図幅名	二日市(東)
		種別	山城	所在	朝倉郡筑前町砥上		

【沿革】秋月氏の持ち城とされる「秋月二十四城」（文献69）の一つに「砥上山城（城主不詳）」がある。

砥上集落の北、標高 106m の丘陵頂部に中世城郭遺構が見られ、その遺構が砥上山城と推測される。

【概要】丘陵頂部にはやや起伏のある東西約 40m、南北約 15m の主郭を置き、東側へ延びる尾根上と、西側へ延びる尾根上にそれぞれ 1 本ずつ堀切を設ける。主郭の北側と南側には帯曲輪が巡るが、南側の曲輪は非常に平坦に造成している。尾根はなだらかに北側へ続いているが、東側の堀切より先には城郭遺構を確認することはできない。この城郭遺構が砥上山城である確証はないが、砥上地区内に伝えられる城郭には、当城に加えて荘林城があり、荘林城は字「上林」周辺の浦谷地区と思われることから、砥上山城に妥当性がある。



第42図 砥上山城縄張り図（事務局作成）

るものと思われる。

【史料】なし

【参考文献】8～11,28,69,72



第43図 砥上山城遠景



第44図 砥上山城主郭東側の堀切

筑前 28	なかむたじょう 中牟田城	郡名	夜須郡	別称	なし	図幅名	二日市(東)
		種別	平地城館	所在	朝倉郡筑前町中牟田		

【沿革】筑紫平野北東部の山家川東岸、中牟田集落に位置する。『城数之覚』には筑紫氏の持ち城で木村備前守と才田丹後守が在番したとある。

【概要】推定城域の中央部近くには西福寺があるが、『全誌』「中牟田村 西福寺」には「応永年中足利氏ノ臣税田小四郎種吉ト云者創建シ」とあり、中絶の後、寛永7年(1630)に寺号を許されたとある。この「^{さいた}税田」姓は中牟田城主の「才田」と同一であるとみられ、また寺の言い伝えでは、先祖は中牟田城主であったということから、ここが城域であったとみてよい。

近年の地籍図や現状を見ると、自然の流れや街区とは異なる方向に、約300m四方にわたって水路が廻っている。これは城の堀の名残とみられ、城の平面プランを反映しているものではないかと思われる。文献

99には、一辺300mの方形区画に本丸として一辺約100mの方形区画を想定するが、自然地形に即した外形を呈する現状に近い形であったとするのが妥当であろう。

【史料】あり

【参考文献】11,28,99



第45図 中牟田城地割図
(現在の地籍図を基に事務局作成)
※青線は水路、△は宅地を示す。



第46図 中牟田城遠景
(筑前町教育委員会提供)



第47図 中牟田城の堀割

筑前 31 ^{こたかじょう} 小鷹城

郡名 夜須郡
種別 山城

別称 梨木城・弥永之城
所在 朝倉郡筑前町弥永・栗田

図幅名 甘木(西)

【沿革】筑前町の東部、朝倉市との境に近い弥永の集落の北西部に当たる標高213mの山頂に位置する。比高約170m。

『本編』によると、「弥永村にあり。むかし榎原備後守高利と云し者、此城を築て在城せり。其後秋月種実か出城となる。家臣内田善兵衛を城番とせらる。備後守が末、榎原刑部少輔と云者は、秋月氏の幕下となり、御笠郡不動か城にうつりぬ。其子兵庫、秀吉公九州征伐の時、秋月氏の先手として戦死せり。」とある。

また『附録』には、「本丸跡一反余あり。其南に一段低き所有。調馬場跡といふ。此山の北は栗田村に境へり。又本丸跡の東北に平かなる地有。たかをとしといふ。」とある。

【概要】標高213mの山頂に、一辺約15mの主郭が位置する。その南側に下ったところには、やや狭い平地があり、そのさらに南側に堀切を設けている。主郭の北側には幅20mで北西側に80m程伸びる細長い曲輪が続き、その曲輪の西側には高さ約0.5mの土塁が施される。これらの周囲には犬走りが見られるが、その犬走りには、約30本足らずの畝状空堀群がほぼ全周する。そして、頂部から派生する四方向の尾根には堀切を設け、防御を固めている。



第48図 小鷹城縄張り図(岡寺良作成)



第49図 夜須郡弥永村小鷹城址図(部分・国立公文書館蔵)

『古城図』を見ると、現状とほぼ合致しているが、畝状空堀群が欠落していることや、逆に東側の尾根に描かれた多数の堀切は、実際には古墳時代の群集墳の墳丘間の凹みであり、城郭遺構とは直接関係がない点などの違いが見られる。また、『城数之覚』に筑紫氏の持ち城として記載される「弥永之城」は、縄張りの状況から 30 の弥永城ではなく、この小鷹城を指しているものと考えられる。
【史料】あり 【参考文献】1,2,4～6,8,9,11,21,51,79,99

筑前 36	ちやうすやまじょう 茶臼山城	郡名	夜須郡	別称	隈江城	図幅名	甘木(西)
		種別	山城	所在	朝倉市隈江		

【沿革】朝倉市隈江集落の西には、目配山から南へ延びる丘陵が走っており、その突端の頂部標高 168m 地点に位置する。『夜須郡之部 風土記再調子草稿』（青柳種信著・『拾遺』の草稿）の「隈江村 茶臼山古城」には、「村より弐町斗山上迄 竹木山 山上平地拾間拾六間斗 柴山の峠に有り。秋月氏の家士の住し処と云。姓名を詳らかにせず …」とある。

【概要】『全誌』には「村の西二町柴山ノ上ニアリ」とあり、集落の西の丘陵上が城の位置するところと考えられる。丘陵頂部標高 168m を中心に約 15～20m 四方の主郭を配し、その周囲にテラス状に帯曲輪を巡らす。北の尾根続き側には堀切を設け、西側斜面は豎堀につなげている。その豎堀のさらに北側にも豎堀 1 本が設けられる。周囲には古墳時代の群集墳も見られることや、主郭の形状から、もともとあった円墳を利用する形で城郭にしている可能性も考えられる。堀切は単に尾根を切るだけでなく斜面側にも続いていることから、城郭遺構とみなすことができる。また、城の南側約 80m 地点には石列状遺構が確認できる(第 51 図右)。古墳の石室とも考えられないため、城郭遺構の可能性はあるが、断定はできない。



第 50 図 茶臼山城縄張り図 (事務局作成)

【史料】なし 【参考文献】4,47



遠景 (右寄りの頂部・左は小鷹城)



主郭北側の堀切



城の南側斜面の石垣 (城との関連は不明)

第 51 図 茶臼山城現況写真

筑前 38

ごいやまじょう
五位山城

郡名 夜須郡
種別 山城

別称 なし
所在 朝倉市千手・長谷山

図幅名 甘木(西)

【沿革】小石原川西側、甘水集落の北東側、千手と長谷山の境にあたる通称「五位山」山頂周辺に位置する。秋月周辺の山々の様子を描いた地元の古記録類に「此所ナラシアリ堀切モ一ツアリ。秋月氏ノ家土要害ヲ構ヘシ所ニヤ」として記載されるのみで、地誌類等には城跡の記載はない。名称は山の名称を採り、今回の調査で命名した。

【概要】城域は、南北2か所に分かれている。南側の頂部は五位山の山頂（標高268m）で、頂部の北側に大きな堀切を1本設け、その南側の自然地形に近い平坦面を防御している。

五位山山頂から尾根の鞍部を北へ約200mの標高272m地点にも、曲輪や堀切が認められるが、こちらの曲輪もまた、あまり平坦ではなく自然地形に近い。なだらかな尾根はさらに北へ伸びてはいるが城郭遺構は確認することはできず、ここまでが城域となる。小鷹城、茶臼山城など、他の隣接する山城と共に秋月谷の南側、小石原川流域からの侵入に対する防御の意味合いが強く感じられる。

【史料】なし 【参考文献】112



第52図 五位山城縄張り図（事務局作成）

筑前 39

つづみがたけじょう
鼓岳城

郡名 夜須郡
種別 山城

別称 千手城
所在 朝倉市下淵・千手

図幅名 甘木(西)

【沿革】現在の甘木市街と秋月の中間地点、小石原川東岸に位置する。標高237m、比高170m。『本編』「鼓ヶ岳城」には、「下淵村に有。大友旗下の城也」とあり、「千手村古城」には、「秋月の端城也。福武美濃守れりと云。」とある。また『附録』「鼓嶽古城」には、「今其跡定かならず。持丸村古城山と千手村古城地との間の山に僅かなる平地あり。此の所ならんか。」とあり、「千手村古城」は「此村（千手村）よりハ、城山といひ、下淵村よりハ、そん田浦といふ。本丸跡の四方低き所に、曲輪の跡有り。」



第53図 鼓ヶ岳城縄張り図（文献11・岡寺良作成）

持丸村古城山と千手村古城地との間の山に僅かなる平地あり。此の所ならんか。」とあり、「千手村古城」は「此村（千手村）よりハ、城山といひ、下淵村よりハ、そん田浦といふ。本丸跡の四方低き所に、曲輪の跡有り。」

山の南は下淵山に隣る。」とある。『全誌』の「鼓カ岳城址」には「…此山下淵、千手両村二頂ヲ分テリ。故二千手ノ城山共云」とあり、明らかに「鼓嶽古城」と「千手村古城」が同一とみられる。

【概要】城郭の構造は、東西それぞれにピークがあり、西側の頂上（標高 237m）には、3つほど曲輪が連なる。その西側には特に堀切などは認められないが、逆に3の曲輪の東側は、急激に下っており、堀切にしてはやや幅の広い標高 219m 地点から東側に連続堀切群が認められる。この連続堀切群は、3～5本を単位として3つの集まりが認められ、合計本数は12本にものぼる。12本の連続堀切のさらに東側に東側のピーク（標高 228m）があり、非常に平坦な曲輪が存在する。この異常なまでの連続堀切の存在理由であるが、尾根を約100m近くも分断することで、尾根上の通行を妨げるだけでなく、尾根上の使用そのものを妨げるを意図していると考えられる。



第 54 図 夜須郡下淵郵鼓嶽城跡図（部分・国立公文書館蔵）

【史料】なし 【参考文献】1,2,4,6,8～10,11,79

筑前 40	かたやまじょう 片山城	郡名	夜須郡	別称	持丸城	図幅名	甘木(西)
		種別	山城	所在	朝倉市持丸		

【沿革】甘木から秋月へ通ずる小石原川沿いの東側の尾根に存在した。『本編』には「持丸村にあり。是秋月氏の端城にして、其家臣福武美濃入道居住せりと云。」とあり、『附録』には「本丸跡七畝余、二の丸跡二畝余有り。又一の堀、二の堀及水の手跡等遺れり。」とある。

【概要】城域は、既に採石されており、調査をなされず消滅したため、詳細な構造を知ることは困難である。ただ『古城図』により在りし日の様子を知ることができる。絵図には南北に細長い主郭を置き、その東側と西側には、各5・6本の縦堀が掘られ、北側の尾根上には3本の堀切を設け、さらにその北側に曲輪を一つ置く。主郭の南側には、やや小さめの曲輪を一つ設け、その南西側に4本の縦堀、その南東側に、南北に細長い曲輪を置く。主郭の三方を畝状空堀で固め、残りの一方に連続堀切を設けるなど、非常に堅固な構えをなしていたことがわかる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,6,8～11,79



第 55 図 夜須郡持丸村片山城址之図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 43

ふくだげじょう
福嶽城

郡名 夜須郡

別称 観音岳城

図幅名 甘木(東)

種別 丘城

所在 朝倉市長谷山・秋月

【沿革】現在の秋月町の西の入り口にあたる観音山山頂に位置する。山頂部は無線局が建てられたために、城郭の大半は破壊されたが、発掘調査が行われ、ほぼ全容が確認された。『全誌』には「観音山城址」として「中央寺山共云…福岳(武?)美濃守居城ナリ…」と記載する。

【概要】山頂部(標高172m)には約20m×約30mの主郭があり、南北両側に約10m四方の小さな曲輪が1～2箇所確認できる。主郭の南側には堀切があり、南側からの攻撃に備える。また、発掘調査区外について、筆者により踏査を行ったが、特に顕著な遺構は確認できなかった。以上のことから、小型の主郭と堀切を持つ単純な小規模城館であったと推定される。

【史料】なし 【参考文献】4,8～11,47



第56図 福嶽城調査平面図(文献47)

筑前 44

いなりやまじょう
稲荷山城

郡名 夜須郡

別称 古賀城

図幅名 甘木(東)

種別 山城

所在 朝倉市秋月

【沿革】秋月地域の北西側、荒平城から谷を挟んで西側の尾根上(標高175m)に位置する。比高差は約70m。『全誌』には、「秋月氏ノ砦ニシテ、其臣古賀平左衛門ト云者居タリト云」とある。『種々』には古賀氏を城主とする「殿神楽城」が古賀ノ谷に所在とあるが、別の城のようである。

【概要】主郭の北側には土塁があり、その北側に幅約5m、深さ約3.5mのかなり大きな堀切があり、さらにその北側に曲輪とするにはやや不明瞭な平坦地が広がり、堀切を設けて城域を画している。また、主郭の東側と南西側には、縦堀が7本と4本ずつ掘られており、特に東側の縦堀は比較的幅が広めでしっかりと掘られた様子が看取できる。筑後平野側から秋月に入る入口部分にあたり、防御的にも非常に重要な地点であったと考えられる。また谷を挟んで東には荒平城が位置し、一体的な防御を想定しているとみられる。

【史料】なし 【参考文献】4,8～10,11,47,79



第57図 稲荷山城縄張り図
(文献79・岡寺 良作成)

筑前 45 あらひらじょう
荒平城

郡名 夜須郡
種別 山城

別称 荒平山砦・秋月氏宅
所在 朝倉市秋月・秋月野鳥

図幅名 甘木(東)

【沿革】朝倉市の秋月城下町の北側の山中、標高 228m の荒平山山頂に位置する。豊臣秀吉が九州征伐の際に逗留したとされることでも知られ、秋月氏の本城として詰城的性格の古処山城と対をなす秋月氏の「里城」である。

【概要】城の構造は、秋月城下町の北、荒平山山頂にあたる主郭部を頂点として、そこから南へ派生する東西 2 本の尾根上、及び谷を隔てた通称「いち木尾」と呼ばれる尾根上に曲輪群が展開している。曲輪群は大きくわけて 5 箇所に分けられる (I ~ V)。相対的な位置関係において I の曲輪群が優位な場所に位置づけられ、残りの II ~ V の曲輪群は下位に位置づけることができる。比較的独自性を



第 58 図 荒平城縄張り図 (文献 11・岡寺 良作成)

保った位置関係にあるといえる。しかし注目すべきはⅡ～Ⅴの曲輪群の縄張りもまた、個々に完結しており、それらの独自性が窺われる。そして、これら曲輪群には膨大な数の畝状空堀群の圍繞を確認でき、嚴重な防御が窺われる。

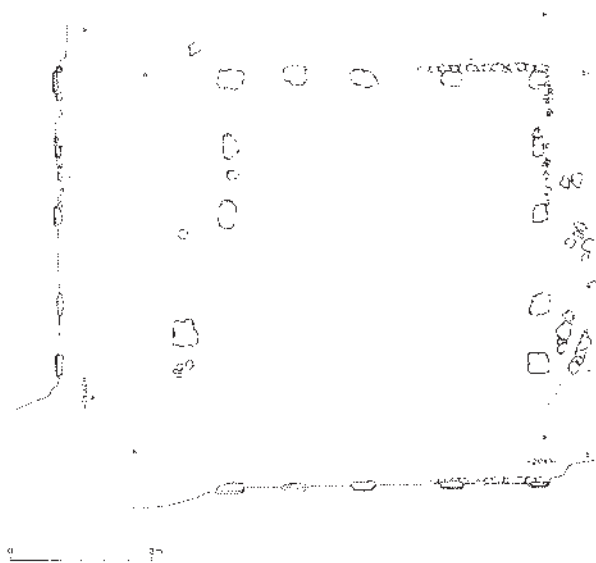
これらのことより、荒平城は古処山城と同じく、広大な曲輪群を膨大な畝状空堀群で圍繞する構造であったことがわかる。

また、国道322号線建設に伴って、昭和56年（1981）にⅠの曲輪群の南側、ⅡとⅢの曲輪群へ続く尾根上が道路上にあたることとなり、ⅠとⅡの曲輪群の間の曲輪が発掘調査対象となって、調査が行われた。その結果、曲輪面（図中c）からは2棟の礎石建物などが検出された。そのうち、1号建物は明瞭に規模が判明しており、柱間4間×4間で約6m四方の規模で、その周りには一部石で積まれた基壇化粧が確認されている。礎石も約50cmの大きく扁平な石を用いており、しっかりとした構造であることがわかる。瓦などは出土していないことから、瓦葺きではなく、茅葺き屋根であったとみられる。また、建物が検出された曲輪からは門跡とみられるピットと、その下の斜面からは階段遺構が見られ、下の曲輪との接続状況が推測されている。

出土遺物についても、土師器・土鍋・瓦質火舎・土師質茶釜・龍泉窯系青磁碗・明染付・鉄製五徳・鉄製刀子などが見られ、13～16世紀後半まで幅広い年代のもので構成される。

【史料】あり

【参考文献】1,2,4,6～9,10,11,37,38,73,79,85



第59図 1号礎石建物（文献37）



第60図 1号礎石建物実測図（文献37）

筑前 47

こしよさんじょう
古処山城

郡名 夜須郡 / 嘉麻郡
種別 山城

別称 古所山城・経ヶ峰城・秋月城 図幅名 甘木(東)
所在 朝倉市秋月野鳥・嘉麻市千手

【沿革】古処山城は、戦国時代秋月に本拠を構え、天正年間には筑前の中・南部の一角を支配した国人領主秋月氏の本城である。城はその支配領域の示すかのように、南は本拠地秋月から、北は筑豊盆地を遙かに見晴るかす古処山山頂（標高 859m）一帯に位置する

【概要】城の構造は、大きくわけて北側の郭群と、南側の郭群（経ヶ峰）の二つの部分からなる。また、南の郭群から麓にかけての要所には、小規模な曲輪群が確認できる。以下、順次説明する。

北郭群 北の郭群は古処山山頂部から西側尾根にかけて展開する。山頂部は、現在若干の平坦面が存在するものの、岩の露頭が非常に多く、宗教施設（白山権現）も存在するため、城郭に関係するような建物等を想定することは難しい。それよりも主郭に想定すべき箇所としては、『本編』にあるように、そこから西へ進んだ 1 の曲輪が考えられる。1 の曲輪は南北約 20m、東西約 70m で、非常に平坦である。一番西側には、現在秋月城の黒門として残っている門がかつてあった場所といわれている所もあるが、真偽は不明である。そして、1 の曲輪には、明確な虎口は存在しない。1 の曲輪の北側にもいくつかの曲輪が展開し、その北側に 15 本の畝状空堀群が掘られている。斜面はかなり急で、縦堀頂部に犬走りや横堀などを設けることなく、斜面にそのまま掘られている。曲輪の両端は比較的大きな縦堀（a, b）が掘られ、曲輪を固める意識が見受けられる。また、曲輪群の西側尾根の北斜面にも畝状空堀群が 14 本並ぶ。これらの畝状空堀群のさらに西側に 2 本の大きな堀切を設け、西側尾根からの侵入を妨げている。



第 61 図 古処山城および関連城館位置図
(数字は山麓城郭を示す)



第 62 図 筑前国夜須郡古所山城并経ヶ峯古城之図
(部分・国立公文書館蔵)



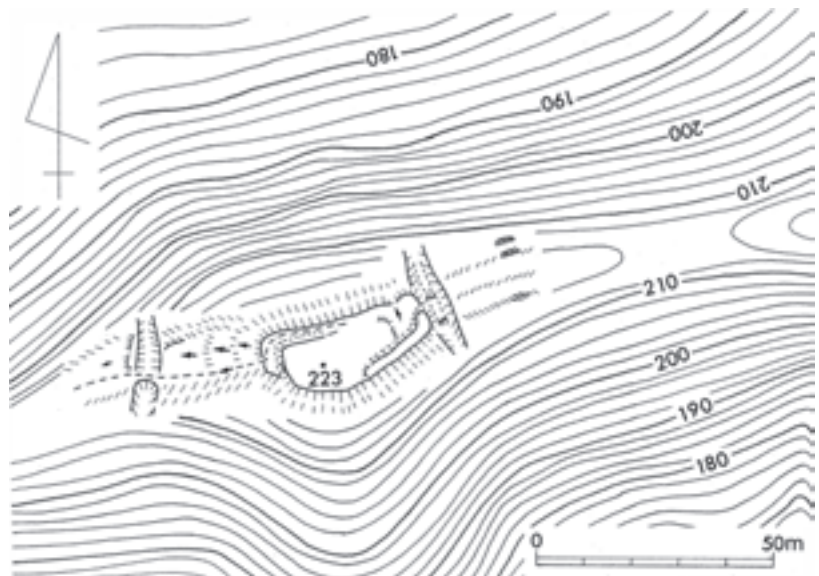
第 63 図 古処山城縄張り図 (文献 79・岡寺 良作成)

南郭群 古処山城の南側、経ヶ峰部分の郭群だが、山頂部から南側へ下り、山の鞍部を過ぎた後、さらに南側に 770m のピークがあり、そこを中心に多くの曲輪が認められる。770m のピーク部分は、非常に狭い削平地があり、そこは求心性の高い曲輪とは認められない。むしろ、南側の郭群における中心的な曲輪は 2 の曲輪がそれに当たる。2 の東西にも曲輪群が展開するが、東側の曲輪群は規模も小さく、平坦面の削平も甘い。それに対して、西側には、数多くの曲輪が認められる。ただし 3, 4 の曲輪を除き、ほとんどの曲輪の削平は甘く、短期間に拡張した様相を看取することができる。そしてそれらの曲輪群の西側と南側には、数多くの畝状空堀群が取り囲んでいる。北側の曲輪群のそれとは異なり、これらの畝状空堀群の頂部には、犬走りや横堀が備えられ、北側の曲輪群の畝状空堀群より進んだ構造となっている。特に防御正面と想定される南西尾根側には、畝状空堀群の密度も濃く、防御性が高くなっている。そしてさらに尾根沿いに南西方向に進んだ所に一本の堀切を設け、城域を画している。

また、南側の郭群の北側(図中 c)には、北側からの侵入に備えての障壁とも言える土塁があり、南側の郭群が、主郭の存在する北側の郭群に対して半ば独立した縄張りであることを示している。しかし、その一方で、山の鞍部には図中 5 に見られるように、削平地と土塁を設けることで、北側の郭群と南側の郭群を結びつけようとする動きも認められる。西側中腹には、一日千人の喉を潤した伝える「水舟」という水場があり、現在でも水が湧いている。城内では瓦や陶磁器が採集される。

山麓側の城郭 南郭群から南西側の秋月町側への山麓部分には、古処山城に関連する城館がいくつかみられる。それらは明確な名称がなく、古処山城に関連するものと思われるため、ここで一括して報告する。

秋月町にある上秋月八幡宮には上秋月城跡が残るが、そこから古処山山頂へは尾根道が続いており、要所には小規模な城館



第 64 図 古処山城山麓城郭 1 (標高 223m 地点) 縄張り図
(文献 83・岡寺 良作成)



第 65 図 古処山城山麓側城郭 2 (標高 317m 地点) 縄張り図
(文献 83・岡寺 良作成)

が見られる。第 64 図は標高 223m 地点に所在する城郭である。東西約 30m、南北約 15m の曲輪が置かれ、曲輪の南側には土塁、東西の尾根上にはそれぞれ堀切が 1 本ずつ確認できる。さらに東側には土留めの役割と考えられる石垣も見られる。地元伝わる近代の絵図には、ちょうどこの場所に「ホリキリ」の記載が認められる。

そこからさらに古処山城よりの標高 317m 地点には、約 12m 四方の曲輪が置かれ、その北東側と西側にそれぞれ曲輪を配置する（第 65 図）。

さらにその北東側にのみ堀切 1 本を設けている。地元の古記録ではここを「蟻塚（有塚）」とする。『本編』には「有塚と云所、上秋月八幡宮の邊にあり。湯浦口、有塚など、昔秋月氏の時、城郭の門の跡ありし出口なり。有塚より古所の城山へ行く道あり。」とされ、有塚に秋月氏時代の城郭遺構が存在したことがわかる。『全誌』には「八幡宮ノ東十町余ニアリ」とある。

そして、さらに尾根を上った標高 471m 地点にも城郭が認められる（第 66 図）。東西 55m、南北 10m の細長い曲輪が三段にわたって階段状に並列するやや規模の大きな城郭である。北東側にのみ堀切 1 本が確認できる。地元古記録によると、「枯松平」という場所に当たる。

一方、秋月町一古処山間の尾根筋のさらに東側にあたる尾根筋にも、城郭を確認することができる。古処山から南南西側の尾根筋の標高 338m 地点の頂部は小石原川流域を見渡す絶好の場所にあり、頂部に約 10m 四方の非常に小規模な曲輪を置き、その北側に 2

本の堀切、南東側にも 1 本の堀切を設けて防御する。地元の古記録にも「城跡」の記載が認められる。

『夜須郡之部 風土記再調子草稿』（青柳種信著・『拾遺』の草稿。『筑前町村書上帳』所収。）の「上



第 66 図 古処山城山麓城郭 3（標高 471m 地点）縄張り図
（文献 83・岡寺 良作成）



第 67 図 古処山城山麓城郭 4（標高 338m 地点）縄張り図
（事務局作成）

秋月村」には、「高尾古城」として、「八幡ノ社ヨリ東甘丁斗ニアリ。高山ニシテ茅山也。古所山の出張（城）といふ、堀切に尚残れり。」とあり、山麓城郭3か4がそれにあたる可能性もあるが、周囲にはさらに未知の城郭が存在する可能性もあるため、現段階においては断定することはできない。

以上のように古処山の周りには山頂周辺に巨大な城郭を置き、そこから延びる尾根の要所にいくつもの小規模な城郭を配する構造を呈していたことがわかる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4～6,8,9,10,11,73,77,78,79,80

筑前 49	かみあきづきじょう	郡名	夜須郡	別称	坂田城	図幅名	甘木(東)
	上秋月城	種別	丘城	所在	朝倉市上秋月		

【沿革】『本編』の「上秋月村城址」によると、「此村の高き岡の上に八幡の社あり。其岡秋月氏の時、家臣坂田氏代々居城せしと云。」とあり、現在の上秋月神社付近に城館があったことがわかる。『種々』には「坂田城址」として記載される。また文献70には、秋月陣屋の南、上秋月八幡宮の隣接する場所に「坂田城」の文字が記載されている(第69図)。

【概要】現在、神社の場所には城郭の名残をとどめる遺構はなく、神社の北西約100m地点の尾根の先端部分に堀切と思われる遺構が認められる。そして西側は現在茶畑になっており、往時の状況を反映していないが、主郭部分と推定される。

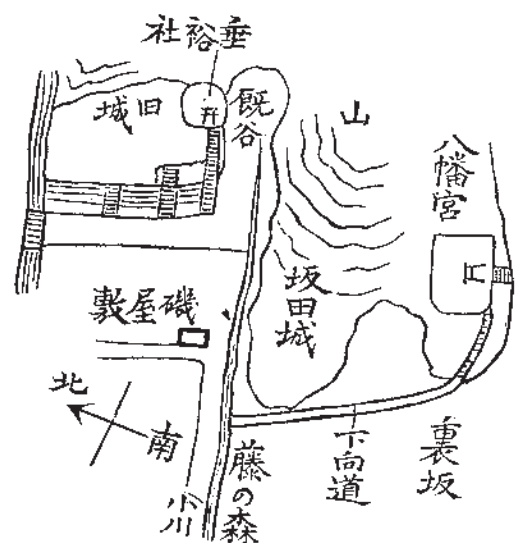
堀切は深さが3m近くもあり、非常に深く、明らかに後世の切り通しで拡幅されている状況が看取できるが、堀切の東側に高さ約1mの土塁が認められることを考えても、城郭の堀切であった可能性は高いと考えられる。おそらくは、尾根の先端、標高115m地点付近に主郭を持ち、尾根続きの方向に、堀切を設けた比高差約35mの単郭の城郭であったと推察される。

なお、『県教委一覧』などには「上秋月城」と「坂田城」が別々の城郭としてあげられているが、単に重複したものと思われる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,6,8～11,69,79



第68図 上秋月城縄張り図(文献79・岡寺良作成)



第69図 坂田城の位置が示された図(文献70)

③下座郡

筑前 51	やすみまつじょう 休松城	郡名	下座郡	別称	安見ヶ城・夜須見松城・茄(子)町城	図幅名	甘木(東)
		種別	山城	所在	朝倉市柿原・板屋・堤・下澗		

【沿革】甘木町の北に聳える大平山から東へ尾根続きにある安見ヶ城山山頂（標高 301m）に位置する。

『本編』には永禄 10 年（1567）に豊後大友方が秋月種実を攻めた際、大友方の戸次鑑連が入城し、秋月方の襲撃を受けた「休松合戦」があったとする。また秋月氏二十四城の一つ茄町城として秋月氏の出城とする（文献 69）。

【概要】山頂を中心に尾根線に沿って細長い曲輪が約 200m にわたって伸び、北西側の曲輪には低い土塁が巡り、他の曲輪の要所には土塁や豎堀が、山頂の南西側、大平山へ続く尾根に堀切がある。

【史料】あり 【参考文献】1～4,6,8～10,11



第 70 図 休松城縄張り図（文献 11・片山安夫作成）

筑前 52	おたじょう 小田城	郡名	下座郡	別称	武京田城	図幅名	田主丸(西)
		種別	平地城館	所在	朝倉市小田		

【沿革】佐田川西岸の平地城に位置する。『本編』には「小田村の枝村、小作家と云所に有。秋月の端城にして、野中彦兵衛といふ者城代たりし」とあり、『附録』には「村民ハ武京田殿の古城といふ。小田彦五郎といふ土城番たりしとそ。」とする。『全誌』には武京田刑部左衛門政延の城で小田彦五郎が城番とする。関連地名として字「武京田」と「正信（政延に由来）」、大字小隈に「城林」がある。

【概要】武京田付近の現在の地籍図に一辺約 100m で折れを有する方形区画が確認でき、小田城跡の区画の可能性はある。現地は耕作地であり、古くからの地割を反映している可能性がある。しかし、「武京田」の北東にある字「正信」にも城域がある可能性もあり、現段階では確定できない。

【史料】なし 【参考文献】1,2,4,8～11



第 71 図 小田城跡推定地割図（現在の地籍図を元に事務局作成）

筑前 53

ちやうすやまじょう
茶臼山城

郡名 下座郡
種別 山城

別称 荷原城
所在 朝倉市荷原

図幅名 甘木(東)

【沿革】朝倉市三奈木の寺内集落北側、寺内ダム（佐田川）の西側の尾根先端に位置する。比高約60m。主郭は標高127m地点に、東西約50m南北約30mの規模を持つ。『本編』には「荷原村にあり。城主不詳。岩切山と此城と取合有しと云。又此村の中に、秋月氏の家臣三奈木彌平次か宅の跡とて、竹林の中にあり。其かまえ廣し。」とある。また、当城の南西側には、美奈宜神社があり、城との深い関係が窺われる。

【概要】主郭の南側を中心に腰曲輪がいくつか設けられる。また主郭北側は、尾根の鞍部にあたり比較的広い平坦地が望めそうな場所ではあるが、不明瞭な平坦面が存在する。『古城図』には堀切と連動した腰曲輪が描かれており、現状とは少し異なっている。寺内ダムの造成地にも近く、ダム造成の際に攪乱を受けている可能性が高い。

一方、主郭から南西側へ下っていくと、堀切が一本認められ、さらにそれに南接して、大きな切り通し状の掘り込みが存在する。『古城図』には、「大ホリ」とされており、近世末期には既にあったことがわかるが、尾根を斜めに登るような形状で、堀切とするよりは、近世階段の切り通しと考えた方がよいと思われる。さらにその南側約100m地点の尾根先端部にも、若干の平坦地が認められるが、山城に付属するものがどうかは不明である。

【史料】なし 【参考文献】1～4,6,8～11,79



第72図 茶臼山城縄張り図（文献79・岡寺良作成）



第73図 下座郡茶臼山古城図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 54

いわきりやまじょう
岩切山城

郡名 下座郡
種別 丘城

別称 茶臼山城か
所在 朝倉市三奈木

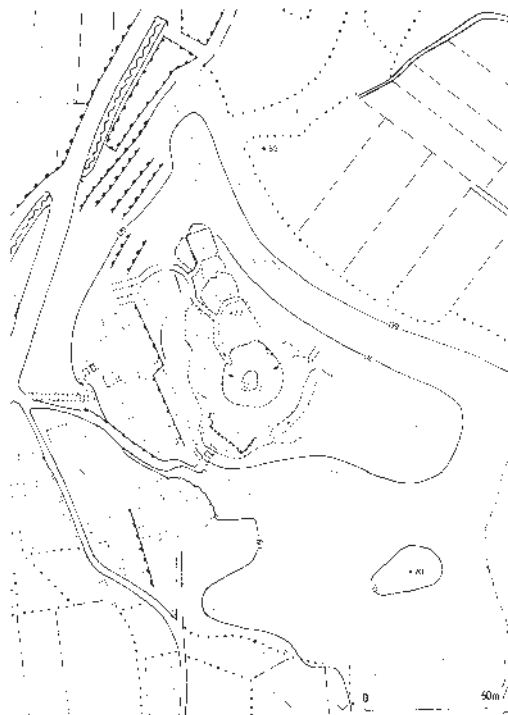
図幅名 田主丸(東)

【沿革】寺内ダムから流れる佐田川の南側、三奈木小学校の東隣にある清岩寺の裏山にあたる。『本編』によると、「いかなる人の居たりし城にや、詳ならず。此山の前に人埋塚とてあり。此城址に今は清岩寺と云禅寺あり。」とあり、『古城図』『岩切山城古城図』にも同様の記述がなされている。

【概要】清岩寺の裏山は標高約 80m の低丘陵で、その山頂部には主郭を配する。その規模は、南北約 25m、東西約 25m だが、不明瞭な平坦面で、また主郭中央部には古墳と思われるマウンドが認められる。主郭の南東側には深さが 2～3m もある非常に大きな堀切が見られる。しかし、それ以外の平坦地は既に近世段階には、墓地となっており、この平坦地が山城の遺構を示すものか、それとも墓地を造るにあたっての造成なのかはわからない。『古城図』には、主郭の北側には、2 本ほどの堀切が描かれているが、現在はそれらを確認することはできないし、絵図にも既にこれらの平坦地が清岩寺と共に墓地として描かれているため、城郭廃絶後の早い段階で、墓地が築かれていたと考えられる。

また、清岩寺の山号は茶臼山であり、『古城図』には 53 の茶臼山城とは別に「茶臼山故城図」(第 76 図)が存在する。それをみると、岩切山城と構造が類似することから、この絵図も岩切山城を描いたものの可能性があるが、確証はない。

【史料】なし 【参考文献】1～4,7～11,79



第 74 図 岩切山城縄張り図
(文献 79・岡寺 良作成)



第 75 図 下座郡三奈木村岩切山古城図
(部分・国立公文書館蔵)



第 76 図 下座郡荷原村茶臼山故城図
(部分・国立公文書館蔵)

④上座郡

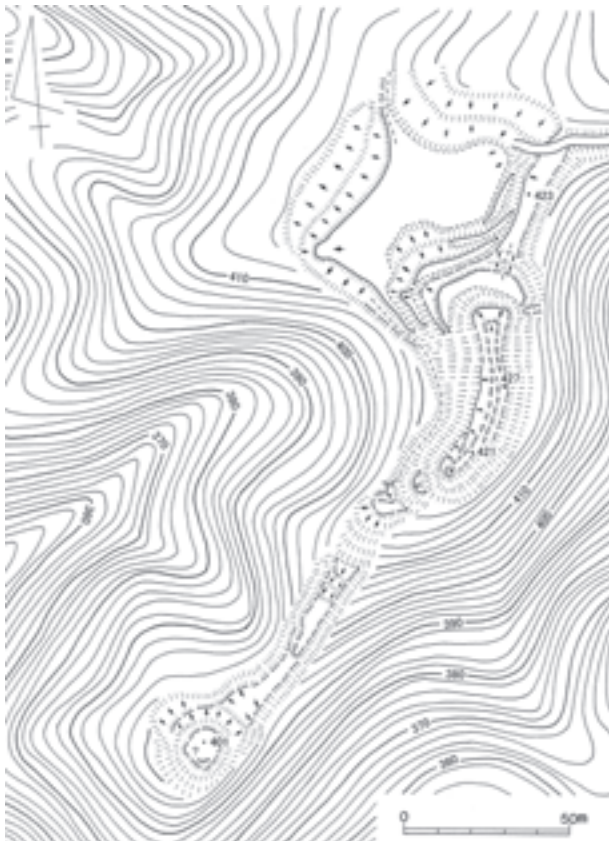
筑前 57	むらかみじょう 村上城	郡名	上座郡	別称	なし	図幅名	吉井(西)
		種別	山城	所在	朝倉市黒川		

【沿革】 広蔵山の南西麓、黒川（朝倉市）は、戦国期に彦山座主が本拠とした黒川院が存在することでも知られるが、村上城は黒川の内、黒松集落の北側の山中にあたる標高 427m の箇所に位置する。『本編』には、村上定雲が城主であるとする。

【概要】 この城の城域の範囲の特定は非常に困難である。それは城の基本をなす曲輪の平坦面がしっかりしていないばかりではなく、通常、城域を防御して区画する堀切、畝状空堀群等の防御遺構が殆ど存在しないためである。つまりは、一般的な里山で見られるような自然地形と比較しても、この場所が一見変わりがないからである。

そこで『古城図』を参考に現地において遺構確認と図化をしたものが第 77 図である。標高 427m の最高所を初め城域の殆どが自然地形である。ただよく観察すると北側の三日月形の曲輪とその南側の切岸は非常に丁寧に成形されており、城郭の構築をもくろんでなされたものであると考えられる。おそらく北側の標高 423m 地点から見上げると、それなりの城の景観を呈していたであろう。また東側斜面にはこの城唯一とも言える豎堀一本も確認できる。さらに北側には広大な平坦面が広がるが、絵図には「畠」とあり、近世には二次利用され、戦国期の状況は不明である。『古城図』にも麓に「村上屋敷跡」と記載される。黒松一帯を治めていた小領主村上氏の詰城と考えられる。

【史料】 なし 【参考文献】 1～4,8～10,11,95



第 77 図 村上城縄張り図（文献 11・岡寺 良作成）



第 78 図 上座郡黒川村之内村上古城之図
（部分・国立公文書館蔵）

筑前 59

ほんじんやまじょう
本陣山城

郡名 上座郡
種別 山城

別称 なし
所在 朝倉市杷木志波・山田

図幅名 吉井(西)

【沿革】旧杷木町の西端、標高 135m、比高約 100m の本陣山に位置する。北側の同じ山塊には麻氏良城が位置する。『古城図』には、「秋月種実の端城と云う」とある。地名にも「本陣」が残る。

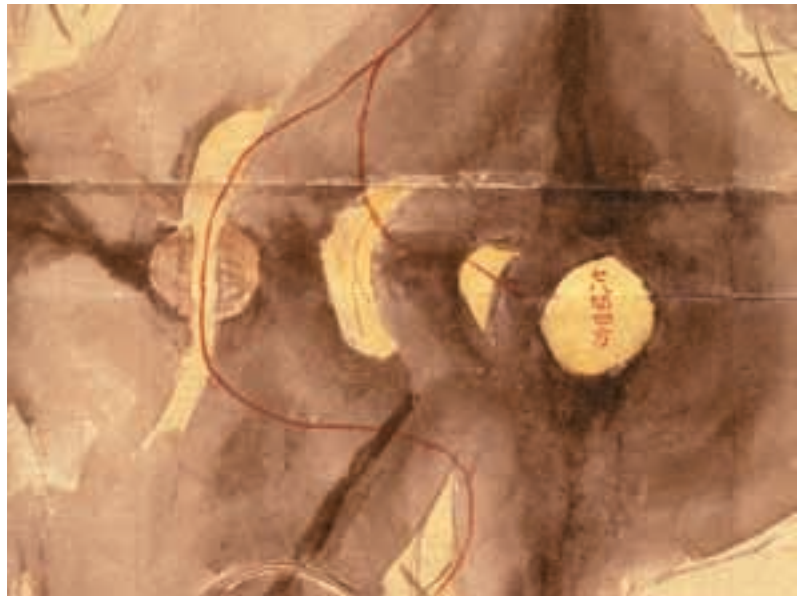
【概要】主郭は東西約 15m、南北約 20m で、その西側にほぼ同規模の曲輪を確認することができる。そして、主郭の西側 70m 地点には、古墳時代中期の円墳、本陣古墳がある。古墳と城跡の間には古墳の周壕が残されているが、城跡側の傾斜が古墳側に比べてかなり急峻となっており、おそらくは周壕を利用して、さらに城跡側の斜面を掘り込むことによって、堀切を造り出しているとみられる。非常に小規模かつ単純な構造であり、戦国時代における麻氏良城の出城としての役割があったものと考えられる。

【史料】なし

【参考文献】1～4,6,8～11,23,85



第 79 図 本陣山城縄張り図 (文献 85・岡寺 良作成)



第 80 図 上座郡志波村本陣山古城之図 (部分・国立公文書館蔵)

筑前 61

まてらじょう
麻氏良城

郡名 上座郡
種別 山城

別称 左右良城・真寺城・舞鶴城
所在 朝倉市杷木志波・山田

図幅名 吉井(西)

【沿革】旧朝倉町の東端、麻天良山(標高 356m・比高差約 300m)に位置する。

『本編』には、秋月種実が喜津瀬(吉瀬)因幡・同主水を城番としたとする。その一方で、『覚書』には左右良山、城主は内田善兵衛とある。その後、小早川氏の筑前支配時には、小早川氏の持ち城となり隆景の代には仁保右衛門、秀秋の代には伊藤雅楽介が入城した。さらには慶長年間に至り、

筑前黒田藩の六端城の一つとなり、当城には1万5千石で栗山利安が入城する。元和の一国一城令により廃城となった。

【概要】延喜式内社麻天良神社が鎮座する山頂部を主郭とし、東西の尾根に曲輪が配される構造をとる。曲輪の周囲には、瓦を伴う石垣の痕跡が随所に確認でき、総石垣であったと考えられ、算木積みで積まれている。よって、これらは慶長年間の黒田氏の改修であると考えられる。また、aの枡形虎口やbの横矢なども同様の改修と考えられる。

その一方で、④の場所や②の東側に確認できる堀切は戦国期のものを踏襲している可能性が高いと思われるが、斜面には畝状空堀群などの施設は認められない。

また、山麓一带には字「里城」や「政所」があり、居館の存在を予感させる。また、さらにその南側には字「杉馬場」があり、一般士分の集落が想定される。おそらく慶長年間の栗山氏入城時のものと考えられる。

現状の曲輪全ての面積は、他の周辺城郭よりも一段と広いが、これは戦国期から、麻氏良城が豊後との国境にあたる杷木地域の支配の拠点とも考えられていたことを示すと共に、慶長年間には六端城の一つとして構築された理由を示しているであろう。

【史料】あり

【参考文献】1～9,10,11, 23,74



第 81 図 麻氏良城縄張り図（文献 74・木島孝之作成）



第 82 図 上座郡山田村麻天良古城之図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 63

まえぐまやまじょう
前隈山城

郡名 上座郡
種別 丘城

別称 なし
所在 朝倉市杷木志波

図幅名 吉井(西)

【沿革】前隈山城は、志波の集落近くの丘陵に位置する。『本編』には、「麻氏良山の下に前隈山として小山あり。是麻氏良城の端城也」とあり、『附録』・『拾遺』などにも記載が認められる。

【概要】城の構造は、標高 74m 地点（比高約 30m）に南北 40m、東西 20m の主郭があり、周囲に幾つかの帯曲輪を巡らすものである。現在は柿畑となっているために、後世の造成として多くの作業道や平坦面が想定されるが、曲輪の他には堀切や横堀のように明確に城郭と考えられる施設は認められない。

『古城図』を見ると、曲輪についてはほぼ現状と変わらないが、「城址全て畠となる」という記述があることから、既にこの絵図が描かれた時点（文化 14 年（1817））で、城跡が畑となって、改変を受けていたことがわかる。また、絵図の上方には現在は開墾で消滅した茶臼山城（ひはた山城）（56・第 83 図 A 地点）も描かれている。

【史料】なし 【参考文献】1～4,8～11,23,85



第 83 図 前隈山城・茶臼山城地点縄張り図
(文献 85・岡寺 良作成)



第 84 図 上座郡志波邨前隈山古城之図
(部分・国立公文書館蔵)

筑前 65

ゆうづきじょう
夕月城

郡名 上座郡
種別 山城

別称 なし
所在 朝倉市杷木古賀

図幅名 吉井(西)

【沿革】杷木のほぼ中央部、池田集落の北西側の山塊朝倉市杷木古賀、現在夕月神社の社殿がある場所（標高 121m）に位置する。この社殿は、文久 2 年（1862）に山中よりこの地に移されたといわれている。地誌類等には記載が見られず、廣崎篤夫によって初めて城郭として紹介されたが（文献 10）、残存している遺構の状況から戦国期の城館であることと見られる。

【概要】現在社殿のある主郭は、東西約 30m、南北約 20m で、その周囲には後世の作業道造成により、かなりの改変を受けているが、復元的に見てみると北側を除く三方に 2 本の横堀が巡らされており、最大で 2 m の深さにも及ぶ。主郭の北側及び、横堀を挟んで西側にも曲輪とも考えられる平坦面が確認できるが、現在、周囲には広く果樹園が広がり、後世の改変を受けている可能性が高い。

【史料】なし

【参考文献】10,11,23,85



第 85 図 夕月城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）

筑前 66

みかづきじょう
三日月城

郡名 上座郡
種別 山城

別称 池田山城
所在 朝倉市杷木池田

図幅名 吉井(東)

【沿革】池田集落の北側の山塊、夕月城の東約 1 km にあたる標高約 195m、比高約 140m の頂部に位置する。『本編』には、「池田村にあり。城の形三日月に似たる故名づく。是は秋月種実取立し城なり。城番には中願寺左近将監と云う者をおかれしとかや。里屋敷の址もあり」と記述される。また『附録』には、「三日月城址并里屋敷址」として「山上一反四畝斗あり。里屋敷は城の南の岡にあり。里民屋敷と言う」とあり、『古城図』には、「秋月種実之を築き、其の臣中元寺左近在城す。里屋舗の址もあり」と記載される。『覚書』には池田山とされ、城主は中元寺左近とある。

【概要】主郭部の平坦面の形態は、その城名の由来にもなっているとおり細長い三日月形を呈し、東西約 5～10m、南北長は直線距離にして約 160m（実距離で約 200m）を測る。非常に細長い形態で、切岸もはっきりしているため、一見これが一つの曲輪であるかのような印象を図面では受ける。しかし実際には、北端を中心とする東西約 6m、南北約 25m の範囲と、そこから南へ約 100m の標高 193m の南端を中心とする東西約 7m、南北約 60m の範囲が、それぞれ曲輪として機能し、その間は緩斜面でつながっている状況である。また、北端の北側には東西約 15m、南北約 20m の曲輪が

見られ、城内で一番広い平坦面であるが、曲輪の西側の切岸は不明瞭で自然地形に続いている。そして、さらに北東側には、深さ1m未満と浅いながらも3本の堀切とその奥に1本の竖堀が見られ、この地点が城郭であることを示している。また、曲輪群の東斜面には2本の竖堀も確認できる。

以上のように、三日月城は非常にいびつな曲輪配置を持つ城郭である。その原因として考えられるのは、この城郭の位置が池田集落から米山城のある米山へ到達するルート上にあたるためであろう。実際米山へ行くルートが南側の曲輪を南北に貫通していることからわかるとおり、三日月城の細長い曲輪は、元来、尾根線上の登山道を取り込んで曲輪化したものなのであろう。よって、三日月城の曲輪配置は、米山城へのつなぎの城としての性格を色濃く反映した結果であるといえよう。

【史料】あり 【参考文献】1～4,6,8～10,11,23,85



第86図 三日月城縄張り図（文献85・岡寺 良作成）



第87図 上座郡池田村三日月城跡之図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 67	こめのやまじょう 米山城	郡名	上座郡	別称	白木山城・国見城	図幅名	吉井(東)
		種別	山城	所在	朝倉市杷木白木		

【沿革】米山の山頂（標高590m）に位置し、周辺の山城の中では最高所に位置する。『覚書』には白木山、城主は松原筑後、八重川原采女とあり、『本編』には、かつては白木玄蕃允が在城していたが、後に秋月氏の端城となり、家臣松原筑後が在城したとされる。

【概要】城の構造は、山頂を中心とした主郭部（通称：長城）と、その北側約300mの標高597m地点を中心とした副郭部（通称：丸城）から構成される。

主郭部は、東西約 125m、南北約 20m の曲輪で、その内部はあまり平坦ではないが、特に中央部分の約 10m 四方の小曲輪は明瞭に平坦にされている。また、主郭の西側部分は、北側 a と、西側 b に土塁が見られ、平坦面も非常に明瞭である。b の土塁は堀底からの高さは約 3m で、非常に堅固に造られている。

主郭部の西側の尾根線上には、5本の連続する堀切群が施されている。土砂の埋没が激しいせいか、主郭に接する1本を除き、かなり不明瞭ではあるが、『古城図』にも描かれており、当初はかなりの深さを有していたことが想定される。

主郭部から副郭部へは北側の尾根線伝いに連絡しているが、その途中には1本の堀切が確認できるほかは、特に際立った施設は見られない。

副郭部は、6つほどの小規模な曲輪が確認できるのみである。『古城図』には曲輪の南側に土塁が描かれているが、現状ではそれを確認することはできない。いずれの曲輪も平坦面はあまり明瞭ではない。

【史料】あり

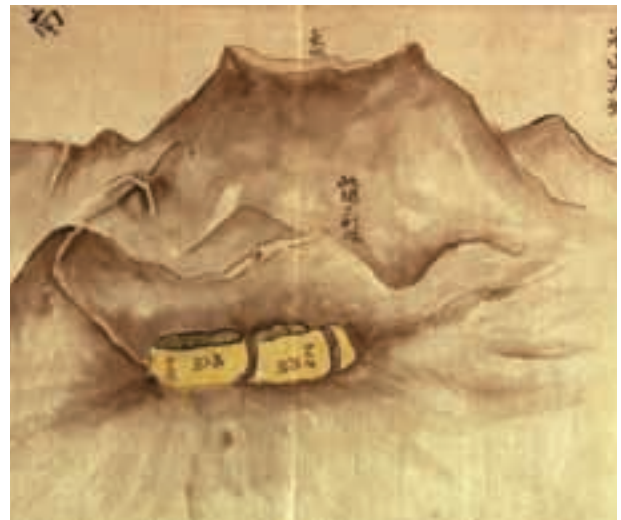
【参考文献】1～4,6,8～11,85



第 88 図 米山城縄張り図 (文献 85・岡寺 良作成)



第 89 図 上座郡白木村米山城跡之図 (部分・国立公文書館蔵)



第 90 図 上座郡白木村米山丸城図 (部分・国立公文書館蔵)

筑前 68

うのきじょう
鶉木城

郡名 上座郡
種別 丘城

別称 なし
所在 朝倉市杷木東林田

図幅名 吉井(東)

【沿革】古代神籠石・杷木神籠石の国道 386 号線より南西側の部分には、戦国時代の山城、鶉木城が存在する。『古城図』には「長尾城之出城也」とあり、『覚書』には城主を日田近江とする。

【概要】現状での鶉木城の構造は、標高 70 m の頂上部を中心として、南北約 40 m、東西約 20 m の主郭がある。その東側から北側にかけて、幅約 10 m、深さ約 1 m の大きな横堀が巡る一方で、西側は横堀ではなく、幅約 10 m の平坦地（腰曲輪）が取り付く。そして、横堀の北側には 3 本の縦堀が認められる。また、主郭への虎口は主郭の南側にあるが、絵図にはなく後世のものかもしれない。

以上が現状の構造であるが、既に鶉木城の南側と西側は後世の攪乱や宅地造成により当時の姿をとどめていない。今となってはその当時の状況を知る手がかりは、『古城図』によるほかない。

絵図を元に構造を考察すると、主郭は宅地造成により南側が削られているために南北幅は長くなる。そして、その主郭の南側へ一段下がった所に、主郭よりも南北幅がさらに長いもう一つの曲輪があったとみられる。主郭の東側の横堀は、消滅したもう一つの曲輪の東側から南側へと続き、西側斜面へ向かって縦堀へとつながる。また、西側の腰曲輪もさらに南側へと続いていたと考えられる。

畝状空堀群は現状では 3 本しか認められないが、絵図では現状の縦堀の他に、主郭の北側から西側にかけて、腰曲輪の下に 5 本、そして曲輪群の南側の横堀のさらに南側に 3 本描かれている。

鶉木城の構造をまとめると、南北に並んだ 2 つの曲輪を中心に、東側から南側に横堀、北側から西側にかけて腰曲輪が巡り、その外側には、北に 8 本、南に 3 本縦堀が配され、西側を除いて横堀や畝状空堀群で防御し、西側は自然の要害である筑後川によって防御するという堅固な構造を呈している。

【史料】あり 【参考文献】1～4,8～10,11,23,48,85



第 91 図 鶉木城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）



第 92 図 上座郡林田邑鶉木山城跡之図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 69 ながおじょう
長尾城

郡名 上座郡
種別 山城

別称 鳶山城
所在 朝倉市杷木東林田

図幅名 吉井(東)

【沿革】鵜木城の東約 400 m、杷木神籠石の列石線上付近の標高 129m、比高約 80m 地点に位置する。

『覚書』には長尾城の城主は木村甲斐とされている。また、『本編』にも秋月種実の出城とし、木村甲斐、木村源太左衛門が入れ置かれたことが記され、年号ははっきりしないが、天正年間に大友宗麟が長尾の攻城に失敗した逸話が記されている。

【概要】標高 129m 地点にある東西約 25m、南北約 20m の主郭を中心に、主に南西側の尾根上に曲輪が 5 つ展開している。いずれの曲輪も平坦面は非常に明瞭である。それらの曲輪群の北・西側には帯曲輪が巡るが、それらをほぼ全周を囲むように約 80 本にも上る畝状空堀群が築かれている。北西側の斜面は、現在崩落しているが、『古城図』では空堀群がほぼ全周に描かれていることから、かつてはここにも幾つか豎堀があったと想定できる。

また、東側の横堀と併行する形で、隣接する曲輪には土塁も施されている。そして、堀切の東側の尾根上は全くの自然地形で、約 50m 先の尾根の鞍部にやや小規模な堀切が 1 本あるのみである。

このように長尾城は、畝状空堀群から見てもわかるように、周辺の他の城よりも非常に高度な築城技術と膨大な土木量を投入して改修がなされていることがわかる。

【史料】あり

【参考文献】1～4,6,8～9,10,11,23,34,73,85



第 93 図 長尾城縄張り図 (文献 85・岡寺 良作成)



第 94 図 上座郡林田村長尾城跡之図 (部分・国立公文書館蔵)

筑前 70

またけやまじょう
真竹山城

郡名 上座郡

別称 真岳城

図幅名 吉井(東)

種別 山城

所在 朝倉市杷木松末

【沿革】杷木から北東側の宝珠山（東峰村）へ抜ける途中、旧松末村の内、真竹集落の背後にあたる真竹山山頂（標高 181m）に位置する。『本編』には「秋月氏の端城にして野手讃岐という者城番たりし」とあり、『覚書』には「真嶽城」として城主が野津手讃岐、香月九郎衛門とあり、在地の秋月氏の家臣が城主であったことが推測される。

【概要】城の現状は後世の作業道の造成などにより、かなりの改変を受けているが、構造を把握する上では、さほどの支障はない。山頂部を中心に南北約 30m、東西約 10m の主郭のほか、南側に曲輪が 2 つほど確認できるが、それらは主に南側に傾斜しており、平坦面はあまり明瞭ではない。

そして、その曲輪群の周囲には畝状空堀群が確認できる。東側の一部は作業道による改変がなされていたり、所々崩落している個所が見受けられるが、現状で 20 本以上存在し、豎堀の頂部に腰曲輪が巡るような形状を呈している。『古城図』では畝状空堀群が曲輪を全周するように描かれており、作業道による地形改変がなされる前は、絵図のようであったのかもしれない。尾根続きの北側は、一部に埋没があるものの 2 本の堀切があり城域を画している。また、『古城図』には堀切の北側にさらに大きな堀切と曲輪を描いているが、自然の谷地形と後世の平坦面とみられ、城郭遺構と判断していない。

【史料】あり 【参考文献】1～4,6,8～10,11,23,85



第 95 図 真竹山城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）



第 96 図 上座郡松末村真竹山城跡之図
（部分・国立公文書館蔵）

筑前 71 はりめじょう
針目城

郡名	上座郡	別称	なし	図幅名	吉井(東)
種別	山城	所在	朝倉市杷木林田・大分県日田市		

【沿革】朝倉市の最東端、大分県日田市との境付近にあたる針目山（標高 488m）山頂に位置する。

『本編』によると、秋月種実の築城とされ、初山九兵衛、大山源左衛門を城番したが、内紛が起こり、天正 9 年（1581）に一時大友方に落ちるものの、同年の原鶴合戦後は、再び秋月方に戻り、中願寺左近の子、中願寺下総を置いたとされている。

【概要】実際の現地の曲輪の配置は、東側と西側に大きく 2 つに分かれる構造を呈している。主郭にあたる西側の曲輪群は、東西 30m、南北 15m の主郭と、東西にあまり平坦ではない曲輪が 2 つほど確認できる。そして、主郭の西側の曲輪の周囲三方には、非常に確認が困難ではあるが、20 本足らずの畝状空堀群が認められ、一部には横堀も確認できる。

一方、主郭の東側にはほとんど畝状空堀群が認められず、東側の曲輪群へと続く土

橋状の通路が存在する。東側の曲輪群は、標高 483m の曲輪を中心として、その南側に 2 つほどの曲輪が確認でき、これらの曲輪は平坦面が非常にはっきりしている。西側の曲輪群とは異なり、畝状空堀群のような防御施設はないが、東側尾根に対して、堀切を 2 本確認することができる。

以上のように針目城は東西 2 つの曲輪群が存在し、それぞれが一定の独立性を保った配置をしており、防御施設も西側には畝状空堀群が存在するものの東側には存在せず、あり方を異としている。

【史料】あり 【参考文献】1～4,6,8～10,11,23,85



第 97 図 針目城縄張り図（文献 85・岡寺 良作成）



第 98 図 上座郡穂坂村針目山古城之図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 72

とやまじょう
塙山城

郡名 上座郡
 種別 山城

別称 鳥屋ヶ嶽城
 所在 朝倉市佐田

図幅名 小石原(西)

【沿革】朝倉市の北東部、標高 645m の鳥屋山山頂に位置する。『本編』には大友宗麟が彦山座主を攻めた際、座主が籠った城と伝える。また『覚書』には鳥屋ヶ嶽城として乙石刑部を城主とする。『附録』は安部宗任を、『種々』は彦山座主と鬼木氏を城主とする。また麓の黒川院は中世彦山座主の居所であった。

【概要】山頂部周辺には奥の院や石仏群があって、いわゆる霊場だが明確な城郭遺構を確認することができない。『古城図』にも平坦面を除き、城郭遺構は描かれていない。

【史料】あり

【参考文献】1～4,6,8～11



第 99 図 上座郡佐田村塙山古城之図
 (部分・国立公文書館蔵)

筑前 73

からすだけじょう
鳥岳城

郡名 上座郡
 種別 山城

別称 宝珠山城・舞鶴城
 所在 朝倉郡東峰村宝珠山

図幅名 吉井(東) / 大行司(西)

【沿革】旧宝珠山村のほぼ中央に位置する城ヶ迫(標高 545m)から南へ約 1 km 「城の平」と呼ばれる尾根の平坦部(標高 430m)に鳥岳城の主郭は位置する。『本編』・『拾遺』・『全誌』には森了心、後に宝珠山遠江守が城主であるとする。『種々』には宝珠山氏の宝珠山城として記載が見られる。

【概要】城の構造は、城ヶ迫の南、「城の平」と呼ばれる尾根のピーク(標高 430m)を利用しており、非常に細長い痩せ尾根に沿って築造される。幅 10m 未満の痩せ尾根上を約 250m の間、不明瞭な平坦面があり、曲輪群の北端部に 2 本の堀切、中ほどに 1 本、南端部に 1 本の計 4 本の堀切がある。主郭は 1 で、不明瞭ながらも約 10m × 20m の平坦面を確保し、北東側に同様の規模の曲輪 2・3 が続く。その北側には、a に堀切を二本設けて城域を限っているが、堀切に面した 3 の曲輪の北側には土塁を設け、防御を嚴重にする。1 の南側は痩せ尾根の自然地形が連続し、途中 b の堀切を挟んで、約 90m の間、自然石が多く露出する自然地形が連続する。そして 4 に至ると、曲輪と呼べる人工的に平坦面化した空間となる。さらに南側も不明瞭な地形が継続し、最終的に c の堀切をもって城域の南側を限っている。

また「城の平」の尾根からは、四方に尾根が延びているが、その南東側の尾根の一つ、鳥嶽城から約 700m 地点に「城ノ辻」は位置する。尾根の先端部、標高 218m のピークに約 20m 四方の主郭を設ける単郭構造で、北西側に四本の堀切、南側に一本の堀切と思われる遺構が見られる。特筆すべきは、主郭の北西側の a に非常に立派な石垣(第 100 図)が見られることである。高さは約 1 m だが、非常に大きな石を利用しており、



第 100 図 「城ノ辻」の石垣遺構

意識的に隅角を造り出している。主に主郭の南西側の斜面に設けられたものである。『古城図』にも双方の図が掲載され、「城の平」を「本城」、「城ノ辻」を「出城」と表現する。(第102・104図)。
 【史料】なし 【参考文献】1～4,6,8～11,25,95,116



第101図 烏岳城(城の平)縄張り図
 (文献95・岡寺良作成)



第102図 上座郡宝珠山村烏嶽古城之図
 (部分・国立公文書館蔵)



第103図 烏岳城(城ノ辻)縄張り図
 (文献95・岡寺良作成)



第104図 上座郡宝珠山邑烏ヶ岳出城図
 (部分・国立公文書館蔵)

筑前 74

たかはなじょう
高鼻城

郡名 上座郡

別称 なし

図幅名 小石原(東)

種別 山城

所在 朝倉郡東峰村鼓

【沿革】小石原から筑後川流域へ抜ける現在の国道 211 号線の途中にある鼓の集落の裏、花園山山頂（標高 469m）に位置する。

【概要】構造は山頂部を中心に東西約 85m、南北約 15m の主郭が配され、主郭の西端には土塁も見られる。さらにその西側に 2 本の堀切、さらに主郭の東側には斜面上に 5 本の畝状空堀群と、その下には 2 本の堀切が配されている。主郭は西側部分を除いてはあまり平坦とは言えず、東側はやや傾斜しており、平坦面化が行き届いているとは言い難い。

『古城図』を見ると、基本的には現状とはほとんど変わらずに描かれているが、ただ、現状 5 本しか確認できない畝状空堀群が 12 本も描かれており、かつては空堀群がもっとあった可能性も考えられるが、その場所には現在、高圧鉄塔の痕跡ともみられる小さな造成段が 2 つ見られるばかりであり、後世の改変が想定される。

『本編』等の地誌類には、城内に古墓があるとされているが、現在確認することはできない。また、城主不詳とされており、城主もよく分からないが、小石原と杷木地域に挟まれたこの立地と畝状空堀群の存在から秋月氏に関連し、鼓集落一帯を本拠としていた小規模領主層の城と考えられる。

【史料】なし

【参考文献】1～4,6,8～10,11,116



第 105 図 高鼻城縄張り図（文献 11・岡寺 良作成）



第 106 図 上座郡鼓村高鼻城跡之図
（部分・国立公文書館蔵）

筑前 75 まつおじょう
松尾城

郡名 上座郡 別称 小石原城
種別 山城 所在 朝倉郡東峰村小石原

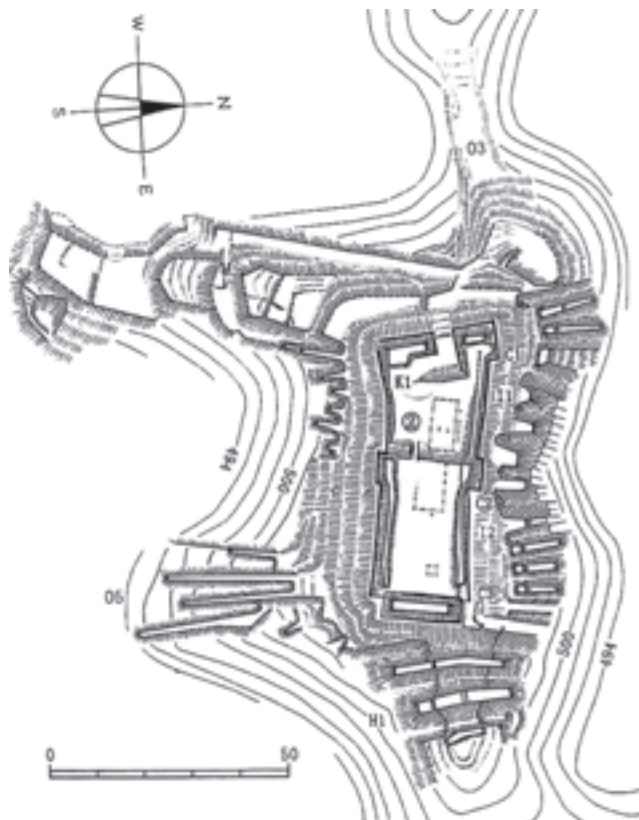
図幅名 小石原(東)

【沿革】小石原集落の北、小丘陵の裏山山頂（標高516m）に位置する。『本編』には「むかし宝珠山山城守といふ者住せし城也と云。長政公入国の後、家臣中間六郎右衛門統種（『拾遺』では統増）を此城に置れしか、元和元年公命によりてわり崩さる」とあり、戦国時代には国人領主の宝珠山氏、江戸時代初期には黒田藩の支城、いわゆる「筑前六端城」の一つとなり、元和の一国一城令により廃城となる。

【概要】山頂部に2段にわたる曲輪（主郭・副郭）を築き、その周囲には矢穴割石や裏込石を用いた総石垣が巡らされる。石垣の要所には、直角の屈曲をもって張り出すことで横矢の効果を持たせた櫓台が、主郭に3箇所、副郭②には虎口に伴って2箇所確認することができる。また、副郭北側には巨大な内枳形虎口が開いており、曲輪の規模の割には、過剰なまでの防御意識をもって構築していることがわかる。



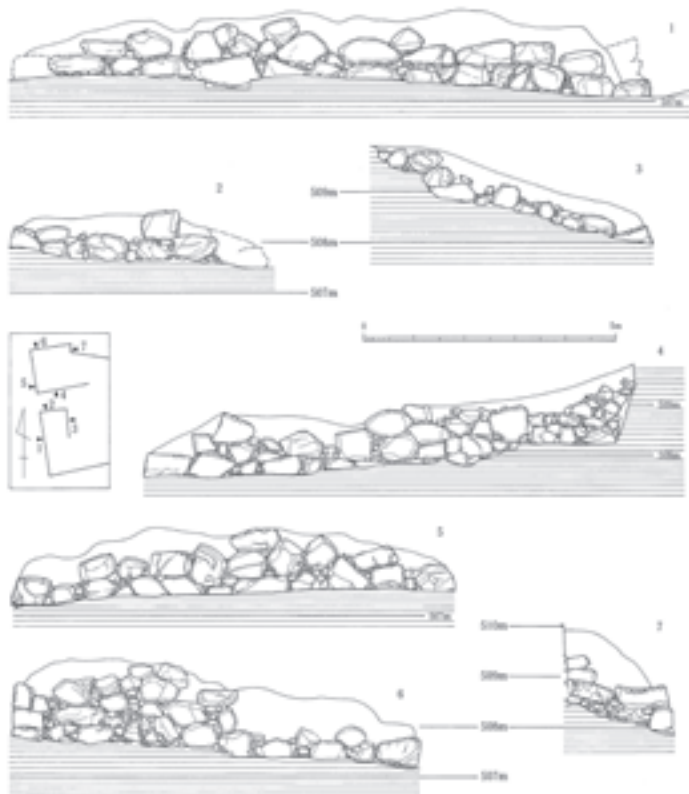
第107図 上座郡小石原村松尾古城図
(部分・国立公文書館蔵)



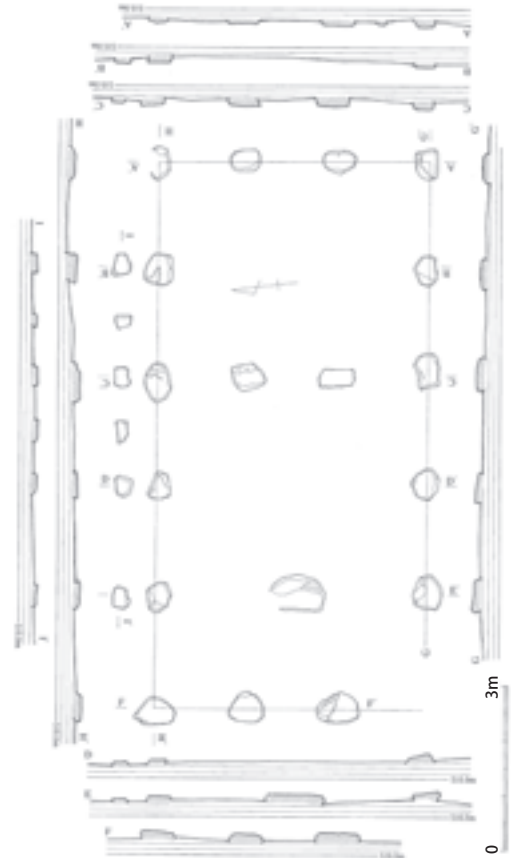
第108図 松尾城縄張り図（文献11・木島孝之作成）



第109図 松尾城測量図（文献62）



第 110 図 副郭内枅形虎口石垣実測図（文献 52）



第 111 図 副郭検出礎石建物実測図（文献 52）

また、発掘調査では、主郭から 2 棟、副郭からは 1 棟の礎石建物が検出されている。5 間×3 間が 2 棟、1 間×1 間が 1 棟である。ただ、出土遺物には瓦が全くないため、瓦葺きではない。

これらの石垣、虎口、礎石建物は黒田期、すなわち慶長 5 年（1600）段階の改修によるものであり、他の六端城と共に織豊系城郭の築城技術が遺憾なく発揮されたものである。

一方、これら曲輪群の南北側両側の斜面には畝状空堀群、主郭櫓台直下の尾根上には三重の堀切が構築されている。これは黒田期ではなく、それ以前の戦国時代のものであると考えられる。

現在、福岡県史跡に指定されている。

【史料】あり

【参考文献】1～4,6～9,10,11,52,62,74



第 112 図 北側石垣（文献 52）



第 113 図 副郭礎石建物（文献 52）

筑前 76

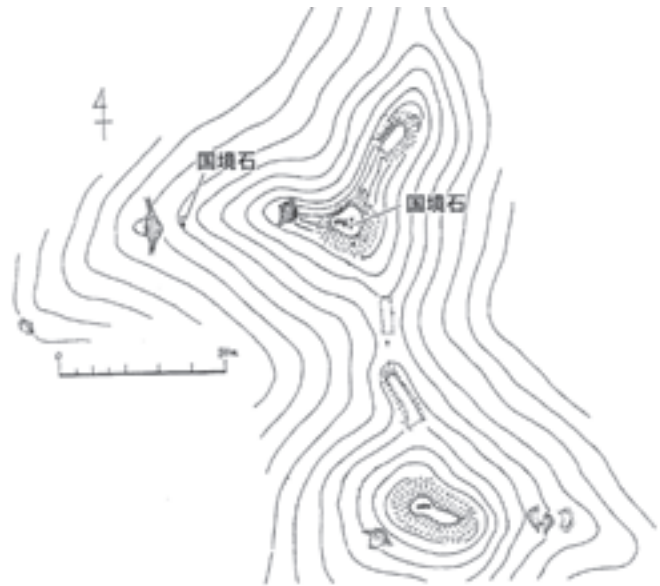
ふたまただけじょう
二股岳城

郡名	上座郡・豊前国田川郡	別称	なし	図幅名	小石原(東)
種別	山城	所在	朝倉郡東峰村小石原・田川郡添田町落合		

【沿革】小石原の北東、豊前との国境上に位置する二股岳山頂に位置し、小石原盆地から見ると二つの頂部が二股に見えることから、この名がついたとみられる。『刀衆先代帳』には永禄 11 年（1568）に英彦山勢が攻撃して落城したとされる。

【概要】2つの頂部には僅かな平坦面が見られる。北側の頂部の西側の尾根上には2本の堀切、南側の頂部の東側と西側の尾根上にそれぞれ1本ずつ堀切が見られる。北側頂部（標高約 630m）は筑前と豊前の国境に当たるため、江戸時代の両国の国境石が背中合わせで建つ。南側頂部は豊前側に属する。『覚書』には嘉麻郡に吉瀬伊賀を城主とする二股岳城の記載が見られる。郡名が異なるがこの城を示すものと思われる。

【史料】あり 【参考文献】32,116



第 114 図 二股岳城縄張り図（文献 116・片山安夫作成）

筑前 79

いおうじじょう
伊王寺城

郡名	上座郡	別称	医王寺城・城の辻城	図幅名	英彦山(西)
種別	山城	所在	朝倉郡東峰村宝珠山		

【沿革】伊王寺集落の東側の丘陵上に位置する。文献 25 に「貞和 6 年（1350）宝珠山五郎兵衛尉種永が築城、戦国期の宝珠山一族の主城」とある。大正 3 年（1914）の畑地開墾の際には遺物が出土し、同文献に刀剣、軒先瓦等が掲載されている。現存する遺物や近年採集された遺物は 14～17 世紀代の国産・中国産陶磁器類である。

【概要】城の構造は、大きく南北2つの頂部に分かれている。北側の標高 315m の頂部は、東西方向に長さ 100m 以上の規模の曲輪で、縁辺部には土塁状の高まりや、曲輪の東側には堀切状の切通しも見られるが城郭遺構が否かはわからない。南側の標高 308m の頂部は南北方向に長さ 100m 近い平坦面があるが、自然地形に近い状況である。しかし平坦面の北側の尾根上には堀切 3 本と豎堀 1 本が見られ、城郭遺構とみられる。遺物の種類や年代から、城に隣接したと伝える「伊王寺」との関連も考える必要がある。

【史料】なし 【参考文献】11,116



第 115 図 伊王寺城縄張り図（文献 116・片山安夫作成）

⑤穂波郡

筑前 80	かけおじょう 懸尾城	郡名	穂波郡	別称	なし	図幅名	篠栗(東)
		種別	山城	所在	飯塚市内住		

【沿革】飯塚市の西端、砥石山から東側へ派生する尾根の一つで、標高約 210m、比高約 40m の尾根上に位置する。『本編』には、「内住村の内」にあり。これ又城主の名知らず」とあり、また『古城図』には、「鬼杉ノ出城ト村民伝フル由…城主の名知らず」とあり、鬼杉城の出城であると伝えられている。また、文献 12 には「内住村の南十町余大小田にあり、城主不詳。」とある。

【概要】標高約 210 m の尾根の先端部に南北約 20m × 東西約 15m のやや狭い主郭 A を置き、その西側に東西約 30m のやや細長い曲輪を配する。その曲輪 B の西側には堀切を 1 本設け、尾根伝いからの攻撃に備えている。そして主郭の東側に横堀状を呈する大型の堀切 C を設けている。これらの堀切により、尾根の両端部を断ち割って、防御すると共に城域を明瞭に画していることがわかる。また、曲輪 A の東側斜面には『古城図』にも描いている通り、石垣遺構が残る。比較的大きな石材が用いられ、切岸の斜面の中ほどに確認することができる。

【史料】なし

【参考文献】1,2,4,8～12,17,29,90



第 116 図 懸尾城縄張り図（文献 90 掲載図を改変して事務局作成）



第 117 図 穂波郡内住村懸尾古城図（部分・国立公文書館蔵）



第 118 図 曲輪切岸に残る石垣

筑前 81

おにすぎじょう
鬼杉城

郡名 穂波郡・糟屋郡
種別 山城

別称 なし
所在 飯塚市内住大野・糟屋郡宇美町宇美

図幅名 太宰府(東)

【沿革】飯塚市と宇美町との境にあたる砥石山山頂（標高 826m）に位置する。三郡山から尾根伝いに約 3 km 北側の地点にあたり、西の穂波郡からも東の糟屋・御笠郡からも可視できる要衝の地にある。『本編』には、「大野の山上にあり。何の時いかなる人の居たりしにや、詳ならず。」とあり、『古城図』にもほぼ同様の記載がなされている。

【概要】山頂の曲輪（A）を中心に大きく 5 つほどの曲輪で構成されている。主郭 A の周囲には帯曲輪状に平坦面が巡り、南北 50 m 程の曲輪 B に接続している。B の曲輪からは南西側に曲輪 C、南東側に曲輪 D が配されている。主郭 A は曲輪 B と共に平坦面が不明確な部分が多い。また、曲輪 D を鞍部として、その南東側へは地形が上っており、曲輪 E が配されている。E には自然地形を残したような箇所がいくつか存在している。そして、曲輪 D の中央やや西寄りには直径 2 m ほどの大きな窪みがあるが、『古城図』には「古井」と記載があり、井戸の可能性も考えられる。『全誌』の「古井堀ノ迹アリ」の記載にも符合する。防御遺構としては城の北側と南西側に堀切 F・G を小型ながらに設け、城域を画し、北東側斜面を中心に堅堀が散在的に配されている。また、曲輪 E から東へ約 150 m 下った尾根の鞍部には、土橋とそれに対応する大きな堅堀 H が設けられている。堀切ではないが、東の城域を画する施設と評価できよう。

【史料】なし 【参考文献】1,2,4,7～12,17,29,90



第 119 図 鬼杉城縄張り図（文献 90・岡寺 良作成）



第 120 図 穂波郡内住村鬼杉故城図
（部分・国立公文書館蔵）

筑前 82

こめのやまじょう
米ノ山城

郡名 穂波郡
種別 山城

別称 牛頸の城
所在 飯塚市山口

図幅名 太宰府(東)

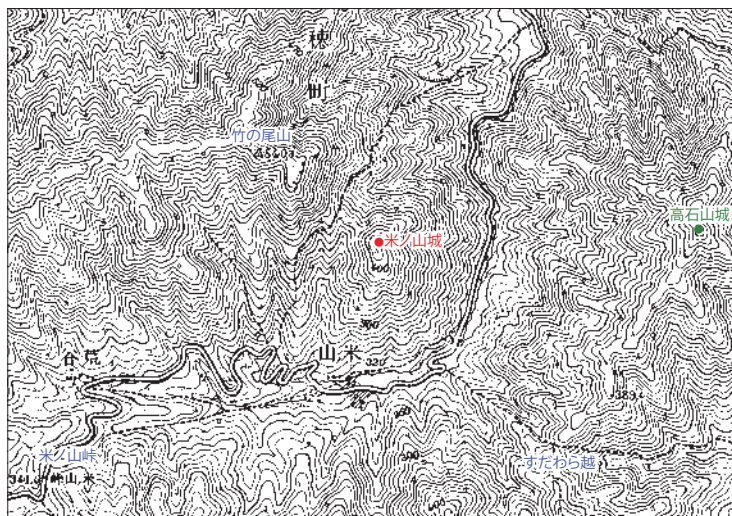
【沿革】太宰府から飯塚・穂波郡へ抜ける主要路である米ノ山越えは、古代律令期からの官道に由来するとされるが、その米ノ山越えの最頂部米ノ山峠の東、米ノ山山頂（標高約 420m）にあたる。

『本編』には、「(御笠郡) 由須原村と穂波郡山口村にかゝれり。この城は高橋紹運の取出の城也。」とあり、『附録』には「(油須原村の) 里民は牛頸の城といふ。」とある。さらに『全誌』には発掘調査が行われたものと思われる「井虚堀等ノ跡モアリ」と記す。

【概要】かつて米ノ山は、飯塚側からは飯を持ったような半独立峰のように目立った存在であったが(第 122 図)、昭和 47～48 年(1972～73)ころの碎石により、山頂一帯の曲輪群は削平され、さらにその後も碎石が進んだため、昭和 62 年度に山頂近くの古井戸周辺の調査が筑穂町教育委員会により行われ、山頂一帯は消滅した。唯一、北東側の堀切 3 本と「馬さし」と呼ばれる曲輪 1 箇所が残されていたが、碎石の対象地となったため、平成 23 年(2011)にそれらも発掘調査が行われ、米ノ山城は完全に消滅した。

よって、幾度かの調査は行われているものの、米ノ山城の全体的な状況については調査が行われないうまま消滅したため、その様相については江戸時代の絵図(第 123 図)と昭和 30 年代の地図(第 121 図)から検討する。

城の主郭は米ノ山山頂に位置し、そこから北東側と南側に延びる尾根上に曲輪が階段状に展開していた。北東側の尾根は小規模な段造成が連続する構



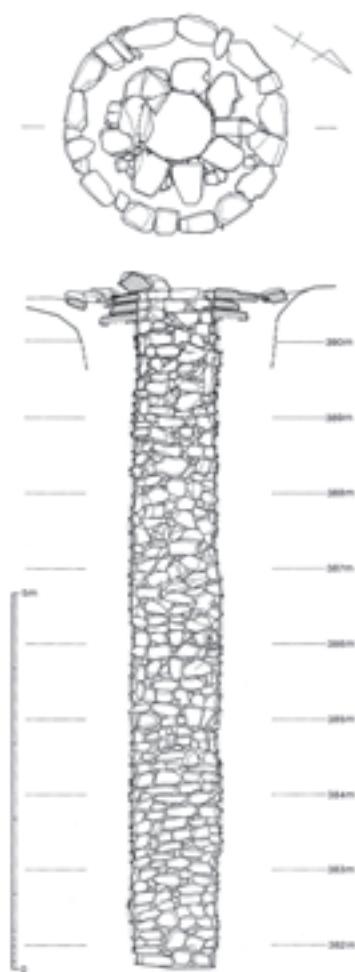
第 121 図 米ノ山城位置図
(昭和 31 年国土地理院発行 1/25,000「太宰府」を一部改変)



第 122 図 かつての米ノ山(写真中央・文献 63)



第 123 図 穂波郡山口村米山古城図(部分・上が北)
(国立公文書館蔵)



第 124 図 井戸実測図
(文献 41)



第 125 図 米ノ山城第 2 次調査 (堀切群・「馬サシ」曲輪・文献 63)

造であるのに対し、南側の尾根上は曲輪が細長く伸びて広い面積を有し、その下方に狭い曲輪が 3 つ並ぶ。南側の曲輪群の尾根からは 3 本の尾根筋が伸びており、それぞれ 1 ～ 2 本の堀切で防御されていた。

一方、主郭の北西側、竹の尾山へと続く尾根はいったん山頂部より低くなって鞍部を形成する。鞍部の南側の谷は『附録』の伝える「馬さしの谷」のようであり、鞍部にある曲輪の通称が「馬サシ」なのも、この名に由来するものと思われる。この鞍部に堀切 4 本を設けて城内側を防御すると共に、その外側に通称「馬サシ」の曲輪を置く。

前述のように発掘調査は過去に二度行われているが、第 1 次調査の対象は、主郭の南西側斜面にあった井戸跡周辺である。調査により、井戸 1 基と基壇状石組み 1 基が検出された。井戸は径 0.95m、深さ 9.2m の円形の石組みで、周縁には外径約 3m の円形石列が見られた (第 124 図)。この井戸は現在山口集落の若八幡宮境内に移築復原されている。第 2 次調査は北西側鞍部の堀切 3 本と通称「馬サシ」の曲輪が対象となり、調査の結果、堀切の断面形状が箱形を呈すること等がわかったが、曲輪では何ら遺構は検出されていない。調査での出土遺物は土器・陶磁器・石臼・鉄砲玉等がある。
【史料】あり 【参考文献】1～4,7～10,11,12,17,29,41,63,90



井戸跡検出状況 (1 次調査)



「馬サシ」曲輪検出状況 (2 次調査)



堀切の断面土層 (2 次調査)

第 126 図 発掘調査状況写真 (飯塚市教育委員会提供)

筑前 83

むかいやまじょう
向山城

郡名 穂波郡
種別 山城

別称 なし
所在 飯塚市馬敷

図幅名 太宰府(東)

【沿革】上馬敷の集落の南東側の山稜部、標高 232m の頂部に位置する。『附録』には「むかい山の古城」として、「城主しれす。東北ハ短く、西南になかし。」とある。

【概要】福岡県教育委員会発行の遺跡等分布地図(文献 103)に掲載された向山城跡の位置は、自然の山林であり、位置についての根拠は不明である。その一方、『全誌』には「村ノ東ニアリ。(中略)

堀跡ノコレリ。」との記載があるため、上馬敷集落の南東側の山稜部を踏査したところ、これまで知られていなかった城郭遺構を確認した。標高 232m の頂部には、東西約 70m の細長い主郭を置き、その西側に連続した 4 本の堀切を設け、痩せ尾根を分断している。一方、東側の尾根線は自然地形が 100m ばかり続いているが、その先には、約 20～30m 四方の曲輪とその北東側に堀切を設けており、城域がここまで延びていることが分かる。北東の先端部については古墳の可能性もあるが、たとえ古墳であったとしても、城郭遺構として再利用しているものと思われる。

【史料】なし

【参考文献】2,4,8～12,17,29



第 127 図 向山城縄張り図(事務局作成)



第 128 図 向山城遠景

筑前 85

たかいしやまじょう
高石山城

郡名 穂波郡
種別 山城

別称 内野城
所在 飯塚市内野

図幅名 大隈(西)

【沿革】近世内野宿の西に高く聳える高石山山頂(標高 480m)に位置する。比高は約 300m と高い。『本編』には「内野村古城址」として「此村の上に高石の城とて古城址あり。城主の名しれす。」とし桑の木之城(84)と共に記されている。『全誌』は「秋月氏ノ端城ト云。城主シレス」とする。

【概要】城郭は高石山山頂部と山頂部から尾根線を東へ約 500m 下った頂部（東山麓部）の大きく 2 箇所位置する。山頂部の曲輪群(第 130 図)は高石山頂に南北に細長い小さな曲輪を置き、南北それぞれの尾根上に堀切を設け防御する。また、東山麓部の曲輪群(第 131 図)は、標高 408m の頂部に約 10m 四方の小規模な曲輪を 2 つ置き、西側に堀切 1 本を設ける単純なものである。『古城図』には高石山城を描いたものがあり、それを見ると、描かれているのは、現状とは若干異なるものの、東山麓部の曲輪群(第 131 図)の方のようである。そして、絵図上方の高石山山頂と思われる箇所には城郭遺構は描かれていない。一方で、東山麓部から北東へ下った頂部にも「別曲輪」として曲輪と堀切を描いているが、現地で確認することはできず、存否は不明である。

【史料】なし

【参考文献】1,2,4,6 ~ 12,17,29



第 129 図 筑前穂波郡内野村高石故城之図
(部分・国立公文書館蔵)



第 130 図 高石山城（山頂部）縄張り図
(岡寺 良作成)



第 131 図 高石山城（東山麓部）縄張り図
(岡寺 良作成)

筑前 86

おうぎやまじょう
扇山城

郡名 穂波郡
種別 山城

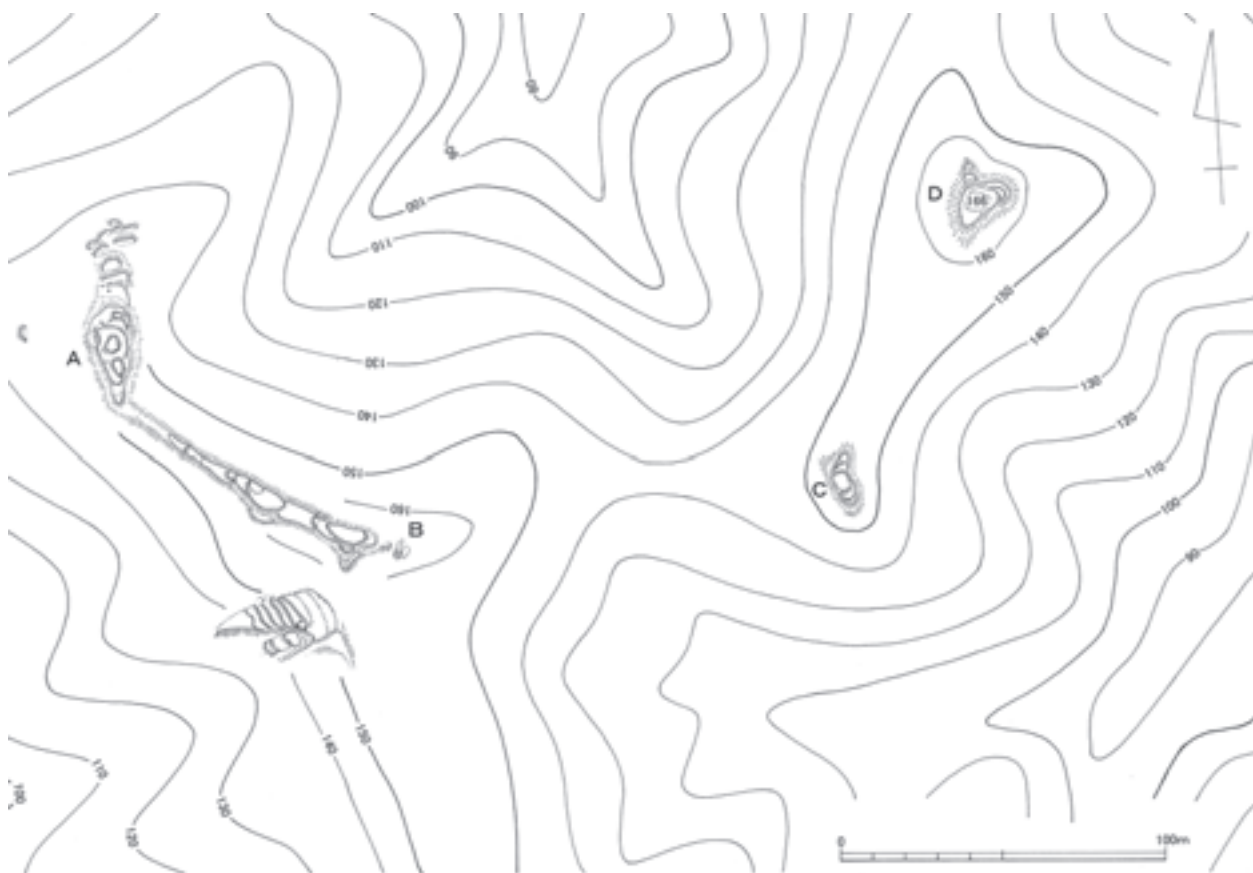
別称 修理殿城
所在 飯塚市阿恵

図幅名 大隈(西)

【沿革】穂波川東岸に面した標高約 170 m の山稜部に位置する。『本編』には「秋月の端城也。村民は修理殿城と云。」とし、その他の地誌にも同様の記載が載せられる。また、『本編』「八木山村古戦場」にも、天正 9 年(1581) 11 月、戸次・高橋両軍が秋月領内に侵攻したため、秋月方の「白井、扇山、茶白山、高の山、馬見などの城代共」が合戦に及んだことが認められ、扇山城が穂波郡における秋月方の城として取り立てられていたことがわかる。また、『古城図』には「土人ハ向ヘノ山ト云」とあり、城のある山を「向山」と呼んでいたと思われる。

【概要】城がある山稜部は、なだらかな尾根が細長く伸びているが、穂波川に面した標高約 170m 地点を中心に尾根上に細長く曲輪が伸びる構造を呈し、尾根上の頂部となる要所に曲輪を置く構造をとる。

穂波川に突き出た尾根の頂部に主郭 A を置き、主郭を含め、非常に小さくあまり平坦ではない曲輪群が尾根上に約 200m にわたって展開する。主郭の平坦面上には古墳と思われるような高まりがいくつか存在したり、曲輪と曲輪の間には、途中自然地形となる場所もあり、平坦面化は顕著ではない。その曲輪群の南側の谷部分には、雛壇状に平坦面が造成され、人為的な平坦地形であることはわかるが、これが城郭に伴う遺構か否かは不明である。これらの曲輪群から東にかけては B に堀



第 132 図 扇山城縄張り図(中村 正作成図面を改変して事務局作成)



第 133 図 穂波郡阿恵村扇山古城図（部分・国立公文書館蔵）

切 1 本を設けて区画・防御するが、そこから東側は自然の尾根の鞍部で、120m ほど東へ進んだ C の頂部までは城郭遺構は認められない。C の頂部には 20m 四方の狭い空間に小さな曲輪がいくつか並列するにすぎない。そして、さらに北側へ尾根は続き、100m ほど先の頂部（標高 166m・D 地点）にも小曲輪群が確認できる。江戸時代の絵図（第 133 図）には C 地点には「古城ヨリ低シ」として曲輪を描いているが、D 地点は自然の山として描いている。また、絵図には、紙を継ぎ足し、A 地点の南側へ続く尾根筋に小曲輪を 5 つ描いているが、現地はなだらかな自然地形で、曲輪とは断定できない。しかし絵図には A 地点から谷を挟んで南側の尾根に当たる箇所いだけに、「巔モナラシ在之砦址ノコトシ」とあり、さらに城域は広がる可能性がある。扇山城一帯は、近隣に一ノ谷城、茶臼山城、高石山城が分布し、茶臼山城や高石山城も、扇山城同様、なだらかな尾根の頂部ごとにいくつかの曲輪群をもつ構造をとるため、周辺の城郭の広がりとも併せ、今後さらなる広範囲な踏査が必要である。

【史料】なし 【参考文献】1,2,4,7～9,10,11,12,17

筑前 87

ちやうすやまじょう
茶臼山城

郡名 穂波郡
種別 山城

別称 なし
所在 飯塚市阿恵・山口

図幅名 大隈(西)

【沿革】山口川に面した四郎丸集落の南の山稜部（茶臼山山頂（標高 286m））に位置する。『本編』には「秋月の端城也。」とあり、『附録』には「村民ハ矢臥山といふ。」とあり、本丸、二の丸、三の丸跡の規模が記される。

【概要】城域は大きく3箇所に分かれており、主郭部とも呼べる中心部分は高石山へ続く山稜の中腹、茶臼山山頂（標高 286m）に位置する。そして、さらに北東側を下った標高 179m 地点（北東山麓）と南側へ上った標高 357m 地点にも位置する。

茶臼山城の主体部分とみられる標高 286m 地点を中心とする曲輪群（第 134 図）は、なだらかな尾根上を、鞍部や3つの頂部を含み込みながら、緩やかに曲輪が展開する構造を呈する。山頂部部分周辺を除けば、平坦面はあまり明瞭ではなく、自然地形に近いものも多い。防御遺構としての堀切は、曲輪群の先端部や曲輪と曲輪の間の鞍部などに併せて7箇所確認できる。曲輪の続く尾根線の総延長は 500m を超え、かなりの規模といえる。



第 134 図 茶臼山城縄張り図 (①主郭部・岡寺 良作成)



第 135 図 茶臼山城位置図



第 136 図 茶臼山城遠景



第 137 図 茶臼山城縄張り図
(②北東山麓部・岡寺 良作成)



第 138 図 茶臼山城縄張り図
(③南側尾根部・岡寺 良作成)

この茶臼山山頂の曲輪群から北東側へ約 500m 下った尾根上には、さらに別の曲輪群が見られる (第 137 図)。尾根上をおよそ 200m にもわたって曲輪が連なるが、ここもまた平坦面が非常に不明瞭で、平坦面化は顕著とは言えない。北側の最も先端部分の曲輪のみが平坦面を明瞭に作り出すばかりである。そして、曲輪群の中ほどに 2 本、南端部に 1 本、併せて 3 本の堀切を設け、曲輪群を防御している。

茶臼山山頂から南西へ尾根線を 500m ほど登った標高 357m の頂部を中心とした箇所にも曲輪群が見られる (第 138 図)。江戸時代の絵図 (第 139 図) に、高石山の北に「旧茶臼山」と記される場所である。ここも緩やかに延びる尾根上を、自然地形を含み込みながら曲輪を配する構造で



第 139 図 茶臼山城と旧茶臼山古城の位置関係 (上が西)
(「筑前穂波郡内野村高石故城之図」(部分・一部改変)
(国立公文書館蔵))



第 140 図 茶臼山城堀切



第 141 図 茶臼山城遠景（左）と筑豊盆地



第 142 図 筑前穂波郡阿恵村茶臼山古城図
(部分・国立公文書館蔵)

ある。東側を除く三方に 1 本ずつ堀切を設けてはいるが、非常に粗野な印象を受ける。

なお、ここからさらに南側へ 1 km ほど登ると高石山山頂へたどり着くが、それまでの間、尾根上には明瞭な城郭遺構は認められない。

以上のように、茶臼山城の縄張りは大きく三か所に分かれていることがわかるが、江戸時代の絵図を見ると、茶臼山山頂周辺の主郭部を絵図の中心に大きく明瞭に描き、北東山麓部の曲輪群も堀切、曲輪を明瞭に描く。旧茶臼山にあたる南側尾根の曲輪群も小さくではあるが、曲輪面を着色しており、これら全てが茶臼山城としての認識により描いていたと推察される。

【史料】なし

【参考文献】1,2,4,6～12,17,29

筑前 88	いちのたにじょう 一ノ谷城	郡名	穂波郡	別称	なし	図幅名	大隈(西)
		種別	山城	所在	飯塚市平塚・阿恵		

【沿革】飯塚市平塚に所在するとされる城郭で、『附録』に「村の南三町斗にあり。城主詳ならず。本丸二ノ丸及堀切の跡、所々に残れり」とある。

【概要】所在については、既往の分布地図（文献 103）には、平塚集落の東、嘉穂郡桂川町土師との境にあたる丘陵上に、周知の包蔵地として登録されていたが、これまで遺構は確認されていなかった。

また今回の踏査においても自然地形と中近世墓とみられる集石が見られるのみであった。地誌の示す場所とも異なるようであるため、平塚集



第 143 図 一ノ谷城堀切

落の南側の山稜部を踏査したところ、大字阿恵との境にあたる標高 198m 地点に城郭遺構と思われる地形の起伏が存在したため、一ノ谷城と想定した。城の構造は、頂部に小曲輪を置き、南側の尾根上に堀切 2 本を設ける至って単純な構造である。

地誌にある本丸・二ノ丸というほどの規模は見られないが、西側の谷を挟んだ丘陵上には扇山城が位置し、双方の城が連繋をとるには都合のいい場所といえよう。

【史料】なし 【参考文献】2,4,8～12,17,29



第 144 図 一ノ谷城縄張り図 (事務局作成)

筑前 90	このみやまじょう 許斐山城	郡名	穂波郡	別称	木の実山城	図幅名	飯塚(西)
		種別	丘城	所在	飯塚市幸袋		

【沿革】旧飯塚宿の北、長崎街道沿いの幸袋町の許斐神社境内地が城にあたる。神社は比高約 20m の独立丘陵上に位置する。『本編』に「秋月の端城也。」とあり、『附録』は「本丸の跡一反余、二の丸跡一反半ばかり。堀切の跡も残れり。」とする。



第 145 図 許斐山城跡の許斐神社社殿

【概要】現在、城跡の曲輪面は許斐神社の境内となっており、およそかつての曲輪の広がりについて踏襲しているようである。しかしながら、後世の神社整備等による改変によって、『古城図』に描かれた社殿背後の堀切などの城郭遺構は、現状では確認できない。「城ノ腰」の地名が残る。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,7～12,18,22,100



第 146 図 穂波郡河袋村木實故城図 (国立公文書館蔵)

筑前 97

みやまじょう
宮山城

郡名 穂波郡
種別 丘城

別称 津原城・城山城
所在 飯塚市津原

図幅名 飯塚(西)

【沿革】内住川に北面した津原集落の丘陵部に位置した。『本編』には、「宮山の上にあり。小さ城址なり。宝満の城主高橋氏の家臣岡松八郎左衛門と云者、是に住せしと云。」とある。『全誌』に「城山城」、『福岡県の城』に「津原城」として紹介される。

【概要】かつて津原の老松神社の北側には、「城の山」と呼ばれる小山が存在し、そこに宮山城が位置していたが、昭和40～50年代の宅地開発によって、調査なされることなくその大半が消滅した。『古城図』を見ると(第147図)、老松神社の北側に小丘陵があり、そこに主郭といくつかの曲輪、堀切が描かれている。『附録』にも本丸とその北・西・東に曲輪があり、東側は調馬場の跡としており、双方の記載がほぼ一致する。

また絵図には、主郭の西に「古城ヨリ低シ」と記した曲輪を描き、「土人ハ是ヲ城址ト云 墓ヲ城主ノハカト云」と記載する。『附録』でも本丸の百歩(約200m)ほど西に砦の跡の平地があると記載しており、このことと思われる。現地にもこの西側の丘陵(標高60m)が残されており、丘陵上には近世墓が残存し、『古城図』の記載した曲輪面が残されていることがわかるが、実際に城郭施設として機能したかは不明である。

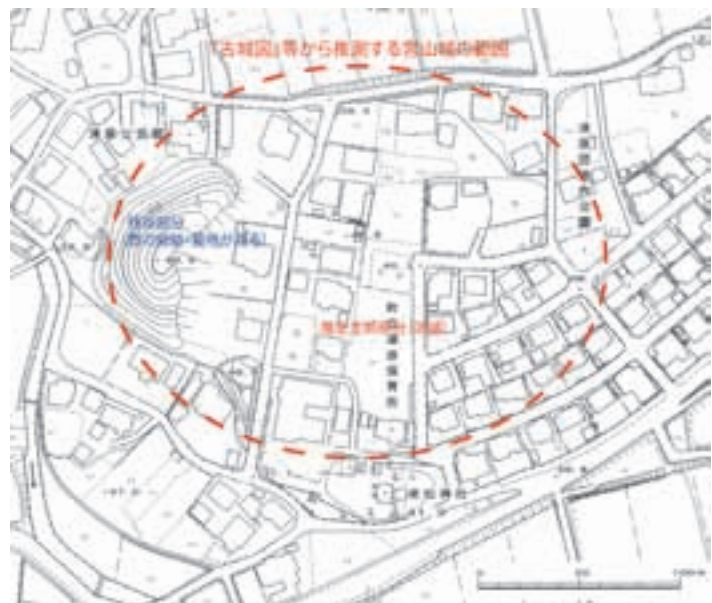
以上のように、宮山城は西端のごく一部を残して、ほぼ消滅していることがわかる。

【史料】なし

【参考文献】1,2,4,6～11,65



第147図 穂波郡津原村宮山古城図(部分・国立公文書館蔵)



第148図 宮山城推定位置図
(飯塚市発行1/2,500地形図に事務局加筆作成)

筑前 98

じょうやまじょう
城山城

郡名 穂波郡 別称 北古賀原城・北古賀城
種別 山城 所在 飯塚市久保白・北古賀

図幅名 飯塚(西)

【沿革】穂波川支流の馬敷川の北岸、北古賀と久保白の境の丘陵上(通称「城の山」)に位置する。『本編』には「久保白村にあり。秋月の端城也。」と記載される。『古城図』には「土人北古賀原ノ城ト云」とする。

【概要】標高 131m の頂部から東側へ約 100m にかけて自然地形に近い平坦地形が続くばかりで、明瞭に平坦にはしていない様子が見受けられる。頂部の西側には尾根上に堀切が 1 本施されるのみである。『古城図』にも 2 段にわたって曲輪が描かれ、下の段の曲輪には「此曲輪低シ サタカナラズ」とあまり明瞭な平坦面ではないと書かれている。

これらの曲輪と堀切の東西両側は、斜面となっており、かなり下のほうには人為的な平坦面なども見られ、既往図(文献 10 に掲載)にはさらに広く城域が設定されたものもあるが、現地の状況や『古城図』と比較すると、示した図面の範囲を城域とするのが適当であると考えられる。

なお、久保白地内には「城越」の地名が残る。

【史料】なし 【参考文献】1,7～9,10,11,65



第 149 図 城山城縄張り図(事務局作成)



第 150 図 穂波郡北古賀村城山古城図(部分・国立公文書館蔵)

筑前 99

おさこじょう
小佐古城

郡名 穂波郡 別称 於佐古城・城山城
種別 山城 所在 飯塚市大分・北古賀・久保白・高田

図幅名 飯塚(西)

【沿革】穂波川・馬敷川の支流大分川の北岸の丘陵上で、大分、北古賀、久保白、高田の旧四ヶ村の境にあたる 2 つの頂部にわたって城域が展開する。『本編』には「北古賀村の内高田の境の山上に城

址二所有。城主不詳。」とある。『古城図』の「北古賀村城山古城図」には「小佐古古城 里人は久保ノ城山ト云フ」とあり、城山城とも呼んでいたと想定される。『附録』・『全誌』・『嘉穂郡誌』には大分村に「於佐古城跡」、久保白村に「城山城跡」と別々の城として掲載しているが、久保白の城山城跡は旧四ヶ村の境界上にあるとしており、明らかに『古城図』の言う



第151図 「穂波郡北古賀村城山古城図」に描かれた小佐古古城

「久保ノ城山」を指しており、同一箇所の城を別々のものとして報告している。この近辺には北古賀・久保白の境の「城山城 (91)」や津原に「城山城 (宮山城・90)」など同一名称の城郭が多いことから混同されてしまったものと思われる。

【概要】城域は南北2つの丘陵頂部からなる。北側の頂部（標高約150m）には東西に細長い曲輪とその周囲に腰曲輪を巡らし、西側には堀切1本を設け、西側を防御している。堀切の西側は不明瞭な平坦面がある。この曲輪から南側は尾根の鞍部となるが、基本的には自然地形である。そして、南へ約100m地点の尾根の頂部（標高152m）にも10～20m四方の曲輪を置き、周りに腰曲輪を巡らし、南東側の尾根上に堀切1本を設けて防御している。『本編』のいう「城址二所」の姿をまさに示している。

【史料】なし 【参考文献】1,2,4,8,9,10,11,12,17,29



第152図 小佐古古城縄張り図（事務局作成）



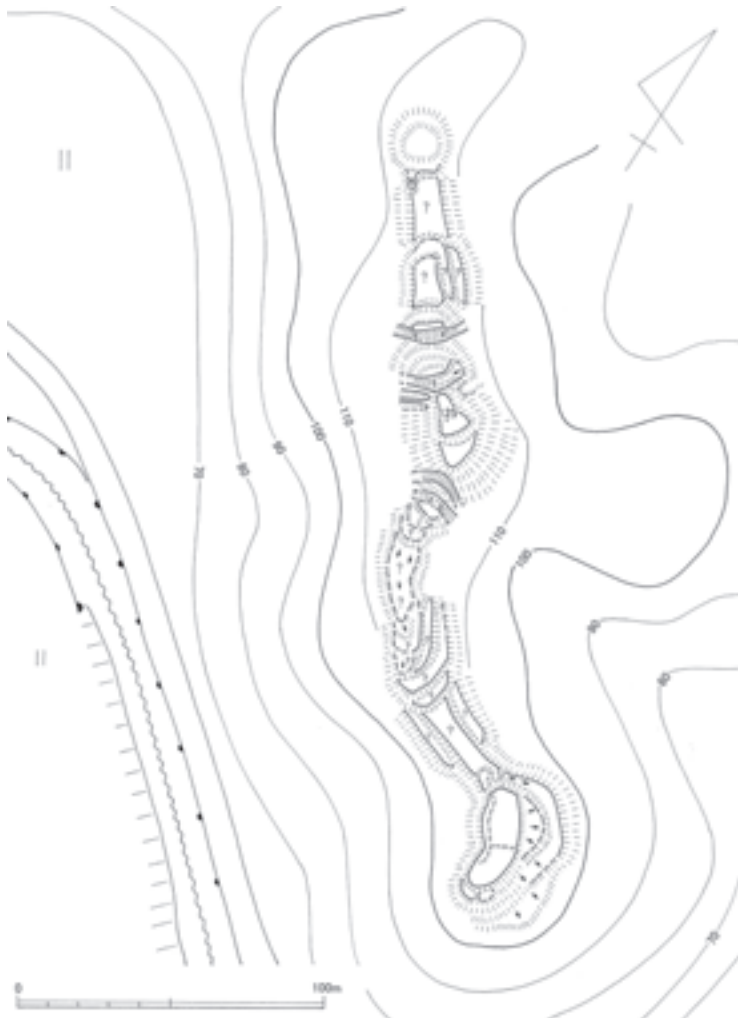
第153図 筑前穂波郡小佐古古城図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 100	たかやまじょう 高の山城	郡名	穂波郡	別称	高野山城	図幅名	飯塚(西)
		種別	山城	所在	飯塚市高田		

【沿革】内住川の北岸、川が蛇行して南側に大きく突き出した標高 125m の丘陵上に位置する。比高約 60m。『本編』には高山古城として「秋月の端城也」とあり、『附録』は「高の山古城」、『古城図』は「高野山古城」と呼んでいる。

【概要】丘陵頂部の標高 125m 地点には、約 10m 四方の曲輪が置かれ、南側にも平面三角形の曲輪が見られる。この2つの曲輪の南北双方の尾根上に2本ずつの堀切を設け、嚴重に防御している。この縄張りの状況は、『附録』の「本丸の跡一反余、其下にも一反斗の平地あり。南ハ險阻にして堀切の跡二所あり。」という記載に合致する。しかし、堀切のさらに南北両側の尾根上には、明らかに人為的な平坦面が継続している。これは『古城図』(第 155 図)にも曲輪として記載されており、絵図が描かれた文化 15 年(1818)には既に平坦面があったことがわかる。しかし堀切などの防御

遺構が見られないことや、『古城図』にも「麦圃」や「櫓畠」など、耕地に利用されていることなどから、廢城後の改変である可能性が高いと考えられ、



第 154 図 高の山城縄張り図(事務局作成)



第 155 図 筑前穂波縣高田邨高野山古城図(部分・国立公文書館蔵)

堀切で挟まれた空間が確実に城域として捉えられ、その両側の空間の大半は後世の改変を受けていると考えるのが妥当である。

なお、『古城図』には「土人ハ城ノ鼻或ハ城ノ隈ト云」とあり、「城ノ鼻」「城ノ浦」「城林」などの地名がみられ、この城郭に関連するものとみられる。

【史料】なし

【参考文献】1,2,4,6～9,10,11,12,17,29



第 156 図 高の山城堀切

筑前 102	かさぎやまじょう 笠木山城	郡名	穂波郡 / 鞍手郡	別称	笠置山城	図幅名	直方 (西)
		種別	山城	所在	飯塚市庄司・相田・宮若市宮田		

【沿革】穂波郡と鞍手郡との境に位置する笠置山山頂（標高 421m）に位置する。『本編』には、「庄司村にあり。本丸、二丸、三丸の址段々にあり。から堀有。（中略）初宗像の端城にして、占部越前守宗安在城す。其後秋月氏の城と成て、乗手石見、柏井九郎左衛門、恵利出雲、此三人城代たりしと云」とあり、城址の状況と、当初宗像氏の出城であったものが、後に秋月氏の城となったことが記される。また『覚書』には、「穂波郡笠城山」として、城主に野津手石見、恵利出雲、柏江掃部の名があがっている。このことから、宗像氏、後に秋月氏が関与した城郭であることが推測される。

【概要】山頂部を中心とし、主にその東側の尾根伝いに展開する広がりを見せ、主要部分のみでも総延長約 400m を越える長大なもので、穂波・鞍手郡を代表するような拠点城郭といえる。

山頂部には、東西 40m、南北 10～15m の主郭 a があり、一段下った北東側には主郭を取り巻くように、城内最大の広さを持つ曲輪 b が配される。主郭 a の南側と西側は尾根続きであるが、そこには、逆 V 字形を呈する執拗なまでの堀切群が見られ、嚴重に防御する様子が窺える。特に南側の尾根続きの c には、堀切群がいくつも切り合うような形でまるで迷路状を呈する堀切群が見られ、斜面が非常に急角度を呈することと、一帯が結晶片岩の岩山であることとも併せ、より一層主郭へのアプローチを困難にしている。一方、西側の尾根続きの d にも大型の堀切群とそれに付随して、一見「武者溜まり」ではないかとも思われる巨大な窪み状の掘り込みも確認できるが、詳細な性格は不明である。

曲輪 b の東側へは、曲輪 b の南側から出て不明瞭な平坦地形 e へと接続している。そして、堀切 f の南側を跨ぎ、さらにもう一つのピークである曲輪 g へと続いている。曲輪 g は東西 25m、南北 20m で、現状では高さ 30cm にも満たないが、堀切 f に隣接して低土塁が巡っている。

曲輪 g の東側には、堀切 h があるが、北端部に石垣を持つ土盛りを設けて堀切を埋め、さらに東側への曲輪群へとつながっている。そして、曲輪 i・j と続き、再び堀切 k を南側から跨ぐように曲輪 l（通称・東観音）、曲輪 m へと続いている。

そして、当城において最も特筆すべき遺構としてあげられるのは、並列的に並んだ曲輪群 a・b・e・g・i・j・l・m の北側斜面にほぼ隙間無く施された約 36 本の豎堀からなる畝状空堀群である。これらの畝状空堀群の中でも尾根へとつながる o には、空堀群のさらに下位にいわゆる捨曲輪ともいえる小型の曲輪群と堀切等が設けられている。

また、堀切kの北東側の尾根続きにも堀切p・qが設けられ、尾根続きからの防御に万全を期しているかのようである。

曲輪mの東側は、城域を画するかのような非常に大規模な堀切2本(r)が掘り込まれる。これらの堀切群の東側は一見、不明瞭な自然地形にも見えるが、北斜面側には土塁状遺構sが見られ、人工的に加工された地形であることが分かる。この土塁は、途中不明瞭になりながらも、約130m続き、t地点で南に折れて収束する。そのt地点付近には畝状空堀群と堀切uも見られる。この東側の尾根上は自然地形が続き、城域はここまでであることが分かる。

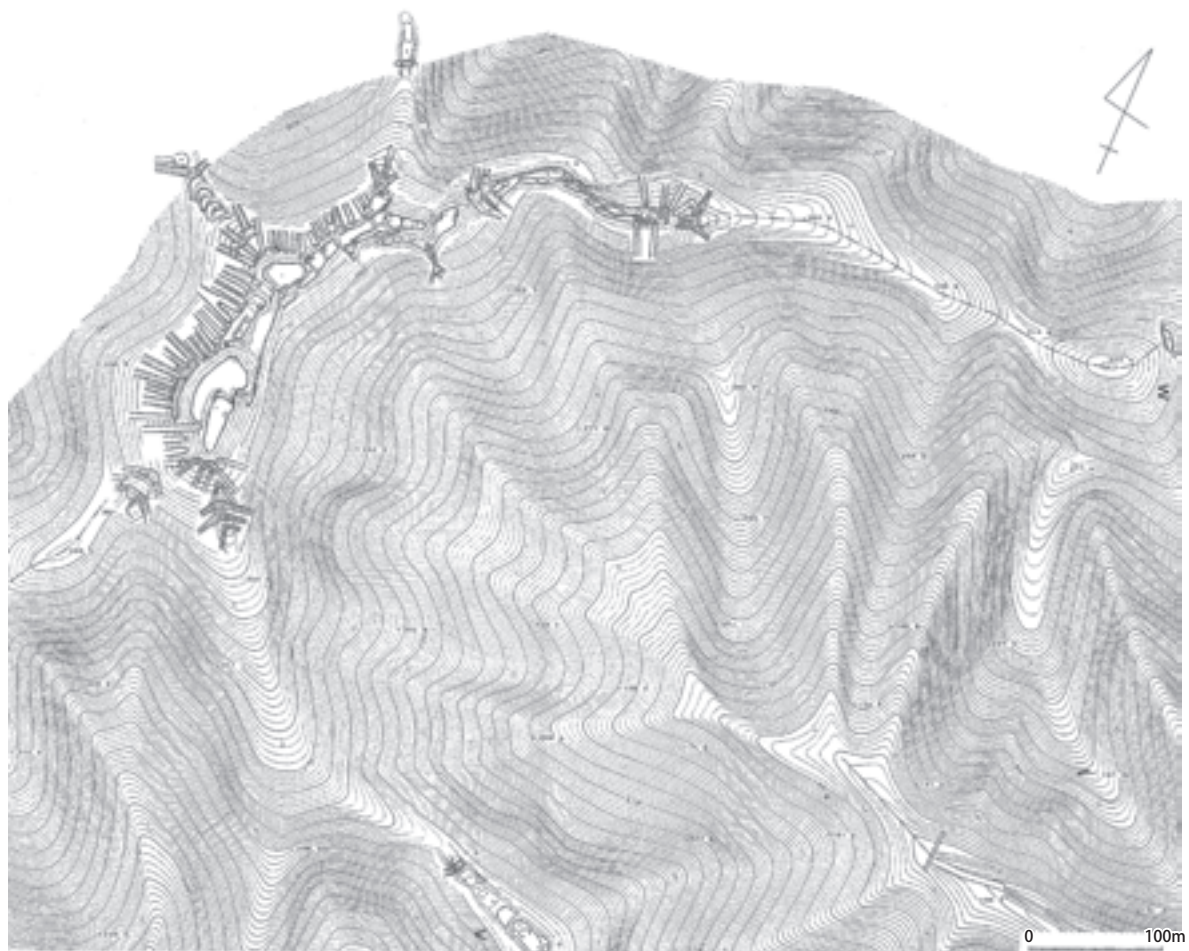


第157図 h地点北側の石垣

また、城域南西端のcの堀切群の南約300m地点の自然の鞍部地形には堀切vが見られ、その南側は自然地形ながらもピーク状になっており、出曲輪もしくは駐屯地が想定できる。また、城域東端のuの堀切のさらに東約350m地点には縦堀状の掘り込みwが見られ、城郭遺構と断定することは困難だが、参考的に図示する。

周辺には「笠城」「城道」「城ノ下」などの地名が残り、当城に関連したものと考えられる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,6～9,10,11,12,13,18,19,22,77,94,100



第158図 笠木山城縄張り図(①全体)(文献94・岡寺良作成)



第 159 図 笠木山城縄張り図 (②中心部分) (文献 94・岡寺良作成)

筑前 104	かづらやまじょう 葛山城	郡名	穂波郡 / 鞍手郡	別称	摺鉢山城	図幅名	直方(西)
		種別	山城	所在	飯塚市庄司・鞍手郡小竹町新多		

【沿革】飯塚市庄司に独立峰としてかつて聳えていた摺鉢山（通称「庄司富士」標高約 160m）山頂に位置したとされる。『本編』には「笠木の出城也」とし、『附録』には「本丸跡ハ此村（庄司村）に属し、二の丸跡ハ新田村に属せり。山の西南に堀切の跡残れり。」とする。

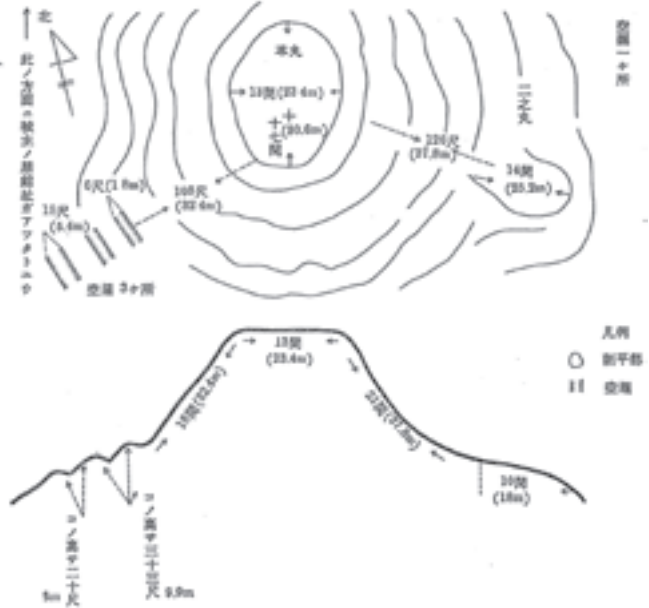
【概要】城のあった場所は昭和 30～40 年代頃の碎石によって現在は全て消滅した。かつての調査図（第 161 図）によると、山頂部に主郭を置き、その東側に曲輪を一つ置いて防御している。さらに南西側斜面に堀切 3 本を築いて麓側からの防御とした構造であったとみられる。

【史料】なし

【参考文献】1,2,4,6～12,18,22,100



第 160 図 かつての摺鉢山（文献 18）



第 161 図 葛山城調査図（文献 18）

⑥嘉麻郡

筑前 109	かやじょう 萱城	郡名	嘉麻郡 / 鞍手郡	別称	なし	図幅名	直方(東)
		種別	山城	所在	飯塚市勢田・直方市中泉		

【沿革】飯塚市勢田の木浦岐地区と直方市中泉との境にあたる丘陵上に位置する。地元の伝承では、直方の鷹取城の出城「カヤ城」とされ、木浦岐集落の松尾神社は落城伝説にまつわるもので、京都から勧請されたと言われている。

【概要】木浦岐集落の北側背後の丘陵頂部（標高 130m）から緩やかに延びる尾根線上、木浦岐と中泉との境界にあたる緩やかになった箇所位置する。曲輪



第 162 図 萱城遠景



第 163 図 堀切状遺構



第 164 図 萱城縄張り図（事務局作成）

面はほとんど平坦面化がなされておらず、自然地形に近い様相を呈するが、東側の尾根上の緩斜面には畝状空堀群で防御するとともに、一部堀切状の遺構も曲輪内に認めることができる。また、畝状空堀群に沿って土塁状の高まりが継続しているが、城の縄張りの外まで続いており、これは後世の造作である可能性も考えられる。周囲は後世の平坦面なども多くみられ、主に城域の北側にかけては未踏査ではあるが緩やかな地形が続いていることから、詳細な検討が必要である。また『種々』には鹿毛馬に「萱城址（小笠原氏）」とあり、当城を指していると思われる。

【史料】なし 【参考文献】6,8～11,15,66

筑前 115	もとよしじょう 元吉城	郡名	嘉麻郡	別称	大門城	図幅名	飯塚（東）
		種別	山城	所在	飯塚市大門・仁保・鹿毛馬		

【沿革】庄内川東岸、大門、仁保、鹿毛馬の境界となる高尾山山頂（標高 165m）に位置する。『附録』には「城山」として元吉村、大門村、鹿毛馬村の境に位置し、「城主詳ならず。」とある。庄内町分布地図（文献 104）には、「大門城」と名付けている。

【概要】高尾山山頂には現在、筑豊ハイツから続く遊歩道と展望台があって、一部破壊されているものの、往時の城郭の様相は地表面観察からも窺い知ることができる。その縄張りは、尾根地形に沿って略三角形の主



第 165 図 元吉城遠景

郭を山頂部に置き、その周囲の尾根上に堀切を設けて防御するものである。主郭を除いた平坦面はあまり平坦ではなく自然地形に近い。既往図（文献 27）にはこの範囲だけではなく、元吉地内にまで至る尾根線上約 600mにもわたって、曲輪群が続くような縄張りとなっているが、踏査の結果から緩やかな自然の尾根地形として除外した。

北側には「城本谷」という関連地名も残る。

【史料】なし

【参考文献】2～4,6,8～12,15,20,27



第 166 図 元吉城縄張り図（事務局作成）

筑前 116	やまのじょう 山野城	郡名	嘉麻郡	別称	高野城・高安城・香安城	図幅名	飯塚(東)
		種別	丘城	所在	嘉麻市山野		

【沿革】遠賀川中流域西岸に面した山野の集落の中の字「城ノ辻」の丘陵上に位置する。『本編』には「宇佐大宮司宮成氏到津氏か城址と云伝ふ。」とあり、『附録』には「古城地」として「里民ハ高安の城跡といふ。」とし本丸・二の丸・からほりの跡を示す。『古城図』には「高野故城」とする。

【概要】心城山香安寺と若八幡神社の背後の丘陵地が城跡にあたるが、丘陵上は近現代の建物の基礎が残されていたり、後世の段造成のため明確な城郭遺構は確認できない。『古城図』（第 167 図）を見ると、南北に細長い主郭の南から南西側に土塁、南側には堀切、それ以外の三方には帯曲輪を巡らせる。そしてさらに東側から北側にかけて横堀と縦堀により防御している。近辺には「浦ノ園」という字が残り、城主の館があったとされ、城の南西側には「浦の園（殿）館跡」として周知の包蔵地（県 500010・市 5005）である。



第 167 図 嘉摩郡山野村高野故城図（部分・国立公文書館蔵）

【史料】なし

【参考文献】2～4,6～12,30

筑前 118

ひのやまじょう
日野山城

郡名 嘉麻郡
種別 山城

別称 金毘羅山城・琴平山城
所在 嘉麻市上白井

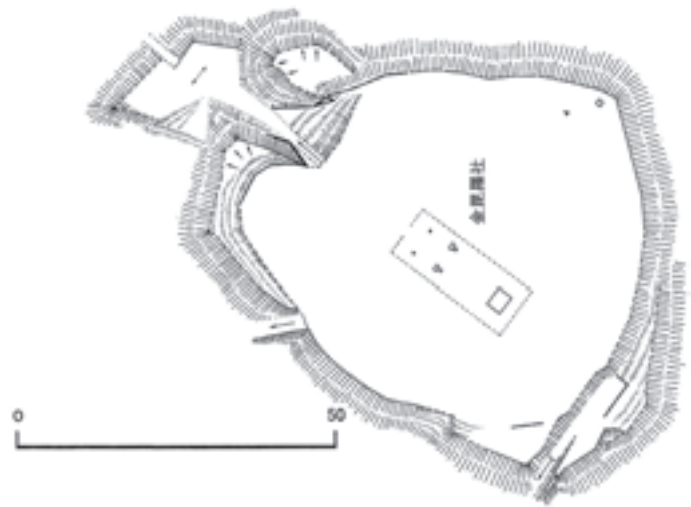
図幅名 大隈(東)

【沿革】嘉麻市役所の南に聳える琴平(金比羅)山山頂(標高 123m)に位置する。『全誌』には「(小早川)隆景ノ臣、日野左近ト云者居レリト云」とあり、織豊期の小早川隆景の支城とされる。

【概要】現在、琴平山山頂には、白峰神社があり、石祠や灯籠などが残されており、平坦面が広がっている。ただ、堀や土塁などの明瞭な城郭遺構は確認することはできず、積極的に城郭に改修された痕跡は認められない。

【史料】なし

【参考文献】4,6,7～10,12,82



第 168 図 日野山城縄張り図 (文献 82・木島孝之作成)

筑前 120

せんずやかた
千手館

郡名 嘉麻郡
種別 山城

別称 千手八太郎宅
所在 嘉麻市千手

図幅名 大隈(東)

【沿革】嘉麻市千手は近世秋月街道の宿場町のひとつとして知られるが、その千手集落の南側の裏手にある千手八幡宮の境内には戦国期の城郭が残されている。文献 12 によると、「千手八太郎宅址 東千手村の東南二十八町元宮にあり、千手は秋月家の土なり」とある。

【概要】現在、境内一帯は半独立丘陵をなしており、標高 116 m の八幡宮本殿のある場所は、南北約 80m、東西約 50m の主郭にあたる。

また、その主郭の北側と西側には幅 10m を越える非常に大規模な横堀が圍繞しており、独立丘陵上の方形居館的な様相を呈している。東側は一部帯曲輪が見られる他は切岸となっており、南側は後世の境内の改修等の所作により、よく分からなくなっている。

【史料】あり

【参考文献】4,7,9～10,11,12,24



第 169 図 千手館縄張り図 (文献 11・岡寺良作成)

筑前 122

はせやまじょう
長谷山城

郡名 嘉麻郡

別称 小岳城・御岳城

図幅名 大隈(東)

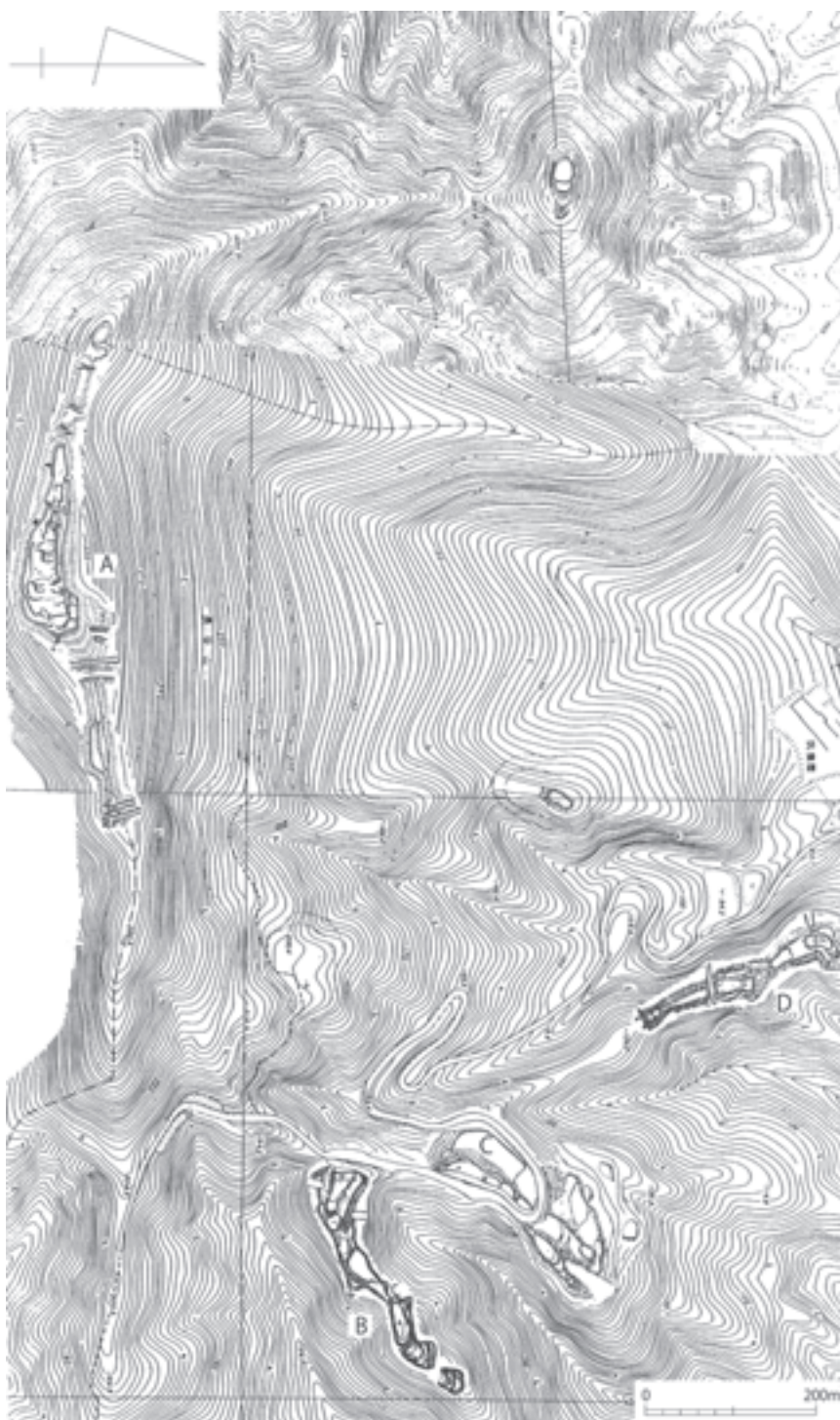
種別 山城

所在 嘉麻市平山・九郎原・上臼井・嘉穂才田・嘉穂郡桂川町土師

【沿革】嘉穂盆地から目立つように嘉麻市と嘉穂郡桂川町の境に聳える長谷山(標高311m)の山頂付近に位置する。

『附録』には「小嶽」の説明として、別名に長谷山のほか、荒平、大平山、御嶽城といい、高橋(高階)盛綱の居城で本丸、堀切が残ると記す。

【概要】城域は長谷山全域に及んでいる。中心は山頂部分Aで、東西の尾根上に堀切あるは縦堀で防御し、その間の緩やかな平坦面約200mを曲輪とする。また、山腹部分についても、北東側を中心としてB・C・Dの尾根上に堀切で防御した曲輪群を設けている。こちらの曲輪は山頂部分よりも明瞭な平坦面を呈している。この他、図示してはいないが、谷部分などを中心に平坦面が展開している。長谷山は南側に護国山量壽院長谷寺の存在を伝え(『附録』による。現在は観音堂を残すのみ)、北側山麓にも平山八幡宮があるなど、山岳霊場としての色彩も濃



第 170 図 長谷山城縄張り図(中村 正作成図を一部改変して事務局作成)

く、山頂では経塚や大量の土師皿の集積、山麓部分でも中世前期の土器・陶磁器が採集されており、宗教遺跡としての側面も大きく、今後、総合的な検討が必要とされる。

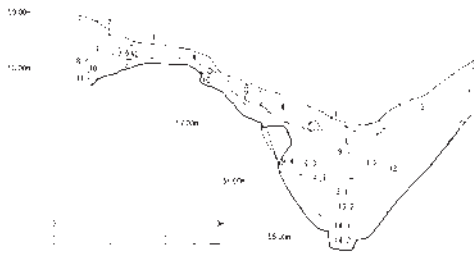
【史料】なし 【参考文献】2,4,6～10,11,12,111

筑前 123	ちくぶじまじょう 竹生島城	郡名	嘉麻郡	別称	なし	図幅名	大隈(東)
		種別	丘城	所在	嘉麻市西郷		

【沿革】日野山城のある琴平山の東、竹生嶋神社の鎮座する独立丘陵上に位置する。地誌類等には一切記載されず、平成17年(2005)に碓井町教育委員会の測量調査によって中世城館跡と判明し、その後発掘調査が行われた。

【概要】現在の神社社殿のある平坦面を主郭とし、その西側背後にある高まり(前方後円墳の後円部)を取り込むようにして、横堀を巡らす構造をとる。堀底の形態はU字かV字形を呈する。

【史料】なし 【参考文献】59



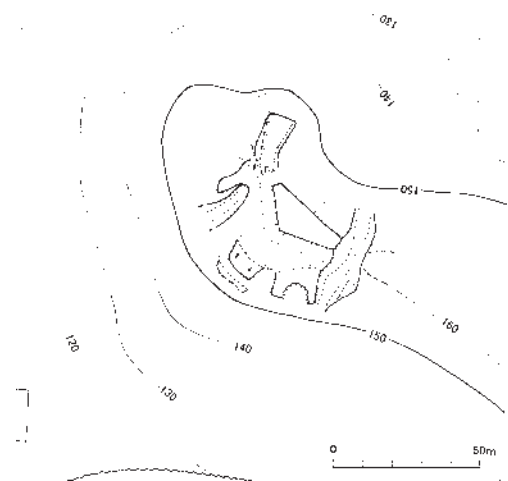
第171図 竹生島城横堀土層図(文献59) 第172図 竹生島城実測図(文献59掲載図を改変して事務局作成)

筑前 124	しばはらじょう 柴原城	郡名	嘉麻郡	別称	なし	図幅名	大隈(東)
		種別	山城	所在	嘉麻市大力		

【沿革】千手川東岸、旧秋月街道に面した標高約160mの丘陵上に位置する。嘉麻市分布地図(文献114)に場所が掲載されるが、地元で「デンシロ」と伝えられるのみである。

【概要】西側に大きく突き出した丘陵先端の頂部に東西25m、南北20mほどの主郭を置き、尾根続きの東側は堀切で大きく断ち割る。南側と北側にそれぞれ曲輪を置き、西側は縦堀をつなぎ合わせたような堀切を設けて遮断している。既往の情報は皆無に近く、城主などは全く伝わっていない。

【史料】なし 【参考文献】114



第173図 柴原城縄張り図(中村 正作成図を改変して事務局作成)

筑前 125 ^{かやんじょう} 茅城

郡名 嘉麻郡 / 夜須郡 別称 馬見城・武の城 図幅名 小石原 (西)
種別 山城 所在 嘉麻市馬見・朝倉市江川

【沿革】馬見山山頂から西の稜線伝い標高796mの頂部に位置する。『附録』「馬見古城」は「馬見大明神の旧宮の地より西南十町余にあり。里民は茅城といふ。南は夜須郡江川村に堺へり。本丸の跡、縦四十間横七間ばかり。二の丸の跡、縦八間余横四間、三の丸跡、縦九間横四間有り。堀切の跡も三所に残れり」とする。



第 174 図 茅城縄張り図 (文献 83・岡寺 良作成)

【概要】標高 796m 地点の主郭を

中心に東西に 5 つの曲輪が並び、主郭からやや南に下ったところにも一つ曲輪が確認できる。また、それらの曲輪の東側には、幅 10m 近くの非常に深い堀切が 3 本認められ、非常に嚴重に防御がなされている。一方主郭から尾根沿いに西へ約 100m の標高 768m 地点にも小規模ではあるが 3～4 つの曲輪が確認できる。『附録』「夜須郡江川村」の「武の城」には「高野河内の北廿余町にあり。嘉麻郡馬見城の郭内也。嘉麻郡の所に記せり」とあり、「武の城」が茅城の別称であったことがわかる。

馬見城は、永禄 11 年 (1568) 頃の毛利方の城として、一次史料にも登場する城であり、少なくとも江戸時代には、「茅城」が「馬見城」と認識されていたことがわかる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,6～10,11,12,24,78,83

筑前 126 ^{はなおじょう} 花尾城

郡名 嘉麻郡 別称 なし 図幅名 小石原 (西)
種別 山城 所在 嘉麻市桑野

【沿革】嘉麻郡から上座郡へ抜ける嘉麻峠の手前に見える小高い半独立丘陵の花尾山の山頂部 (標高 322m) に位置する。比高 60m。『附録』には馬見城主・毛利鎮実の家臣・毛利三七兵衛の城であったとする。



第 175 図 花尾城縄張り図 (文献 93・岡寺 良作成)

【概要】山頂部に 50m × 30m の主郭を置き、その北西側に曲輪が続く。現在山頂一帯は茶畑や墓があり、さらに幾つかの平坦面や石垣が確認されるが、戦国期のものであるかどうかは不明である。防御遺構は北側の斜面に 5 本の畝状空堀群、北西側の尾根下には堀切を 1 本確認できる。南西側は山頂部からの道が続き、先は土橋状になっているが、かつては堀切であった可能性も考えられる。

【史料】あり 【参考文献】2,4,6～12,24,93

筑前 127

ますとみじょう
益富城

郡名 嘉麻郡 別称 益富山城・大隈城

図幅名 筑前山田(西)

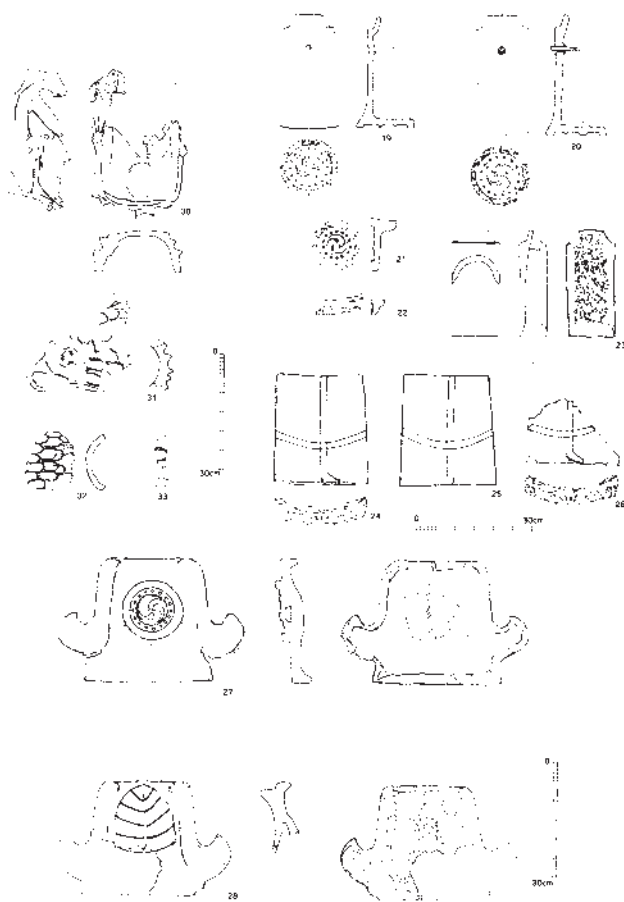
種別 山城 所在 嘉麻市中益・大隈町・大隈

【沿革】筑豊盆地から筑前小石原へ抜ける途上の嘉麻市中益の裏山である「城山」山頂（標高約190m）を中心に城域が広がっている。『本編』には「世人は大隈の城と云。（中略）秋月種実の父宗全隠居城なり」とし、天正15年（1587）に豊臣秀吉が陣をここに敷いたことなどが記され、黒田長政筑前入部の際には筑前六端城の一つとして、家臣後藤又兵衛、のちに母里太兵衛を置き、元和の一国一城令により廃城となったことが記される。『拾遺』にはこれらの事績に加え、「本城の西北の方に金丸馬屋台など云遺名有。廊（廓か）のあとなりといふ。」とある。

【概要】益富城（第179図（上））は標高約190mの城山に、城郭の中心部分である主郭をおき、東西に細長く延びる尾根上に展開する「主城部分」（第179図上・1～16）と、主城部分の北側を取り囲むように、尾根線上を約1.5kmにも及ぶ曲輪群からなる「外郭部分」の大きく2つに分けて考えることができるため、それぞれ説明する。

主城部分 主城部分は平成13・14・16年度に嘉穂町教育委員会により発掘調査がなされており（第179図下）、本丸と二の丸との接続部分を除き、主城部分の大半が調査対象となり、曲輪面上の状況が明らかとなった。その成果とも併せて説明すると、主城部分は、東西に細長く1（主郭・本丸）と2（二の丸）の曲輪が並列し、その縁辺部には土塁・石垣が巡らされ、北側には横矢の張り出し

が5箇所確認できる。a・b・cは虎口で、いずれも土塁線をL字形に



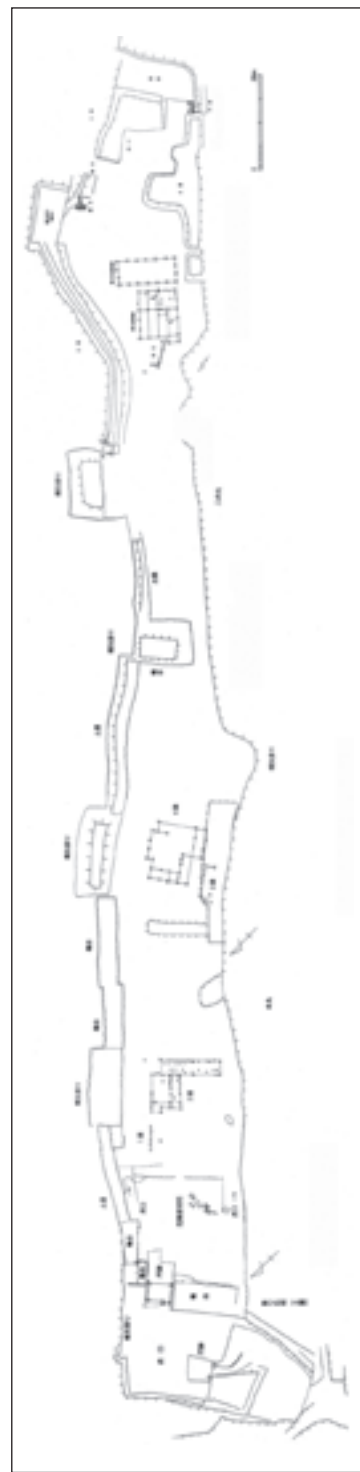
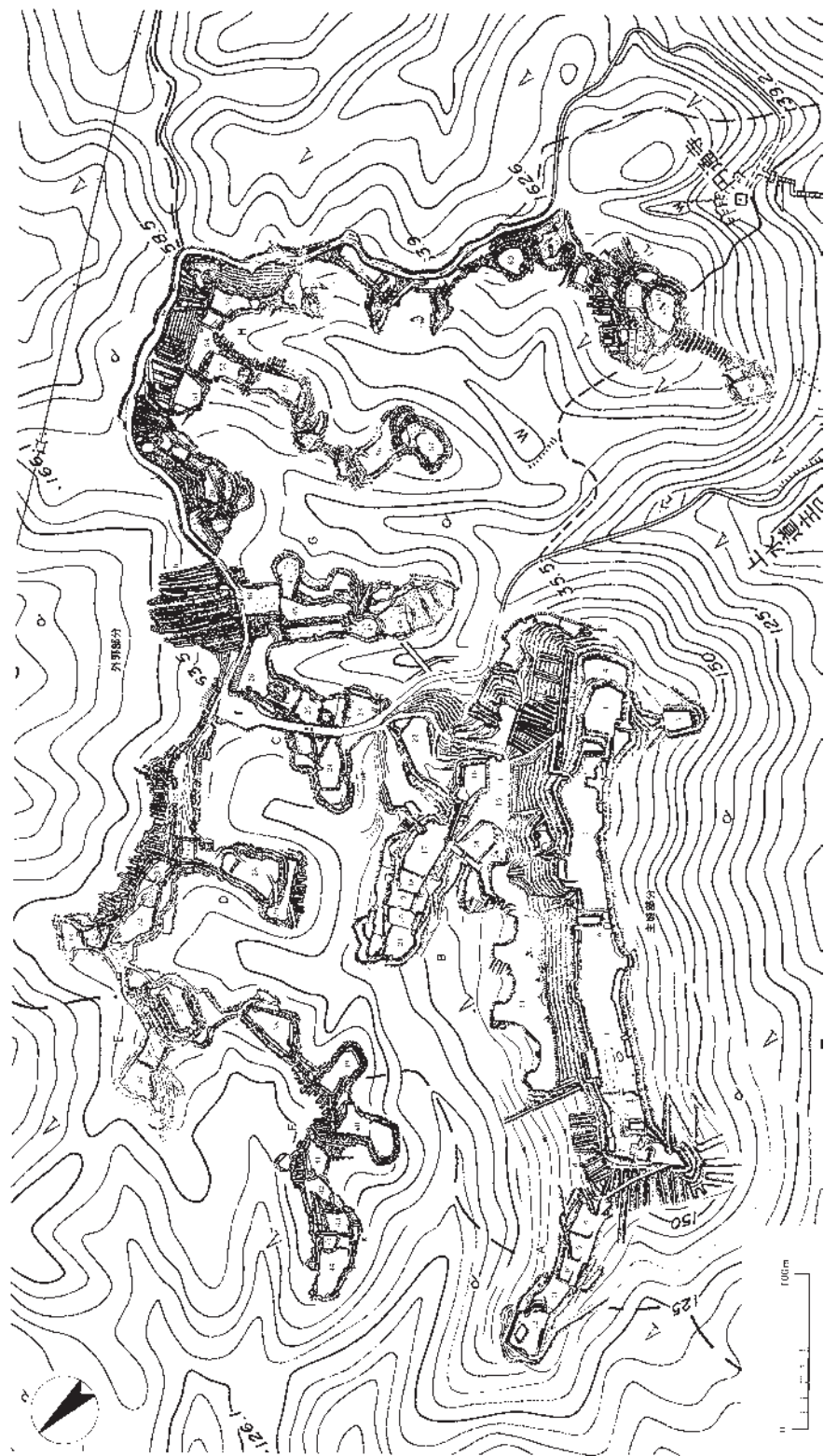
第176図 益富城出土瓦類実測図（文献53）



第177図 益富城礎石建物
（嘉麻市教育委員会提供）



第178図 益富城主郭虎口の門礎
（嘉麻市教育委員会提供）



第 179 図 益富城縄張り図 (上)・主城部分平面実測図 (下) (上：文献 96・木島孝之作成図を改変して作成、下：文献 53・56 掲載図を改変して事務局作成)

屈曲した桁形虎口の形状を呈している。また、本丸部分には4棟の礎石建物、二の丸部分では1棟の礎石建物と1棟の掘立柱建物が発掘調査で検出されている。特に本丸東側で検出された4号礎石建物は、6間×4間の柱間に東西に縁が張り出す大型で瓦葺きの構造で、黒田期の中心的建物（主殿）と考えられる。また、曲輪の東西側の虎口の調査でも鬼瓦・鯨瓦・軒先瓦（丸瓦はほぼ全てコビキB類技法による）など瓦類が大量に出土する。これらの遺構遺物は黒田期の改修によるものである。

13～15の曲輪には矢穴が穿たれた痕跡の持つ石材が散乱しており、廃城後の1・2の曲輪からの転落や、採石の状況を示しているものと考えられる。また、1の西側（d）、3・4（e）の北側の斜面には畝状空堀群が施されている。特に3・4の北側斜面の畝状空堀群は上部と下部にそれぞれ横堀が構築される。後述する外郭部分の遺構の状況や畝状空堀群自体が、織豊系の築城技術以前

から北部九州に存在していた事などから考え合わせても、これらの畝状空堀群は、在地系の築城技術すなわち秋月氏段階の改修によるものである。

外郭部分 主城部分のある「城山」の北側から東側にかけては、城山を取り囲むように尾根線が続いている。その尾根上を中心に展開する曲輪群が益富城の外郭部分にあたる。主城部分の北西側、6・7の曲輪から北西側に続く尾根上には、畝状空堀群を挟んで、曲輪群A（8～12）が階段状に構築されている。いずれも十数m四方の狭い曲輪だが、石垣で周囲を固める。『古城図』にも「古城」・「御



第180図 益富古城図（部分・国立公文書館蔵）



第181図 益富古城ノ東ニ当テ此砦跡図（部分・国立公文書館蔵）

馬屋台」とあり、『本編』の「馬屋台」に合致する。直線的な石垣塁線で、石垣遺構は黒田期の改修によるものである。

主城部分の北東側、14・15から尾根続きになっている箇所には、尾根線伝いに階段状に曲輪群B（16～22）が並立している。15は曲輪のような平坦面を呈しているが、実際には大規模な堀切fで、江戸時代の絵図（第180図）にも「堀切」と書かれている。おそらく黒田期の改修段階で、fの大規模な堀切やそれに隣接する14の池が造成されたものと考えられ、やはりここが「主城部分」と「外郭部分」を分割する場所と考えられる。22の北側は外郭部分本体へ継続する尾根線へと続く場所にあたり、公園の林道により一部破壊されているが、23～26にかけて曲輪群Cが造成されている。24・25・26には、断片的にはあるが低い土塁が残されている。そして、26の東西方向にかけての尾根線上を中心に外郭部分の曲輪群が形成されている。26の西側には、尾根線上に27・30～34の曲輪群が並立し、そこから南へ派生する尾根上に28・29にも曲輪が造られており、27～34で一つのまとまり（曲輪群D）を形成している。立地や曲輪の規模から考えて、28と31・32がこれらの曲輪群の中でも中心的な曲輪であると考えられる。そして、これらのまとまりの北側斜面、つまり27・30～32の北側斜面には約30本の畝状空堀群、29の南側斜面にも約10本の畝状空堀群が施され、防御されている。また曲輪の各所には低土塁が構築され、曲輪の縁辺部を防御している。

さらに尾根線を西側へ進むと、35の曲輪を中心とした曲輪群E（35～37）、さらには曲輪群F（38～44）が散在的に配置されている。それらの北側斜面側には、各々の曲輪が土塁で防御され、また39～41の北側斜面には約20本の畝状空堀で防御されている。土塁で防御される曲輪の中でも、43・44の曲輪は曲輪全体が土塁で囲まれ、南側から屈曲して曲輪内部に導入させる虎口が構築されており（g）、虎口に対する技巧的な側面を見せている。主城部分の土塁とは異なり、高さは0.5m未満の低土塁であり、おそらく他の外郭部分の土塁と同様の改修に伴うものと考えられる。41の北側の土塁は石で固められており、石塁に近いものがある。その北側には堀切が見られる。

曲輪群Cの東側を見ると、隣接して曲輪群G（45～49）が見られるが、主体となるような規模の大きな曲輪は見られない。ただ、46の北側斜面に構築された7本の畝状空堀群hは深さ3m、幅5mを超える非常に大規模なもので、益富城内の他の畝状空堀群とは規模がかなり異なっており特徴的である。そして更に東側には曲輪群G（50～58）が構築される。この曲輪群Hは、第181図の絵図に当たる箇所である。ここでは、51～55の曲輪群が主体となって、それぞれが土塁で囲まれ、北東側斜面には約20本の畝状空堀群、そして図にはないが52・53の南東側斜面にも小規模ながら約15本の畝状空堀群が構築される。53から西側へ派生する尾根を下ると、鞍部を挟んで56・57の曲輪が見られるが、ここは土塁や畝状空堀群等の防御遺構は認められない。

曲輪群Hから南へ続く尾根線上に至ると、曲輪の配置が散在的になり、50mほどの間隔を置いて、59～62の曲輪群Iが確認できる。60の曲輪の北側のiには、外郭部分唯一とも言える堀切遺構が認められる他は61の平坦面が秋葉社境内地である。しかしその北側斜面には10本の畝状空堀群が認められ城郭遺構である。最も先端部に当たる62の曲輪には土塁に加え、石垣も見られる。

以上のように、益富城は黒田期に大々的に改修された「主城部分」とその前の秋月期に畝状空堀群と土塁によって広大な曲輪群を作出した「外郭部分」とで大きく様相が異なることが分かる。

【史料】あり 【参考文献】1～9,10,11,12,24,53,56,74,96

筑前 128	もうりがじょう 毛利ヶ城	郡名	嘉麻郡	別称	福智城	図幅名	筑前山田(西)
		種別	丘城	所在	嘉麻市馬見		

【沿革】嘉麻市馬見の集落内、縣社馬見神社の西側にある独立丘陵の山頂部（標高約 220m・比高約 20～30m）に位置する。この城の傍を流れる宮小路川にかかる橋の名称は「福智城橋」で、地元では「福智城」と伝えられているのがわかる。『附録』には「毛利鎮実の端城なりにしや」とある。

【概要】山頂部には現在、祠が建てられているが、ここに東西約 20m、南北約 15m の主郭が想定される。曲輪は北側の尾根に続いており、いずれも主郭よりも広い規模である。いくつかの曲輪には石垣が認められる。一方、防御遺構はあまり顕著ではなく、南側を除く三方には特に確認できない。唯一主郭の南側には、堀切と思われる遺構が見られる。しかしその東側は現在水田となっており、若干不明確となっている。

【史料】なし 【参考文献】2,4,7,10,11,12,24,93



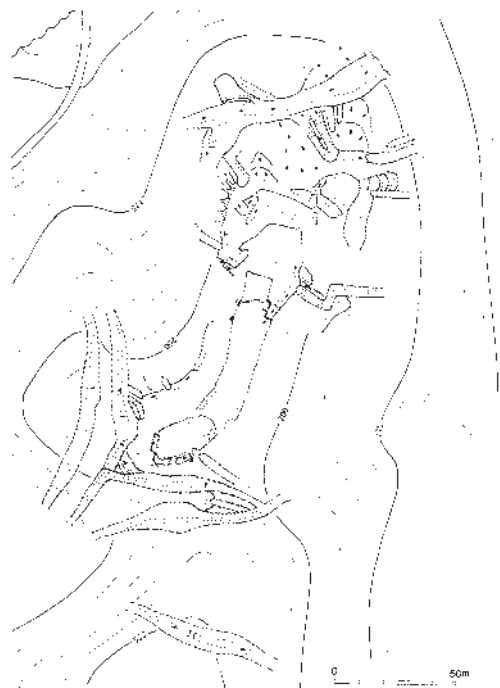
第 182 図 毛利ヶ城縄張り図 (文献 93・岡寺 良作成)

筑前 129	へいけがじょう 平家城	郡名	嘉麻郡	別称	なし	図幅名	筑前山田(西)
		種別	山城	所在	嘉麻市屏		

【沿革】嘉麻市屏の集落の背後の尾根筋、標高約 200 m 地点に位置する。『附録』には「宇土浦山の続きに平家か城といふ有り。城主詳らかならず」とあり、文献 12 には「屏村の南六町、宇土浦山の続きに荒谷の上にある」とする。地元では字荒谷の地内に平家城と言いつた場所があり、そこがこれらの地誌類のいうところの平家城と思われる。

【概要】城域の南側に主郭を置き、そこから北側へ階段状に曲輪が並列する。主郭の南東側には土塁が巡り、すぐ北側の曲輪には石組みの虎口も確認することができる。曲輪群の周囲の尾根上には非常に規模の大きな堀切が複数本ずつ掘り込まれており、非常に厳重な防御がなされていたことがわかる。城の最も北側はやや不明瞭になってはいるが、尾根上を堀切で分断して防御している。明らかに戦国時代の城館である。

【史料】なし 【参考文献】2,4,11,12,24,87,93



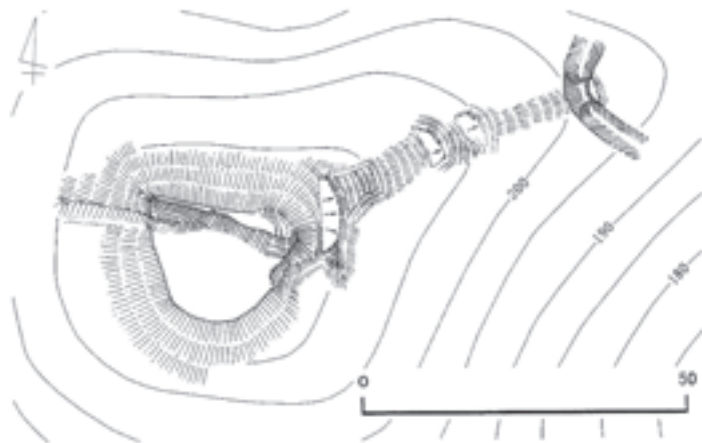
第 183 図 平家城縄張り図 (文献 93・岡寺良作成)

筑前 130	だいおうさんじょう 大王山城	郡名	嘉麻郡 / 豊前田川郡	別称	帝王城	図幅名	筑前山田(西)
		種別	山城	所在	嘉麻市上山田・田川市猪国		

【沿革】嘉麻市と田川市の境、すなわち筑前国と豊前国の境にそびえる摺鉢（帝王）山山頂（標高211m）に位置する。比高約150m。江戸時代の地誌類に頻出し、小早川秀秋により築城、家臣日野龍右衛門が入れ置かれたとする。

【概要】山頂部には約20m四方の曲輪が置かれ、北側には土塁状、東側斜面には堀切が1本確認できるのみの小規模城館である。地誌類では小早川秀秋の築城とするが、現状の遺構を見る限りでは、小早川期以前の戦国期城館の状況を反映しているものと思われる。

【史料】なし 【参考文献】1～4,6～11,24,82



第184図 大王山城縄張り図（文献82・木島孝之作成）



第185図 嘉麻郡上山田村大王故城図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 131	きしろやかた 木城館	郡名	嘉麻郡	別称	平床屋敷・里城	図幅名	筑前山田(西)
		種別	平地城館	所在	嘉麻市上山田		

【沿革】摺鉢山の南東麓、木城集落に位置する。『附録』・『拾遺』には大王山古城の里城として、堀を巡らした日野龍右衛門の宅跡とする。

【概要】『古城図』には木城の村落の南側に空堀を巡らした「平床屋敷」が描かれている。しかし、現在は宅地化され、周囲はかつて炭鉱などもあったため、堀などの痕跡を地表面に見ることはできない。

【史料】なし

【参考文献】2～4,10～12,68



第186図 嘉麻郡上山田村木城宅跡図（部分・国立公文書館蔵）

筑前 133

きしどのじょう
岸殿城

郡名 嘉麻郡 別称 御前ヶ城・岸取城・高城
種別 山城 所在 嘉麻市下山田

図幅名 筑前山田(西)

【沿革】 嘉麻市下山田と田川市猪国との境に聳える大法山（標高 232m）から稜線上を南へ 500m 程の地点に白馬山（標高 242m（山頂の標柱は 261m））山頂部に位置する。『附録』には「里民ごぜんが城といふ。平地三畝余あり。」とし『古城図』は「岸取古城」とし「土人ハ高城ト云」とする。

【概要】 城域は白馬山山頂周辺と山頂から南西へ派生する尾根を約 150m 下った箇所を 2 箇所に分かれる。

山頂には、20～30m 四方の主郭を置き、同規模の曲輪が 2 つほど尾根上に並ぶ。その北側には 6 本ほどの畝状空堀群と堀切と豎堀でかなり嚴重に防備する。南側の尾根にも堀切 3～4 本を設けて防衛している。

一方、南西側の尾根筋は、山頂から 120m ほどは自然地形が続くが、その先に堀切 1 本を設け、その先の標高 219m の頂部に 10m 四方にも満たない小さな曲輪を 3～4 つ置く。その南西側の尾根上には堀切 1 本と豎堀 3 本により防衛している。そこから約 50m 下った箇所には 20m 四方を越えるやや大きめの曲輪があり、非常に平坦であるが、堀切の外側になっていることもあり、



第 187 図 岸殿城縄張り図 (事務局作成)

城郭遺構と断定できないが、その可能性も十分考えられるので、とりあえずは城の範囲としておく。

なお、この城を描いた『古城図』には、南西側の曲輪群のみを描き、山頂部については曲輪群はおろか、何の注記もない。単なる見過ごしなのか他に理由があるのかについては不明である。

【史料】なし【参考文献】1～4,8～12



第 188 図 山頂周辺の畝状空堀群



第 189 図 嘉摩郡中山田村岸取古城図 (部分・国立公文書館蔵)

筑前 135	へいやまじょう 屏山城	郡名	嘉麻郡 / 夜須郡	別称	平家城	図幅名	甘木(東)
		種別	山城	所在	嘉麻市屏・朝倉市江川		

【沿革】嘉麻郡と夜須・上座郡を大きく隔てる古処連山の一角をなす屏山山頂(標高 928m)に位置する。地誌類にはほとんど紹介されず、近年発見され、山名からこの名称が当てられているが、屏山は近世までは「宇土浦山」と呼ばれ、『全誌』の「宇土浦山」には「絶頂ヲ平家城ト云。」とあるためそれが本来の城の名称の可能性も考えられる。当然、城主等は不明である。



第 190 図 屏山城縄張り図 (文献 83・岡寺 良作成)

【概要】屏山山頂には、あまり平坦ではない主郭を置く。稜線に沿って東西に長く、約 100m にもなる。その北西側に明瞭に平坦な曲輪が設けられる。主郭の東側には縦堀を両側斜面に設けて防御する。その一方、西側の稜線上には、非常に長大な堀切を 2 本設け、古処山城に対する防御を固める様子が窺われる。北側麓にある毛利ヶ城や平家城との関連が推察される。

【史料】なし【参考文献】4,6,11,12,93

2 近世城館

筑前 K1	あきづきじんや 秋月陣屋	郡名	夜須郡	別称	秋月城・黒田氏居館	図幅名	甘木(東)
		種別	陣屋	所在	朝倉市秋月野鳥		

【沿革】朝倉市秋月、古処山の西側麓にして秋月谷の奥部に構えられた近世福岡藩の支藩・秋月藩五万石の陣屋跡である。桜の名所でも有名な杉の馬場の東側の石垣で固められた堀を挟んだ奥側、現在の秋月中学校と垂裕神社境内地にあたる。秋月藩は黒田長政の三男、長興を初代とし、寛永元年（1624）に陣屋が置かれ、以後明治維新まで存続した。

【概要】明治時代に描かれた『筑前秋月黒田甲斐守長徳公御館図面』（第 195 図）を参考に城内の様子を説明すると、現在杉の馬場といわれる場所は「内馬場」および「勢溜」に分かれており、「勢溜」からは瓦坂橋をわたり表御門へ入ることができる一方で、「内馬場」からも堀を渡って裏御門から城内へ入城した。表御門からは表御殿へ、裏御門からは御休息所（奥御殿）へと入ることができた。

なお、この絵図は明治 5 年（1872）に描かれたもので、既に表御殿は秋月県庁、御休息所は「梅園御館」として黒田公の指定となった時点のものとなっており、赤色で示している箇所は、描かれた前年の廃藩置県の際、秋月県庁がおかれた前後に取り壊された部分を示している。



第 191 図 秋月陣屋奥御殿発掘調査遺構平面図（文献 38）

秋月陣屋については、奥御殿部分については発掘調査が行われており、邸宅のほか、庭園、井戸、厠などが検出され、藩政時代当時の状況が良好に残存していることが判明した。

現在は福岡県史跡に指定されている。

【史料】あり 【参考文献】4～7,8～10,35,36,38,39



第192図 秋月陣屋奥御殿調査全景1
(西から 朝倉市教育委員会提供)



第193図 秋月陣屋奥御殿調査全景2
(南から 朝倉市教育委員会提供)



第194図 秋月陣屋奥御殿庭園遺構
(西から 朝倉市教育委員会提供)



第195図 筑前秋月黒田甲斐守長徳公御館図面 (朝倉市教育委員会蔵 縦181cm×横183cm)



第196图 筑前秋月黑田甲斐守長徳公御館図面（左：表御殿部分 右：奥御殿部分）

筑前 K2

あきづきはんみなみごてん
秋月藩南御殿

郡名 夜須郡
種別 御殿

別称 なし
所在 朝倉市上秋月

図幅名 甘木(東)

【沿革】 秋月陣屋から上秋月八幡宮の尾根をまたいだ低台地上に位置する。文久3年(1863)に建設された秋月藩の別御殿である。

【概要】 昭和26年(1951)に著された『秋月史考』(文献71)には、古老談として、文久3年3月28日に木屋入りして建設が始まり、明治初年になって竣工したとする。一部分は当時の吉田熊雄氏の住宅あるいは上秋月の大安守の本堂となったとする。石垣はそのままではあるが、敷地は上秋月小学校の敷地となっているとし、巻末には御殿の平面図を載せている(第198図)。

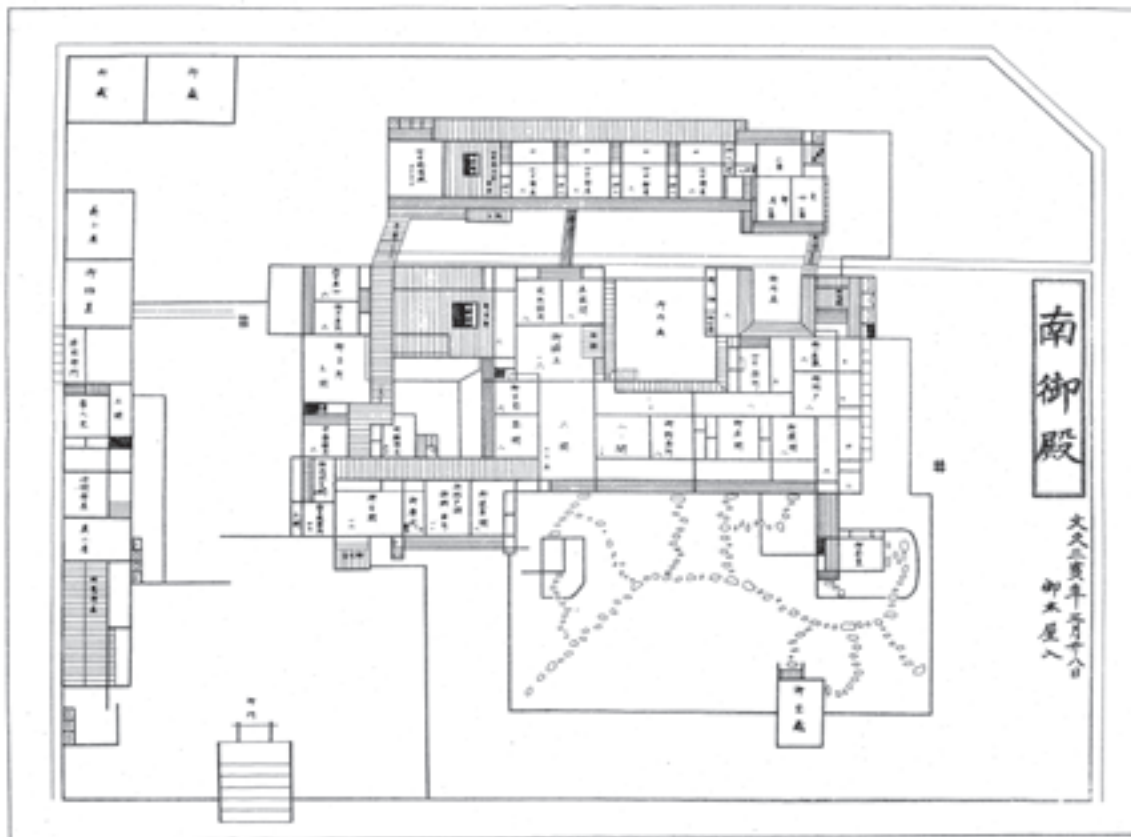


第197図 秋月藩南御殿石垣

図面には、建物内に居間のほか、玄関、台所、女中部屋、使者の間、対面所、寝間、内庭、茶室など事細かに描かれ、南西側には御門、西端には炭小屋や物置などが置かれている。

現地は上秋月小学校跡地として更地になっているが、敷地の周りには石垣が見られる。一部は積み直されているものもあるが、当時のままを反映している部分も多く見られる。

【史料】 なし 【参考文献】 71,113



第198図 秋月藩南御殿平面図(文献71)

3 城館関連遺跡

筑前 R1	みかさ もりいせき 御笠の森遺跡	郡名	御笠郡	図幅名	福岡南部(東)
		種類	居館遺跡	所在	大野城市山田2・3丁目

【位置】御笠川西岸の平地にあたり、遺跡の中心には神功皇后ゆかりの大野城市指定文化財の「御笠の森」が位置する。

【概要】県道工事に伴い、9次にわたって調査が行われた。東西約250m、南北約30mの範囲が調査対象となり、調査の結果、一辺約25～40mの規模の溝に囲まれた方形区画6箇所(B～G区画)が見つかると共に、その南西側、御笠の森と重なる場所には、一辺70～75mの大型の方形区画(A区画)が検出された。

出土遺物から全区画が併存した可能性が考えられ、基本的に16世紀代に掘削、16世紀後半には併存した可能性が高い。16世紀末～17世紀初頭にかけてE・G区画が廃絶、その他の区画も17世紀中頃～後半に廃絶していると想定される。

出土遺物は土器・陶磁器類に加え、石臼、木製羽子板、鉄砲玉などがみられる。

【参考文献】54,55,61



第199図 御笠の森遺跡遺構概略配置図(文献55)

筑前 R2	いらいじゃくいせき 以来尺遺跡	郡名	御笠郡	図幅名	二日市(西)
		種類	居館遺跡	所在	筑紫野市筑紫

【位置】筑紫野市筑紫の低丘陵上に位置する。北東約500mには筑紫氏居館跡と推定される筑紫小学校があり、南西約300mには筑紫神社が位置する。

【概要】国道3号線バイパス建設に伴い調査が行われた。比高約20mの台地上に、溝で仕切られた一辺50mほどの方形区画が2箇所確認された。区画内部は削平されたためか、遺構はほとんど確認されておらず、区画外より掘立柱建物がいくつか確認されている。発掘調査区外へも方形区画は伸びているため、居館群の全体的な様相はつかめていない。16世紀代までに



第200図 以来尺遺跡全景

これらの方形区画は埋没しており、それに代わり東西方向の更に大型の溝が現れ近世まで続くようである。これも調査範囲が限られているため、その性格は不明である。

【参考文献】 46



第 201 図 以来尺遺跡遺構配置図（文献 46 掲載図を一部改変して転載）※アミカケは中世の溝

筑前 R3 しもたてのいせき
下杵野遺跡

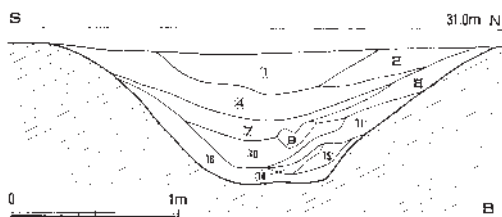
郡名 夜須郡
種類 居館遺跡

図幅名 二日市(東)
所在 朝倉郡筑前町中牟田

【位置】中牟田城の東約 300m 地点、中牟田川西岸の標高 30m の平地に位置する。

【概要】圃場整備に伴い発掘調査が行われた。中世の居館に関連する遺構が検出されたのは B 地区で、一辺約 50m の方形区画溝が検出され、その内外からは多数の柱穴群が検出された。溝は幅約 2m、深さ約 1m である。溝が途中途切れる箇所があり、出入口のためと思われる。『附録』には中牟田村には豊臣秀吉の朝鮮出兵のための「御倉やしき」とあり、関連性が窺われるが、出土遺物は 15 世紀代が中心である。

【参考文献】 57



第 202 図 大溝土層断面図 (文献 57)



第 203 図 下杵野遺跡遺構配置図
(文献 57 掲載図を一部改変して転載) ※アミカケは中世の溝

筑前 R4 とがみじょうばやしせいせき
砥上上林遺跡

郡名 夜須郡
種類 居館遺跡

図幅名 二日市(東)
所在 朝倉郡筑前町砥上

【位置】砥上岳から南へ派生する尾根の付け根部分、標高約 50m の平地に位置する。

【概要】県道建設及び圃場整備に伴い発掘調査が行われた。その結果、12～14 世紀代の掘立柱建物、区画溝、井戸、道路側溝などが多数検出され、遺物も 12 世紀代を中心に白磁・青磁・天目茶碗など多数の出土を見た。また県調査の 33 号土坑は、木棺墓とみられ、土器・陶磁器の他、漆が塗布された布が見つかり、烏帽子とも考えられている。

区画溝は、南北方向に大溝と 33 号溝が走り、東西方向にもいくつか中世の溝が確認されている。17 号溝は大溝と接続する形でいびつな形ながら一辺約 20m の方形区画をなし、その区画の中には井戸や、時期の詳細はわからないが、掘立柱建物が建つ。この遺跡の字名は「上林」であり、同一地点ではないであろうが、庄林城が近辺の丘陵上にあったものと考えられ、当遺跡との関連が伺われる。

【参考文献】 43,44



第 204 図 砥上上林遺跡遺構平面図（文献 44 掲載図を一部改変して転載）※アミカケは中世の区画溝

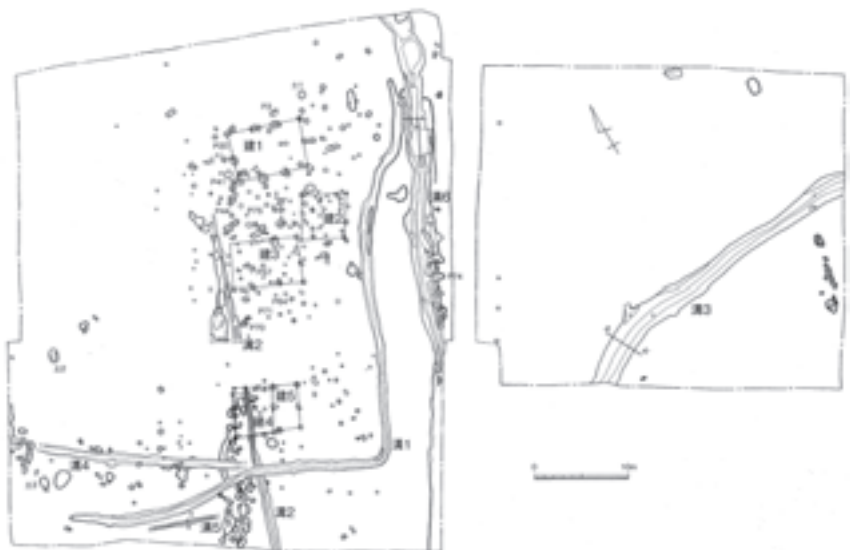
筑前 R5	すみやきせき 炭焼遺跡	郡名	夜須郡	図幅名	二日市(東)
		種類	居館遺跡	所在	朝倉郡筑前町曾根田

【位置】曾根田川上流東岸の標高約 60m の扇状地上に位置する。

【概要】圃場整備に伴う発掘調査が行われ、一辺 40m の L 字を呈した区画溝とそれに平行する南北方向の大溝、そして L 字区画内には 5 棟の掘立柱建物、さらには地下式貯蔵庫（土坑）が検出された。溝からの出土遺物は李朝産雑釉陶器皿なども見られることから、下限は 15～16 世紀まで下るものと思われる。

なお、この周辺には勝山、小路、陣ノ内などの字が残るため、城館関連遺跡が今後発見される可能性が想定される。

【参考文献】 60



第 205 図 炭焼遺跡遺構平面図（文献 60）

筑前 R6 じょうのこしいせき
城腰遺跡

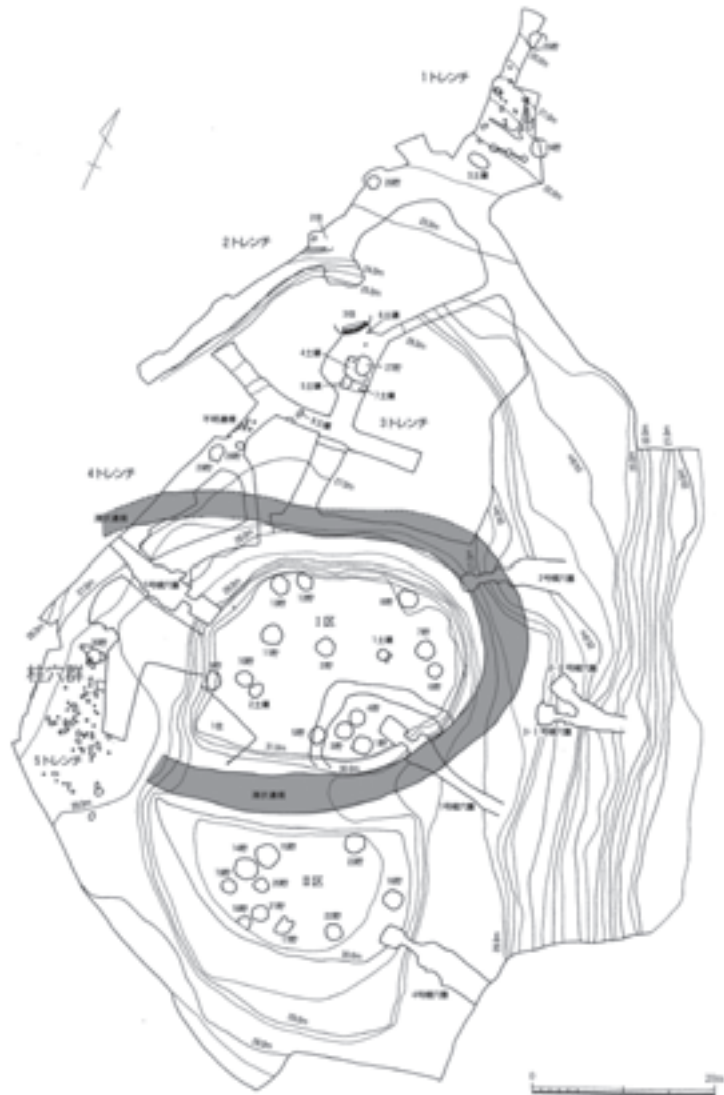
郡名 嘉麻郡
種別 丘城？

図幅名 飯塚(東)
所在 飯塚市佐与

【位置】遠賀川支流の庄内川西岸にやや突き出した低台地上（標高約 30m、比高約 20m）に位置する。字は「城腰」である。

【概要】法人施設建設及び土砂採取に伴い発掘調査が行われた（後の計画変更等により現地は保存されている）。丘陵頂部には溝状遺構で囲まれた南北約 20m、東西約 30m の規模を有する平坦面が検出され、溝状遺構を挟んで南側にも、約 20m 四方の平坦面が検出された。溝状遺構は、最大幅約 3m、深さ 1.5m ほどであるが、平坦面上端部から測ると、深さは 3m を越え、かなりの防御性を有するものと思われる。また、調査区西側下段部には、中世の柱穴群が検出され、掘立柱建物の存在が想定される。

城館としての伝承は存在しないが、字が「城腰」であることや、溝に囲まれた平坦面の存在など、一定程度防御性の認められることから、武家居館あるいは丘城



第 206 図 城腰遺跡遺構平面図（文献 50 より一部改変して作成）
※アミカケは溝状遺構の範囲を示す。



第 207 図 城腰遺跡全景（飯塚市教育委員会提供）



第 208 図 城腰遺跡溝状遺構（飯塚市教育委員会提供）

として考えるのが妥当ではないかと思われる。

【参考文献】 45,50

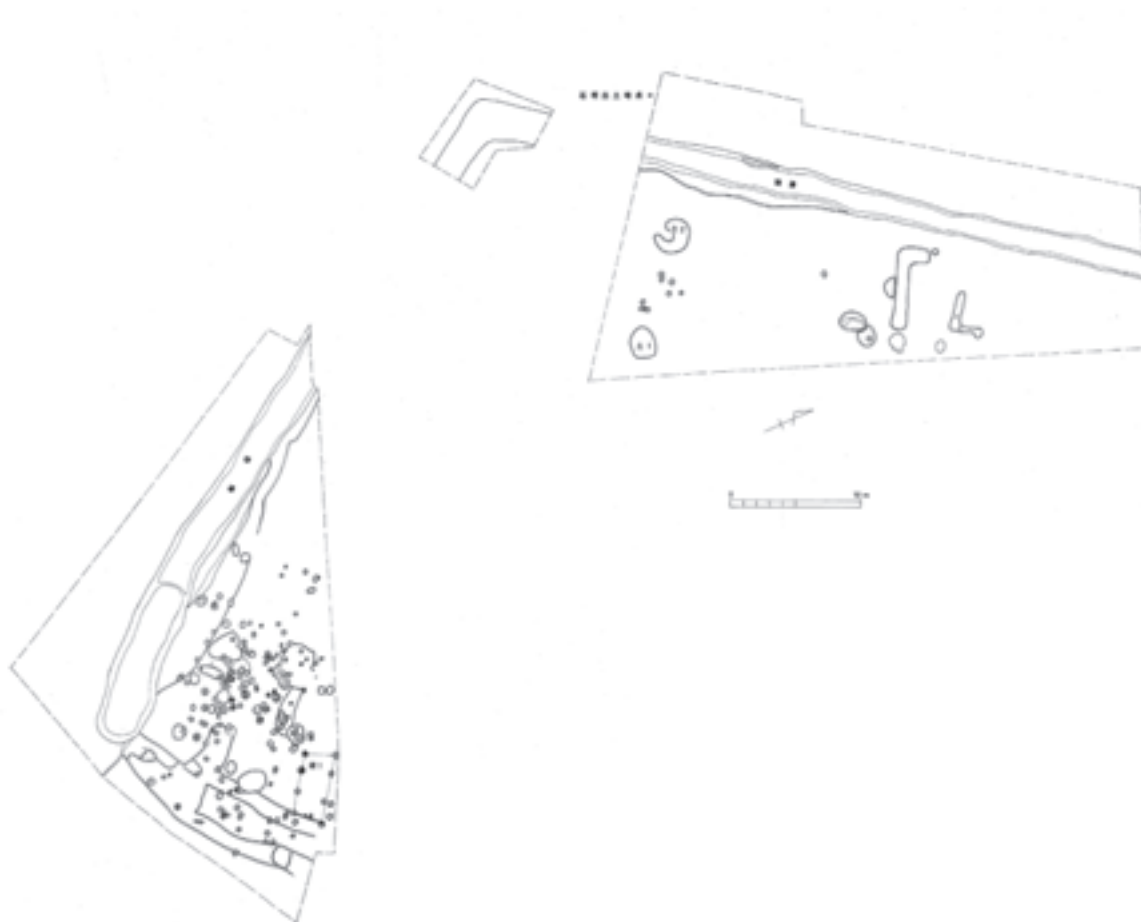
筑前 R7 <small>かんだかいせき</small> 勘高遺跡	郡名 嘉麻郡	図幅名 筑前山田(西)
	種別 居館遺跡	所在 嘉麻市上

【位置】 遠賀川の東岸、標高約 70m の平野部の耕作地（田圃）に位置する。

【概要】 圃場整備に伴い、発掘調査が行われている。調査区からは一辺約 55m × 55m 以上の溝で囲まれた方形区画が検出され、区画内部、特に南隅部分からは掘立柱建物 1 棟を含む多数の柱穴列が見つかった。溝の規模は、幅約 3～4 m、深さは 0.8m である。

なお、溝の中からは土師器・陶磁器が出土しており、12～13 世紀の時期が与えられ、遺跡の活動時期を示しているものと考えられる。

【参考文献】 40



第 209 図 勘高遺跡遺構平面図（文献 40）

VI 城館関連文献史料一覧

- ・本章では、本書報告対象の城館が登場する文献史料を掲載した一覧表を示す。
- ・掲載にあたっては、城館別に採集した関係史料を「一次史料」と「参考史料」に類別し、編年配列した上で、各「一次史料」には枝番号を付した。ここでの「一次史料」とは、その城館が存続した同時代成立の史料である古文書・記録・日記類であり、その写しも含む。「参考史料」は、城館に関する記述内容の時期よりも後世の成立となる記録や編纂物である。
- ・本来ならば、原文書からの翻刻を掲載すべきだが、作業期間・紙幅等の事情により、その多くを良質な刊本から、一部を原本・謄写本等から収集し、内容については要旨、または当該城館に係る記述からの情報を示した。

- ・『薮野家譜』久野家譜は福岡県立図書館所蔵本を、児玉韞採集文書は東京大学史料編纂所所蔵謄写本を使用した。
- ・活字文獻のうち略号を用いたものは以下の通り。
 - 『大分県史料』→『大県史』
 - 『大分県先哲叢書 大友宗麟』→『宗麟』
 - 『大蔵姓原田氏編年史料』→『原田編年』
 - 『鹿児島県史料 日記雑感後編2』→『旧雑感2』
 - 『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』→『嘉瀬川』
 - 『嘉瀬地方史 古代中世編』→『嘉古中』
 - 『九州中世研究』→『九中世』
 - 『九州史料落穂集』→『落穂』
 - 『黒田家文書1 本編』→『黒田1』
 - 『熊本県史料 中世編』→『熊本中』
 - 『西国武士団関係史料集11 田原文書』→『田原』

<中世城館>

No.	名称	校番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
1	唐山東城	参考	永禄12年		豊前覚書/豊前覚書P8			筑紫宮座主藤清、岩屋城の「向城」として「賀良山」城を「取誘」、人数を連れて登城する。
2	唐山西城	参考	天正7年6月2日		豊前覚書/豊前覚書P24			「賀良山(西軍)を取誘」、岩崎宮座主方清、「東城」・「松尾」に動番する。「西城」は由布宗秀、後に大津留宗周が動番する。
		参考	天正7年		薮野家譜			龍か城・あまか城・から山・香椎山・名嶋などに砦を築き軍勢を籠める。
		(1)	(天正12年頃)	大友義統感状	児玉韞採集文書7-99(是松氏所蔵)	(大友)義統	是松中務丞殿	是松中務丞、福有備後守の「嘉良山」在城の軍忠を賞す。
		(2)	2月21日		田原文書13(御感状御判物写略系/『田原』P34、 『大友26』P186)	(大友)宗麟	福有備後守殿	小田民部少輔の「嘉良山」在城等の軍忠を賞す。
		(3)	(年未詳)3月1日	大友宗麟感状	大坪文書/『柳近前』P65、『宗麟4』P131	(大友)宗麟	小田民部少輔殿	「嘉良山」東城督、勅役を命じ、知行を預け置く。
		(4)	(年未詳)10月20日	立花統虎知行預ケ状	由布功家文書A2-6/『柳近後』P351	(立花)統虎	由布大炊入道殿	
		(5)			由布豊昭家文書/『柳近後』P381		由布大炊入道殿	
3	不動城 (牛頭城)	参考		筑紫氏所領城敷	筑紫文書/『落穂7』P58、『福市中1』P992			筑紫広門期の城(那賀郡之内)に「牛頭」城 幡崎兵庫頭 筑紫越前守。
4	和久堂城	参考	天正13年9月13日		九州軍記/『大太16』P215			筑紫広門の宝満城を攻めに、島田武蔵守がワグドクノ城より馳せ参じる。
		参考			薮野家譜/『大太16』P216			筑紫広門の宝満城を攻めに、武蔵・和久堂山・柴田・所々の砦より筑紫勢が駆け付ける。
		参考			筑紫文書/『落穂7』P58、『福市中1』P992			筑紫広門期の城(三笠郡之内)に「佐野之城 上野伊賀守」。
5	岩屋城	参考	(応永4年分)		北肥戦誌/『北肥』P102			少弐氏、大内氏に敗れ、「岩屋」等木・天拝岳所々の要害に籠もる。
		(1)	文明10年10月18日	大内政弘袖判下文	正任記/『山県史中1』P947			大内政弘、深野重親に夜須郡山家庄の地を宛行い、「岩屋」に在城せしむ。
		(2)			讃井文書/『山県史中2』P176、『太市中』P723	(大内)政弘		大内政弘、山道兼久に那珂郡矢方原の地を宛行い、「岩屋」に在城せしむ。
		(3)	文明12年2月9日	大内政弘袖判下文	防長風土注進案/『大日史8編12』P95、『大太13』P545			大内政弘、讃井護重に三笠郡府領内の地を宛行い、「岩屋」に在城せしむ。
		(4)			北肥戦誌/『北肥』P199			大友・少弐・千葉氏、大内義隆守護代杉興連の太宰府岩屋城を攻める。
		参考	天文1年		開書秘説(導経閣文庫)/『太市中』P779			平戸の龍手田定経、岩屋城にて飯田興秀より故実伝授を受ける。
		(5)	天文4年7月17日～11月13日		松隈家文書37、麻那古村大光寺文書写7/『太宰府学6』P44史料2、『嘉瀬川』P1632	(大内)義隆		大内義隆、去9月6日「岩屋城籠」における少弐冬尚残党峰起の際、防戦の軍忠を賞す。
		(6)	天文12年11月29日	大内義隆感状	麻那古村大光寺文書写13/『太宰府学6』P48註12、『嘉瀬川』P1633			杉重矩、松隈正勝の無足にて「岩屋御城番」を勤めたことについて、扶持を与えるべき事を大内氏に注進する。
		(7)	(年未詳)6月16日	杉重矩書状				大友勢、岩屋・杉杉を攻め落とす。その後岩屋城に三原和泉守・高橋三河守、麦生の3名を置く。さらにその後、高橋一人を在番に置き、三笠郡一人を在番に知行3800石を与える。
		参考	弘治3年7月13日		北肥戦誌/『北肥』P309			

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
5	岩屋城							
参考			(永禄2年4月10日)		崇福寺文書 横岳古文書/『大太15』P80			高橋鑑種、大友義鎮より「宝満・岩屋両所ノ城」・2千町の領地を与えられ、筑前15郡の執政を預かる。
(8)			(永禄5年)7月16日	毛利隆元・元就連署 條々	山田文書/『大太15』P144	(毛利隆元、元就)	市式(市川経好)、財新(財満忠久)、致新(坂元祐)	高橋鑑種、毛利氏に通じ大友宗麟より離反を図る。
参考			永禄10年6月		北肥戦誌/『北肥』P296、薦野家譜			高橋鑑種、大友氏を離反し岩屋城・宝満城に籠もる。
参考			永禄10年7月7日		大友家文書録/『大太15』P190、『大友22』P60			6月、高橋鑑種、毛利元就に通じ、「岩屋城」に拠り、「点宝満岳為要害」。
参考			永禄10年		大友家文書録/『大太15』P193、『大友22』P61			7月7日、戸次鑑連等岩屋城を落とし、高橋鑑種「宝満城」に入る。大友軍、宝満城を包囲して連月攻防する。
(9)			(永禄10年)7月13日	高橋鑑種書状	北肥戦誌/『北肥』P400、薦野家譜	(高橋)鑑種	万福寺 衣鉢閣下	大友宗麟、岩屋城・宝満城の高橋鑑種に対し軍勢を差し向ける。
(10)			(永禄12年)11月25日	大友宗麟書状写	小島居文書/『大太15』P191、『大友22』P62	(大友)宗麟	(北原)鎮休	高橋家を主膳兵衛鎮種に相続させ、「岩屋・宝満両城要害」を堅固に守らせる。
参考			(永禄12年11月)		福岡市博物館所蔵文書「福市中1」P1028、『宗麟4』P105			吉弘鑑理の二男鎮理、高橋鑑種の養子となり、高橋鎮種と名乗り「宝満・岩屋」城主となる。
参考			永禄12年		大友家文書録・九州治乱記・薦野家譜ほか/『大日史10編3』P625			高橋鑑種、岩屋城にて高良山より北上する大友勢を妨害する。
参考			永禄13年		豊前覚書/『北肥』P433			大友勢、岩屋城を攻め、高橋鑑種降参・下城する。高橋家を主膳兵衛鑑盛に継がせ、宝満城の勦滅とする。
参考			天正6年12月1日		北肥戦誌/『北肥』P433			早川の取戦を受け、龍造寺勢等の求襲に備えて「宝満・岩屋・立花」勢籠城する。龍造寺隆信、宝満・岩屋・立花等を攻めるも、戸次道雪、高橋紹運等これを防ぐ。
(11)			天正7年1月18日	高橋紹運知行宛行状写	三原文書/『大太15』P428	(高橋)紹運	屋山三介殿	高橋紹運、屋山三介の筑紫広門、秋月種実に対する「岩屋籠」防戦勝利を賞し、知行を宛行う。
参考			天正7年7月27日		薦野家譜			秋月種実、筑紫広門、岩屋城を攻める。城代屋山中務はじめ宝満・立花勢防戦する。
(12)			(天正7年)7月28日	戸次道雪感状写	薦野家譜	(戸次)道雪	薦野左近大夫殿	戸次道雪、昨日27日「宰府」(観音寺)口における鷹野増時優待の軍忠を賞す。
(13)			(天正8年)8月15日	北原種興書状写	大友興勝記/『大太15』P460	(大友)義統	内田彦五郎殿、秋月藤次郎殿	北原種興、秋月種実に対し「岩屋城」を攻めんとす。
(14)			天正11年2月17日	大友義統感状写	三原文書/『大太16』P2			大友義統、去2月8日の筑紫広門「岩屋城」(麟討)における屋山中務の軍忠を賞す。
参考			天正11年3月7日		豊前覚書ほか/『大日史11編4』P914			岩屋城、筑紫広門に攻められも、「宝満」の援軍により撤退する。
参考			天正11年8月18日		立花記ほか/『大日史11編4』P914			戸次道雪、高橋紹運の宗統虎を嗣とし、立花城に居住させる。
(15)			(天正12年)3月5日	戸次道雪書状写	薦野家譜/『福市中1』P267、『大太16』P27		(薦野)増時	前日「岩谷」より「上進」の日隈善右衛門、麻生外記丞、今夕帰着する。
(16)				大友義統書状	某氏所蔵文書/『大太16』P42			大友義統、立花城衆に対し、「岩屋城火事」以来「宝満表」を始め、戸次道雪軍旗下における軍忠を賞す。
(17)			(天正12年)6月24日	大友義統書状写	立花文書(立花家旧臣文書)/『柳近前』P319	(大友)義統		同上。6月24日付某氏所蔵文書の写。
(18)					「土民ノ事蹟」柳102-26/『柳近後』P560			
(19)			(天正12年)6月24日	つほね書状	某氏所蔵文書/『大太16』P44	つほね	たち花しんるい衆	大友義統つほね、立花親頼衆の「いひやの城火事」以来「ほうまん表」における軍忠を賞し、「むね虎」の事、「道せつひやく」の上は、「ほうまん」へ心を添えるべきを伝える。
(20)				つほね消息写	立花文書(立花家旧臣文書)/『柳近前』P320			同上。(6月24日)付某氏所蔵文書の写。
(21)			(天正12年)6月28日	大友義統書状写	今村家文書(文化史140)/『柳近前』P36			某氏所蔵文書(6月24日付)と本文・宛先ほぼ同じ。
(22)			(天正12年)10月12日	大友義統感状写	三原文書/『大太16』P145、『太市中』P925、『大友27』P54			屋山三介の高橋紹運指揮下における「岩屋要害勤番」等の軍忠を賞す。
(23)			(天正12年)10月18日	大友義統感状写	三原文書/『大太16』P145、『大友26』P254	(大友)義統		屋山三介の高橋紹運「黒木表」出兵時における「岩屋城」留守在番の軍忠を賞す。
(24)				大友義統感状	築瀬文書/『大太16』P146、『大友26』P253			築瀬三河入道の高橋紹運「黒木表」出兵時における「居城」留守在番の軍忠を賞す。
(25)			(天正12年)12月8日	大友義統感状写	築瀬新介殿			築瀬新介の高橋紹運「同城」以来所々における軍忠を賞す。
(26)			(天正13年)2月21日	大友義統感状写	三原文書/『大太16』P154、『大日史11編13』P318、『大友27』P4			屋山中務・村上日向の「岩屋籠在城」等の軍忠を賞す。
参考			天正13年9月13日		九州軍記・薦野家譜ほか/『大日史11編20』P275、『大太16』P213			筑紫広門「宝満ノ城」を攻め取り、高橋統増は岩屋城へ敗走する。
(27)			(天正13年)9月29日		上井覚兼日記/『上井下』P42			筑紫広門が立花城と宝満城を陥落させる。同。同。
(28)			(天正13年)10月28日	大友義統感状写	三原文書/『大太16』P214、『大日史11編22』P89、『太市中』P933	(大友)義統		屋山中務少輔の、去年以来高橋紹運後表在陣中の軍忠、およびこの度「宝満不慮」において、家中一致の働きによる高橋紹運の「岩屋要害」掃城の功を賞す。
(29)			(年未詳)11月16日	大友義統知行預々状写	松村家文書21/『柳近後』P240			元年「立花・岩屋籠義之刻」、使者として渡海等の働きを賞し、知行を預け置く。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容	
5	岩屋城	(30)	天正14年7月8日	高橋紹運書状写	柳川藩立花家文書27/『柳近後』P284	高橋主膳(紹運)	森下備中守殿、原尻左馬介殿、内田老岐守殿	「岩屋」籠城の準備が調ったことを伝える。	
		(31)	(天正14年)7月8日		由布功家文書B65/『柳近後』P379		森下備中守殿、原尻左馬助殿、内田老岐守殿		
		(32)	天正14年7月17日		上井覚兼日記/『上井下』P150				島津勢、「宝満・岩屋・立花」に開城を申し入れるも、拒否される。
		(33)	天正14年7月22日		上井覚兼日記/『上井下』P154				上井覚兼、「岩屋」の陣より1里ほどの「長尾」村に着す。明朝「岩屋下拵」攻撃の旨を軍議する。
		(34)	天正14年7月26日		上井覚兼日記/『上井下』P155				島津勢、岩屋城「下拵」を破り、城を包囲する。翌日城攻めと決す。
		(35)	天正14年7月27日		上井覚兼日記/『上井下』P160				島津勢、「岩屋城」を攻め落とす。
		(36)	天正14年7月28日		島津忠長書状	大鳥居文書/『大太16』P416	(島津)忠長	天満宮大鳥居(信寛)殿へ	大鳥居信寛、「岩屋城」落城を祝す使僧を送り、島津忠長返書する。
		(37)	天正14年7月28日		伊集院忠棟書状写	青柳種信筆写/大鳥居文書/『大太16』P417	伊集院右衛門大夫忠棟	大鳥居(信寛)殿	大鳥居信寛、「岩屋城」落城を祝す使僧を送り、伊集院忠棟返書する。
		(38)	天正14年8月2日		島津義久感状写	児玉鑑探集文書3-152(波多江弥右衛門所持)/『大太16』P417	(島津)義久	波多江忠兵衛(種時)殿	島津義久、波多江種時の「岩屋城」攻めにおける軍忠を賞す。
		参考	天正14年7月27日			豊前軍書・高橋記・薩藩日記雑録後編ほか/『豊前軍』P38、『大太16』P307			島津勢、岩屋城を攻め落とし、高橋紹運自害する。その後毛利陣元の援軍「朝倉殿・入江殿」が「高島・岩屋」に入り、薩摩勢退く(豊前軍書)。
		参考	天正14年8月25日			豊前軍書・北肥戦誌・高橋記・藤野家譜ほか/『豊前軍』P44、『北肥』P744、『大太16』P434			岩屋城落城後、秋月氏より桑野新右衛門が岩屋城に籠め置かれる。立花統虎、高鳥居・岩屋・宝満の諸城を攻めてこれを復す。
		(39)	(天正14年)9月14日		立花統虎知行預々状	吉田家文書11-1/『柳近後』P392	(立花)統虎	吉田鶴寿殿	この度、薩摩勢が攻めた際の「岩屋」籠城における父戦死の軍忠を賞し、3町を預ける。
		参考	天正14年			安軍家史料/『大太16』P441、『柳近前』P18	(立花)統虎	安軍紀伊入道殿	「岩屋」籠城の際、岩屋へ入る。立花宗茂、これを攻め落とす。
		(40)	(年未詳)7月27日		立花統虎感状写	薩藩日記雑録後編/『旧雑後2』P280			「岩屋」籠城の際、岩屋へ入る。立花宗茂、これを攻め落とす。
(41)	天正15年3月3日		内覚	細川幽斎九州道の記/『大太11』P66			かきさ城・口(岩)屋・宝満岳のひもとつても豊臣方に落ちると支障が出る。		
(42)	天正15年5月26日						「去年晴津出て、あたりちか岩屋の城せめ落せし時分…」		
参考	(年未詳)12月27日		立花氏年寄連書状	吉田家文書10-1/『柳近後』P391	立花孝成守権左、十時三弥助権保、矢嶋石見守[]	由布[]、山田勝兵衛口、由布孫[]、十時[]	吉田右京祖父、「岩屋御加勢之刻」に鉄砲物頭に任ぜられ、高橋紹運と共に戦死する。		
6	浦ノ城	(1)	観応4年(文和2)1月25日	左馬助某書下写	由比文書10/『九中世3』P398、『大太11』P429、『大太11』P428、『大友7』P96	左馬助	由比重富次郎四郎殿	「浦城御後攻」としての参陣を賞す。	
		(2)	文和2年3月5日	島津師久書状写	薩藩日記雑録前編18/『大太11』P428、『大友7』P96	(島津)左衛門尉師久	御奉行所	薩州凶徒退治のため打ち立ちつとつところ、「太宰府浦城合戦」難儀のため味方軍勢引き返す云々。	
		(3)	文和2年3月5日	西郷有政軍忠状写	西郷文書/『南北九3』B3538			文和1年12月1日～2年2月1日の「浦城攻」等における軍忠を注進する。	
		参考	観応3年11月24日		北肥戦誌/『北肥』P50			足利直冬・少式頼尚、「浦の城」に籠もり、一色氏と戦う。	
		参考	文和2年		太平記33/『菊池合戦事』/『太平記3』P256、『大太11』P429			鎮西探題一色道敏、「古浦城」に攻める。	
		参考	延文6年8月17日		北肥戦誌/『北肥』P72			官方「少式の本城太宰府」を攻め落とす。少式頼尚、城を落ち、「宝満嶽」に登る。	
		参考			筑紫文書/『落穂7』P58、『福市中1』P992			筑紫広門斯の城(三笠郡之内)に「高尾ノ城」番符。	
		参考			太平記16/少式与菊池合戦事付宗志藏主事/『太平記2』P126、『大太11』P7、『太市中』P369			菊池武敏、少式頼尚と合戦に及び、また少式貞経を「内山城」・「有智山の要害」に攻める。	
		参考	建武2年2月29日		梅松論下・北肥戦誌ほか/『群書類従20』P182、『大太11』P8、『太市中』P372、『北肥』P17			中村孫四郎入道宗永、去2月29日「有智山合戦」における軍忠を注進する。	
		参考			中村文書/『南北九3』P493、『大太11』P6、『太市中』P368、『大友5』P153	少式(頼尚)	安恒九郎四郎殿	中村孫四郎入道宗永、去2月29日「有智山合戦」における軍忠を注進する。	
(1)	建武3年3月20日		少式頼尚書下	託摩文書62/『大太11』P5、『大泉史12』P99、『大友5』P153	(少式)頼尚		託摩之親、去年2月29日「有智山合戦」における軍忠を注進する。		
(2)	建武4年2月2日		大友貞政軍忠状	託摩文書71/『麻生』P96、『南北九3』3571、『福市中1』P359	大友貞政	大友貞政、建武3年2月29日「有智山合戦」等における軍忠を注進する。			
(3)	建武5年4月18日		少式頼尚軍勢催促状写	太平記33/『菊池合戦事』/『太平記3』P257、『大太11』P460、『太市中』P471	少式(頼尚)	麻生人々御中	少式頼尚、凶徒退治のため7月19日「有智山」を立出する。		
(4)	(延文4年々)7月21日			北肥戦誌/『北肥』P72			少式頼尚、大保原合戦に敗北し、太宰府「宝万ガ嶽」に引き上げる。		
参考	延文4年8月			北肥戦誌/『北肥』P83			官方の太宰府攻めに対し、少式頼尚「宝満嶽」に「要害」を構える。8月17日少式頼尚太宰府の城を落ち、「宝満嶽」に登る。		
参考	延文6年			北肥戦誌/『北肥』P91			今川了俊、官方が籠もる有智山城を攻め落とす。		
参考	応永5年			北肥戦誌/『北肥』P91			大内義弘、大友親世とともに少式頼尚を有智山城に攻め落とす。		
参考	永享2年			北肥戦誌/『北肥』P120			少式頼尚、肥前にて大内氏に敗北し、「太宰府の要害」に籠もる。		

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
8	有智山城	宝満城	(5)	龍造寺家経軍忠状	龍造寺文書/『南北九』4J224	藤原(龍造寺)家経	(少貳頼尚)	龍造寺家経、去4月11日に肥後・筑後の軍勢による大宰府攻めに際しての「有智山城」における恒重誓固の軍忠を注進する。
			(6)	深堀時綱軍忠状写	深堀系図証文記録/『南北九』5J474、『大友8』P79	(深堀時綱)	(今川了俊カ)	肥前彼杵の深堀時広代時綱、同年8月の官方「有智山城」没落等における軍忠を注進する。
			(7)	征西將軍宮令旨	曹方文書/『大日史9編36』P88、『大友12』P232	左少将(胤房)	曹方新左衛門尉(固)	征西將軍懷良親王、曹方固の「烏帽子嶽・有智山・高良山」の陣における忠節を賞す。
			(8)	山内道忠軍忠状	山内首藤家文書/『南北九』5J163、『太市中』P503、『大友8』P122	(山内通忠)	(今川了俊)	応安5年8月11日、今川了俊のために、征西將軍宮懷良親王「内山」を落ちる。
			(9)		山内首藤家文書/『南北九』5J164		(今川頼泰)	
			参考	延文4年8月	太平記33「菊池合戦」事/『太平記3』P257、『大友11』P460			少貳頼尚、大保原合戦に敗北し、大宰府「宝方ガ嶽」に引き上げる。
			参考	延文6年	北肥戦誌/『北肥』P72			官方の大宰府攻めに對し、少貳頼尚「宝満嶽」に「要害」を構える。8月17日少貳頼尚大宰府の城を落ち、「宝満嶽」に登る。
			参考	嘉吉2年	北肥戦誌/『北肥』P132			大内政弘の進軍に對し、少貳頼尚「宝満嶽」に「本城」を構えるも、「大宰府の陣」・「宝満の要害」を攻め落とされる。
			参考	大永1年	北肥戦誌/『北肥』P185、『大日史9編14』P16			筑紫瀧門、宝満嶽上宮を再建する。
10	宝満城		(1)	毛利隆元・元就連署條々	山田文書/『大友15』P144	(毛利隆元、元就)	市式(市川経好)、財新(財満忠久)、坂新(坂元祐)	高橋鑑種、毛利氏に通じ大友宗麟より離反を図る。
			参考	永禄期	北肥戦誌/『北肥』P396、藤野家譜			高橋鑑種、大友氏を離反し岩屋城・宝満城に籠もる。
			参考	(永禄5年)11月18日	問註所野家譜/『大友15』P157			永禄5年冬、「宝満嶽」を城主・高橋鑑種、反心して大友氏に背く。
			(2)	(永禄5年)11月18日	問註所野家譜/『大友15』P157、宗麟3』P138	(大友宗麟)	問註所形部太輔(麒麟)殿	問註所鎮連、大友宗麟に高橋鑑種離反の事を注進する。
			(3)	(永禄5年)11月19日	問註所野家譜/『大友15』P158、宗麟3』P139			大友宗麟、高橋鑑種討伐につき、諸勢の出陣を促す。
			(4)	(永禄10年)3月2日	大倉氏採集文書/『大友15』P187、宗麟3』P147	(大友)宗麟	右田正入道殿	6月、高橋鑑種、毛利元就に通じて「岩屋城」に拠り、「点宝満嶽を要す」。
			参考	永禄10年6月	大友家文書録/『大友15』P190、『大友22』P60			7月7日、戸次鑑連等岩屋城を落とし、高橋鑑種「宝満城」に逃れる。大友勢、宝満城を包囲して連月攻防する。
			参考	永禄10年7月7日	大友家文書録/『大友15』P193、『大友22』P61			永禄10年7月7日「宝満」一種における軍忠着到を披見する。
			(5)	永禄10年7月10日	田原文書/『大友15』P203、宗麟3』P159	(大友宗麟)	(田原鑑種代官)	大友勢の岩屋城攻撃に際し、小鳥居氏以下大宰府天満宮の社家衆、神体・神宝等を伴い、「宝満」に避難する。
			(6)	(永禄10年)7月13日	小鳥居文書/『大友15』P191、『太市中』P886、『大友22』P62	(高橋)鑑種	万福寺 衣鉢閣下	去月10日「宝満攻口」における軍忠を賞す。
			(7)	(永禄10年)8月4日	佐土原文書/『大友15』P206、宗麟3』P164、『大友22』P64	(大友)宗麟	佐土原彦十郎殿	小野俊久、「宝満嶽」に派遣されるにあたり、市次郎に跡目を譲る。
			(8)	永禄10年10月13日	萩藩閣録71小野貞右衛門10/『閣閣録2』P647、『大友15』P207	(小野)俊久	市次郎殿	大宰府天満宮上下神官、高橋鑑種に同心して宝満山城に「籠城」する。
			(9)	(永禄10年)10月29日	大鳥居文書/『大友15』P211、『太市中』P868	(高橋)鑑賢、(夏足)宗普	天満宮大鳥居殿	大友義鎮、岩屋城・宝満城の高橋鑑種に對し軍忠を差し向ける。
			参考	永禄10年	北肥戦誌/『北肥』P400			大友宗麟、永禄11年7月23日の「宝満之者共差下候之刻」、「宇美河内」における、戸次鑑連配下の軍忠着到を披見する。
			(10)	永禄11年7月23日	立花文書31/『柳近前』P346、宗麟3』P223、『大友22』P104	(大友宗麟)	(戸次鑑連カ)	河本左京亮を「宝満」に派遣する。
			参考	永禄11・12年	藤野家譜/『太市中2』P630			小早川隆景、有田加賀守を「急用」のため「宝満」に遣わす。
(11)	(永禄12年)2月20日	佐藤保介氏文書/『大日史10編1』P947、萩藩閣録108赤川勘兵衛22/『閣閣録3』P328	(小早川)左衛門隆景	佐又(佐藤元美)	吉川元春・小早川隆景、立花城を攻め落とす。高橋鑑種を「宝満」に差し返し、大友勢の背後を遮断する。			
(12)	(永禄12年)3月8日	佐藤保介氏文書/『大友15』P226、萩藩閣録108赤川勘兵衛19/『閣閣録3』P328	(小早川)左衛門隆景	佐藤又右衛門尉(元美)殿	毛利元就、「宝満」へ使者を遣わす。			
(13)	(永禄12年)5月30日	佐藤保介氏文書/『大日史10編2』P639、『太市中』P891、萩藩閣録108赤川勘兵衛26/『閣閣録3』P329	(小早川)左衛門隆景、(吉川)駿元春		小早川隆景、堀立直正に「立花・宝満」の状況を尋ねる。			
(14)	(永禄12年)7月2日	佐藤保介氏文書/『大日史10編2』P640、萩藩閣録108赤川勘兵衛3/『閣閣録3』P325	(毛利)元就	堀立老政守(直正)殿	大友宗麟、筑・肥への出馬を前に、吉弘鑑理・戸次鑑連より情勢を伺い、指示を出す。「彦山」が大友氏に属せば、「古所・宝満」は勿論、肥前・肥後までも支配下に入るとの見通し。			
(15)	(永禄12年)10月19日	毛利氏四代妹録考証論断/『大日史10編2』P393	(小早川)隆景					
(16)	(永禄12年)10月25日	木下文書、親王鑑録集文書6-108(香椎木下氏藤書)/『大友15』P300、『福市中1』P1、『柳近前』P166、宗麟4』P93	(大友)宗麟					

No.	名称	校番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
10	宝満城							
(17)	(永禄12年)10月26日	聖護院門跡道増書状	萩藩閩録16志道太郎右衛門55/『閩閩録1』P468、『大太15』P301		(聖護院門跡道増)	立雪斎市川式部少輔(經好)殿、赤川左京亮(元保)殿	福原惣左衛門尉のこと、「宝満之加勢」への派遣について。	
(18)	(永禄12年)10月28日	吉弘鑑理書状写	無尽集79浦備前書3/『大太15』P302、『大日史10編3』P600、『宗市中2』P597		吉弘左近大夫鑑理	立花勤番各御中御陣所	大内輝弘の山口入りと、吉川元春・小早川隆景の立花撤退、「宝満之儀」は近々一着あるべきこと等を報じる。	
(19)	(永禄12年)11月3日		無尽集79浦備前書3/『大太15』P303、『大日史10編3』P600、『宗市中2』P598			浦兵部少輔殿	「宝満之儀」近々一着すべきこと等を報じる。	
参考	永禄12年11月14日		豊前覚書・高橋記ほか/『豊前覚』P13、『大太15』P297				戸次鑑連、11月14日に「宝満」に攻めかかり、15日高橋鑑種降参する。	
(20)	(永禄12年)11月25日	大友宗麟書状写	福岡市博物館所蔵文書/『福市中1』P1028、『宗麟4』P105		宗麟	(北原鎮休)	高橋家を主膳兵衛鑑種に相続させ、「岩屋・宝満両城要害」を堅固に守らせる。	
参考	(永禄12年)11月)		大友家文書録・薦野家譜ほか/『大日史10編3』P625、『大友22』P224				吉弘鑑理の二男鎮理、高橋鑑種と名乗り「宝満・岩屋」城主となる。	
参考	永禄13年		北肥戦誌/『北肥』P433				大友勢、岩屋城を攻め、高橋鑑種降参・下城する。高橋家を主膳兵衛鑑盛に継がせ、宝満城の勤番とする。	
(21)	永禄12年12月13日	大鳥居信寛申状	太宰府天満宮文書/『大太15』P311、『太市中』P899		法印(大鳥居)信寛	国司右京亮(元武)殿、見玉三郎右衛門尉(元良)殿	大鳥居信寛が大友氏に提出した訴状で、永禄10年7月に社家衆が大友氏に背いて「宝満城」に籠城し、落城の後分国中に隠れ住んだ者たちの処分を依頼する。	
(22)	天正3年4月3日	堀立直正書状写	堀立氏証文写/『大太15』P376		堀立老岐守直正	さんちよ女	堀立直正、国司元武・見玉元良に毛利輝元への軍忠披露を依頼する。博多へ「警固」に下り、そのまま「宝満」に留まる。	
(23)	天正3年5月28日	戸次道雪議状写	立花文書35/『大太15』P192、『柳近前』P358		戸次伯耆守入道道雪		永禄10年7月7日「宝満九ノ峰切崩」時の軍忠披見状を譲る。	
参考	天正6年12月1日		豊前覚書・北肥戦誌ほか/『豊前覚』P21、『大太15』P410				耳川の敗戦を受け、龍造寺勢等の来襲に備えて「宝満・岩屋・立花」勢籠城する。龍造寺隆信、筑前に侵入し宝満・岩屋・立花等に攻めかかり、戸次道雪・高橋紹運等これを防ぐ。	
(24)	(天正7年)7月11日	筑紫鎮恒感状写	筑紫辰五郎資料/『福市中1』P1001		筑紫鎮恒	兵部少輔(筑紫宗門)殿	「宝満岳要害小屋口」における軍忠を賞す。	
参考	天正7年9月6日		歴代鎮西志・歴代鎮西要略/『大太15』P449				秋月種実、宝満城を攻め、戸次道雪・高橋紹運により敗退する。	
(25)	(天正9年)4月12日	大友円斎書状	問註所文書/『大太15』P490、『太市中』P917、『宗麟5』P147、『大友25』P181		円斎(大友義鎮)	問註所刑部少輔(統景)殿	大友義鎮、問註所統景に「立花・宝満」について申し談す。	
(26)	(天正9年)9月9日		問註所文書/『問註』P41、『大太15』P504、『宗麟5』P151				大友義鎮、問註所統景に「立花・宝満」より大友義統の陣替え要請があること等を伝える。	
参考	天正11年2月17日		豊前覚書ほか/『豊前覚』P34、『大日史11編3』P661				岩屋城、筑紫広門に攻められるも、「宝満」により撤退する。	
(27)	天正11年12月18日	ルイス・フロイス書翰写	イエズス会日本年報/『大太16』P24		ルイス・フロイス	(アレックス・ドロ・バリニヤ)	大友氏の領する「Fima(宝満か)・「Tachibana(立花)」の城の守将、秋月種実に対し謀略を図る。	
(28)	天正11年12月20日	大友義統知行宛行状写	大友家文書録/『大日史11編5』P382、『大太16』P22、『大友26』P176		(大友)義統	築瀬三河入道殿	「宝満遂籠城」の功を賞し、三井郡に知行を与える。	
(29)	天正12年2月2日	大友義統感状	築瀬文書/『大太16』P23、『大友26』P181			築瀬新介殿	「宝満陸在城」と折々の軍功を賞す。	
(30)	天正12年3月27日	戸次道雪書状写	薦野文書52/『福市中1』P267、『大友26』P195		(戸次)道雪	(薦野)増時	薦野増時、昨3月26日、にわか「宝満表」に赴く。	
(31)		大友義統書状	某氏所蔵文書/『大太16』P42			立花弾正忠殿 ほか30名	「岩屋城火事」以来「宝満表」を始め、戸次道雪旗下における立花城衆の軍忠を賞す。	
(32)	(天正12年)6月24日	大友義統書状写	立花文書(立花家旧臣文書)/『柳近前』P319		(大友)義統	立花弾正忠(元)立花右衛門大夫二至ルル卅一名宛	同上。6月24日某氏所蔵文書の写。	
(33)			「土民ノ事蹟」柳立102-26/『柳近後』P560			立花弾正忠殿 ほか30名		
(34)	(天正12年)6月24日)	つほねおのしほ	某氏所蔵文書/『大太16』P44		つほね	たち花しんるい衆	大友義統つほね、立花親頼衆に対し、「いへやの城火事」以来「ほうまん表」における軍忠を賞し、「むねおのしほ」の事、「道せつけいやく」の上は、「ほうまん」へ心を添えるべきを伝える。	
(35)		つほねおのしほ	立花文書(立花家旧臣文書)/『柳近前』P320				同上。(6月24日)付某氏所蔵文書の写。	
(36)	(天正12年)6月28日	大友義統書状写	今村家文書(文化史140-1)/『柳近前』P56		(大友)義統	立花弾正忠殿 ほか30名	某氏所蔵文書(6月24日付)と本文・宛先ほぼ同じ。	
(37)	(天正12年)6月晦日	戸次道雪書状写	薦野文書54・薦野家譜/『福市中1』P267、『大太16』P47		鶴白軒(戸次)道雪	(薦野)増時	「宝満」にも一昨日指し遣わさる由云々。我らも「白岳」普請のため明日朝日は「白岳」在城の覚悟。	
(38)	(年月日未詳)	戸次道雪書状	立花文書679-3/『大太16』P41、『柳近前』P61		(薦野)増時		今日「宝満」へ差し遣わす「御覚悟」の由云々。	
(39)	(年月日未詳)	戸次道雪書状写	木付文書(立花家旧臣文書)/『柳近前』P318		(木付鑑)実		今日「宝満」へ「原左」を差し送る。	
(40)	(天正12年)7月5日	大友義統感状	築瀬文書/『大太16』P50		築瀬三河入道殿		去々年以來「宝満」籠城等の軍忠を賞す。	

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
10	宝満城	(41)	(天正12年)7月23日	原田了栄書状写	兄玉鑑採集文書2-117(山前氏所蔵)/『原田編年』P264、『大太16』P56 九州軍記・藤野家譜ほか/『大日史11編』P275、『大太16』P213 北肥戦誌/『北肥』P726	(原田)了栄	(秋月)種実主	原田了栄、秋月種実「立花・宝満之者共」夜須表に一行為るべき風聞等、大友方の動静を報じる。 筑紫広門「宝満・城」を攻め取り、高橋紹運は岩屋城へ敗走する。宝満城には筑紫奥門が入る。
		参考	天正13年9月13日					高橋紹運の筑後出陣中、秋月種実の策により、高橋紹運が宝満城を下城する。宝満城には筑紫奥門が入る。
		参考	天正13年10月23日					筑紫広門が立花城と宝満城を陥落させると聞く。
(42)			(天正13年)9月29日		上井覚兼日記/『上井下』P42			筑紫奥門が立花城と宝満城を陥落させると聞く。
(43)			(天正13年)10月28日	大女義統感状写	三原文書/『大太16』P214・276、『大日史11編』P933 高橋記・歴代領西志/『大太16』P275・293 上井覚兼日記/『上井下』P150 上井覚兼日記/『上井下』P160 上井覚兼日記/『上井下』P163	(大女)義統	屋山中務少輔殿	去年以来高橋紹運筑後表在陣中の軍忠、およびこの度の「宝満不慮」における、家中一致の働きによる高橋紹運の「岩屋要害」「帰城」の功を賞す。
		参考	天正14年					高橋紹運、兵門と和睦し、高橋紹運が宝満城へ入る。
(44)			天正14年7月17日		鳥津勢/『宝満』岩屋・立花に開城を申し入れるも、拒否される。			鳥津勢、岩屋城を攻め落とす。
(45)			天正14年7月27日					上井覚兼、八代にて鳥津義久に面会し「宝満」は5日もせずに落城せんことを伝える。
(46)			天正14年8月5日					伊集院忠棟、「宝満一着の儀」について大鳥居信寛より祝儀を受け、神領について安堵する。
(47)			(天正14年)8月8日	伊集院忠棟書状	大鳥居文書/『大太16』P433	(伊集院)忠棟	留守大鳥居(信寛)殿	「宝満之事」18月6日に落居のこと、神領・神官等の下知のことを伝える。
(48)				忠敦書状	大鳥居文書/『大太16』P434	忠敦	大鳥居(信寛)殿	八代への鳥津本陣に、筑前表について、「宝満」の陥落が伝わる。
(49)			天正14年8月8日		北肥戦誌/『北肥』P742			鳥津勢、筑前撤退に際し、宝満城に秋月種実を置く。
参考			天正14年					鳥津勢、筑前撤退に際し、宝満城に秋月種実を置く。
(50)			天正15年3月3日	内寛	薩藩日記雑録後編/『田雑後2』P280			鳥津勢、筑前撤退に際し、宝満城に秋月種実を置く。
(51)				豊臣秀吉朱印状	小早川家文書471/『大日古11-1』P407	(豊臣)秀吉	小早川左衛門佐(隆景)とのへ	大隈・秋月・「宝万」ほか、筑前・筑後、肥後の諸城の平定を伝える。
(52)			(天正15年)4月15日	豊臣秀吉朱印状	黒田家文書89/『黒田』P210、『福市中1』P712	(豊臣)秀吉	黒田勘解由(孝高)とのへ	
参考			天正15年4月	生駒雅楽頭宛書	『物語秋史』上』P378			
(53)			天正15年5月26日		細川幽斎(九州道の記)/『大太117』P66			生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうら「宝満嶽 内田四郎右衛門」。
参考			慶長15年11月16日	福岡重継軍功書上写	秋藩閩閩録34草刈太郎左衛門60/『閩閩録1』P819			「昔は龍門山宝重寺とて山伏の住ける所」有けるを、ちかきとし比より高橋と云者城郭にこしらへて有けるが、去年嶋津出て、あたりちかき岩屋の城せめ落せし時分あけるが、此比山伏の扁住と申せし……」
参考			慶長15年11月16日					小早川隆景の筑前入都に際し、「宝満」城を預かり、「筑後」(肥後)一国一揆の際にも在城する。
(54)			(年未詳)12月13日	戸次鑑連知行預ケ状	田原惟敏家文書B5-15/『柳近前』P358	福岡対馬守重継	前原休閑(元詮)様	近年、特にこの度の「九峯」における軍忠を賞し、知行を預け置く。
参考			(年月未詳)	道雪旗印代戦死之人教	十時(吉)文書38/『柳近前』P659			「筑前国宝満二面」。「筑前国九峯ニテ」。
参考				筑紫氏所領城教	筑紫文書/『落穂』P58、『福市中1』P992			筑紫広門朝野の城(三笠郡之内)に「宝満」城、高橋乗雲居城切取ル。筑紫四郎右衛門尉」。
参考			(永禄5年)11月18日		問住所町野家譜/『大太15』P156			米津(6)年冬、宝満龍平岳城主・高橋鑑種、大友氏に離反する。
参考			天正7年					秋月・筑紫氏による宝満・岩屋・立花城への「附城」構に對し、高橋紹運・戸次道雪も「米の山・龍か城・あまか城・から山・香椎山・名嶋」などに砦を築き軍勢を籠める。
参考	16	天判山城(武藏/城)	延文6年 (応永4年カ)		北肥戦誌/『北肥』P72			宮方の太宰府攻めに對し、少貳氏「天律蘇」に出城を察す。8月宮方に落とされる。
参考			天文2年12月		肥陽軍記・龍造寺記ほか/『大太14』P358			大内氏の將領興興、筑紫正門が籠もる「武藏」の城を攻め落とす。
参考			天文2年		北肥戦誌/『北肥』P201			御興厚、武藏城を攻め落とす。
参考			永禄2年		北肥戦誌/『北肥』P336			春、筑紫推門「居城武藏」に戻る。4月2日大友氏がこれを攻める。
参考			天正6年		豊前覚書/『豊前覚』P22			筑紫広門の使者嶋珍彦、立花城より「武藏」の城に、帆足弾正所に届る。のち立花勢、「武藏」の城に籠もる。
参考			天正13年9月13日		藤野家譜/『大太16』P216			筑紫広門の宝満城を攻めに、武藏・和久堂山・柴田・所々の砦より筑紫勢が駆け付ける。
参考			天正15年3月3日		北肥戦誌/『北肥』P768			豊臣秀吉の九州平定に際し、黒田家人久野四兵衛・入江与三兵衛、武藏に警備する。
参考					筑紫文書/『落穂』P58、『福市中1』P992			筑紫広門朝野の城(三笠郡之内)に「武藏」城、帆足善右衛門尉」。
参考			天正6年		豊前覚書/『豊前覚』P22			筑紫広門朝野の使者嶋珍彦、立花城より「武藏」の城に、帆足弾正所に届る。のち立花勢、「武藏」の城に籠もる。
参考	17	飯盛城	天正6年					筑紫広門朝野の城(三笠郡之内)に「築師山城 同人(帆足善右衛門尉)」。
参考	18	草/山砦(築師山城)	天正7年		筑紫文書/『落穂』P58、『福市中1』P992			秋月種実、柴田龍平に陣し戸次道雪・高橋紹運と合戦するも、破れて弥永に敗走する。
参考	19	柴田城	天正7年9月		立花系譜附録/『大太15』P451			筑紫広門の宝満城を攻めに、村山近江守が柴田の城より馳せ参る。
参考	20	永岡城	天正13年9月13日		九州軍記/『大太16』P215			筑紫広門の宝満城を攻めに、武藏・和久堂山・柴田・所々の砦より筑紫勢が駆け付ける。
参考	21	永岡城			藤野家譜ほか/『大太16』P216			筑紫広門朝野の城(三笠郡之内)に「築師山城 村上近江守」。
参考	22	永岡城			筑紫文書/『落穂』P58、『福市中1』P992			筑紫広門朝野の城(三笠郡之内)に「長岡」城、原大隈守」。
参考	23	永岡城	天正7年		藤野家譜			秋月・筑紫氏による宝満・岩屋・立花城への「附城」構に對し、高橋紹運・戸次道雪も「米の山・龍か城・あまか城・から山・香椎山・名嶋」などに砦を築き軍勢を籠める。
参考	24	中牟田城			筑紫文書/『落穂』P58、『福市中1』P992			筑紫広門朝野の城(弥須郡)に「中牟田城 木村備前守 才田丹後守」。
参考	25	弥永城	天正15年4月		『物語秋史』上』P378			生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「弥永 深江伯耆」。
参考	26	小鷹城			筑紫文書/『落穂』P58、『福市中1』P992			筑紫広門朝野の城(弥須郡之内)に「弥永」城、切取ル「番持」。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
40	片山城	参考 天正15年4月		生駒雅楽頭宛宛書	『物語秋史 上』P378			生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「片山 税田民部」。
45	荒平城	参考 天正15年4月5日		豊前宛書/豊前宛書	『北肥戦誌』/北肥』P774			立花統虎、「秋月里城」に陣を取り、「秋月城」において秀吉に対面する。
		参考 (1) (天正15年)9月27日		安国寺惠復書状写	萩藩閩閩録50飯田与一左衛門16、『閩閩録2』P288	安国寺惠復	(伊賀)家久	秀吉・大隈城より秋月が里城荒平」に移る。立花統虎参陣し、秀吉と対面する。
		参考 (2) (天正16年)2月1日		吉川広家書状	萩藩閩閩録50飯田与一左衛門8、『閩閩録2』P287	吉蔵(吉川)広家	伊賀与三郎殿	伊賀家久、「秋月御在番」を勤める。
46	杉本城	参考 (1) (年未詳)3月16日		戸次鑑連知行預々状	北肥戦誌/北肥』P208	(戸次)鑑連	小野乙寿丸殿	小野乙寿丸の養父大蔵丞の「秋月宅所」における戦死の軍忠を賞し、土地を預け置く。
		参考 (2) 弘治3年7月		戸次鑑連感状写	『土民ノ事蹟』柳立102-40/『柳近前』P564		後藤市弥太殿	大友勢(休松)に陣して秋月文種「秋月館」を攻め、焼き払う。
		参考 (3) (弘治3年)7月7日		戸次鑑連感状	太田文書/宗麟2』P642	(戸次)鑑連	安東次郎殿	
		参考 (4) (弘治3年)7月28日		戸次鑑連感状	安東家史料1045-27/『柳近前』P17		安東助八郎殿	この度の秋月文種「宅所」攻めに於ける軍忠を賞す。
		参考 (5) (弘治3年)7月11日		戸次鑑連感状	由布文書1-4/『柳近前』P338、『大友20』P133		由布源五左衛門尉殿	
		参考 (6) (永禄1年)3月26日		大友義鎮知行預々状写	小野文書/宗麟2』P176	(大友)義鎮	吉弘八郎殿	先年「秋月退治」の際、「後屋敷」取懸における親父戦死の軍忠を賞し、土地を預け置く。
		参考 (7) (永禄2年)4月23日		大友義鎮知行預々状	小野文書(中世)40/『柳近前』P87、『宗麟2』P208		小野乙寿殿	去々年「秋月退治」の際、「文種居屋敷」取懸における親父戦死の軍忠を賞し、土地を預け置く。
		参考 (8) (永禄2年)4月23日		北肥戦誌/北肥』P401				秋月種実、大友勢の来襲に対し、居館より古処山城に移る。
		参考 (9) (天正16年)2月1日		吉川広家書状	萩藩閩閩録50飯田与一左衛門8、『閩閩録2』P287	吉蔵(吉川)広家	伊賀与三郎殿	伊賀家久、「秋月御在番」を勤める。
47	古処山城	参考 (1) 永享5年9月5日		満濟准后日記/『纂群書類従 補遺1 満濟准后日記』P507、『太市中』P617				「筑前秋月城(8月19日)に落ち、「少式父子三人」の頸が近日に上京との報。
		参考 (2) 永享5年8月		北肥戦誌/北肥』P120				少式満貞、大内氏に追われ秋月氏を頼み、「箇の城」に籠もる。探題崇川氏・大内氏これに攻め、8月19日に満貞自害する。
		参考 (3) 嘉吉2年		北肥戦誌/北肥』P134				大内教弘、少式教頼を対馬に追い、「秋月」城に秋月中務大輔種繁を籠め置く。
		参考 (4) (弘治2年)10月20日		満盛院文書/『太太15』P135		(田北)鑑生	(満盛院)	「古所山」の攻略が近いことを報じる。
		参考 (5) (弘治3年)6月5日		宗像神社文書/『宗市中2』P376		(大友)義鎮	殿	大友義鎮、このたびの「秋月御成敗」における宗像鍋寿丸の協力を依頼する。
		参考 (6) (弘治3年)7月11日		田北文書/『宗麟2』P131、『大友20』P132			鶴原刑部丞殿	7月7日「秋月要春取懸」「打崩」における軍忠を賞す。
		参考 (7) 弘治3年7月		田口文書/『宗麟2』P130				秋月文種、大友勢に「館」を落とされ、「古所山の本城」に移るも殺される。戸次鑑連ら、古処山城の秋月文種を攻め、古処山城を陥落、文種戦死する。
		参考 (8) (弘治3年)6月5日		野家譜/『史料綜覧10』P442		(大友)義鎮	鶴原刑部少輔殿	7月7日「秋月家城取懸」における軍忠を賞す。
		参考 (9) (弘治3年)9月23日		田口文書/『宗麟2』P142			永永越中守殿	このたびの「秋月退治」里城」における軍忠を賞す。
		参考 (10) (弘治3年)9月23日		永永文書/『宗麟2』P154、『大友20』P146			永永越中守殿	秋月種実、毛利元就の助けにより古処山城を攻め、奪還する。これに対し大友氏、古処山城を攻める。
		参考 (11) 永禄2年1月		秋月高錦家譜、北肥戦誌ほか/『北肥』P338、『野家譜』、『史料綜覧10』P468				秋月種実、毛利元就の助けにより古処山城を攻め、奪還する。これに対し大友氏、古処山城を攻める。
		参考 (12) 永禄2年8月16日		北肥戦誌/北肥』P401				秋月種実、大友勢の来襲に対し、居館より古処山城に移る。
		参考 (13) (永禄11年)10月15日		佐藤保介氏文書/『大太15』P219、萩藩閩閩録108赤川勘兵衛27、『閩閩録3』P328		(小早川)隆景、(吉川)元春	佐藤又右衛門尉(元美)殿	「古所」兵糧について毛利方より支援のため佐藤元美を派遣する。
		参考 (14) (永禄12年)閏5月21日		問註所文書/『福泉資10』P323、『宗麟4』P50、『大友22』P182		(大友)宗麟	問註所刑部入道殿	秋月種実、大友宗麟に服従する。
		参考 (15) (永禄12年)10月25日		木下文書、頂玉鑑採集文書6-108(香椎木下氏蔵書)/『大太15』P300、『福市中1』P1、『柳近前』P166、『宗麟4』P93			吉弘左近大夫(鑑理)殿、戸次伯耆守(鑑連)殿	筑・肥への出陣を前にあたり、吉弘鑑理・戸次鑑連に指示を出す。「彦山」が大友氏に属せば、「古所・宝満」は勿論、肥前・肥後までも支配下に入るとの見通し。
		参考 (16) 永禄12年11月		豊前宛書/『豊前宛』P13				戸次鑑連、秋月の城を攻め敗北するも、山隈原にてこれを破る。
		参考 (17) 元亀1年1月		ルイス・プロイス「日本史」/東洋文庫330『日本史5』P16				秋月種実が「空高く響える山の上の、たいそう大きな所」に住居する。
		参考 (18) (年未詳)7月19日		由布文書1-1-5/『柳近前』P338				この度の「古所山」攻めにおける軍忠を賞す。
		参考 (19) 戸次鑑連感状		太田文書/『柳近前』P642		(戸次)鑑連	安東舍人允殿	同上。太田文書の写。
		参考 (20) 戸次鑑連感状		安東家史料1045-30/『柳近前』P17				香春城を攻めんとする大友勢に対し、秋月種実「古所山城」を築し、猪熊にて大友勢を破る。
		参考 (21) 天正7年12月		大友文書/『大友史33-2補遺5』P33、『大友24』P174				
		参考 (22) 天正13年8月29日		藤龍家譜/『大友史11編18』P408			筑紫広門(政家)殿	筑紫広門と秋月種実、龍造寺政家を介して和し、島津氏に与する。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
47	古処山城							
(17)		(17)	(天正14年)12月22日	豊臣秀吉書状	黒田家文書/『黒田1』P177、『福市中1』P703		小早川左衛門佐(隆景)とのへ、安国寺(惠助)、黒田勘解由(孝高)とのへ	豊臣秀吉、秋月種実からの臣従申し入れを受け、毛利吉成を「秋月城」に入れ置かんとする。
(18)		(18)	(天正15年)3月20日	豊臣秀吉朱印状写	黒田家文書/『福市中1』P785	(豊臣秀吉)	黒田勘解由(孝高)とのへ	豊臣秀吉、黒田孝高等九州先陣の軍勢に、「秋月」付近にて秀吉の到着を待つよう命じる。
(19)		(19)	(天正15年)3月28日		吉川家文書706/『大日古』P652		吉川蔵人(広家)とのへ	秀吉、「秋月表」の政聞を命じる。
(20)		(20)	(天正15年)3月晦日	豊臣秀吉朱印状	小早川家文書469/『大日古11-1』P405		小早川左衛門佐(隆景)とのへ	秀吉、明日馬嶽より「秋月表」への移動を伝える。
(21)		(21)	(天正15年)3月30日		黒田家文書/『黒田1』P207、『福市中1』P711		黒田勘解由(孝高)とのへ	
参考			天正15年4月4日		豊前覚書/『豊前覚』P47、北肥戦誌/『北肥』P73			秋月種実、豊臣秀吉に降伏し、古処山城を明け渡す。秀吉、同城に生駒雅楽守近正を置く。
参考			天正15年4月5日		豊前覚書/『豊前覚』P48			立花統虎、「秋月里城」に陣を取り、「秋月城」において秀吉に對面する。
(22)		(22)	(天正15年)4月7日	安国寺惠獲書状写	萩藩閩閩録102-1冷泉五郎72、『閩閩録3』P222	安国寺惠獲	元満	4月1日岩石城が落城、秋月種実が毛利吉成の陣所に走り入りて命乞いし、「古所」を明け渡す。
(23)		(23)	(天正15年)4月8日	木下吉隆書状	古文書類纂/『福岡県文化財調査報告書195 秋月街道』P228、『史料綜覧』11編912冊160頁 (大日本史料総合DB)	木下半助	中村式部少輔殿、山内対馬守殿、一柳伊豆守殿、日根野織部殿、堀尾帯刀殿、同勘右衛門殿	豊臣秀吉、4月2日に「大熊」に陣替えする。秋月種実父子、剃髪の上毛利吉成の陣所を訪ね、降伏・命乞いをする。また、助命の礼に「大熊」の秀吉を訪ね、檣柴を献上する。浅野長吉、「城」を受け取り、4日に入城する。
(24)		(24)	(天正15年)4月15日	豊臣秀吉朱印状	小早川家文書471/『大日古11-1』P407	(豊臣秀吉)	小早川左衛門佐(隆景)とのへ	岩石・大隈・「秋月」ほか、筑前・筑後・肥後の諸城の平定を伝える。
(25)		(25)			黒田家文書/『黒田1』P210、『福市中1』P712		黒田勘解由(孝高)とのへ	
参考			天正15年4月		九州御動座記/『大太17』P69			4月2日、豊臣秀吉大隈に逗留する。秋月種実、古所山城を浅野長吉・毛利吉成に明け渡し、秀吉に對面する。
参考			天正15年4月	生駒雅楽頭宛覚書	『物語秋月史』上』P378	吉蔵(吉川)広家		生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「古所山 御居城」。
(26)		(26)	(天正16年)2月1日	吉川広家書状	萩藩閩閩録50飯田与一左衛門8、『閩閩録2』P287		伊賀与三郎殿	伊賀家久、「秋月御在番」を勤める。
参考			弘治3年7月		北肥戦誌/『北肥』P307			大友勢(休松)に陣して秋月文種「秋月館」を攻める。
参考			永禄2年		北肥戦誌/『北肥』P338			大友氏の筑後勢、古処山城に籠むる秋月種実を討つため、「休松」に陣する。
(1)		(1)	永禄10年9月3日	大友宗麟軍忠披見状	五条家文書/『五条』P102、『福果資1』P133、 『宗麟3』P169	(大友宗麟)	(五条鎮定)	永禄10年9月3日「秋月」休松合戦時、軍忠着到を披見する。
(2)		(2)			三池文書/『福果資10』P386、『宗麟3』P176		(三池鎮実)	永禄10年9月3日「休松」合戦時の軍忠着到を披見する。
(3)		(3)			田尻文書/『宗麟3』P170		(田尻鎮種)	
(4)		(4)	(永禄10年)10月5日	大友宗麟感状	三池文書/『福果資10』P385、『宗麟3』P186、 『大友22』P74		三池(鎮実)殿	
(5)		(5)			五条家文書/『五条』P101、『福果資1』P133、 『宗麟3』P188、『大友22』P75		五条(鎮定)殿	
(6)		(6)	永禄10年10月8日	大友宗麟感状	田尻文書/『宗麟3』P187	(大友)	田尻中務太輔(鑑種)殿	9月3日「休松」合戦における軍忠を賞す。
(7)		(7)			花田文書/『宗麟3』P188		草野中務太輔殿	
(8)		(8)	(永禄10年)10月11日	大友宗麟感状	佐土原文書/『宗麟3』P189、『大友22』P75		佐土原彦十郎殿	
(9)		(9)	(永禄10年)11月13日	大友宗麟安堵状	波津久文書/『宗麟3』P197、『大友22』P79		波津久弥三郎殿	この度の「休松」における父戦死の軍忠を賞し、跡目相続を安堵する。
(10)		(10)	(永禄10年)12月17日	大友宗麟感状	小野文書/『柳近前』P88、『宗麟3』P200		小野彌介殿	
参考			永禄10年8月16日		北肥戦誌/『北肥』P401			8月16日に戸次鑑連など大友勢、秋月種実を攻めためるため休松に着陣する。9月3日大友勢と秋月種実、休松にて合戦する。
(11)		(11)	(永禄11年)6月7日	戸次鑑連書状写	北肥戦誌/『北肥』P405	戸伯(戸次)鑑連	(田尻)鑑種	去年の「休松」における合戦について。
(12)		(12)	(永禄11年)10月9日	大友宗麟知行預々状	小野文書/『柳近前』P88、『宗麟3』P244	(大友)宗麟	小野彌介殿	先年「安見松」における父戦死の軍忠を賞し、土地を預け置く。
(13)		(13)	(年未詳)10月26日	大友宗麟感状	甲木文書115/『柳近前』P157		瀧田近江守殿	先13日の筑前休松における毛利親對陣時の防戦の軍忠を賞す。
(14)		(14)	天正3年5月28日	戸次道雪書状写	立花文書35/『柳近前』P358	戸次伯耆守入道道雪	きんちよ女	永禄10年9月3日「秋月」休松合戦の軍忠により拝領の「打物」を譲る。
(15)		(15)	天正9年4月28日	秋月種実書状	大倉氏採集文書/『史料綜覧』9編910冊663頁 (大日本史料総合DB)	(秋月)種実	上野四郎兵衛尉殿	先年「筑前之内休松・馬見」等における軍忠を賞す。
参考			(年月日未詳)	道雪様御代戦死之人數	十時(吉)文書B8/『柳近前』P659			「筑前休松」永禄10年9月3日、「永禄10年9月3日」、「永禄7年」。
参考			弘治3年		北肥戦誌/『北肥』P307			大友氏、秋月・筑紫氏の離反に対して軍勢を築し、日田より「右良山」に陣する。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
61	麻氏良城	参考 永祿2年	(永祿10年)11月8日	大友宗麟書状	北肥縣誌/北肥JP338	(大友)宗麟	問註所刑部入道殿	大友氏、古処山城に籠るる秋月種美を討つため軍勢を發し、日田より「左右良山」に陣する。 「左右良山」修築の忠勸を賞す。 このたびの戸次鑑連・臼杵鑑運・吉弘鑑理のその表出張における馳走、および「左右良一城」の「取付」勳番を賞す。 永祿10年以來、「左右良城」における忠勸を賞し、肥筑に知行を預け置く。 大隈・秋月・「間寺」ほか、筑前・筑後・肥後の諸城の平定を伝える。
					問註所文書/問註JP19、『福果實』10JP322、『宗麟3』JP193、『大友22』JP78			
					問註所文書/問註JP17、『宗麟3』JP243			
					問註所文書/福果實10JP323、『宗麟4』JP50、『大友22』JP182			
					小早川家文書471/『大日古』11-1JP407			
66	三日月城 (池田城)	参考 天正15年4月 参考 慶長6年 参考 元和1年	天正13年閏8月8日	江戸幕府老中連署奉書	黒田家文書/黒田家文書2JP69、黒田家譜14/黒田家譜1JP489	(大友)左京様	黒田筑前守(長政)殿	一國一城令により、六端城を破却する。 長尾城へ発向のため「池田城」を攻略する。 天正13年閏8月16日「池田城」籠小屋」発向時の被官の軍忠状を披見する。 筑前国木郷へ発向の際、「池田里城」攻撃における軍忠を賞し、父の一跡を安堵する。 筑前国木郷へ発向の際、「池田里城」攻撃における軍忠を賞す。 生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「池田山 中五寺左近」。
					碩田叢史(鶴崎吉岡氏所蔵 豊後武家文章)/『大日史』11編19JP150			
					大友家文書録/『大日史』11編19JP152			
					大友家文書録/『大日史』11編19JP152			
					片山文書/『大日史』10-2』551、『大日史』11編19JP153、『大友27』JP32			
67	米山城 (白木山城)	参考 天正15年4月 参考 天正15年4月	天正13年閏8月28日	大内氏奉行人連署奉書	須子家文書/『福市中』1JP861	須子弥太郎(信光)	大内義隆、須子信光の祖父親光以来の「筑前米山御城番」の軍忠を賞し、長門美祿郡に所領を宛行。	
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
68	鶴木城	参考 天正15年4月	天正13年閏8月28日	戸次道雪書状	藤野文書、藤野家譜/『福市中』1JP271、『大日史』11編13JP202	(高野)増時	1月21日、日田郡那々の大友勢、秋月種美の「長尾・針目」両城を攻め落とす。	
					碩田叢史(鶴崎吉岡氏所蔵 豊後武家文章)/『大日史』11編19JP150			
					高瀬文書/『大日史』11編19JP151			
					榎垣文庫資料/『福市中』1JP175、『大日史』11編19JP151			
					立花文書689/『柳近前』JP588			
69	長尾城	参考 天正15年4月	天正13年閏8月13日	戸次道雪書状	立花文書689/『柳近前』JP588	志賀伊勢入道道輝老ほか9名	戸次鎮連の、先年「長尾」攻めにおける態度を叱責し、今後の奮起を促す。 筑前長尾、「永祿12年5月18日」、「永祿12年右同」。 生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「長尾 木村甲斐」。 生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「真嶽 野津手讃岐・香月九郎右衛門」。 1月21日、日田郡那々の大友勢、秋月種美の「長尾・針目」両城を攻め落とす。 1月20日、日田郡那々の大友勢、針目城を攻略する。 天正13年1月20日「筑後国日田郡塚針目城二発向之事」。 長尾城へ発向のため池田城を攻略する。田原親家「針目城」に陣する。 9月5日、「針目」の大友勢、秋月勢に敗北し夜中に撤退する。 生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「鳥屋ヶ原 乙右刑部」。 「千手堂」の確保のため豊後玖珠衆に「小石原表一城」取付を命じる。 1月12日の「筑前国小石原」の「切寄及町」合戦における軍忠を大友義鎮が披見する。	
					十時(吉)文書88/『柳近前』JP659			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
70	真竹山城	参考 天正15年4月	天正13年閏8月13日	戸次道雪書状	藤野文書、藤野家譜/『福市中』1JP271、『大日史』11編13JP202	(高野)増時	1月21日、日田郡那々の大友勢、秋月種美の「長尾・針目」両城を攻め落とす。	
					三原文書/『大日史』11編19JP203、『柳近後』P260			
					碩田叢史(白竹長助所蔵古文書)/『大日史』11編13JP204			
					碩田叢史(鶴崎吉岡氏所蔵 豊後武家文章)/『大日史』11編19JP150			
					上井訥兼日記/『上井下』JP33			
71	針目城	参考 天正15年4月	天正13年閏8月11日	大友宗麟書状	大友家文書録/『嘉古中』JP369、『宗麟3』JP246	(大友)宗麟	大友宗麟少輔殿 ほか11名	
					大友家文書録/『大日史』33-2』1850、『大友26』JP45			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
72	峠山城 (小石原城)	参考 天正15年4月	天正13年閏8月8日	大友宗麟書状	大友家文書録/『嘉古中』JP369、『宗麟3』JP246	(大友)宗麟	大友宗麟少輔殿 ほか11名	
					大友家文書録/『大日史』33-2』1850、『大友26』JP45			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			
					『物語秋月史 上』P378			

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
75	松尾城 (小石原城)	(3)	(天正10年)1月16日	大友府蘭感状写	大友家文書録/『大東史33-2』11851、『宗麟5』P166、『大友26』P45	府蘭(大友宗麟)	赤尾兵庫助(鎮辰)殿	1月12日の「筑前国小石原表」「松尾切寄井町」の合戦における軍忠を賞す。 上座部小石原城を築き、黒田六郎右衛門を置く。 黒田長政、大坂夏の陣後の京都滞在中「御国中御本城の外、端城は破壊候様」徳川氏より内達される。 一國一城令により、六端城を破却する。
		参考	慶長6年		黒田家譜14/『黒田家譜』P464			
		参考	元和1年		久野家譜			
		(4)	元和1年閏6月13日	江戸幕府老中連署奉書	黒田家文書/『黒田家文書2』P69、黒田家譜14/『黒田家譜』P489	安藤対馬守重次、土井大次助利勝、酒井雅楽守忠世	黒田筑前守(長政)殿	
76	二股岳城	参考	天正15年4月	生駒雅楽頭宛書	『物語秋月史 上』P378	安芸守(小原隆言)、右衛門大夫(仁保隆徳)	須子弥太郎(信光)	生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「二股岳 吉瀬伊賀」。
82	米ノ山城	(1)	弘治2年10月28日	大内氏奉行人連署奉書	須子家文書/『福市中』P861			大内義隆、須子信光の祖父親光以来の「筑前米山御城番」の軍忠を賞し、長門美祿郡に所領を宛行す。
		参考	天正7年		薦野家譜			
		参考	(天正9年)同年末		高橋記/『大日史』編2』P656			秋月・筑紫氏が宝満・岩屋・立花城への「附城」の構えに対し、高橋紹運・戸次道雪も「米ノ山・龍ヶ城・おまか城・から山・香椎山・若嶋山」などに岩を築き軍勢を覆める。
		参考	天正10年10月2日		九州治乱記・高橋記ほか/『大日史』編2』P655、『大友15』P537			高橋紹運、高橋紹運の「米ノ山」を攻め落とすも、紹運即日引退する。
		(2)	天正11年10月3日	立花統虎・戸次道雪連署状写	伝習館文庫柳河藩政史料(梅岳君御軍功実録)『大友16』P20	(立花)統虎、(戸次)道雪	(高木長門入道殿)	秋月種実、「米山」に攻めかかるも、高橋紹運防戦する。
		(3)	(天正11年)10月10日	立花統虎・戸次道雪連署状写	吉田家文書11-5/『柳近後』P393	(戸次)道雪、(立花)統虎	吉田右京亮(連正)殿	秋月勢に対する「米山」防戦の軍忠を賞す。
		(4)		立花統虎・戸次道雪連署状写	伝習館文庫柳河藩政史料(柳河藩史5貞仮記4)『大友16』P22			同上。吉田家文書11-5の写。
102	笠木山城	参考	(応永4年)		北肥戦誌、『北肥』P102			少弐氏、大内氏に敗れ、「岩屋・笠木・天拜岳」所々の要害に籠もる。
		(1)	(永禄11年)11月18日	毛利輝元・元就連署状	麻生文書37/『麻生』P42、『福市中』1』P555	(毛利)輝元、元就	麻生右衛門大夫(鎮里)殿	毛利輝元・元就、麻生鎮里の「笠城」普請の労を謝す。
		(2)	(永禄11年)12月13日		冷泉家文書/『山嵐史』中2』P948			毛利輝元・元就、「笠城山」普請等の労を謝し、来春中の「彼城」在番を命じる。
		(3)	(永禄12年)1月25日	吉川元春・小早川隆景連署状	佐藤保介氏文書/『大日史』10編1』P893、萩藩閩関録108赤川勘兵衛28/『閩関録3』P329	(吉川)元春、(小早川)隆景	佐藤又右衛門尉(元美)殿	筑前方面の情勢について「笠城」より注進あり。
		(4)	(永禄12年)1月25日		佐藤保介氏文書/『大日史』10編1』P892、萩藩閩関録108赤川勘兵衛18/『閩関録3』P327			「笠木」への返事について。
		(5)	(永禄12年)1月29日	小早川隆景書状	佐藤保介氏文書/『大日史』10編1』P893、萩藩閩関録108赤川勘兵衛20/『閩関録3』P328	(小早川)隆景	佐藤又右衛門尉(元美)殿	「笠城」に兵様100俵の運び入れを指示する。
		(6)	(永禄12年)2月11日		佐藤保介氏文書/『大日史』10編1』P893、萩藩閩関録108赤川勘兵衛21/『閩関録3』P328	(小早川)左衛門隆景	佐又右(佐藤元美)殿	「笠木城戸扉五面」を急々に送り連わす。
		(7)	(永禄12年)4月15日	毛利輝元・元就連署状	麻生文書36/『麻生』P41、『福市中』1』P555	(毛利)輝元、元就	麻生右衛門大夫(鎮里)殿	毛利輝元・元就、麻生鎮里の「笠城」普請・在番の労を謝す。
		(8)	(永禄12年)5月晦日	毛利輝元書状	佐藤保介氏文書/『大友15』P282、萩藩閩関録108赤川勘兵衛48/『閩関録3』P333	(毛利)輝元	佐東又右衛門尉(佐藤元美)とのへ	「当城」の普請について、矢田貞政を使者として派遣する。
		(9)	(永禄12年)9月5日	吉川元春・小早川隆景連署状	萩藩閩関録108赤川勘兵衛29/『閩関録3』P329	(吉川)元春、(小早川)隆景	佐又右(佐藤元美)殿	毛利家臣井上元継、「笠木」に在番し、普請等を勤める。
		(10)	(元龜1年)7月16日	大友宗麟書状	入田文書/『宮崎県史 史料編』中世』P128、『宗麟4』P180、『大友22』P196	(大友)宗麟	入田丹後入道(義実・宗和)殿	大友宗麟、入田宗和に「笠木城」の知行と、修築・勤番を命じる。
		(11)	天正9年4月28日	秋月種実書状写	大倉氏採集文書/『史料総覧』10編911冊292頁(大日本史料総合DB)	(秋月)種実	上野四郎兵衛尉殿	秋月種実、上野四郎兵衛尉に対し、北郡田掃部助の城「笠木」を攻略した軍忠を賞す。
		(12)	(天正9年)10月15日	朽網宗歴書状	鹿子木文書/『龍泉中』P30、『宗市中』2』P751	(朽網)宗歴	三	麻生・宗像両氏、秋月種実の城「笠木」を落城させる。 秋月氏家臣江利内盛助、守備する笠木城より清水原に出て、立花勢と戦う。
		参考	天正9年11月		薦野家譜			秋月氏家臣江利内盛助、守備する笠木城より清水原に出て、立花勢と戦う。
		(13)	(天正14年)11月4日	立花統虎書状写	萩藩閩関録166上田武兵衛2/『閩関録4』P419	立左虎(立花統虎)	(朝倉)元息、(杉)元重	朝倉元息、杉元重と共に立花統虎の「笠城」攻めに加わる。
		(14)	(天正14年)11月7日	朝倉元息書状写	萩藩閩関録166上田武兵衛3/『閩関録4』P420	(朝倉)元息	上田掃部助(秋宣)殿	朝倉元息、杉元重と共に立花統虎の「笠城」攻めに加わる。
		(15)	(天正14年)11月9日	杉統虎書状写	萩藩閩関録166上田武兵衛1/『閩関録4』P419	杉統虎	浅藏(朝倉隆秋)殿	朝倉元息、杉元重と共に立花統虎の「笠城」攻めに加わる。
		(16)	天正15年2月26日	杉統久感状	山部村尾仲文書/『鞍手郡誌』上』P141	(杉)統久	尾仲主膳兵衛尉殿	去18日「笠城」発動時の「笠城」口における軍忠を賞す。
		(17)	天正15年3月3日	内覧	薩藩日記雑録後編/『旧雑録2』P280			防さき城・口(若)屋・宝満岳のほとつても豊巨方に落ちると支障が出る。
		参考	天正15年4月	生駒雅楽頭宛書	『物語秋月史 上』P378			生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「笠城山 野津手石見・黒川出雲・相江掃部」。
120	千手鍾	(1)	正平9年11月15日	本屋行実軍忠状	本屋文書/『南北』9』3748	(本屋)行実	(菊池)武光	同年10月の「筑前国千手城」における城攻めの軍忠を注進する。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
120	千手館	(2)	嘉吉2年3月11日	室町幕府御教書	平賀家文書35/『大日古14』P28、『大友10』P232	右京大夫(細川持之)	平賀尾張守殿	平賀頼宗の大内教弘方としての「千手城」攻め意向を賈す。
		(3)	弘治2年7月3日	佐田隆居手負注文	佐田文書172/『熊中2』P254、『嘉古中』P353	(佐田)隆居	内藤端正忠殿、杉民部大輔殿	6月8日の秋月文種との「千手・馬見表」合戦時の軍忠を注進する。
		(4)	弘治2年7月23日	佐田隆居馳走人教注文	佐田文書173/『熊中2』P256、『嘉古中』P354		(内藤)隆居	6月8日の「千手・馬見表」合戦時の宇佐郡衆の馳走人数を注進する。
		(5)	弘治2年8月10日	大内義長感状	佐田文書174/『熊中2』P260、『嘉古中』P357	(大内)義長	佐田端正忠殿	6月8日の「千手・馬見面」合戦時の軍忠を賈す。
		(6)	弘治2年8月15日	杉隆相感状	萩原元氏文書/『嘉古中』P358	(杉)隆相	萩原兵部丞殿	6月8日の「筑前千手表」合戦時の軍忠を賈す。
		(7)	(永祿11年)11月19日	大友宗麟書状写	大友家文書/『嘉古中』P369、『宗麟3』P246	(大友)宗麟	帆足兵部少輔殿ほか11名	「千手要書」の確保のため豊後玖珠衆に小石原衆へ出向を命じる。
125	茅城 (馬見城)	(1)	建武4年11月1日	長野助豊軍忠状写	長野文書/『南北九』1096	仲原(長野)助		10月25日「馬見嶽・桑野」を焼きおろす等の軍忠を注進する。
		(2)	嘉吉2年3月14日	室町幕府御教書	平賀家文書36/『大日古14』P528、『大友10』P233	右京大夫(細川持之)	平賀尾張守殿	平賀頼宗の、大内勢と少弐勢、馬見合戦、時の軍忠を賈す。
		(3)	弘治2年7月3日	佐田隆居手負注文	佐田文書172/『熊中2』P254、『嘉古中』P353	(佐田)隆居	内藤端正忠殿、杉民部大輔殿	6月8日の秋月文種との「千手・馬見表」合戦時の軍忠を注進する。
		(4)	弘治2年7月23日	佐田隆居馳走人教注文	佐田文書173/『熊中2』P256、『嘉古中』P354		(内藤)隆居	6月8日の「千手・馬見表」合戦時の宇佐郡衆の馳走人数を注進する。
		(5)	弘治2年8月10日	大内義長感状	佐田文書174/『熊中2』P260、『嘉古中』P357	(大内)義長	佐田端正忠殿	6月8日の「千手・馬見面」合戦時の軍忠を賈す。
		(6)	(永祿11年)9月16日	吉弘鑑理・戸次鑑連連署状	江藤文書/『柳近前』P62、『大友22』P117	(吉弘)鑑理、(戸次)鑑連	吉岡越前入道殿	「長野表」・「馬見」が毛利方に落ちたことを伝える。
		(7)	(永祿11年)11月6日	吉川元春・小早川隆景連署状	佐藤保介氏文書/『大日古10編1』P270、萩藩閩閩録108赤川勘兵衛38/『閩閩録3』P331	(吉川)駿河元春、(小早川)隆景、(吉川)元春、(小早川)左衛門右衛門尉(元美)殿	井上神左衛門尉殿、佐藤又右衛門尉(元美)殿	「馬見要書」修築に佐藤元美を遣わす。
		(8)	(永祿11年)11月10日	小早川隆景・吉川元春連署状	佐藤保介氏文書/『大日古10編1』P270、萩藩閩閩録108赤川勘兵衛37/『閩閩録3』P331	(小早川)左衛門右衛門尉(元春)	井上神左衛門尉殿、佐藤又右衛門(元美)殿	佐藤元美ら「馬見普請」に尽力する。
		(9)	(永祿12年)1月14日		佐賀文書(小田村文書)/『大日古10編1』P802	(吉川)元春、(小早川)隆景、(小早川)左衛門右衛門尉(元美)殿	小田村備前守殿	吉川元春・小早川隆景、麻生隆実共に「馬見在番」の警備を助けさせる。
		(10)	(永祿12年)1月17日		佐藤保介氏文書/『大日古10編1』P835、萩藩閩閩録108赤川勘兵衛35/『閩閩録3』P330	(吉川)駿河元春、(小早川)左衛門右衛門尉(元美)殿	佐藤又右衛門尉(元美)殿	「馬見」への路地案内を依頼する。
		(11)	(永祿12年)1月18日		佐藤保介氏文書/『大日古10編1』P836、萩藩閩閩録108赤川勘兵衛36/『閩閩録3』P331	(小早川)隆景、(吉川)元春	佐藤又右衛門尉(元美)殿	「馬見普請」について指示する。
		(12)	(永祿12年)1月19日		佐藤保介氏文書/『大日古10編1』P836、萩藩閩閩録108赤川勘兵衛23/『閩閩録3』P328	(小早川)隆景	佐藤又右衛門尉(元美)殿	粟屋就信を「馬見」へ派遣する。
		(13)	(永祿12年)1月20日		佐藤保介氏文書/『大日古10編1』P837、萩藩閩閩録108赤川勘兵衛39/『閩閩録3』P331	(吉川)元春、(小早川)隆景	佐藤又右衛門尉(元美)殿	
		(14)	永祿12年1月26日	某覚書案	到津文書432/『大日古24-1』P83			大友氏が「筑前カマノ郡馬見城」を攻め落とす。
126	花尾城 (桑野城)	(1)	建武4年11月1日	長野助豊軍忠状写	長野文書/『南北九』1096	仲原(長野)助		10月25日「馬見嶽・桑野」を焼きおろす等の軍忠を注進する。
127	益富城	(1)	天正15年3月3日	内覚	薩藩日記雑録後編/『旧雑後2』P280	豊		毛利勢が一両日中に「彦山」が岩石か大隈に陣替えとの情報。
		参考	天正15年4月2~3日		九州御動座記/『大日古17』P69			豊臣秀吉「筑前尾籠」に逗留。秋月種美、古所山城を明け渡し、秀吉に対面する。
		参考	天正15年4月4日		北肥戦誌/『北肥』P773			豊臣秀吉、「大隈益富城」に移る。翌5日「秋月」が里城荒平に移る。
		(2)	(天正15年)4月8日	木下吉隆書状	古文書類纂/『福岡県文化財調査報告書195 秋月街道』P228、「史料総覧11編912冊160頁(大日本史料総合DB)	木下半助	中村式部少輔殿、山内守馬守殿、一柳伊豆守殿、日根野織部殿、堀尾帯刀殿、向島右衛門尉殿	豊臣秀吉、4月2日に「大隈」に陣替えする。秋月種美父子、剃髪の上毛利吉成の陣所を訪ね、隆伏・命乞いをする。また、助命の礼に「大隈」の秀吉を訪ね、檜柴を献上する。浅野長吉、「城」を受け取り、4日に入城する。
		(3)	(天正15年)4月15日	豊臣秀吉朱印状	小早川家文書471/『大日古11-1』P407	(豊臣)秀吉	小早川左衛門尉(隆景)とのへ 黒田勘解由(孝高)とのへ	「筑前国大隈・秋月」など、筑前・筑後・肥後の諸城の平定を伝える。
		(4)			黒田家文書/『黒田』P210、『福市中1』P712			生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のつらに「大隈 御隠居城」。
		参考	天正15年4月		『物語秋月史 上』P378			嘉麻郡大隈城を築き、後藤又兵衛を置く。
		参考	慶長6年		黒田家譜14/『黒田家譜1』P464			大隈城主後藤又兵衛が出奔し、母里太兵衛を大隈城に、手塚水雲を高取城に置く。
		参考	慶長11年					黒田長政、大坂夏の陣後の京都藩在中「御国中御本城の外、端城は破壊(後藤)徳川氏より内達される。

No.	名称	校番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
127	益富城	(5)	(元和1年)閏6月10日	黒田長政判物写	毛利家文書 修史余録別集10/『福岡県史 近世史料編 福岡藩初期(上)』P296	(黒田)長政	毛利左近(友生)殿	「小隈之城割」(破却)を命じる。
(6)			元和1年閏6月13日	江戸幕府老中連署奉書	黒田家文書/『黒田家文書2』P69、 黒田家譜14/『黒田家譜1』P489	安藤対馬守重次、土井大炊助利勝、酒井雅楽守忠世	黒田筑前守(長政)殿	一國一城令により、六端城を破却する。

<近世城館>

No.	名称	校番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	秋月陣屋	参考	慶長5年		長興公御代始記/『福泉資2』P300			
(1)			元和9年閏8月23日	黒田忠之知行目録写	長興公御代始記/『福泉資2』P283	(黒田)忠之	黒田勘解由(長興)殿	黒田長政、筑前入部に併い、黒田凶重直之を秋月に差し置く。直之、梅園と称する秋月氏家代の居住地に「御館」を営作し、慶長14年まで10年間居住する。
(2)			寛永11年7月	黒田忠之の知行目録写	黒田忠之の知行目録写/『福泉資2』P442			黒田忠之、長興に5万石を分知する。
(3)			寛永11年	黒田忠之の知行目録写	黒田忠之の知行目録写/『福泉資2』P300			黒田忠之、長興に5万石を分知する。
(4)			延宝4年	黒田忠之の知行目録写	長重公御代之記/『福泉資2』P305			黒田直之の館に修理を加え、長興の「御館」とする。
(5)			元文5年5月16日	黒田忠之の知行目録写	長長公御代之記/『福泉資2』P318			「秋月御館御新宅」普請始まる。延宝6年長重初入国までに成就する。

<城館等伝承地>

No.	名称	校番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
D4	筑紫氏居館	(1)		戸次鑑連感状	太田文書/『柳近前』P643		安東舍人亮殿	この度の「筑紫宅所」における軍忠を賞す。
(2)			(年未詳)8月23日	戸次鑑連感状写	安東家史料1045-31/『柳近前』P17 「土民ノ事蹟」柳次102-41/『柳近後』P564 由布文書1-1-6/『柳近後』P338	(戸次)鑑連	同上。太田文書の写。	この度の「筑紫宅所」における軍忠を賞す。
(3)								
(4)								

<所在地が不明なもの>

No.	名称	校番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
F1	水木城	参考	永祿12年閏5月		北肥戦誌/『北肥』P431			高橋鑑種・秋月種美、「水木」に城を構え、大友勢の往来を妨害する。
F2	尾崎城	参考			筑紫文書/『藩政』P58、『福市中』P992			筑紫公門野の城(三笠之郡)に「尾崎」城 筑紫大和守。
F3	宮尾城	参考	弘治3年7月13日		北肥戦誌/『北肥』P309			大友勢、「岩屋・若杉」を攻め落とす。その後宮尾城に筑後勢を置き、さらにその後、草野長門守貞清に明け渡す。
F4	鏡ヶ鼻城	参考	永祿2年		北肥戦誌/『北肥』P337			草野貞清、宮尾城を落ち、その後再び籠もる。筑紫権門に打ち崩される。
F5	庄山城	参考	天正15年4月		豊前寛書/『豊前寛』P47			立花鑑忠、秋月の秀吉に對面のため、金出を懸て「秋月庄山」の「庄山里城」に至る。
F7	嘉麻城	(1)	建武4年10月21日	薬丸有世軍忠状	丹波有光所藏文書/『大日史6編4』P408、『福泉資9』P275、『嘉古中』P227	丹波(薬丸)有世	御奉行所	北朝方の豊前薬丸有世、「桑野原」合戦、および「嘉麻城」攻めにおける「城内」攻め入る等の軍忠を注進する。
(2)			建武4年10月21日	成恒松石丸軍忠状	相良家文書77/『大日史5-1』P123、『大日史6編4』P408、『嘉古中』P228	大蔵(成恒)松石丸	御奉行所	北朝方の相良定頼代官豊前国成恒松石丸、「筑前国嘉麻城合戦」における「城内」攻め入る等の軍忠を注進する。
F8	松原城	(1)	延文5年4月5日	二階堂行門軍忠状	二階堂文書/『大日史6編23』83P、『嘉古中』P256	藤原(二階堂)行門	御奉行所	薩摩の北朝方二階堂行門、2月4日筑前国嘉麻郡松原城発向時の福直警護、同23・24日同城攻めの軍忠を注進する。
F9	奉行巖城	参考	天正15年4月	生駒雅楽頭宛書	『物語秋月史 上』P378			生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「奉行巖 坂田内蔵助」。
F10	山口城	参考	天正15年4月	生駒雅楽頭宛書	『物語秋月史 上』P378			生駒雅楽頭に渡す秋月抱城のうちに「山口 大坪甚太郎、但若年二付入番竹原一学・大坪主水」。
F11	二獄城	(1)	永享5年8月29日		満濟権后日記/『統群書類從 補遺1 満濟権后日記』P506、『太市中』P615			8月16日夜亥刻、少式城筑前国二獄云々」落城、少式小法師・大友掃部頭打たれるか、との報。
(2)			永享5年8月29日		看聞御記/『統群書類從 補遺2 看聞御記下』P135			大内侍世、8月14日に少式氏と合戦し、少式小法師を討ち取り、城を攻め落とすとの報。
参考			永享5年		北肥戦誌/『北肥』P119			大内侍世豊前上陸を聞き、大友特直豊前へ向出、「二ツ岳」に登って特直と対陣する。
F12	神山御城	(1)	心安8年1月1日	山内道忠軍忠状	山内首藤家文書/『南北九』5163、『大友』P77	(山内)通忠		心安6年閏10月2日筑前国「神山御城」の警固等の軍忠を注進する。
(2)					山内首藤家文書/『南北九』515164	(山内)通忠		

VII 城館関連地名一覧

<凡例>

- 1 本章では、報告対象地域における城館に関連する地名を一覧にしたものである。
- 2 城館に関連する地名とは、城(シロ・ジョウ)・館(タチ・タテ)・屋敷・門・矢倉・園・垣内・土居(ドイ)・府・丸・蔵(クラ)・城戸(キド)・鍛冶・射場・的場・堀切のほか、武器あるいは合戦に関連すると思われる地名、あるいはその他城館に関連すると思われる地名を指す。
- 3 地名の抽出は、「明治十五年字小名調」(『福岡縣史資料第七輯』1937年 福岡県編集・発行)に搭載された地名を基本とし、これらに搭載されていない現在残る小字を補完的に追加したものである。地名の抽出に当たっては、服部英雄氏(福岡県中近世城館跡詳細分布調査指導委員・九州大学大学院教授)が作成したデータを利用した。
- 4 現在、城館と判明しているものと直接つながりがある地名については、別の欄を設けて、他の地名と区別した。なお、今回あげられた大半の地名には、中近世城館とは無関係のものが多数含まれていると考えられるが、それらの峻別は困難であり、また今後の調査研究の備えとして、あえてその全てを掲載することとした。

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	御笠郡	太宰府市	太宰府	—	奥園・馬場・家ノ前
				6.浦ノ城	浦ノ城
				D3.今川了俊居館	月見山・泉水
筑前	御笠郡	筑紫野市	香園	—	花園・堀・下ノ屋敷
筑前	御笠郡	筑紫野市	大石	—	上ノ屋敷
筑前	御笠郡	筑紫野市	原	—	堀浦
筑前	御笠郡	筑紫野市	吉木	—	堀切・今屋鋪
筑前	御笠郡	筑紫野市	山家	—	門ノ尾・引藪・小屋敷・垣ノ内
筑前	御笠郡	筑紫野市	原田	—	脇田・鎧田・勝負坂
				D5.原田氏居館	辻畑・堀田
筑前	御笠郡	筑紫野市	筑紫	—	城山
				D4.筑紫氏居館	倉良・大手門・裏門・矢倉・城ノ越・城屋敷・上小路
筑前	御笠郡	筑紫野市	塔原	—	土城原・村屋敷
筑前	御笠郡	筑紫野市	杉塚	—	土城原
筑前	御笠郡	筑紫野市	萩原	—	扇殿・垣ノ内
筑前	御笠郡	筑紫野市	古賀	16.天判山城	城ヶ原
筑前	御笠郡	筑紫野市	上古賀	—	車添
筑前	御笠郡	筑紫野市	山口	—	城越・倉谷・中屋敷・鍋倉
筑前	御笠郡	大野城市	中	—	森園・幸門・小田屋敷
筑前	御笠郡	大野城市	筒井	—	敵燈
筑前	御笠郡	大野城市	仲嶋	—	居屋敷
筑前	御笠郡	大野城市	畑詰	—	園田
筑前	御笠郡	大野城市	上大利	—	上ノ園
筑前	御笠郡	大野城市	下大利	—	今堀・柿ノ内カ・下ノ城戸・上ノ城戸・堀田・矢倉・船頭園
筑前	御笠郡	太宰府市	吉松	—	狭間・土手ノ内・土居
筑前	御笠郡	太宰府市	大佐野	—	馬場・殿ノ城戸
筑前	御笠郡	大野城市	牛頸	—	倉石・長者ヶ原
				3.不動城	城の山・城ノ下・ジツガニ・キノチ・シツ・武士町
筑前	御笠郡	太宰府市	水城	—	古門畑・成屋形・堀切
筑前	御笠郡	太宰府市	国分	—	陳ノ尾・鍛冶久・松倉・堀田
筑前	御笠郡	太宰府市	坂本	—	大正府・松倉・小正府・花ノ屋敷
				5.岩屋城	引陣
筑前	御笠郡	太宰府市	観世音寺	—	廣丸・築山
				D2.少弐氏関連館	御所ノ内・土井ノ内
筑前	御笠郡	太宰府市	通古賀	—	土場分・垣添・扇屋敷
筑前	御笠郡	太宰府市	片野	—	キド・シュウリダ
筑前	御笠郡	筑紫野市	隈	—	堀切・藏本・中屋敷

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	御笠郡	筑紫野市	若江	—	森園
筑前	御笠郡	筑紫野市	西小田	—	彌五屋敷・屋敷・向屋敷
筑前	御笠郡	筑紫野市	下見	—	馬場田・土島屋敷・土居掛
筑前	御笠郡	筑紫野市	石崎	—	溝土居
筑前	御笠郡	筑紫野市	立明寺	—	鎧田・中城戸・下城戸・向城戸・鈴倉・下鈴倉
筑前	御笠郡	大野城市	瓦田	—	原門
筑前	御笠郡	筑紫野市	永岡	21.永岡城	上城戸・向城戸・城ノ内
筑前	御笠郡	筑紫野市	常松	—	中城戸
筑前	御笠郡	筑紫野市	諸田	—	中城戸
筑前	夜須郡	朝倉市	江川	—	陣屋・馬場ノ原
筑前	夜須郡	朝倉市	上秋月	—	森園・若ソノ
				D11.為朝居宅跡	立園
筑前	夜須郡	朝倉市	日向石	—	臺・屋敷
筑前	夜須郡	朝倉市	野鳥	—	屋敷裏
				47.古処山城	城ノ尾
				K1.秋月陣屋	館ノ尾・館ノ裏
筑前	夜須郡	朝倉市	甘水	—	岩井園・牧ノ内
筑前	夜須郡	朝倉市	長谷山	—	大園
筑前	夜須郡	朝倉市	下淵	—	園田・三府・三府ノ前・園田浦・三丁弓
筑前	夜須郡	朝倉市	隈江	—	花園
筑前	夜須郡	朝倉市	甘木	—	梶丸・堀ノ前・溝田・馬場口・馬場町
筑前	夜須郡	筑前町	依井	—	井手屋敷・部府・カシ丸・倉園屋敷
筑前	夜須郡	筑前町	弥永	—	イバ屋敷・大神屋敷
				31.小鷹城	梨ノ木城
筑前	夜須郡	筑前町	久光	—	宮苑
筑前	夜須郡	筑前町	當所	—	上屋敷
筑前	夜須郡	筑前町	栗田	—	田中園・金丸
筑前	夜須郡	筑前町	森山	—	尾園・垣越・矢手屋敷・小路
筑前	夜須郡	筑前町	草水	—	東丸内・西丸ノ内・今屋敷・道ソノ
筑前	夜須郡	筑前町	上浦	—	ヤカタ町
筑前	夜須郡	筑前町	下浦	—	鍛冶田・花園・藤藏堀・茶屋・大屋敷・郷城
筑前	夜須郡	筑前町	曾根田	—	屋形崎・町畠・大門・ヤクラ・立・岩園・馬場
筑前	夜須郡	筑前町	三牟田	—	大村屋敷
筑前	夜須郡	筑前町	下高場	—	田屋
筑前	夜須郡	筑前町	四三島	—	屋形原・堀田
				山隈城 (筑後地域にて報告予定)	城山
筑前	夜須郡	筑前町	中牟田	—	車地
筑前	夜須郡	筑前町	二	—	古堀
筑前	夜須郡	筑前町	東小田	—	假屋田・射場ノ本
筑前	夜須郡	筑前町	篠隈	—	古賀園
筑前	夜須郡	筑前町	山隈	—	城山・陳山・坂堀
				山隈城 (筑後地域にて報告予定)	城山
筑前	夜須郡	筑前町	桑曲	—	ホリ田
筑前	夜須郡	筑前町	三並	—	大園・鍛冶屋園・城林・門出・陣ノ内・唐根垣・城ノ尾
筑前	夜須郡	筑前町	三箇山	—	城ノ尾
筑前	夜須郡	筑前町	畑島	—	藏谷
筑前	夜須郡	筑前町	砥上	—	馬場屋敷・新立
筑前	下座郡	朝倉市	矢野竹	—	タテ岩・生矢ヶ平・射場坂・木戸口・合戦場・屋敷・堂園
筑前	下座郡	朝倉市	城	—	上リ立・門森
筑前	下座郡	朝倉市	荷原	—	西ソノ・寺ヤシキ・シキ屋
筑前	下座郡	朝倉市	三奈木	—	辻ノ園・長者原・惣門・西ノ園
筑前	下座郡	朝倉市	柿原	—	古屋シキ
				51.休松城	城ノ下・城

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名（大字）	関連城館	関連地名
筑前	下座郡	朝倉市	屋形原	—	造ババ・深堀
				K3.黒田図書助直之宅跡	城原・上城原・上城原ノ上
筑前	下座郡	朝倉市	堤	—	山門・門田
筑前	下座郡	朝倉市	来春	—	屋内町・土居丸・本村屋鋪
筑前	下座郡	朝倉市	古賀	—	馬場先・ホコノキ
筑前	下座郡	朝倉市	一木	—	西ヤシキ・原屋敷・東屋敷・長者原・屋敷・天神ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	西津留	—	ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	牛鬮	—	長者原
筑前	下座郡	朝倉市	小隈	—	屋敷・矢倉ノ本・神倉・大ソノ
筑前	下座郡	朝倉市	小田	—	官郷ノ・ヤシキタ
筑前	下座郡	朝倉市	金丸	—	ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	中島田	—	本村ヤシキ・原ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	田島	—	屋鋪・文王屋敷
筑前	下座郡	朝倉市	片延	—	屋敷・土手ノ下・羽下ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	鎌崎	—	ムカエ・屋敷
筑前	下座郡	朝倉市	白鳥	—	宮永ヤシキ・三ノ丸・鳥屋シキ・白鳥ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	鶉木	—	屋鋪・下屋敷
筑前	下座郡	朝倉市	徳淵	—	弓木・ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	中	—	土手ノ外
筑前	下座郡	朝倉市	吉末	—	新屋敷・古木戸・弓張・クツワ・古屋敷
筑前	下座郡	朝倉市	長田	—	矢倉下・安福寺屋敷・平セヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	長田	—	土手ノ外・長田屋敷・町ヤシキ・大川端土手ノ外・大川端土手ノ内・土手ノ内中小路屋敷・下堀田・馬場添・町ヤシキ・屋形町・藤島屋敷
筑前	下座郡	朝倉市	福光	—	屋敷・中屋シキ・東屋敷・西屋敷・巻園
筑前	下座郡	朝倉市	八重津	—	椋木ヤシキ・北ヤシキ・中屋敷
筑前	下座郡	朝倉市	桑原	—	今屋敷・鍛屋ノ前・屋敷・元屋敷
筑前	下座郡	朝倉市	林田	—	屋シキ
筑前	下座郡	朝倉市	倉園	—	屋敷ヤシキ
筑前	下座郡	朝倉市	平塚	—	大堀
筑前	下座郡	朝倉市	中寒水	—	久保菌・深ホリ・ヤシキ・弓場ノ前
筑前	上座郡	東峰村	寶珠山	—	大蔵・馬場・千代丸・五ツケ倉・古庄屋・屋椎
筑前	上座郡	東峰村	福井	—	屋敷・矢所・小鹿倉・長者原・国門
筑前	上座郡	東峰村	赤谷	—	倉谷
筑前	上座郡	東峰村	鼓	—	蔵貫・木城
筑前	上座郡	東峰村	小石原	—	堂園
筑前	上座郡	朝倉市	黒川	—	馬場・宮ソノ
筑前	上座郡	朝倉市	星丸	—	照丸
筑前	上座郡	朝倉市	池田	—	森園・竹ノ下・土井ノ内
筑前	上座郡	朝倉市	寒水	—	屋鋪・久保屋鋪
筑前	上座郡	朝倉市	古賀	—	出府・馬場添・鍛冶田・屋敷・木戸ノ下
筑前	上座郡	朝倉市	林田	—	臥堀・久保垣・篠原垣・中園・鍛冶屋園・庄屋園・屋敷田
				68.鶉木城・69.長尾城	城園
				68.鶉木城	城先
筑前	上座郡	朝倉市	穂波	—	園山・本陣・陣内
筑前	上座郡	朝倉市	久喜宮	—	城ヶ迫・森園・關殿・鎧畑・中園
筑前	上座郡	朝倉市	志波	—	大門尻
				59.本陣山城	本陣
				61.麻氏良城	杉馬場・里城・奥ノ丸・政所
筑前	上座郡	朝倉市	佐田	—	中園・古ヤシキ・立・三延弓・倉床・大城・堀馬屋・倉厂・倉谷
筑前	上座郡	朝倉市	山田	—	倉場・堀ノ内・北園・倉谷
				59.本陣山城	本陣
筑前	上座郡	朝倉市	菱野	—	本陣・釵塚
筑前	上座郡	朝倉市	古毛	—	才園
筑前	上座郡	朝倉市	須川	—	古賀倉・錢倉・鍋倉・深倉

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	上座郡	朝倉市	田中	—	大溝
筑前	上座郡	朝倉市	鳥集院	—	蔵ヤシキ
筑前	上座郡	朝倉市	宮野	—	杉ノ馬場・天園
筑前	上座郡	朝倉市	石成	—	堀田・猿城・上り立
筑前	上座郡	朝倉市	大庭	—	後田・今屋敷・井堀・佐屋・犬丸・安丸・後ソノ
筑前	上座郡	朝倉市	長淵	—	立出
筑前	上座郡	朝倉市	入地	—	安丸・光丸・犬丸・立ノ脇・大溝
筑前	穂波郡	飯塚市	内野	—	赤堀・屋敷ノ浦・中園・古門・胴切・大門・關屋裏
筑前	穂波郡	飯塚市	枝國	—	木ノ戸
筑前	穂波郡	飯塚市	山口	—	丹所・ホリ田・土居丸・八ヶ倉・下木屋・日守・道官
				82.米ノ山城	城山・城ノ山
筑前	穂波郡	飯塚市	阿恵	—	陣ノ内・門田
筑前	穂波郡	飯塚市	長尾	—	タテ
筑前	穂波郡	飯塚市	土師	—	森園・的場・小茶園・馬場・井堀
筑前	穂波郡	飯塚市	内山田	—	門
筑前	穂波郡	飯塚市	中屋	—	辻ノ前
筑前	穂波郡	飯塚市	豆田	—	カン竹・古ヤシキ
筑前	穂波郡	飯塚市	平塚	—	辻島・大丸・戸切
筑前	穂波郡	飯塚市	片島	—	門出・土手ノ外
筑前	穂波郡	飯塚市	川津	—	屋敷・上屋敷
筑前	穂波郡	飯塚市	高田	—	杉園・堀田・薪園
				100.高ノ山城	城ノ鼻・城ノ浦・城林
筑前	穂波郡	飯塚市	舍利藏	—	堀田・垣ノ内
				96.城ヶ尾城	城ヶ尾
筑前	穂波郡	飯塚市	津原	—	中屋敷・上屋敷・下屋敷・土居ノ熊
筑前	穂波郡	飯塚市	久保白	—	馬屋谷・土居ノ内・土居ノ外・下木戸・古木戸
				98.城山城	城越
筑前	穂波郡	飯塚市	建花寺	—	園・堂園
筑前	穂波郡	飯塚市	蓮台寺	—	倉谷
筑前	穂波郡	飯塚市	大日寺	—	屋敷・城角・丸ノ内・下屋敷・門天
筑前	穂波郡	飯塚市	花瀬	—	下猪堀・猪堀・屋敷・上屋敷・下猪堀
筑前	穂波郡	飯塚市	馬敷	—	谷屋形・園ノ田・荒堀・獅子堀
筑前	穂波郡	飯塚市	内住	—	土居丸・古屋敷
筑前	穂波郡	飯塚市	平恒	—	入倉・荒堀・入倉前
筑前	穂波郡	飯塚市	明星寺	—	屋敷・園・北屋敷
筑前	穂波郡	飯塚市	庄司	—	馬谷・井堀
				102.笠木山城	城道・笠城
筑前	穂波郡	飯塚市	土居	—	丁字丸
筑前	穂波郡	飯塚市	幸袋	90.許斐山城	シヨノコシ
筑前	穂波郡	飯塚市	目尾	—	シヨフダニ
筑前	穂波郡	飯塚市	小正	—	立野
筑前	穂波郡	飯塚市	辨分	—	門ノ町・山シロ・平ヤシキ・馬シ・岩ゾノ・マントコ・今丸
筑前	穂波郡	飯塚市	椿	—	ヤシキ・今丸・大門・大門ヶ原
筑前	穂波郡	飯塚市	相田	—	北園
				102.笠木山城	城ノ下
筑前	穂波郡	飯塚市	八木山	—	立ヲサ・堀田・神ヶ久保・屋形葉山・金堀・長倉・堀田
筑前	穂波郡	飯塚市	忠隈	101.藤ノ木城	城崎
筑前	穂波郡	飯塚市	堀池	—	阿城・古屋敷
筑前	穂波郡	飯塚市	南尾	—	大屋敷・西屋敷・弓田
筑前	穂波郡	飯塚市	菰田	—	タデワラ
筑前	穂波郡	飯塚市	太郎丸	—	上ノ隈・堀ノ前・中園・佛園・外園前・下屋敷・辻ノ角
筑前	穂波郡	飯塚市	椋本	—	掛屋敷・的場
筑前	穂波郡	飯塚市	樂市	—	タテ原・屋敷前・堀池宮ノ前
筑前	穂波郡	飯塚市	秋松	—	築切

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	穂波郡	飯塚市	大分	—	陣ヶ面・車屋
筑前	嘉麻郡	飯塚市	東畑	—	ジンテナカエン
筑前	嘉麻郡	飯塚市	大力	—	ババ・入道丸
筑前	嘉麻郡	飯塚市	鯉田	—	馬口・角上・土井渡・古位
				111.古城	古城
				112.築城	築城・殿池
筑前	嘉麻郡	飯塚市	勢田	—	大城ノ奥・大城・新立・倉谷
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	山野	—	白門・嘉蔵・立居・矢櫃
				116.山野城	浦ノ園・城ノ辻
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	口春	—	白門・堀ノ内・的場
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	下山田	—	嘉門・小石丸・矢ノ浦・立石
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	千手	—	陣ノ春・古屋敷・木戸山
筑前	嘉麻郡	飯塚市	上三緒	—	フルヤシキ・シラカド・セキイデ・ジョラガヲ・バノウラ・バノミゾヤシキ・ホリ・カドタ
筑前	嘉麻郡	飯塚市	綱分	—	内堀・安丸
筑前	嘉麻郡	飯塚市	赤坂	—	定角
筑前	嘉麻郡	飯塚市	有安	—	馬場添・堀田・土居ノ内・内ノ堀・切ラレ・馬乗廻・持溝
				114.城ノ腰城	城ノ越
筑前	嘉麻郡	飯塚市	仁保	—	立石
筑前	嘉麻郡	飯塚市	有井	—	大門古川・古ノ城・馬立
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	平	—	城ヶ浦・八矢ヶ浦・城山・イカクバ・城子町・コジロ町・立田・コジノ・カトタ・丸古ノ
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	才田	—	クツワキデ
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	鴨生	—	大倉
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	上臼井	—	門前
				118.日野山城	城山・城ノ辻
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	下臼井	—	トノ田・堀田・土居ノ本
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	光代	—	三ツ屋敷
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	貞月	—	屋敷ノ花
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	牛隈	—	立田・谷蔵・射場・宮園・ヒシヤシキ・向屋敷・ソノ田・細丸・不動丸・下射場・廣丸・中ノ門
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	平山	—	マチヤシキ・ウハヤシキ・金丸
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	九郎原	—	マルタ・ヤシキノウエ・アツマル
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	西郷	—	戸倉
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	泉河内	—	堀田原・古ヤシキ・ヤシキ田・城ヶ尾・熊ヶ倉
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	岩崎	—	甲ノ倉
筑前	嘉麻郡	飯塚市	佐與	—	論城・鍛冶屋敷・矢形ヶ浦
				R6.城腰遺跡	城ノ腰
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	中益	—	土井ノ内・佛蔵
				127.益富城	城山・城下
				K5.城主屋敷跡	ヤカタ・エビジロ
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	大隈	—	寺屋敷・門出・奥園
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	上	—	犬丸・ソノ町
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	宮吉	—	政所・屋敷田・舍利蔵
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	上山田	131.木城館	木城
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	才田	—	門出・井堀
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	漆生	—	蔵ノ本・大城ヶ浦
筑前	嘉麻郡	飯塚市	下三緒	—	馬場・出口屋敷・城屋敷・奥屋敷・土屋敷・前屋敷・前屋敷・佐屋
筑前	嘉麻郡	飯塚市	熊ヶ畠	—	政所・中馬場
筑前	嘉麻郡	飯塚市	小野谷	—	立山・長サコ・千代丸・八郎屋敷・馬場
				132.塘迫城	城山
				D17.八郎館	八郎屋敷
筑前	嘉麻郡	飯塚市	桑野	—	添ヶ蔵・倉谷・宗門
				126.花尾城	城山
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	上西郷	—	土居ノ内・ショフサコ
筑前	嘉麻郡	飯塚市	入水	—	堤ヶ奥・川城・船頭屋敷・居屋敷

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名（大字）	関連城館	関連地名
筑前	嘉麻郡	飯塚市	高倉	－	上屋敷
筑前	嘉麻郡	飯塚市	筒野	－	陣屋ノ谷・谷屋敷・居屋敷・堀田・馬場・上武風
筑前	嘉麻郡	飯塚市	鹿毛馬	－	堀
				115.元吉城	城本谷
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	屏	－	堀田
筑前	嘉麻郡	嘉麻市	馬見	－	惣門
筑前	嘉麻郡	飯塚市	川島	－	殿ノ浦

索引

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
あ						
赤坂城	あかさかじょう	嘉麻郡	飯塚市赤坂	113	20	—
秋月氏宅	あきづきしたく	→荒平城（あらひらじょう）				
秋月氏宅跡	あきづきしたくあと	夜須郡	朝倉市甘水	D8	24	—
秋月宅所	あきづきたくしよ	→杉本城（すぎもとじょう）				
秋月城	あきづきじょう	→秋月陣屋（あきづきじんや）				
秋月城	あきづきじょう	→古処山城（こしょさんじょう）				
秋月陣屋	あきづきじんや	夜須郡	朝倉市秋月野鳥	K1	22	144
秋月藩南御殿	あきづきはんみなみごてん	夜須郡	朝倉市上秋月	K2	22	147
秋月館	あきづきやかた	→杉本城（すぎもとじょう）				
芥田悪六兵衛宅	あくただあくろくべえたく	→芥田館（あくただやかた）				
芥田悪六兵衛か宅跡	あくただあくろくべえがたくあと	夜須郡	朝倉郡筑前町栗田	D7	24	—
芥田館	あくただやかた	嘉麻郡	嘉麻市芥田	D18	26	—
蘆城城	あしきじょう	→天ヶ城（あまがじょう）				
天ヶ城	あまがじょう	御笠郡	筑紫野市阿志岐・山家	25	14	75
阿満か城	あまがじょう	→天ヶ城（あまがじょう）				
阿弥陀峰城	あみだがみねじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町久光	33	14	—
荒平城	あらひらじょう	夜須郡	朝倉市秋月野鳥	45	14	83
荒平山砦	あらひらやまとりで	→荒平城（あらひらじょう）				
粟田城	あわたじょう	→粟林城（くりぼうしじょう）				
飯盛城	いもりじょう	御笠郡	筑紫野市武蔵	17	12	71
伊王寺城	いおうじじょう	上座郡	朝倉郡東峰村宝珠山	79	18	109
医王寺城	いおうじじょう	→伊王寺城（いおうじじょう）				
伊川城	いがわじょう	穂波郡	飯塚市伊川	94	18	—
池田山城	いけだやまじょう	→三日月城（みかづきじょう）				
一ノ谷城	いちのたにじょう	穂波郡	飯塚市平塚・阿恵	88	18	120
稲荷山城	いなりやまじょう	夜須郡	朝倉市秋月	44	14	82
今川了俊居城	いまがわりようしゅんきよじょう	御笠郡	太宰府市太宰府	D3	24	—
弥永城	いやながじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町弥永	30	14	—
以来尺遺跡	いらいじゃくいせき	御笠郡	筑紫野市筑紫	R2	26	148
岩切山城	いわきりやまじょう	下座郡	朝倉市三奈木	54	16	92
岩屋城	いわやじょう	御笠郡	太宰府市太宰府・観世音寺	5	12	59
宇佐原城	うさがはるじょう	→博多見城（はかたみじょう）				
牛頸城	うしくびじょう	→不動城（ふどうじょう）				
内野城	うちのじょう	→高石山城（たかいしやまじょう）				
有智山城	うちやまじょう	御笠郡	太宰府市内山・北谷	8	12	63
内山城	うちやまじょう	→有智山城（うちやまじょう）				
内山太宰少貳城址	うちやまだざいしょうにじょうあと	→有智山城（うちやまじょう）				
鶴木城	うのきじょう	上座郡	朝倉市杷木東林田	68	16	100
馬見城	うまみじょう	→茅城（かやんじょう）				
浦ノ城	うらの（ん）じょう	御笠郡	太宰府市太宰府	6	12	61
潤野城	うるのじょう	穂波郡	飯塚市潤野	92	18	—
扇山城	おうぎやまじょう	穂波郡	飯塚市阿恵	86	18	116
大出城	おおいでじょう	御笠郡	筑紫野市山口	24	14	—
大門城	おおかどじょう	→元吉城（もとよしじょう）				
大隈城	おおくまじょう	→益富城（ますとみじょう）				
尾崎城	おざきじょう	御笠郡	所在不明（太宰府市大佐野か）	F2	26	—
小呉竹城	おくれたけじょう	穂波郡	飯塚市目尾	105	20	—
小佐古城	おさこじょう	穂波郡	飯塚市大分・北古賀・久保白・高田	99	18	123
於佐古城	おさこじょう	→小佐古城（おさこじょう）				
御岳城	おたけじょう	→長谷山城（はせやまじょう）				
小岳城	おたけじょう	→長谷山城（はせやまじょう）				
小田城	おたじょう	下座郡	朝倉市小田	52	16	90
小西館	おにしやかた	上座郡	朝倉市須川	D13	24	—
尾西館	おにしやかた	→小西館（おにしやかた）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
鬼杉城	おにすぎじょう	穂波郡 / 糟屋郡	飯塚市内住大野・糟屋郡宇美町宇美	81	18	111
愛嶽の砦	おだけのとりで		→升形城(ますかたじょう)			
か						
懸尾城	かけおじょう	穂波郡 / 鞍手郡	飯塚市内住	80	18	110
掛尾城	かけおじょう		→懸尾城(かけおじょう)			
笠木山城	かさぎやまじょう	穂波郡 / 鞍手郡	飯塚市庄司・相田・宮若市宮田	102	20	126
笠置山城	かさぎやまじょう		→笠木山城(かさぎやまじょう)			
柏井九郎左衛門か宅	かしわいくろうざえもんがたく		→末高陣(すえたかじん)			
片辺城	かたべじょう	嘉麻郡	嘉麻市椎木	121	22	—
片山城	かたやまじょう	夜須郡	朝倉市持丸	40	14	81
勝山城	かつやまじょう		→鷲山城			
葛山城	かづらやまじょう	穂波郡 / 鞍手郡	飯塚市庄司・鞍手郡小竹町新多	104	20	129
兼光城	かねみつじょう		→莊林城(しょうばやしじょう)			
嘉麻城	かまじょう	嘉麻郡	所在不明	F7	26	—
竈門山城	かまどやまじょう		→宝満城(ほうまんじょう)			
上秋月城	かみあきづきじょう	夜須郡	朝倉市上秋月	49	16	89
神山城	かみやまじょう	不明	所在不明	F12	26	—
鴨ヶ岳城	かもがたけじょう		→筒見城(つつみじょう)			
萱城	かやじょう	嘉麻郡 / 鞍手郡	飯塚市勢田・直方市中泉	109	20	129
茅城	かやんじょう	嘉麻郡 / 夜須郡	嘉麻市馬見・朝倉市江川	125	22	135
烏岳城	からすだけじょう	上座郡	朝倉郡東峰村宝珠山	73	18	104
烏山城	からすやまじょう	上座郡	朝倉市杷木志波	62	16	—
唐山西城	からやまにしじょう	御笠郡	大野城市中	2	12	57
賀良山西城	からやまにしじょう		→唐山西城(からやまにしじょう)			
唐山東城	からやまひがしじょう	御笠郡 / 糟屋郡	糟屋郡宇美町井野・大野城市乙金東	1	12	57
賀良山東城	からやまひがしじょう		→唐山東城(からやまひがしじょう)			
川津城	かわづじょう	穂波郡	飯塚市川津	93	18	—
勘高遺跡	かんだかいせき	嘉麻郡	嘉麻市上	R7	26	153
観音岳城	かんのんだけじょう		→福嶽城(ふくだけじょう)			
岸殿城	きしどのじょう	嘉麻郡	嘉麻山下山田	133	22	142
岸取城	きしとりじょう		→岸殿城(きしどのじょう)			
木城館	きしろやかた	嘉麻郡	嘉麻市上山田	131	22	141
北古賀城	きたこがじょう		→城山城(筑前 98)(じょうやまじょう)			
経ヶ峰城	きょうがみねじょう		→古処山城(こしよさんじょう)			
国見城	くにみじょう		→米山城(こめのやまじょう)			
隈江城	くまえじょう		→茶臼山城(筑前 36)(ちゃうすやまじょう)			
熊山城	くまやまじょう	夜須郡	所在不明(朝倉市千手か)	F6	26	—
倉谷某か屋敷跡	くらたになにがしがやしきあと	夜須郡	朝倉市甘水	D10	24	—
栗林城	くりぼうしじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町栗田	34	14	—
栗田城	くりたじょう		→栗林城(くりぼうしじょう)			
栗山備後宅跡	くりやまびんごたくあと	上座郡	朝倉市杷木志波	K4	22	—
黒田氏居館	くろだしきよかん		→秋月陣屋(あきづきじんや)			
黒田図書助直之宅跡	くろだずしよのすけなおゆきたくあと	下座郡	朝倉市田代	K3	22	—
桑木城	くわのきじょう	穂波郡	飯塚市内野	84	18	—
小石原城	こいしわらじょう		→松尾城(まつおじょう)			
小出城	こいでじょう	御笠郡	筑紫野市山口	23	12	—
五位山城	ごいやまじょう	夜須郡	朝倉市千手・長谷山	38	14	80
高安城	こうあんじょう		→山野城(やまのじょう)			
香安城	こうあんじょう		→山野城(やまのじょう)			
高山城	こうやまじょう	上座郡	朝倉市杷木志波	60	16	—
香山城	こうやまじょう		→高山城(こうやまじょう)			
古賀城	こがじょう		→稻荷山城(いなりやまじょう)			
古城	こじょう	嘉麻郡	飯塚市鯉田	111	20	—
古城	こじょう		→大日寺城(だいにちじじょう)			
古城	こじょう		→潤野城(うるのじょう)			
古城	こじょう		→川津城(かわづじょう)			
古城	こじょう		→伊川城(いがわじょう)			
古処山城	こしよさんじょう	夜須郡 / 嘉麻郡	朝倉市秋月野鳥・嘉麻市千手	47	16	85

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
古所山城	こしょさんじょう		→古処山城（こしょさんじょう）			
御前ヶ城	ごぜんがじょう		→岸殿城（きしどのじょう）			
小鷹城	こたかじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町弥永・栗田	31	14	78
琴平山城	こんびらさんじょう		→日野山城（ひのやまじょう）			
許斐山城	このみやまじょう	穂波郡	飯塚市幸袋	90	18	121
木の実山城	このみやまじょう		→許斐山城（このみやまじょう）			
米嘴城	こめかみじょう	御笠郡	筑紫野市二日市北5丁目	15	12	69
米山城	こめのやまじょう	上座郡	朝倉市杷木白木	67	16	98
米ノ山城	こめのやまじょう	穂波郡	飯塚市山口	82	18	112
金毘羅山城	こんびらさんじょう		→日野山城（ひのやまじょう）			

さ

才田城	さいたじょう	嘉麻郡	嘉麻市才田	119	20	—
坂田城	さかたじょう		→上秋月城（かみあきづきじょう）			
鷺山城	さぎやまじょう	嘉麻郡	嘉麻市岩崎	117	20	—
桜川砦	さくらがわとりで	夜須郡	朝倉郡筑前町弥永	32	14	—
笹尾城	ささおじょう	御笠郡	筑紫野市大石	13	12	—
里岩城	さといわじょう		→博多見城（はかたみじょう）			
里城	さとじろ		→木城館（きしろやかた）			
左野之城	さののしろ		→和久堂城（わくどうじょう）			
地頭屋敷跡	じとうやしきあと	穂波郡	嘉穂郡桂川町吉隈	D17	24	—
柴田城	しばたじょう	御笠郡	筑紫野市天山	20	12	74
柴原城	しばはらじょう	嘉麻郡	嘉麻市大力	124	22	134
下杵野遺跡	しもたてのいせき	夜須郡	朝倉郡筑前町中牟田	R3	26	150
修理殿城	しゅりどのじょう		→扇山城（おうぎやまじょう）			
城ヶ尾城	じょうがおじょう	穂波郡	飯塚市舍利蔵	96	18	—
城尾城	じょうがおじょう	穂波郡	嘉穂郡桂川町土師・飯塚市弥山	106	20	—
城ヶ迫城	じょうがさこじょう	上座郡	朝倉郡東峰村宝珠山	削除	26	—
障子岳城	しょうじがたけじょう		→頭巾山城（とっきんさんじょう）			
城主屋敷跡	じょうしゅやしきあと	嘉麻郡	嘉麻市中益	K5	22	—
少弐氏関連館跡	しょうにしかんれんやかたあと	御笠郡	太宰府市太宰府	D2	24	—
城腰遺跡	じょうのこしじょう	嘉麻郡	飯塚市佐与	R6	26	152
城ノ腰城	じょうのこしじょう	嘉麻郡	飯塚市有安	114	20	—
城の辻城	じょうのつじじょう		→伊王寺城（いおうじじょう）			
庄林城	しょうばやしじょう	上座郡	朝倉郡東峰村福井	77	18	—
庄林城	しょうばやしじょう		→荘林城（しょうばやしじょう）			
荘林城	しょうばやしじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町砥上	27	14	—
剩林山城	しょうばやしやまじょう		→庄林城（筑前77）（しょうばやしじょう）			
城林城	じょうばやしじょう		→荘林城（しょうばやしじょう）			
庄山城	しょうやまじょう	夜須郡	所在不明	F5	26	—
城山城	じょうやまじょう	穂波郡	飯塚市久保白・北古賀	98	18	123
城山城	じょうやまじょう		→宮山城（みややまじょう）			
城山城	じょうやまじょう		→小佐古城（おさこじょう）			
白木山城	しらきやまじょう		→米山城（こめのやまじょう）			
白旗山城	しらはたやまじょう	穂波郡	飯塚市相田・中	95	18	—
志波城	しわじょう	上座郡	朝倉市杷木志波	58	16	—
陣の原城	じんのはらじょう	嘉麻郡	嘉麻市馬見	削除	26	—
末高陣	すえたかじん	穂波郡	飯塚市川津	D15	24	—
杉本城	すぎもとじょう	夜須郡	朝倉市秋月野鳥	46	14	—
炭焼遺跡	すみやきいせき	夜須郡	朝倉郡筑前町曾根田	R5	26	151
摺鉢山城	すりばちやまじょう		→葛山城（かづらやまじょう）			
千手城	せんずじょう		→鼓岳城（つづみがたけじょう）			
千手館	せんずやかた	嘉麻郡	嘉麻市千手	120	22	—
千手八太郎宅	せんずはちたろうたく		→千手城（せんずじょう）			
千田治兵衛館跡	せんだじべえやかたあと	夜須郡	朝倉郡筑前町森山	D6	24	—

た

帝王城	だいおうじょう		→大王山城（だいおうさんじょう）			
大王山城	だいおうさんじょう	嘉麻郡 / 豊前田川郡	嘉麻市上山田・田川市猪国	130	22	141

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
大将軍陣	たいしょうぐんじん	→大将陣 (たいしょうじん)				
大将陣	たいしょうじん	穂波郡	飯塚市天道・嘉穂郡桂川町吉隈	D14	24	—
大日寺城	だいにちじじょう	穂波郡	飯塚市大日寺	91	18	—
高石山城	たかいしやまじょう	穂波郡	飯塚市内野	85	18	114
高尾城	たかおじょう	夜須郡	朝倉市秋月野鳥	48	16	—
高尾山城	たかおやまじょう	御笠郡	太宰府市太宰府	7	12	62
高城	たかじょう	御笠郡	筑紫野市塔原	14	12	—
高城	たかじょう	→岸殿城 (きしどのじょう)				
高野城	たかのじょう	→山野城				
高の山城	たかのやまじょう	穂波郡	飯塚市高田	100	20	125
高野山城	たかのやまじょう	→高の山城 (たかのやまじょう)				
高鼻城	たかはなじょう	上座郡	朝倉郡東峰村鼓	74	18	106
高丸城	たかまるじょう	穂波郡	飯塚市庄司か	103	20	—
武の城	たけのじょう	→茅城 (かやんじょう)				
大宰府城	だざいふじょう	→浦ノ城 (うらのじょう)				
龍ヶ城	たつがじょう	御笠郡	筑紫野市吉木・大石	12	12	—
立岩城	たていわじょう	嘉麻郡	飯塚市立岩	削除	26	—
探題城	たんだいじょう	→今川了俊居城 (いまがわりようしゅんきよじょう)				
為朝居宅跡	ためともきよたくあと	夜須郡	朝倉市上秋月	D11	24	—
筑紫氏居館	ちくししきよかん	御笠郡	筑紫野市筑紫	D4	24	—
筑紫広門砦	ちくしひろかどとりで	→永岡城 (ながおかじょう)				
竹生島城	ちくぶじまじょう	嘉麻郡	嘉麻市西郷	123	22	134
茶白山城	ちやうすやまじょう	夜須郡	朝倉市隈江	36	14	79
茶白山城	ちやうすやまじょう	下座郡	朝倉市荷原	53	16	91
茶白山城	ちやうすやまじょう	上座郡	朝倉市杷木志波	64	16	—
茶白山城	ちやうすやまじょう	穂波郡	飯塚市阿恵・山口	87	18	118
茶白山城	ちやうすやまじょう	穂波郡	嘉穂郡桂川町寿命	107	20	—
茶白山城	ちやうすやまじょう	→岩切山城 (いわきりやまじょう)				
茶がま岩	ちやがまいわ	嘉麻郡	嘉麻市上山田	D20	26	—
ちよぼんが城	ちよぼんがじょう	御笠郡	筑紫野市山口	22	12	75
ちよんぼんが城	ちよんぼんがじょう	→ちよぼんが城 (ちよぼんがじょう)				
鎮西八郎為朝か屋敷跡	ちんぜいはちろうためともがやしきあと	→八郎館 (はちろうやかた)				
築城	つきじょう	嘉麻郡	飯塚市鯉田	112	20	—
作手城	つくでじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町東小田	29	14	—
葛岳城	つただけじょう	上座郡	朝倉郡東峰村福井	78	18	—
塘迫城	つつみがさこじょう	嘉麻郡	嘉麻市小野谷	132	22	—
塘の城 (上の城・下の城)	つつみのしろ (うえのしろ・したのしろ)	→塘迫城 (つつみがさこじょう)				
鼓岳城	つづみがたけじょう	夜須郡	朝倉市下湊・千手	39	14	80
筒見城	つつみじょう	嘉麻郡	嘉麻市下山田・平	136	22	—
津原城	つはらじょう	→宮山城 (みややまじょう)				
天拝山城	てんぱいざんじょう	→天判山城 (てんぱんざんじょう)				
天判山城	てんぱんざんじょう	御笠郡	筑紫野市古賀・武蔵	16	12	70
道場山城	どうじょうやまじょう	夜須郡	朝倉市長谷山	41	14	—
道城山城	どうじょうやまじょう	→道場山城 (どうじょうやまじょう)				
堂の山城	どうのやまじょう	穂波郡	嘉穂郡桂川町瀬戸	108	20	—
堂ノ山砦	どうのやまとりで	御笠郡	筑紫野市武蔵	18	12	72
遠見ヶ尾城	とおみがおじょう	嘉麻郡	嘉麻市小野谷	134	22	—
砥上上林遺跡	とがみじょうばやしせいせき	夜須郡	朝倉郡筑前町砥上	R4	26	150
砥上山城	とがみやまじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町砥上	26	14	76
突巾城	とっきんじょう	→頭巾山城 (とっきんざんじょう)				
頭巾山城	とっきんざんじょう	御笠郡 / 糟屋郡	筑紫野市袖原・糟屋郡宇美町宇美	11	12	67
殿神楽城	とのかぐらじょう	夜須郡	朝倉市秋月	42	14	—
鳶山城	とびやまじょう	→長尾城 (ながおじょう)				
鳥屋ヶ嶽城	とやがたけじょう	→峙山城 (とややまじょう)				
峙山城	とややまじょう	上座郡	朝倉市佐田	72	16	104
鳥山城	とりやまじょう	→鳥山城 (からすやまじょう)				

な

中尾城	なかおじょう	上座郡	朝倉市宮野	56	16	—
-----	--------	-----	-------	----	----	---

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
永岡城	ながおかじょう	御笠郡	筑紫野市永岡	21	12	—
長岡城	ながおかじょう		→永岡城(ながおかじょう)			
長尾城	ながおじょう	上座郡	朝倉市杷木東林田	69	16	101
中牟田城	なかむたじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町中牟田	28	14	77
梨木城	なしのきじょう		→小鷹城(こたかじょう)			
茄(子)町城	なすまちじょう		→休松城(やすみまつじょう)			
鯉田城	なますだじょう		→古館城(ふるたてじょう)			
荷原城	にないぼるじょう		→茶白山城(筑前53)(ちゅうすやまじょう)			
は						
博多見城	はかたみじょう	御笠郡	筑紫野市山口	19	12	73
長谷山城	はせやまじょう	嘉麻郡	嘉麻市平山・九郎原・上白井・ 嘉穂才田・嘉穂郡・桂川町土師	122	22	
八郎館	はちろうやかた	嘉麻郡	嘉麻市小野谷	D19	26	—
花尾城	はなおじょう	嘉麻郡	嘉麻市桑野	126	22	135
原田氏居館	はらだしきよかん	御笠郡	筑紫野市原田	D5	24	—
針目城	はりめじょう	上座郡	朝倉市杷木林田・大分県日田市	71	16	103
日野山城	ひのやまじょう	嘉麻郡	嘉麻市上白井	118	20	132
平床屋敷	ひらとこやしき		→木城館(きしろやかた)			
平手城	ひらてじょう	夜須郡	朝倉郡筑前町栗田・朝倉市隈江か	35	14	—
ひはた山城	ひわだやまじょう		→茶白山城(64)(ちゅうすやまじょう)			
備後陣	びんごじん	穂波郡	飯塚市馬敷	D16	24	—
深江伯耆屋敷跡	ふかえぼうきやしきあと		→古城戸城(ふるきどじょう)			
深野某か屋敷	ふかのなながしやしきあと	夜須郡	朝倉市甘水	D9	24	—
武京田城	ぶぎょうだじょう		→小田城(おたじょう)			
奉行岳城	ぶぎょうだけじょう	嘉麻郡	所在不明	F9	26	—
福嶽城	ふくだけじょう	夜須郡	朝倉市秋月・長谷山	43	14	82
福智城	ふくちじょう		→毛利ヶ城(もうりがじょう)			
藤ノ木城	ふじのきじょう	穂波郡	飯塚市忠隈・南尾	101	20	—
二嶽城	ふたたけじょう	夜須郡 / 嘉麻郡	所在不明	F11	26	—
二股岳城	ふたまただけじょう	上座郡 / 豊前田川郡	朝倉郡東峰村小石原・田川郡添田町落合	76	18	109
不動城	ふどうじょう	御笠郡	大野城市牛頸	3	12	—
古城戸城	ふるきどじょう	夜須郡	朝倉市隈江	37	14	—
古館城	ふるたてじょう	嘉麻郡	飯塚市鯉田	110	20	—
豊後谷	ぶんごだに	御笠郡	大野城市中	D1	24	—
平家城	へいけがじょう	下座郡	朝倉市堤	50	16	—
平家城	へいけがじょう		→休松城(やすみまつじょう)			
平家城	へいけがじょう	上座郡	朝倉市宮野	55	16	—
平家城	へいけがじょう		→志波城(しわじょう)			
平家城	へいけがじょう	嘉麻郡	嘉麻市屏	129	22	140
平家城	へいけがじょう		→屏山城(へいやまじょう)			
屏山城	へいやまじょう	嘉麻郡 / 夜須郡	嘉麻市屏・朝倉市江川	135	22	143
宝珠山城	ほうしゅやまじょう		→烏岳城(からすだけじょう)			
宝満城	ほうまんじょう	御笠郡	太宰府市内山・筑紫野市本道寺	10	12	65
本陣山城	ほんじんやまじょう	上座郡	朝倉市杷木志波・山田	59	16	94
ま						
舞鶴城	まいづるじょう		→麻氏良城(まてらじょう)			
舞鶴城	まいづるじょう		→烏岳城(からすだけじょう)			
前隈山城	まえぐまやまじょう	上座郡	朝倉市杷木志波	63	16	96
升形城	ますがたじょう	御笠郡	筑紫野市大石・太宰府市内山	9	12	64
升形山城	ますがたやまじょう		→升形城(ますがたじょう)			
益富城	ますとみじょう	嘉麻郡	嘉麻市中益・大隈町・大隈	127	22	136
益富山城	ますとみやまじょう		→益富城(ますとみじょう)			
真竹山城	またけやまじょう	上座郡	朝倉市杷木松末	70	16	102
真岳城	またけやまじょう		→真竹山城(またけやまじょう)			
松尾城	まつおじょう	上座郡	朝倉郡東峰村小石原	75	18	107
松原城	まつばらじょう	嘉麻郡	所在不明	F8	26	—
麻氏良城	まてらじょう	上座郡	朝倉市杷木志波・山田	61	16	94

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
左右良城	まてらじょう	→麻氏良城(まてらじょう)				
真寺城	まてらじょう	→麻氏良城(まてらじょう)				
丸尾城	まるおじょう	→頭巾山城(とつきんさんじょう)				
御笠の森遺跡	みかさのもりいせき	御笠郡	大野城市山田2・3丁目	R1	26	148
三日月城	みかづきじょう	上座郡	朝倉市杷木池田	66	16	97
水木城	みずきじょう	御笠郡	所在不明	F1	26	—
三奈木弥平次が宅跡	みなぎやへいじがたくあと	下座郡	朝倉市荷原	D12	24	—
南尾城	みなみおじょう	→藤ノ木城(ふじのきじょう)				
宮尾城	みやおじょう	御笠郡	所在不明	F3	26	—
宮山城	みややまじょう	穂波郡	飯塚市津原	97	18	122
向山城	むかいやまじょう	穂波郡	飯塚市馬敷	83	18	114
武蔵ノ城	むさしのしろ	→天判山城(てんぱんざんじょう)				
村上城	むらかみじょう	上座郡	朝倉市黒川	57	16	93
毛利ヶ城	もうりがじょう	嘉麻郡	嘉麻市馬見	128	22	140
持丸城	もちまるじょう	→片山城(かたやまじょう)				
元吉城	もとよしじょう	嘉麻郡	飯塚市大門・仁保・鹿毛馬	115	20	130
や						
八木山城	やきやまじょう	穂波郡	飯塚市八木山	削除	26	—
薬師山城	やくしやまじょう	→堂ノ山砦(どうのやまとり)				
安見ヶ城	やすみがじょう	→休松城(やすみまつじょう)				
休松城	やすみまつじょう	下座郡	朝倉市柿原・板屋・堤・下瀬	51	16	90
夜須見松城	やすみまつじょう	→休松城(やすみまつじょう)				
山口城	やまぐちじょう	嘉麻郡	所在不明	F10	26	—
山城跡	やましろあと	上座郡	朝倉市杷木穂坂	削除	26	—
山野城	やまのじょう	嘉麻郡	嘉麻市山野	116	20	131
弥山城	ややまじょう	夜須郡	飯塚市弥山	89	18	—
夕月城	ゆうづきじょう	上座郡	朝倉市杷木古賀	65	16	97
鎧ヶ鼻城	よろいがはなじょう	御笠郡	所在不明	F4	26	—
わ						
脇田城	わきたじょう	→和久堂城(わくどうじょう)				
和久堂城	わくどうじょう	御笠郡	筑紫野市杉塚	4	12	—

報告書抄録

ふりがな	ふくおかけんのちゅうきんせいじょうかんあといち							
書名	福岡県の中近世城館跡 I							
副書名	筑前地域編 1							
巻次	福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書 第1集							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第249集							
編著者名	一瀬 智・今井涼子・岡寺 良 (編集)							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 Tel. 092-651-1111							
発行年月日	2014年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
福岡県筑前地域の 一部 (旧御笠 郡・夜須郡・下 座郡・上座郡・ 穂波郡・嘉麻郡) に所在する中近 世城館遺跡等 約180箇所	大野城市	40219				121201 ~ 140331		福岡県中 近世城館 遺跡等詳 細分布調 査
	太宰府市	40221						
	筑紫野市	40217						
	筑前町	40447						
	朝倉市	40228						
	東峰村	40448						
	飯塚市	40205						
	桂川町 嘉麻市	40421 40227						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
福岡県筑前の一 部地域 (旧御笠 郡・夜須郡・下 座郡・上座郡・ 穂波郡・嘉麻郡) 所在の城館跡等 約180箇所	城館 及び城館 関連遺跡	鎌倉 ～江戸時代	城館遺構 (曲輪・土塁・堀など)		なし			
要約	本報告における福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査では、筑前地域の一部 (旧御笠郡・夜須郡・下座郡・上座郡・穂波郡・嘉麻郡) に所在する約180箇所の中近世城館、城館等伝承地、城館関連遺跡等を対象とし、一部の対象については現地調査を行い、また縄張り図等の作成を行い、その結果を報告している。そして城館に関連する文献史料、絵画資料等についても、総合的な調査を実施し、その結果も併せて報告している。							

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 25	登録番号 01

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書 1

福岡県の中近世城館跡 I

— 筑前地域編 1 —

福岡県文化財調査報告書第249集

平成26年 3 月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812-8575
福岡県福岡市博多区東公園 7 番 7 号
印刷 株式会社 四ヶ所
〒838-8512
福岡県朝倉市馬田336

